天の火柱

山手樹一郎長編時代小説全集＝55

春陽堂

作品案内 ―――文芸評論家 石井富士弥

自由な恋ができるのは若者の特権だ。――だが、ここに十三歳になったばかりの美しい箱入り娘が突然、臨終の父から、お前には親のきめた許婚がある、といわれたとしたらどうなるだろう？しかも、その相手には一度も会ったことはないのだ。……そして、年ごろになったら、彼女を育てた兄が急に自分の出世のため、こんどはそんな約束はほおかぶりで、好色な富豪の後添いにしようとたくらんでいる。

かくて本編のヒロイン美沙緒は、耐えかねてまだ見ぬ夫を訪ねて家出をしたが――ここから若い時代の運命の気まぐれで、浪人鈴木大作とめぐり会う。彼女を追う兄の家の悪用人・好色豪商・悪徳役人などと敢然と闘う大作に次第に魅かれるが、〝許婚の許しがなければ堂々と一緒になれない〟と、あくまで心正しく大作は生きようとする。この青春の火柱がどこまで燃えるか、彼を助ける怪盗団南蛮太郎一味と、叔父遠山金さんの温情――山手文学独擅場のストーリーの奔流だ。

天の火柱

山手樹一郎長編時代小説全集＝55

春陽堂

天の火柱

山手樹一郎長編時代小説全集＝55

春陽堂

春陽堂● 490円
0193－200455－3066

天の火柱

山手樹一郎長編時代小説全集

55

天の火柱

山手樹一郎長編時代小説全集

55

春陽堂

春陽堂

天の火柱

山手樹一郎長編時代小説全集

55

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
*一条明
伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

*本巻執筆者

天の火柱

江戸のやみ

1

神田小川町から神保町一帯は大名旗本の屋敷町で、日が暮れるとほとんど人通りがなくなる。

まだ宵をすぎようとする時刻で、すでに西へかたむいた五日ばかりの月かげが大路小路の片がわをひっそりと青く照らしているが、月のあたらぬ片がわはくっきりと暗いやみを作っていた。

中神保町通りを水道橋のほうへ、別にこれという当てもなく歩いていた鈴村大作は、

――はてな。

と、思わず目をみはった。

四、五間ほど前の左がわの横町から、ふっと通りへ出てきた二人づれの女が、あたりを見まわすようにして水道橋のほうへ曲がり、なるべく暗いほうの塀ぎわを、なにかに追われるようにいそいでいく。

二人ともまだ若いようだが、一人は旗本の娘、一人はその侍女といった身なりで、どうやら侍女のほうが娘をどこかへ案内していくというかっこうに見える。

――家出らしいな。

まだ宵のうちとはいいながら、こんな時刻に若い女が二人きりで屋敷を出てくるということはありえない。旗本の家柄なら必ずちょうちん持ちの中間がつくはずだ。

ことに、このごろの江戸の街は、夜になるとひどく物騒になる。その責任は無論、公儀の役人どもにあった。

久しく泰平がつづいてきた幕府は、上は老中から下は旗本御家人にいたるまで、少しでもいい職権にありつこうと猟官運動が激しく、それ

らが党派を作って、たがいに相手の職をけとばそうと、昼となく夜となく政争に血眼になっている。

大町人はこれらと結んで、旗色のいいほうへどしどし政治資金をまわし、そのかわりにうまい利権をわが手におとそうと目の色をかえている。

そういう役人どもや大町人に取り入って、暴力のほうを引きうける遊侠や博徒が、江戸をわがもの顔に横行し出す。と、その混乱の裏をくぐって食い詰め浪人どもは押しこみ強盗や辻切り強盗と化して堂々とあばれ出し、ならず者たちはそれらに負けずに、なになに小僧と名乗りをあげて市民のふところをねらい出す。

昼間でさえ町にけんかが絶えないのだから、夜ともなれば百鬼夜行となって、まったく手のつけようもなくなる江戸の街なのだ。

さすがに公儀でもたまりかねたとみえて、その昔金さんと名乗って市井の無頼の中にいたことのある遠山左衛門尉景元を、こんど北の町奉行職にあげたが、これはつい先月のことで、まだその手腕のほどはわからない。

そういう江戸の夜の恐ろしさを知っているのかいないのか、若い女がいま二人きりで家出をしてきたようだ。

――どこへ行くつもりなのか。あの二人は目的地まで無事につけるかなあ。

大作は人ごとながら心配せずにはいられなかった。

女たちは時々なにかささやきあいながら、小走りに水道橋をわたりきって、どうやらお茶の水のほうへ坂道をあがっていくようだ。

これはあまりにも大胆すぎる。

2

「だんな、今晩は――」

足音も立てずに、すっとうしろから肩をならべてきたやつがある。手ぬぐいをぬすっとかぶ

りにした中間体の、すばしっこそうな男だ。
「おまえはだれだな」
大作は数間先をお茶の水のほうへのぼっていく女たち二人の黒々としたうしろ姿から目をはなさず、大声で聞いてみた。
「吉助っていうちょいと骨っぽい野郎ですがね。だんな、この仕事はあっしにもひとつ半口のせてやっておくんなさい。そのかわり、うんと働きやすぜ」
吉助というやつは声をひそめながら、ぬすっとかぶりの中でにやりとずぶとい薄らわらいをうかべたようだ。
「なんの話だ、それは」
「あれえ、水くさいんだなあ、だんなは。——だんなは神保町からずっと、あの鴨のあとをつけてきたんでしょう」
「うむ」
「だから、ずばりといやあ、だんなにあの娘のほうはさしあげやすから、お供の年増のほうはあっしにおくんなさいっていう相談なんでさ」
「なるほど、こいつはずばりといったもんだなあ」
大作は内心あきれながら、思わず苦わらいをして、
「しかし、あの二人は一体何者なんだろうな」
と、それとなく聞いてみる。
「あっしの眼に狂いがなけりゃ、相当いいところの旗本のいたずら娘、どうせ屋敷をそっとぬけ出して、好きな男のところへあいびきに行くんでさ。若葉どきってやつは、ねこでさえさかりがつく時候ですからね」
「そうか——。それで、おまえはあの年増のほうをさらって、どうする気なんだ」
「どうするって、いやなことを聞くなあ、だんなは。さんざんかわいがってやってから、あきたら宿場女郎にでもたたき売って金にする、それがおれたちの御定法でさ。だんなはあの娘をねらってどうする気なんです」

「そうだなあ、わしはまだそこまで考えていないんだが、——一体どこで仕事をする気なんだ」
「この坂をのぼりきると、左手が桜の馬場になる。右手はお茶の水の崖っぷちだ。こんな物騒な御時勢だから、もうだれも人なんか通りゃしねえ。あっしがいきなり年増のほうをうしろから抱きすくめて口をふさいでしまうから、だんなは娘のほうの口をふさぐんだ。声を立てると殺すぞと、一つおどかしておきゃぐうもすうもありゃしねえ。うまくやらなくちゃいけやせんぜ、だんな」
「口をふさいで、それからどうすればいいんだ」
「けっ、からかっちゃいけやせん。それからはだんなの好きなようにすりゃいいんだ」
「好きなようにな——おまえはどうするね」
「知れたことだ。すぐ暗やみへつれていって、口のきけねえ体にしてしまう。女なんてものは、一度そうなっちまえば、後は男のいうなり次第についてくるもんさ」
「ふうむ、そんなにうまくいくものかなあ」
大作は感心したようにいいながら、
「ああ、こりゃいかん」
と、思わずそこへ立ちどまる。

3

こっちが坂をのぼりきったころ、月はもうだいぶ西へかたむきかけて、その月あかりのあるうちにと女たちは先をいそいでいたのだろう、二十間ばかり先を歩いて、ちょうど桜の馬場のあたりへかかっていた。
その馬場の桜並木のかげから、ふいにくせ者がばらばらと飛び出してきて、前に三人、うしろへ二人、たちまち女たちを取りまいていた。五人とも黒頭巾で面をかくした浪人者のようである。
「いけねえ、だんな、五人組みかもしれねえ」
吉助もぎょっとしたようにそこへ立ちすくんでしまう。

「なるほど、敵はたしかに五人だな」
　去年の秋あたりから、五人組みの浪人強盗が江戸の街を荒らし出して、市民たちをふるえあがらせていた。この五人組みは、手向かいする者は必ず切ってすて、堂々と金蔵の戸をあけさせて有り金を強奪していく、女には決して手を出さないが、五人とも非常に腕の立つやつばかりだということで、いまだに一人もつかまっていない。
　困ったことには、一方にそういう五人組みがあらわれてうまくやっているとわかると、必ずこれをまねする五人組みが出てくることで、今年に入ってからそういう偽五人組みが二組みもできているといううわさがある。
　いま女たちを取りまいたのは、はたして本物のほうか、偽物のほうか——。
「とにかく行ってみよう」
　大作は吉助をさそって歩き出そうとした。
「大丈夫かね、だんな。五人組みはひどく強いって話だからねえ」
「なんだ、おまえはせっかくねらった鴨を人に横取りされてもいいのか」
　大作はわらいながら、かまわず現場のほうへ大股に歩き出した。
　五人組みのほうでもすぐにこっちへ気がついたらしく、さすがに悪びれた様子もなく、じっとこっちの近づくのを待っているようだ。
「やあ、あんたがたは五人のようだな」
　大作は五尺八寸ぐらいの上背があるから、相手を見おろすようにして、わらいながら立ちどまった。
「若僧、命が惜しかったら黙って通りすぎることだ」
　女たちを背にして二人ならんでいる覆面の一人が、低い声でおどしつけてきた。
「それは、貴公、あべこべのようだな。貴公たちこそ、今夜はじゃまがはいったと見たら、いさぎよく引きあげたほうがいいんじゃないか。

悪事というやつは、人の見ている前ではやらないほうが利口なんだ」
「ほざいたな、若僧。その分にはすておかんぞ」
　覆面たち二人はとっさに柄に手をかけたが、これもただすごんでみせただけで、まだ本当に抜く気はないようだ。
「本物の五人組み強盗は、女には手を出さないと聞いていたが、貴公たちは偽物のほうなのかな」
　大作は平気で五人を見くらべている。
　女たち二人はびっくりしたように大作の顔を見ていた。娘のほうは十八、九でもあろうか、月あかりをまともにうけて、あっと目をみはるほど美人に見える。供の腰元のほうもなかなかきりっとした年増ぶりで、これは二十二、三にはなっているだろうか。

4

女たちのうしろに立っている三人の覆面のうち、袴をつけているやや立派な身なりのやつがこの組の首領らしい。
　こっちがどうしても脅しにのりそうもないと見ると、
「切れっ、切ってしまえ」
と、そんな冷酷な言葉を無造作に口にした。
「待った」
　大作はそっちを見て微笑しながら、
「ここで刀を抜くとけが人が出る。五人組みが一人でも二人でも欠けては、後の仕事にさしつかえやしないかね」
　と、わざとからかうようなことをいう。
　先頭の一人がたたきつけるようにやりかえしてきた。
「けがをするのは貴様だ」
「せっかくだが、わしはけがはきらいなんだ。これからお嫁さんをもらうというのに、かたわになっちゃ来手がなくなるだろうからな」
「くそっ、——やっちまえ」

相手があまりにも場ちがいなことをならべてのんびりと構えているので、敵は多少甘く見たのだろう、だっと踏みこみざま、一人が火のような抜きうちをかけてきた。

「あぶない」

大作はひらりと飛びのいて空を切らせ、敵の一刀が横に流れたのを見て、

「とうっ」

こっちも一足踏み出して、猛烈な抜きうちをかける。

「わあっ」

そやつが刀を持った右手を切られて、どっとしりもちをついたとたん、

「おうっ」

もう一人のやつがうろたえ気味に、真っ向から抜刀を振りおろしてきた。

「えいっ」

同時に片ひざづきに身を沈めた大作の二の太刀が、つばめがえしに敵の高股のあたりを払いあげている。

「う、うっ」

わずかに大作の片手なぎのほうが早かったらしく、敵はがくんとそこへ両ひざをついてしまう。

一瞬にして二人を倒した大作は、抜き身をひいてすっと立ちあがりながら、

「強盗だあ。人殺しい、五人組みだぞう」

と、お茶の水の谷へこだまするような大声をあげた。

残る三人の覆面どもは、ふいをくらって明らかにぎょっとしたらしい。

「まずい、ひけ」

首領は仲間に声をかけながら、自分から先に馬場のほうへ逃げ出していく。

大作はそれをわらいながら見送って、素早く刀をぬぐい、鞘におさめ、

「さあ、あんたがたも今のうちだ。送ってあげるから、いっしょにくるがいい」

と、茫然と立っている女たちのほうへ声をかける。

「はい、お願いいたします」

走り寄ってきたのは娘のほうで、年増の腰元のほうはぽかんとした顔つきで、まだ正気がつかないようだ。

大作はかまわず娘といっしょに歩き出す。

5

月はすでに西へ沈みかけて、大作と肩をならべて歩く娘と、二人の影を黒々と長く前へおとしていた。

まもなくその歩いていくほうへ、下谷から外神田へかけて下町一帯の甍の波がはるかに目の下へひらけてくる。昼間ならこの甍の波の果てに紫色の筑波山が石の置物のように見えるはずなのだ。

「どこへお送りすればいいんです、お嬢さん」

大作はまずそれから聞いてみた。

腰元のほうはすぐうしろからついてきているが、ぬすっとかぶりの吉助のほうはあれっきり姿を見せないようである。

「あの、ただいまはあぶないところをお助けいただきましてありがとうございました」

娘はちょっと立ち止まるようにして、ていねいにおじぎをした。

「いや、その礼にはおよびません。しかし、女二人でこんな物騒な道はなるべく通らないほうがいいでしょう。この辺は辻切り強盗、おいはぎなどのいいかせぎ場になっているところなんだ」

「いまのは五人組み浪人強盗でございましょうか」

「五人いたから、あれも五人組みにはちがいありませんな。しかし、本物の浪人強盗じゃないでしょう。本物のほうは女に手を出さないそうだし、こんなところでおいはぎはやらんでしょう」

「でも、あたくし怖くて、どうしようかと思いました」
娘はいまさらのように身ぶるいをしている。
「それは偽物だって強盗は強盗にちがいありませんからな」
「あたくし、あの、屋敷の名は家名にもかかわりますので申しかねますが、美沙緒（みさお）と申します。少し子細がございまして、今夜お浜といっしょに屋敷をぬけ出してまいった者なのです」
「なるほど——。すると、あんたがお浜さんというのか」
大作はうしろを振りかえって、年増の腰元のほうへ聞く。
「はい。いろいろお世話さまになりまして、本当に助かりました」
「なあに、そですりあうも他生の縁というからね。わしは浪人鈴村大作。実は、わしも少し子細があって、いま屋敷をぬけ出してきたばかりなんだ」
「まあ、本当でございますの」
美沙緒はびっくりしたように目をみはる。
「そこで、わしは美沙緒さんをどこへ送ってあげればいいんだろうな」
「蔵前の天王橋の近所に知っている屋敷がございます」
「じゃ、天王橋まで送っていけばいいわけだな」
「どうぞお願いいたします」
美沙緒はもう一度頭をさげてから、
「鈴村さまはどうして家出などなさいましたの」
と、不審そうに聞く。
「わしは兄の冷や飯食いなんだ。二十五にもなって、まだ兄の脛（すね）をかじっていちゃ申し訳ない。そこで、断然家出を決行することにしたわけです」
「それで、これからどうなさるおつもりですの」
美沙緒という娘は、相当苦労性に生まれついているようだ。

6

道は左手に聖堂の塀を見ながら下り坂にかかってきた。そして、灯を吹き消したように月の光が消えて、一瞬あたりはやみ一色に塗りこめられる。
「あっ」
美沙緒はびっくりしたように肩をよせてきながら、
「月が落ちましたのね」
と、自分にいいきかせるようにつぶやいている。
「美沙緒さんは夜道を出歩くことなどめったにないだろうからな」
急に足もとがあぶなげになるのを見て、大作は自分も足をゆるめてやる。
「でも、あたくし、覚悟していますの」
「その覚悟は覚悟としても、蔵前へ行くならなにもこんな物騒なお茶の水を通らなくてもすむ。どうして小川町から須田町（すだちょう）のほうへ出なかったんです」
大作はちょっとなじるように聞いてみた。
「それは、あの、あたくし道のことはよくわからないものですから」
「すみません、あたしこっちのほうが近道だと思って——」
うしろからお浜がいそいで口を入れてきた。
「あんたはお浜さんとかいったね」
「はい」
「あんたは美沙緒さんより年上のようだし、世間のこともよくわかっているはずだ。わしはまだ美沙緒さんの家出の事情は聞いてはいないが、人から見ればこの家出は年上のあんたがすすめたんだと、だれしも考える。そのあんたがわざわざ物騒なお茶の水へ道をとったとなると、痛くない腹をさぐられてもしようがないことになるんだ。気をつけなければいけないな」
大作はそれとなくお浜をたしなめておく。

さっき五人組みが逃げ出した時、ほっとして夢中ですがりついてきたのは美沙緒のほうだった。それをお浜は案外冷たい目で茫然とながめていた。そんなはずはない。当然、責任のあるお浜のほうがほっとして、もっと感情的になるはずだと大作は見ていた。

それればかりでなく、さっきの五人組みは、たとえ偽物にもせよ、盗賊なら金が目あてのはずである。それが女をねらう、後で女衒に売って金にするにしても、金が目的なら、五人がかりでそんな手数のかかるまねはしないだろう。これはあきらかにはじめから美沙緒をねらって待ち伏せをしていたとしか考えられない。

すると、あのぬすっとかぶりの中間も、それが中間だけにくさいぞということになってくるのだ。

「あたし、あたしはお屋敷の追っ手をさけるつもりだったんです」

お浜は言い訳をするようにぽつんと口走る。

「いや、わしはなにもあんたを疑っているわけじゃないんだ。ただ、もし町役人の見まわりにでも引っかかると、そこを追及される、気をつけるようにと注意しただけなんだ」

「鈴村さま、あたくしたち町役人に見つかると、怪しいやつだと見とがめられますかしら」

美沙緒ははっとしたように大作の腕へつかまってくる。

「無論、見とがめられます。このごろ夜になれば物騒だとわかりきっている江戸の街を、ただで若い女が二人きりで歩いているはずはありませんからね」

7

月は落ちたが、空にはきれいな星あかりがあった。やみに目がなれてくると、ちょうちんはなくても道は結構歩けるから、人間の目というものは案外調法にできているものらしい。

しかし、夜道になれない美沙緒はすっかり心

細くなってしまったのだろう、いつの間にか大作のたもとをしっかりとつかんで歩いていた。

道はやがて昌平橋の北たもとへ出て、そこをまっすぐ神田川にそっていけば、次は筋違橋のたもとへ出る。

町へ出てきても、もう往来を歩いている者などは一人もなかった。

どこか遠いところで、犬がけたたましくほえ出している。

「本当にだれも人は通りませんのね」

美沙緒は黙っていると余計心細くなってくるらしく、肩をよせるようにして話しかけてきた。

「そうですな、今ごろ出歩いているのは、岡っ引きのたぐいか、どろぼうぐらいのもんでしょう。もっとも、ここに家出をしてきた人間が二人、一人はお供までつれて歩いていますがね」

大作はそんな冗談を口にしたが、

「あの、天王橋というのは、まだよっぽど遠いのでしょうか」

と、美沙緒はそれどころではないようだ。

「さあ、一里まではないでしょうが、まだ相当ありますな」

「鈴村さまはどちらまでおいでになりますの」

「それは美沙緒さんを送りとどけてからきめることにしようと思う」

ふっと見付門からちょうちんの灯が一つ出てきて、足早に筋違橋をわたってくるのが目についた。どうやら御用ぢょうちんのようである。

――まずいなあ、定町回りかもしれない。

人数は四人のようだ。

「町役人のようですね」

美沙緒にもそれがすぐにわかったらしい。

「そうのようです」

「とがめられたら、どうしましょう」

「なんとかうまく切りぬけてみるから、あんたはわしのいうとおりにしているんです」

「はい」

向こうが橋をわたりきるのと、こっちが橋だもとへかかるのと、ちょうどいっしょだった。
ちょうちんを持って先頭に立っている小者が、いきなりこっちへちょうちんをかざすように立ちどまると、
「しばらくお待ちなさい」
うしろにいた同心風の中年の男がこっちを呼びとめて、つかつかと前へ出てきた。
「お役目御苦労ですな」
大作は如才なくこっちからも声をかけながら立ちどまる。
「手前は北の定町回り小林勝之進、役目によって相たずねる。あなたの姓名は――」
「鈴村大作、浪人者です」
「連れは――」
「美沙緒、十八歳、家内です」
「いずれへまいられるのか」
「神保町の家内の里方へまいり、天王橋の浪宅へ帰るところです」
「御家内の里方も浪人かな」
「いや、旗本で大東寅太郎、これの父です」
「ちょうちんの用意がないようだが、なにか考えがあってのことかな」
役目柄、小林の鋭い目がじっと若い二人を見くらべている。

8

「ちょうちんは持っていたんだが、実はそこの桜の馬場のところでおいはぎが出たものだから、刀を抜く時にすてて、それっきりにしてきました」
大作はとっさにうまいこじつけが口に出る。
「おいはぎ――、どんなやつでした」
「宗十郎頭巾をかぶった五人組みで、中の二人がこっちを女づれと見て、からかい半分に抜き身を突きつけてきたから、こっちもいきなり刀を抜いて振りまわしてやると、あわてて馬場のほうへ逃げていきました」

それとなく美沙緒のほうばかり見ていた小者たちが、五人組みと聞いていっせいに大作のほうへ目を向ける。
「本当でしょうな」
それにしてはこっちの態度が少しけろりとしすぎていたのだろう、小林はちょっとうさんくさそうに念を押してくる。
「本当です」
大作には、いざとなったら刀の血ぐもりを見せてやるという自信があったから、きっぱりと答える。
「相手を切られたのか」
「切りました。一人は右手、一人は左の高股に、かなりの傷をうけているはずです」
「失礼いたした。気をつけてお帰りなさい」
小林同心は急にせかせかとあいさつをして、
「おい、いそぐんだ」
と、小者たちをうながし、足早にお茶の水のほうへ歩き去る。
「さあ、出かけますかな」
大作はわらいながら美沙緒をさそう。
「あの、お浜はどこへまいったのでしょう」
美沙緒は不審そうにあたりを見まわした。
「どこかへかくれたんでしょう、ひどく役人を怖がっていたようだから」
大作はかまわず橋だもとを突っ切って、佐久間町河岸のほうへ入っていく。
美沙緒はしきりにうしろばかり気にしているようだ。
「そんなに心配しなくても、行く先がわかっているんだから、いまに追いついてくるでしょう」
「そうでしょうか」
「それよりねえ、美沙緒さん、今夜はこれだけじゃすまないような気がするんだ。二度あることは三度というからな」
「どうしてですの。またおいはぎが出るのでしょうか」
美沙緒はどきりとしたように、またしてもこ

っちのたもとをつかんでくる。
「おどかすわけじゃないが、美沙緒さんはなにかわなにかかっているようだ。そんな気はしませんか」
「あたくしがわなにですか」
「そうです。さっきの五人組みも怪しいし、供のお浜も少しおかしい」
「お浜がどうしておかしいのでしょう」
「お浜は美沙緒さんなどよりよっぽど世間なれている女だ。それが、こんな物騒な時勢に、大切な主人のお嬢さんをつれて、わざと寂しいお茶の水へ道をとるのは変だ。それと、さっきの五人組みがもし金が目あての浪人強盗なら、あんたがたをあそこでねらうはずはない。それとも、美沙緒さんは屋敷から大金を持ち出しているかな」
大作は冗談のようにいって美沙緒の顔を見る。

9

「あの、お浜は、屋敷の追っ手が怖いから、少し寂しい道ですけれど、お茶の水をぬけようと申していました。それでもおかしいでしょうか」
美沙緒はお浜を疑いたくないような口ぶりである。
「そうですなあ。人を疑うということは、決していいことじゃない。まあ、それはそれでいいでしょう。とにかく、わしは責任をもって美沙緒さんを天王橋まで送ってあげればいいんだ。そうでしょう」
余計なお節介は迷惑のうちへ入ると大作は気がついたので、これ以上深入りはしないことにした。
「でも、あたくし、天王橋まで行っても、お浜がいませんと家がわからないのです」
「そりゃちょいと心細いなあ。しかし、屋敷の名前ぐらいはわかっているんでしょう」

「それが、実はお浜の親もとへ二、三日泊めてもらうことになっているものですから」
なるほど、それではお浜を疑いたくないわけである。
「そうか、それは困ったなあ」
しかし、これは困っただけではすまないものがありそうだ。お浜の親もとは屋敷でもちゃんとわかっているはずだから、ここはかくれ家にはならない。追っ手の追跡をさけるためにわざわざお茶の水へ道をとるほどのお浜が、そんなことぐらい気がつかないはずはあるまい。
「しようがない、この辺でお浜のくるのをしばらく待ってみますかな」
道はちょうど和泉橋のたもとへ出ていた。
「でも、また町役人がまいりますと怪しまれはしませんかしら」
「その時はまた、家内美沙緒、十八歳といってごまかします」
「歩きましょう。あたくし立っているの、なんですか怖い」
美沙緒はこっちの冗談ににこりともしないで、気重げに自分から歩き出す。
「さっき美沙緒さんは、二、三日お浜の実家へ泊まるのだといっていたようだが、それからどこへ行く気だったんです」
「お浜といっしょに甲府へ立つことになっていますの」
「甲府へねえ。江戸から三十六里の旅だが、そこへ行けばたよりになる親戚でもあるんですか」
美沙緒は黙ってかむりを振ってみせる。
「おかしいなあ。じゃあ、どうして甲府なんかへ行く気になったんです」
急に返事ができないようだ。つまり、これもお節介のうちへ入る質問だったのだろう。
「よろしい、もうなんにも聞かないことにするから、安心なさい」
考えてみると、この娘とはついさっきお茶の

水で出会ったばかりで、こっちも娘のことはなんにも知らないのだし、娘のほうもこっちの素姓はなんにもわからない。だから、用心する気持ちは無理はないと思うが、こっちはさっき命がけでこの娘を助けている。なにか事情がありそうだから、心配して聞いているのだ。

　それが迷惑なら、ただ天王橋まで送ってやればそれで用はすむことだと、大作もちょいと意地になってくる。

10

「あたくし、どうすればいいのか、わからなくなってきました」

　暗い河岸っぷちの道をしばらく黙って歩いていると、美沙緒は心細さにたえられなくなってきたようにいう。

「あんたはわしを信用しないんだからしようがない」

「いいえ、そんなことございません。さっき鈴村さまに助けていただかなければ、いまごろどんな目にあわされているかわからないのですもの」

「じゃ、話してごらんなさい。わけを聞かなくては、わしだってどうしてあげようもありません」

　やっぱりおれはお節介をやきたがっているんだなと、大作は我ながら内心おかしくなってくる。

「聞いていただきますわ。その上で、死んだほうがいいのでしたら、あたくし覚悟をします」

　美沙緒はそんな思いきったことをいい出す。

「冗談じゃない。どんな切羽詰まった人間にだって、生きる道はきっとあるものなんだ。まあ話してごらんなさい」

「あたくしの亡くなりました父は、十年ほど前に勘定奉行をつとめていたことがありますの。その時なにか手違いがあって、その罪を組下の峰村新左衛門さまという方がしょってくれたの

だそうです。峰村さまはそれからまもなく甲府勤番を仰せつかって、甲府へ移りました。その方の御子息に新十郎さまという方があって、あたくしは一度もお目にかかったことはございませんが、親同士の間でいまにいっしょにしようという約束があったのですって」

「つまり、いいなずけということになるんですな」

「ええ。その話を、五年前、父が亡くなります時、あたくしははじめて聞きました。あたくしが十三になった春のことです」

「新十郎さんはいくつになるんだろう」

「今年たしか二十五になると思います。あたくしの家は兄がつぎまして、三島弥十郎と申しますが、あたくしより二まわりも年が上で、ぜひ長崎奉行をつとめたいと、前から望んでいました。それにはかなりお金がかかりますそうで、このごろになって、兄嫁と用人の長坂重蔵とが相談の上、あたくしに堀留の質両替商柏屋惣兵衛の後添いにまいるようにとしきりにすすめるのです」

「支度金がほしいわけですか」

「ええ。お浜の話ですと、三千両の約束なのだそうです。あたくしは父の遺言がありますので、これだけはおねえさまにことわりました。おねえさまも父の遺言では無理にともいえず、一度はあきらめたようでしたが、この間ふいに、甲府を調べさせたら峰村新十郎さまは二、三年前に浪人して行方がわからなくなっている、そんな人に義理を立てる必要はないからと、またあたくしを責めはじめるのです。そして、とにかく明日はいっしょに柏屋の今戸の寮へ行くようにと、今夜いやおうなしに申しわたされてしまいましたので、お浜が、もう屋敷にいてはあぶない、いっそ二人で一度甲府へ行ってみましょうとすすめてくれましたので、日の暮れるのを待って屋敷をぬけ出してまいりましたの」

　美沙緒はそう打ちあけて、不安そうにため息

をついている。

11

三島弥十郎は裏神保町に屋敷のある千石取りの旗本である。これが長崎奉行をねらうのは少しもふしぎはない。

長崎は日本でただ一つ外国との交易をゆるされている港街で、長崎奉行は役料千五百石の要職の上、これを数年つとめれば一生困らないほどの実入りがあるといわれ、無事にこれをつとめあげればたいてい勘定奉行に栄転する例になっている。だから、少しでも頭のきく旗本は、財産をはたいても賄賂をつかって長崎奉行をねらう者が非常に多いのだ。

しかし、妹の体を犠牲にしてまで猟官運動に血眼になるという例は、大作もあまり聞いたことがない。

しかも、堀留の質両替商柏屋惣兵衛は裏で高利を貸していて、この男の金を借りたが最後、血の一滴まで吸いとられて、一家離散する者、気が狂う者、自殺する者が後をたたないといわれるほどの冷血漢で、江戸中にその悪名をはせているやつだ。年もすでに五十を一つ二つ出ているが、女にかけても精力絶倫の狒々おやじという評判もある。

「おかしいなあ。兄上は自分の口から柏屋へ行けなどと美沙緒さんを責めるのか」

「いいえ、兄はなんでもおねえさままかせなものですから」

「なるほど——。すると、そのあによめさんと用人の長坂とかいうやつが相談して、なんでもかんでも三千両の軍資金を柏屋から借り出そうとしているんだな」

さすがに美沙緒は返事をしないが、別に否定もしないところを見ると、そうだと断定してもいいようだ。

「それで、もし甲府へ行っても、その峰村新十郎さんが本当に浪人していたら、どういうこと

になるんだろう」

「あたくし、その時はもう、どうなってもしようがないと思っています」

「心細いんだなあ。お浜はなんといっているんです」

「その時はその時のことで、あたくしを困らせるようなことは決してしないからと申してくれるのです」

「ほかにもっとたよりになってくれるような親戚はないんですか」

「親戚にたよっても、おねえさまの目が光っているからだめだとお浜はいいますの」

「ふーむ、ずいぶん怖いあによめさんのようですな」

大作は苦わらいをしながら、

「しかし、若い女が二人きりで道中をするなんてことは、常識では考えられない。ことに、甲州路は山が多いんだ。わしにはお浜のいうことがどうもふにおちない」

と、はっきりそれを口にする。

さすがにこんどは美沙緒もお浜の弁護ができないようだ。

暗い道はやがて新シ橋のたもとへかかろうとしている。

「おや」

ちょうど向こう柳原通りのほうから出てきて橋へかかろうとした二人づれの、御家人くずれといったような着流しの男が、ふっとこっちへ気づいたように立ちどまった。

美沙緒はどきりとしたように、ぴったり肩をよせてくる。

12

「おぬし、女づれのようだな」

目のぎょろりとしたほうのやつが、無遠慮に大作と美沙緒の顔を見くらべながら聞いてきた。三十がらみの、ひどくすさんだ面構えのやつである。

大作は黙ってそいつの顔を見ていた。
「ああ、わかった。おぬしはその娘さんをどこかで拾ってきたんだな。そうだろう」
目玉はにやりとわらいながら、こんどは美沙緒のほうへ、
「お嬢さん、こんな男の口車に乗せられると、いまに骨までしゃぶられてしまうぜ。この男の稼業(かぎょう)は女たらしというやつで、若い女をうまく口でだましちゃどこかへつれこみ、自分があきるまでおもちゃにして、あきると地獄へ売り飛ばして金にする。逃げるんなら今のうちだよ。おれたちが見ていてやるから、早く逃げるがいい」
と、親切ごかしに説き立てる。
美沙緒はおそろしそうに大作の胸へすがるばかりだ。
「おい、女たらし先生、その娘さんを放してやったらどうだ。今夜はおれたちに出会ったのが不運と早くあきらめたほうが身のためだぜ。それとも、そこの番屋へおれたちといっしょに行く度胸があるか、どうなんだ」
「今夜貴公たちに会うのは、これで二度目のような気がする。違うかね」
大作の顔へのんびりした微笑がうかぶ。
「なんだと――」
「自身番が怖いのは、貴公たちのほうらしいな」
「ほざいたな、青二才」
ぎょろりとした目玉が、なんとなく凶悪な色をおびてくる。
「美沙緒さん、わしのそばを離れてはいかん。この連中はさっきのお茶の水の五人組みの片われなんだ。わしにここでけんかを売って、そのどさくさまぎれに仲間があんたをさらっていく計画なんだろう」
大作はそういい聞かせながら、美沙緒をうしろへかばってじりじりと人家の軒下のほうへさがっていく。
「おい、たたっ切れ」

「よし」
悪党どもはもうこれまでと観念したのだろう、二人同時にさっと抜刀した。
「人殺しい」
大作は大声にわめきながら、すかさず抜きあわせる。この一喝(いっかつ)はたしかにきいたらしく、
「黙れっ」
「うぬっ」
二人はぎょっとしたように一足さがった。が、この二人は相当な腕前らしく、次の瞬間、必死の形相になって、じりじりと詰めよってくる。いまの一喝がかえって殺気をあおり立てた結果になって、さすがの大作も舌刀を飛ばしているゆとりがなくなってきた。
「えいっ」
「とうっ」
悪党どものほうには早くかたづけないとじゃまが入るというあせりがあるのだろう。しかも、この二人には人だのみをしている気配は少しもなく、おれが切ってやろうという闘志がその目にぎらぎらと燃えている。
――くそっ。
大作は我にもなく歯をくいしばっていた。

13

血に飢えているような強敵二人の残忍な切っ先にねらわれながら、しかし、大作はとてもかなわないかなというような不安は少しも感じなかった。
二人ともたしかに強い。こっちから仕掛けていくすきはちょいとなさそうだが、敵から仕掛けてくれれば、同時にこっちからも踏んごんで、先に仕掛けたほうを横なぐりにして、かえす刀で後のやつを引っ払う。勝負はこれできまるのだ。生死は運にまかせるほかはない。
大作はとっさにそう腹をきめて、敵の出方をじっと待っている。
「えいっ」

「とうっ」
　敵二人は往来をやや斜めに神田川を背にして立ち、こっちは美沙緒を人家の軒下へかばってその前に立っているから、うしろへはさがれない。
　切っ先と切っ先との間合いは六尺ほどで、もし敵が少しでもこれ以上間合いをつめてくれば、こっちはうしろがないのだから、一気に飛びこんでいくほかはないのだ。
　が、敵にもこっちの気魄がはっきりわかるらしく、さすがにそこでちょっとためらっている。
「おうっ」
「えいっ」
　絶対に切れるという自信があれば、ここでためらうはずはない。おそらく、敵は相打ちになりそうだと見たのだろう。
　いかに凶悪冷酷でも、敵はどうせ金で雇われてきているのだから、自分がけがをしてまで相手を切らなければならない義理も責任も彼らにはないはずだ。
　こうなれば持久戦に出て、こっちの疲れるのを待つほかはないとみたらしく、
「行くぞ、若僧」
　目玉のほうが舌刀を用いてきた。
　残念ながらこっちにはそれをやじりかえす余裕がない。へたに息をぬくと、連れのほうのやつがすかさず切りこんできそうだからだ。上背こそ目玉より低いが、中肉中背のがっしりとした体つきで、むしろそいつのほうが太刀さばきは敏捷そうである。
「なあんだ、かわいそうに、もう口もきけねえじゃねえか」
　目玉は図に乗って悪態をあびせてくる。
　――くそ。
　だれがそんな手にのるものかと、大作は自重した。
「そうれ、目をむいたぞ。怒れ怒れ。どうだ、ついでに男ならどんと一つぶつかってみろ。た

なの上のだるまじゃあるめえし、目ばかりむいていたってだれも怖がりゃしねえぜ」
　目玉はわざと剣先を浮動させながら、こっちを誘いこもうとする。
「どうしたんだ、いろ男、手も足も出ねえのか。うしろで娘さんがわらっているぜ」
　目玉があくまでからかい顔ににやりとわらった時、
　ぴ、ぴい。
　ぴ、ぴい。
　と、ふいに呼び子の音が向こう柳原通りのほうから聞こえてきた。
　それにこたえて、すぐそこの裏通りのほうからも、ぴ、ぴい、ぴ、ぴいと呼び子が鳴り出す。たしかに捕り物の呼び子だ。

14

　悪浪人二人は、呼び子の音を耳にしたとたん、あきらかに愕然としたようだ。
　その一瞬のすきに、大作はあぶないと見ていた中肉中背のほうへ、
「えいっ」
　一気に踏んごみざま胴を払い、
「あっ」
　さすがにそやつがあやうく飛びのいて逃げる間に、
「とうっ」
　二の太刀をつばめがえしに、目玉の逆胴へたたきつけた。
「おうっ」
　目玉もひやりとしながら必死に飛びのいて、
「あぶねえ、――引きあげろ」
　相棒をうながして、素早く新シ橋をわたり出す。
　こっちの刀を恐れたわけではなく、呼び子の音に追い立てられたのだろう。
　ぴ、ぴい。
　ぴ、ぴい。

不気味な呼び子の音は、だんだんこっちへ近づいてくるようだ。

「怖い、あたくし」

美沙緒がいきなり背中へすがりついてきた。

「いや、もう大丈夫だ」

大作はほっとして刀を鞘へおさめながら、全身に冷や汗を感じている。

──踏みこみが少し足りなかったかな。

そうは思ったが、悔いはない。むしろ切らなくてよかったと、あかるい後味である。

「さあ、出かけましょう」

「どこへ、どこへ行きますの、これから」

「ああ、そうか。あんたはもう天王橋へ行ってもしようがなかったんだな」

美沙緒は背中から離れようとしない。

大作はそこへ気がついて、ちょいと当惑する。

「だんな、すんませんが、あっしをお供にしておくんなさい。名前は久蔵、たのんます」

そこの路地口からひょいと出てきて早口にそういったのは、三十がらみのどこかやくざっぽいこいきな男だ。

美沙緒がびっくりして、大作の背中を離れる。

ちょうど御用ぢょうちんを先頭にした捕り方が二人、向こう柳原通りから橋だもとへ飛び出してきた。

「失礼ですが、お武家さんがたはどこへおいでになるんです」

岡っ引きらしいほうが、さっそくうさんくさそうに聞いてきた。

「わしは浪人鈴村大作、これは家内の美沙緒、こっちは供の久蔵、神保町の家内の里方へまいって、これから天王橋の浪宅へもどるところだ」

さっき一度経験があるから、大作はすらすらと答える。

「おい、供の久蔵、おめえちょうちんはどうしたんだ」

岡っ引きはふいに久蔵のほうへ聞く。

「それはさっき筋違橋のたもとで定町回りの小

林さんという人からも聞かれたんだが、お茶の水の桜の馬場で五人組みのおいはぎに出会った時、久蔵がびっくりして燃やしてしまったんだ」

大作が引き取って、おだやかに説明する。

15

「なにっ、五人組みのおいはぎ──」

案の定、岡っ引きの目がきらりと光る。

「そればかりじゃねえんでさ、親分。たった今も、ここへ二人組みが出て、だんなが刀を抜いて追っ払ったばかりなんです」

久蔵がもっともらしく口を入れる。

「本当か、それは」

「うむ、うそではない。しかし、二人が逃げ出したのは、わしが刀で追っ払ったわけではなく、呼び子の鳴るのを耳にして、びっくりして逃げ出したようだ」

大作がかわって説明する。

「浪人者かね」

「二人とも着流しで、御家人くずれらしかったな」

「どっちへ逃げたね」

「橋をわたっていった。呼び子の聞こえたほうには、逃げたくなかったんだろう」

大作はついそんな皮肉が口へ出たが、

「一人はのっぽで、一人は中肉中背のやつじゃなかったかね」

と、岡っ引きはそれどころではないらしく、たたみこんでくる。

「そのとおりだ」

「畜生、その二人ならおれも怪しいとにらんでいたんだが、やっぱりおいはぎだったんだな」

「あの呼び子は、どんなやつを追いこんでいるんだね」

「中間体のぬすっとかぶりのやつなんだ。見かけなかったかね」

「さあ──」

大作はすぐに吉助というやつを思い出した

が、うっかりしたことをいうと面倒だと口を濁していると、ちょうど一つ向こうの横町あたりから、
「出たぞう、逃がすなあ」
という叫び声といっしょに、ぴ、ぴい、ぴ、ぴいという物々しい呼び子の音が聞こえ出した。
「お武家さん、失礼しやした。——それ「行け」
岡っ引きはちょうちん持ちの男をうながして、さっと今きたほうへ引きかえしていく。
「おどろいたな。夜になると、こんなに江戸は毎晩物騒になるんかねえ」
大作は苦わらいをしながら、左衛門河岸のほうへ歩き出す。
「怖い、あたくし——」
美沙緒はため息をつきながら、しっかりと大作の腕へつかまっている。
「なあに、今夜は特別のようでさ。町方がみんな張りきっていやすからね」
のこのことうしろからついてきながら久蔵がいう。
「町方が張りきっているから、特別に物騒なのか」
「なあるほど——。町方が張りきってくると、こんなに怪しいやつが網に引っかかる。すると、怪しいやつは毎晩出ているんだが、町方が張りきらないから、今まではわからなかったってことになりやすね。こいつはたしかに理屈だ。頭がいいなあ、だんなは」
「おだてたってだめだ。久蔵もその毎晩出る怪しいやつのうちの一人じゃないのか」
「あれえ、変なことをいいやすねえ、だんなは」
久蔵の声がなんとなくとがってきたようだ。

16

「久さん、今夜はどうして町方がみんなこんなに張りきっているんだろうな」
大作がふしぎそうに聞く。

「けっ、あっしのような怪しいやつにそんなことを聞いたってしようがねえでしょ」
久蔵は本当につむじを曲げているようだ。
「ああ、そうか、久さんはなんにも知らないのか」
「知らねえとも——。知ってるなあ、おめえさんたちがまともな夫婦じゃねえってことだ。白状しなせえ、だんなはそのお嬢さんをどこかの屋敷からだましてつれ出して、駆け落ちをしようってところだ。図星だろう、だんな」
「当たったなあ。どうしてそんなことがわかるんだ、久さん」
「いくら出すね、だんな」
「いくらって、金のことか」
「あたりきよう。すなおに出したほうが身のためだろうぜ。今夜は町方が張りきってるんだ。おれがここで駆け落ち者だあと一声どなりゃ、おめえさんたちはもうそれっきりの話なんだ」
久蔵はいやにすごみをきかせてくる。
正直な美沙緒はどきりとしたように腕をつかんでいる手に力が入る。
「そういう久さんだって、町方はあんまりうれしくなさそうだな」
「そんなこたあねえ。だんなは知らねえんだな。こんど北へ入ったお奉行さまは遠山の金さんといって、若い時分は一時やくざの仲間へ入っていたことがあるんだ。こう見えても、おれはその時分、金さんと兄弟分の杯をかわしている仲なんだ」
「ふうむ、金さんは体に桜のほりものがあるそうだね」
「あたりめえよ。おれがすすめてほらしたんだ。いいかね、だんな、そういう気っぷのお奉行さまだから、当節江戸の夜が物騒だってのが気に入らねえ。町方がだらしがねえから、悪党どもがのさばってくるんだ。一体、町方はどんな取りしまりかたをしているのか、おれが調べてやるってんで、このごろ夜になると昔のやくざの

風をして、一人で江戸の街を見まわりに歩き出したってんだ。そういううわさが町方の耳に入ったから、みんなびっくりして今夜のように町方が張りきり出したんだ。わかったかね、だんな」
「わかった。すると、久兄貴は兄弟分の金さんにたのまれて一役買っているということになりそうだな」
　大作はもっともらしく持ちかけてみる。
「なあに、別に金さんからたのまれたってわけじゃねえが、昔の兄弟分のよしみで、そうと聞いちゃおれだって黙って見ているわけにゃいかねえからな」
　久蔵は得意そうにいってのける。
「それで安心した。こんど町方にとがめられたら、いまの話をして、あべこべに町方をおどかしてやろう」
「冗、冗談いっちゃいけねえ。そんなことは内緒にしておくところに味があるんだ。だんなはばかっ正直だからつきあいにくいや」
　道はどうやら浅草橋のたもとへかかってきた。この茅町通りを左へ行けば天王橋へ出るが、そこへ行ってもしようがないとわかった今は、これからどっちへ行ったものか。大作の足は思わずそこへ立ちどまっていた。

17

「あれえ、だんな、さっきの御用ぢょうちんが飛んでくるようですぜ」
　久蔵がどきりとしたようにいった。
　なるほど、左衛門河岸のほうから、御用ぢょうちんが一つ、どんどんこっちへ駆け出してくる。
「あたくしたちを追ってくるのでしょうか」
　美沙緒はもう顔色をかえているようだ。
「なあに、大丈夫だ。お奉行さまの兄弟分がここについていてくれるんだ」
「だんな、だんな、そいつはいけねえ。たのん

ます、そいつだけは内緒なんだ」
　いまにも逃げ出しそうなかっこうをしながら、久蔵は両手をあわせて拝んでみせる。
　そんなところを見ると、この男はただ悪党ぶっているだけで、そう悪いやつでもなさそうである。
　それにしても、さっきの岡っ引きがどうしてまたこっちへ追いかけてきたのだろう。
「あっ、いやしたぜ、親分、あれだ」
　御用ぢょうちんを持って先に立っていたやつが目ざとくこっちを見つけたらしく、たちまち走り寄ってきた。
　そのうしろからさっきの岡っ引きが中間風の男といっしょに追いついてきて、
「お武家さん、おかみの御用聞きをからかっちゃいけねえな」
　と、苦い顔をしながら前に立つ。
「はてな、おまえはさっき水道橋のところで出会った吉助だな」
　大作は中間風の男のほうを見すえながらいきなり声をかける。さっきは手ぬぐいをぬすっとかぶりにしていたが、すばしっこそうな体つきですぐわかる。
「知らねえなあ。あっしは神保町の三島家の中間で喜久蔵って者だ。そのお嬢さんに聞いてもらやわかります」
　二十七、八のずぶとい面がまえのやつで、そんな白々しいことをいいながら、平気でこっちを見かえしている。
「お武家さん、そのお嬢さんは神保町の旗本三島弥十郎さまのお妹御さんだそうだね」
「うむ、そのとおりだ」
「さっきおまえさんは、おれの家内だっていっていなすったね」
「たしかにそういった」
「いつ御祝言をなすったんです」
「先刻お茶の水を歩きながらそういう約束ができて、祝言はこれからやる――そうだな、美沙

緒さん」
「はい」
美沙緒は大作の背へかくれるようにしながら、返事だけははっきりとする。
「そ、そいつはいけねえや、お嬢さん。おまえさまが黙って屋敷をぬけ出したもんだから、殿さまも奥方さまもひどく心配なすって、屋敷中の者がみんなさがしに出ているんです。いま御用人さまとここへくるはずだが、どうかあっしたちといっしょに屋敷へお帰りを願いやす」
喜久蔵はもっともらしい顔つきでのべ立てる。
「喜久蔵、お浜はどうしたね」
「いまここへ御用人さんといっしょにきやすよ。おめえさんはうまくお浜をまいたんだってね。見かけによらねえすごい女たらしだ」
わざとあきれたような顔をしてみせる喜久蔵である。

18

――こいつは困ったことになりそうだぞ。
内心大作は当惑した。三島家の用人長坂重蔵がきて、ぜひ美沙緒をわたしてもらいたいと出られると、こっちにはそれを拒む理由がないのだ。
たとえば相手の悪だくみをすっぱぬいてみても、証拠がないのだから、うまく悪用人にいいぬけられてしまえばそれっきりの話なのである。
「親分、さっきの捕り物はこの中間さんだったということになるのかね」
大作は念のために聞いてみた。
「そいつは、ついあっしが逃げたのが悪いんだが、おめえさんたちのためにあっしはあぶなく縛られちまうところだった。いいあんばいにそこへ御用人さんがきてくれたんでやっと助かったようなものの、お嬢さん一人のためにおれた

ちはみんなとんだ目にあっているんでさ」
すかさず喜久蔵がしゃしゃり出て、美沙緒のほうへうらみがましくいう。
そこへ、御用ぢょうちんに案内されて用人長坂重蔵がお浜をつれて追いついてきた。
意外だったのは、重蔵と肩をならべているのは、さっき筋違橋で一度呼びとめられている北の定町回り小林勝之進である。
「御苦労さまで――」
岡っ引きは小林に会釈をして、すっと一足後へさがる。
「あなたは鈴村大作どのでしょうな」
さっそく声をかけてきたのは長坂のほうだ。
「そうです」
「はじめて御意を得ます。拙者は三島家の用人長坂重蔵です。お浜から聞きますと、お茶の水でお嬢さんがあぶないところを助けていただきましたそうで、まことにかたじけなく存じます」
年ごろ三十六、七、なかなか苦み走った男ぶりで、態度も堂々としている。そのくせ、案外腰がひくくて如才なく、つまり、煮ても焼いても食えない、そういうずぶとさを持っている男のようだ。
これで宗十郎頭巾をかぶればお茶の水の五人組みの頭領そっくりという体つきである。
「わしは、どこかで一度、長坂さんにお目にかかっているような気がするな」
大作はそれとなく一本さぐりを入れてみた。
「さあ、拙者はおぼえがないようだが――」
長坂は苦わらいをしながら、
「お浜、お嬢さんにあやまりなさい」
と、うしろに立っているお浜のほうへいいつける。
「お嬢さま、申し訳ございません」
お浜はうなだれたままおじぎをして、こっちへ顔があげられないような風情だ。
「なにが申し訳ないんだ、お浜さん」
大作が軽く聞きとがめる。

「いや、お嬢さんにつまらぬ知恵をつけたのはお浜だそうで、とんだ人騒がせをしました。主人もたいそう心配しておりますので、いずれ鈴村さんにはあらためてお礼に出ます。どうぞお嬢さんをおわたしくだされたい。いかがなものでしょうな」
　あくまでも下から出てくる長坂だ。
「どうする、美沙緒さん」
　帰る帰らないは美沙緒の意志一つできまるので、ここは大作が返事をするわけにはいかない。

19

「重蔵、あたくしは二度と屋敷へはもどりたくありません。そなたからお兄上さまに、美沙緒は死んだものとおぼしめしてお捨ておきくださるように、よく申し上げておいてください」
　美沙緒は思ったよりはっきりとした態度で長坂に答えた。
「それはまた、どういうことでございましょうなあ」
　長坂は白々しくびっくりしたような顔を見せる。
「美沙緒は柏屋へなどまいりたくありません」
「なるほど――。そのことでございましたら、お兄上さまもたってということではございますまい。一度屋敷へお帰りになって、直々にお話しになればすむことでございます」
「いいえ、もう屋敷へはもどりません」
「困りましたなあ。屋敷へおもどりにならないで、これからどうなさるおつもりなんでしょうなあ」
「美沙緒には亡くなられたお父さまの遺言がございます」
「すると、お嬢さまは甲府へまいられるおつもりなのですな。困りましたなあ、甲府へまいられても、峰村新十郎さまはすでに浪人されて、もう甲府にはいないと申し上げておいたはずな

んですがなあ」
　長坂は当惑したようにいったが、美沙緒は自分のいいたいことはそれだけだというように、すっと大作のうしろへ下がってしまう。
「お嬢さま、たとえば甲府へまいられるにしても、一度お屋敷へかえって、お兄上さまのおゆるしを得なければいけません。いまのお兄上さまはあなたさまの親がわりで、あなたさまを養っている責任者なのですからな。あなたさまの身勝手はゆるされないのです」
　長坂の態度がなんとなく冷たくなってきたようだ。
「しかしなあ、長坂さん、美沙緒さんが娘の身で家出を決心するまでには、相当な悩みがあったはずだ。親がわりという枷はいい意味にも悪い意味にも使われることで、美沙緒さんは亡くなられた父上の遺言を果たしたいといっているんだ。ここは見ないふりをして、一度だけ甲府へ行かせてあげるわけにはいかないかね」
　大作はそばからおだやかに口を入れる。
「それは鈴村さんいかん。だいいち、世間知らずのお嬢さんが一人で甲府まで無事に行けるものかどうか、常識で考えたってわかることじゃないか」
「いや、それはわしが責任をもって、自分でついていくなり、しかるべき人にたのむなりして、絶対に間違いのないようにする」
「そんな子供だましのような口をきくもんじゃない。ここにはちゃんと町方の方々が聞いておられるんだ。見ず知らずの浪人さんに、大切な主家の娘さんをあずけられるかどうか、――そんな虫のよすぎる言動は慎んだがいいな」
「じゃ、こうしよう。ここに立ち会っておられる小林さんに、美沙緒さんの後見人を選んでもらう。これならいいだろう」
「お黙りなさい。一体、貴公はどうしてそんな余計な口をきくのだ。三島家とどんな縁がある御仁なのだ。まずそれからうかがいたい」

悪用人はいよいよ本性をあらわしてきたようである。

20

「御用人さま、この野郎はきっとお嬢さまをうまく口車にのせてひともうけしようとたくらんでいるにちげえねえんでさ。当節の食い詰め浪人とくると、おおかみのようにがっついていやすからね」

喜久蔵がそばからそんな悪態をついて長坂をけしかける。

「長坂さん、毛を吹いて傷を求めるということがある。今夜は穏便に別れたほうが、むしろ主家のためだと思うんだがねえ」

大作は相手の悪口などにはのろうともせず、けろりとした顔でいってのける。

「なにっ」

ずるい長坂はきらっと鋭い目を光らせたが、こいつ一筋なわではいかぬとすぐに見てとったのだろう。

「定回り殿、この不逞浪人をお召し捕り願いたい。こやつは婦女誘拐を常習としている悪浪人です」

と、小林同心のほうへ助けを求めた。

旗本は若年寄支配で、ことに屋敷うちのごたごたには町方はうっかり口が出せないからそれまで黙って控えていたのだが、長坂のほうから言葉があればもうかまわない。

「承知いたした」

と、小林は一足前へ出て、

「浪人鈴村大作、ならびに美沙緒の両人、不審があるによって、茅町の自身番まで同行されたい」

と二人に申しわたす。

「いや、美沙緒どのは三島家のお妹御で、決して怪しい者ではありません」

あわてて長坂が口を入れる。

「あなたが不審がなくとも、当方は役目の手前、

一応取り調べなくてはなりません。この男は先刻美沙緒どのを家内だといい、美沙緒どのもまたそれを承認している風だった。——初五郎、とにかく両人を自身番へつれていけ」

「へえ」

さっきの岡っ引きが腰から十手を抜いて、

「おとなしくおれについてきなせえ。神妙にしたほうがおめえさんたちのためだ」

と、大作たちをうながす。

「美沙緒さん、心配しなくてもいいんだよ」

大作は美沙緒にささやきながら岡っ引きの後にしたがう。

「あの、あたくし、屋敷へもどるのは死んでもいやです」

美沙緒はぴったり肩をよせながら大作のたもとにすがっている。

後から二間ばかり離れて小林と手下の小者がついてくるが、長坂たちはまだはじめのところに立っているようだ。

久蔵はどこへ姿をかくしたか、目のとどくところには見えない。

茅町の自身番は天王橋のほうへ二、三町行った右がわの第六天社へ入る裏角にあるのだ。

——どうもおかしい。

こっちはさっきたしかに小林にうそをいっている。しかし、このあつかいはそれをとがめるというより、長坂たちを追っ払ってくれるのが目的のように大作にはとれるのだ。

それでなければ、小林たちが二間も離れてついてくるはずはない。

そんなことを考えている大作の右がわへ、だれかうしろからすっと肩をならべてきた者がある。

悪党ども

1

前を岡っ引きの初五郎とならんで、小者が一人御用ぢょうちんをかざしながら行く。

「大の字――」

美沙緒とは反対がわへ肩をならべてきたやつが、低い声で呼んだ。その声に聞きおぼえがあるので、はっとしながらそっちを見ると、背のすらりとした遊び人風の男で、手ぬぐいをぬすっとかぶりにしている顔が、前を行くちょうちんの光の中でわらいながら、

「悪党どもに負けるなよ」

と、はっきりいった。

「あっ、伯父上――」

それは、たしかに先月、北の町奉行職にあげられた伯父、遠山左衛門尉の変装である。

「甲府まで行くつもりか」

伯父はいまの長坂との掛け合いをどこかに立って聞いていたらしい。

「はあ、場合によりましては」

「今夜は、泊まるところがなかったら、柳橋の船宿深川屋へ泊めてもらえ。知っているだろう」

「はい、そうします」

「人をたよっちゃいけねえ。なんでも自力でやるんだ。それでないと男にゃなれねえ」

「はい」

「しっかりやんな」

伯父はすっと離れて、すたすたと浅草橋のほうへ引きかえしていく。

大作は立ちどまりもしなかったし、振りかえってもみなかった。

伯父は役目で微行しているのだから、遠山左衛門尉とわかってはならない。また、こっちも、町奉行職としての伯父の力にたよってはならないのだ。

しかし、いつにかわらぬ肉親の伯父としてのあたたかい愛情は、場合が場合だけに、大作は胸が熱くなるほどうれしかった。

「どなたでございますの」

美沙緒が不審そうに聞く。

「わしの伯父貴でね、道楽者だからとうとうあんな風に身を持ちくずしてしまったんだ」

「そうですか。――あの、甲府へ行くのかって聞いておいでになりましたね」

「わしはうっかりしていたが、どこかでいまの様子を立ち聞きしていたらしいんだ。それで、男ならしっかりやれと、景気づけにきてくれたんだろうと思う」

「あたくし、心配ですわ」

「心配――」

「鈴村さまも、今夜、家出をなすってきたのでしょう。あの、伯父さまからお屋敷のほうへ知れても、追っ手はまいりませんかしら」

「ああ、そのことか――」

こまかいところへよく気がまわるものだと大作は感心しながら、

「わしのほうはそんな心配はありません。屋敷をあけるのは毎度のことだし、冷や飯食いは居候もおんなじですからな」

と、思わず苦笑が出る。

「では、あたくし安心しておすがりしていてもよろしいのでございますね」

「大丈夫です。場合によっては、甲府までいっしょに行ってあげてもいいんだ」

「それで、あたくし、やっと安心しましたわ」

なるほど、この娘はいまのところ、だれもたよる者がないんだと思うと、大作はあらためて責任さえ感じてくる。

2

「鈴村さん、今夜はどこへお泊まりになりますな」

茅町の自身番の灯が見えてくると、小林勝之

進が急に距離をちぢめてきて、気さくに声をかけてきた。
　こっちが奉行の身内らしいとわかったので、小林は一切の疑いをすてたのだろう。いや、奉行はさっきの長坂との掛け合いをどこかで聞いていたようだから、こっちだけを自身番へつれていけという指図は、奉行から出ているのかもしれない。だから、小林はわざと二間あまりもうしろから歩いて奉行が話のしいいように遠慮していたということになりそうだ。
「わしは柳橋の船宿深川屋が顔見知りなんで、今夜はそこへ泊めてもらおうと考えている」
「それじゃ初五郎に送らせましょう」
「取り調べのほうはいいのかね」
　それとなく聞いてみる。
「取り調べたいのはあの御用人さまのほうなんだが、旗本屋敷は支配ちがいで、残念ながら八丁堀のにらみはききません。もっとも、現場をおさえればいやおうなしですがね」
　にやりと小林がわらってみせたのは、ちゃんと手は打ってあるといいたいのだろう。
「とにかく、長坂というやつは相当の悪党と見ていいようです。油断は禁物ですぜ、鈴村さん」
「ありがとう。十分気をつけることにしよう」
「それが一番です。――初五郎、後をたのむよ」
「承知しやした」
　小林はもうさっさと浅草橋のほうへ引きかえしていく。さすがに奉行のぶの字も口にしない。心得たものだと、大作は感心した。
「だんな、御用ぢょうちんといっしょじゃ、あんまりありがたくないでしょう」
　前を行く初五郎が立ちどまって、遠慮そうに聞く。この岡っ引きの顔も、もうすっかり好意にみちているようだ。
「いや、そんなことはかまわないが、今夜は親分もいそがしいんだろう、わざわざ送ってくれなくてもいいよ、すぐ近いところなんだから」
「なあに、あっしたちはどこを歩いていたって、

むだってことはありやせん。怪しいやつはどこにだっているんですからね。こうしやしょう。だんなはかまわず先を歩いてください。あっしたちは後から陰供ってことにしやすから」
「そうか、すまんなあ」
　柳橋へ出るには、もう一度浅草橋のたもとまで引きかえして、川っぷちを左へ入っていくほうが近い。
「美沙緒さん、くたびれたようだな」
　げっそりとしたように黙って歩いている美沙緒を見ると、大作はついいじらしくなってくる。
「いいえ、大丈夫ですの。もうだれにも怪しまれなくてすむんですもの」
「しかし、今夜はずいぶん怖い目にあってしまったねえ。わしも夜道はこんなに物騒だとはちっとも知らなかった」
「あの、これから行く船宿というところは、なんにも怪しまずに泊めてくれますかしら」
「わしがついているんだから、そんな心配はしなくていいんだ」
　しかし、美沙緒はなんとなく不安そうである。

3

　浅草橋から柳橋のあいだの北がわを久右衛門町河岸といって、その河岸通りはほとんど軒並みといっていいほど、船宿の掛け行燈がならんでいる。ここはもう柳橋という色街の中へ入っていて、船で芸者遊びをするだんな衆が多いからだ。
　この河岸通りの裏がわは路地から路地が迷路のようにひろがっていて、雑然と置屋がひとかたまりになっている芸者の巣である。
　深川屋は柳橋のほうから数えて五軒目に掛け行燈をかけていた。ここはつり好きの兄滝主水がひいきにしている家で、深川屋の先代島七は滝家に中間奉公をしていた縁故がある。
　いまはせがれが島七をついで、船頭仲間では兄貴株だが、世辞のない男だから店のことは一

切女房のおときが取りしまっている。このおときがまたひどく伝法な女で、少し筋のとおらないことがあると、だれかれなしにぽんぽん啖呵を切るので名物女になっていた。
「ここだよ、美沙緒さん」
　大作は油障子をあけて先に土間へ入る。
「おや、いらっしゃいまし」
　店の炉端でだれかと話しこんでいたおときが、目ざとくこっちを見て、上がり框まで出迎える。
　炉端で背中を見せていた男が、ひょいとこっちを向いた。
「あれえ、だんな」
「なんだ、久蔵じゃないか。こんなところへきていたのか」
「すんません、だんな。あっしはどうもお役人は苦手でござんしてね、だんなが番屋へつれていかれたんで、こいつはいけねえと、つい逃げ出しちまったんでさ」
　久蔵は間の悪そうな顔をして座りなおしている。
「なんだ、いま久さんの話していた鈴村さんてのは、この若だんなのことだったのかえ」
　おときはそれとなく大作の背中へかくれるようにしている美沙緒のほうを見ている。
「今夜からわしは鈴村大作になったんだ。おときもおぼえておいてくれ」
「じゃ、おつれさんは美沙緒さまとおっしゃるんですか、若だんな」
　おときはもう久蔵からあらましの話は聞いているらしい。
「うむ、そうなんだ。美沙緒さん、ここへくればもう安心なんだから、そんなに小さくなっていなくてもいいんだ」
「はい」
　美沙緒はすなおに大作の背中を離れて、
「美沙緒と申すふつつか者でございます。お見知りおきくださいませ」

と、ていねいにおじぎをする。
「お嬢さんにそんなていねいなあいさつをされると、こっちはおじぎのしようがなくなっちまいます。さあ、どうぞおあがりになって――。今夜はずいぶん大変だったんですってね」
　おときは気さくにいいながら、
「若だんな、すぐ二階のほうがいいかしら」
と、あいかわらずよく気がまわる。
「そうだな。とにかく茶をのませてくれ。のどがかわいてかなわん」
　大作は美沙緒をうながして上へあがり、かまわず炉端へ座りこむ。美沙緒はその大作のたくましい背中からどうしても離れられないようだ。

4

「久さん、おまえ深川屋の縁故の者だったのか」
　大作はあらためて久蔵に聞いてみた。
「これはね、若だんな、うちの宿六の弟なんですが、どういうもんかちっとも一つところへしりが落ち着かなくて、もうやがて三十だってのに、まだ女房も持てないんですからねえ」
　おときが茶をいれながら、洗いざらいぶちまけてしまう。
「へ、へ、まあ、ざっとそんな野郎でござんして」
　久蔵はしようがないというようにわらっている。
「そうか、ここの舎弟なら、遠山の金さんと若い時兄弟分だったっていうのも、まんざら与太ではなさそうだな」
「おや、この風来坊がそんなことをいったんですか」
「ちょいと時のはずみでござんしてね。若だんなは正直だからいけねえや」
「久さん、それだけはいけないよ。殿さまはこんど大切なお役につきなすった。どこでどんな風に間違われないものでもないから、殿さまのことだけは口にしちゃいけないって、うちの人

からあんなに口どめされているんだろう」
　おときは真顔になって、声さえひそめながら、
「もっとも、久さんがそんなことといったって、だれも本当にゃしないだろうけれどね」
　と、おかしそうにわらい出す。
「久さんは金さんと兄弟分のくせに、どうして町役人が怖いんだろうな」
「なあにね、若だんなの前だが、あの近所にあっしの顔を三日見ねえとふさぎの虫をおこすっていう奇特な御婦人がいやしてね、その家をひょいと飛び出したとたんに、あの呼び子でござんしょう。間違ってつかまって、どこの帰りだってことになると、その御婦人に迷惑がかかる。だから、若だんなのお供ということにしてもらったんでさ」
　どこまでが本当だかわからない。空っとぼけた返事である。
「けど、若だんな、おどろきやしたねえ。あっしの兄弟分は、うわさだけじゃなく、本当におしのびで歩いているんですぜ。見たでしょう、若だんなも」
「うむ、見た」
「はあてね、若だんなが滝さまの御一門なら、殿さまともなんかにあたるんじゃないかな」
「今ごろなにいってるのさ。伯父御(おじご)さまと甥御(おいご)さんじゃないか」
　ばかだねえといいたそうなおときの顔だ。
「あっ、そうか。なあんだ。あっしはそうとは知らねえから、お二人さんで番屋なんかへつれていかれて、若だんなはまあいいとしても、お嬢さんがさぞつらかあねえかと思って、いい心配をしちまった。けど、本当にようござんしたねえ、お嬢さん」
「はい、いろいろと御心配ばかりおかけしまして——」
　美沙緒は顔を赤らめながら、それでもていねいに会釈をする。
「おかみさん、お二階の支度できました」

　小女が二階からおりてきて告げた。
「若だんな、お嬢さんはお二階のほうがお楽なんじゃありませんか」
　おときが如才なくそうすすめてくれる。

5

「若だんな、とてもおきれいなお嬢さんじゃありませんか」
　美沙緒が小女に案内されて二階へ去ると、おときが声をひそめて、目でわらいながらいう。飼いねこがねずみをとってきたのを、よく取ったとほめているような顔つきだ。
「それがなあ、わしはあの娘をつれて明日にも甲府まで行ってこなくちゃならないかもしれないんでね」
　大作はつい苦わらいが出てくる。
「甲府へですか」
「うむ、甲府に親同士がきめたあの娘のいいなずけがいるらしいんだ」
「あらまあ、いいなずけがねえ」
「そいつはちょいとがっかりですねえ、若だんな」
　久蔵がもっともらしい顔をする。
「どうだ、久さん、だからそのことで、別に久さんに金をいたぶられる筋合いはないだろう」
「あれえ、物おぼえがいいなあ、だんなは」
「久さん、おまえ、あのお嬢さんのことで、若だんなになにか因縁をつけたの」
　おときの強い目がきらっと光ってくる。
「いや、あれは冗談だったんだろう。金さんの兄弟分が本気でそんなまねをするもんか。なあ、久さん」
「あやまるよ、若だんな。あっしはちょいと人の弱みにつけこんでみる悪いくせがありやしてね。なあに、金がほしいんじゃねえ、ついからかってみたくなるんでさ。育ちが悪いんですねえ」
　兄嫁の手前、久蔵は小さくなって頭をかいている。

「おねがいだから、久さん、うちの人の顔へどろをぬるようなことはしておくれでない」
「わかってまさ。そいつだけはやらねえ。久蔵だってこれでも男の端くれでさ」
「なあに、久的のは罪のねえいたずらなんだが、あの娘の屋敷の用人てのが相当の悪党らしいんだ。兄貴ってのがまた少しおっとりしすぎているんだろうな。早くいえば、あの娘を三千両の金にかえようとしたんで、今夜お浜って腰元をつれて屋敷をぬけ出してきた。それも悪用人の筋書きでね、わざと家出をさせておいて、途中でつかまえてしまう。口のきけないようにしておいて、先方へ運ぼうという魂胆だったんだな」
「へえ、あきれた悪党なんですねえ、その用人てのは。じゃ、若だんなが助けてやらなければ、あのお嬢さんどうなったかわからないんですね」
「まあ、そういうことになる。とてもそんな屋敷へはかえせないんで、そのいいなずけさんのところまで送ってやろうってことになったんだ」
「そいつがあっしは気に入らねえな。あのお嬢さんはそのいいなずけさんが好きなんかね、若だんな」
「いや、まだ会ったことはないんだって話だ」
「そうらね。さっき若だんなが、鈴村大作、家内美沙緒って岡っ引きに名乗っていたら、あのお嬢さんうれしそうに若だんなの背へ張りついていやしたぜ。そのいいなずけさんのほうは、なんとかならねえもんですかねえ」
「冗談いっちゃいかん。家内美沙緒はその場の方便だ。親同士の約束というのは、そんな軽いものじゃない」
大作はたしなめるようにいって、明るくわらっている。

6

「おとき、じゃ、今夜はやっかいになるよ」

大作はそうおときにあいさつをして二階へ立った。
船宿は稼業で客を泊めてはいけないことになっている。だから、二階はたいてい六畳一間きりで、ほかに船頭が寝泊まりする裏二階が一間、総じて薄汚いのが船宿の常識である。
大作が二階へきてみると、その六畳一間に寝床が二つならべて取ってあって、まくらもとに行燈がおいてあり、その行燈の向こうに美沙緒がしょんぼりとうなだれて座っていた。
しめきった部屋の中に、女の甘いにおいがそこはかとなく鼻につく。
「なんだ、美沙緒さん、まだ寝なかったのか」
大作は行燈のこっちがわへ座りながらいった。
「はい」
美沙緒は体中をかたくして顔があげられないようだ。
「ああ、そうか。わしがいっしょじゃ、美沙緒さん困るんだな」
今そこへ気がついたわけではないが、美沙緒のそんな姿を見ると、やっぱり大作はそれを口にしなければならなかった。
若い男と女が一つ部屋へまくらをならべて寝る。世間から見れば不謹慎であり、またいちばんあぶないことでもある。が、今夜の場合はやむをえずそうするよりしようがないのだから、間違いをおこさないという腹さえしっかり持っていれば、それでいいと大作は考えていたのだ。
それでも美沙緒がこっちを怖がるとなると、大作も考えなおさなくてはならない。
「困ったなあ、この家にはこの部屋一つしか我我が泊めてもらう部屋はないんだ。ここは旅籠屋と違うんでね」
「いいえ、あたくし――」
美沙緒は真っ赤な顔になる。
「それにねえ、美沙緒さん、わしがあんたを甲

府まで送っていくとなると、やっぱり一つ部屋へ泊まりをかさねていくようになる。宿帳へは妻美沙緒と書かないと、かえって疑われるんだ。それではいいなずけの相手に申し訳が立たないというんなら、別の方法を考えるよりしようがない」

　大作はそう説明しながら、

「そうか。やっぱり、わしがいっしょじゃ、いいなずけさんに具合いが悪いことになりそうだね。こいつは困ったことになったなあ」

　と、自分でも当惑してきた。

　相手に信用はできないと正面から開きなおられると、李下(りか)の冠以上に申し訳の立たない立場になりそうだからだ。

「いいえ、あたくしがわがままだったのでございます。あたくし、もうやすませていただきます」

　美沙緒はいじらしいほどおろおろとそこへ両手をつかえる。

「そうか。とにかく、今夜はおやすみなさい。明日のことはまたよく考えてみよう」

「はい、そうさせていただきます」

　美沙緒は覚悟したように立って部屋のすみへ行き、静かに帯をときはじめる。

　大作はたばこ入れを出して、行燈の灯で一服つけながら、

「悪党というやつは恐ろしいなあ、美沙緒さん」

　と、明るく話しかける。

7

「あの、桜の馬場の五人組みは、本当に長坂だったのでございましょうか」

　美沙緒は派手な長襦袢(ながじゅばん)姿になって、向こうで脱いだ帯や着物をたたみながら、思い出したように聞く。

　さすがになまめかしい姿で、大作はなるべくそっちを見ないようにしながら、

「重蔵はいまはやりの五人組みが美沙緒さんを

さらっていったということにしたかったんだ。そうしておけば、世間は一人で家出などした美沙緒さんが悪いんだということになって、自分たちの罪にはならないからね」

　と説明してやる。

「それで、どこへあたくしをさらっていく気だったのでございましょう」

「たぶん、明日美沙緒さんが行くことになっている今戸の柏屋(かしわや)の寮へ運んでいって、三千両の金と引きかえにする気だったんだろうとわしは思うな」

「まあ、――では、あたくし、今夜もし鈴村さまに助けていただいていなかったら、死んでいたかもしれませんのね」

　美沙緒はほっとため息をつきながら、

「あたくし、これからどうなってしまうのかしら」

　と、しょんぼりうなだれてしまう。

「そんな心配はしないほうがいい。わしにはあんまりいい知恵はないが、親戚(しんせき)には相当の人物がいるから、きっと美沙緒さんの身の立つようにしてあげられると思うんだ」

「どうぞお願いいたします」

　美沙緒はそういって、やっと思いなおしたように、

「あの、それではやすませていただきます」

　と、あらためてそこへ両手をつかえる。

「なにも考えないで、ゆっくりおやすみなさい。明日は旅に出るようになるかもしれないんだからね」

「はい、おやすみなさいませ」

　行儀よくあいさつをして、美沙緒は向こうの寝床へ入り、壁のほうを向いて横になる。

　――こんなところへ泊まるのは、はじめてだろうからな。うまく眠れるかな。

　そんなことを考えながら、大作も着のみ着のままこっちの寝床へ入り、さて、明日はどうしたものかと、ぼんやりすすけた天井を見あげて

いると、ふっと隣の寝床から安らかそうな寝息が耳についてきた。
――あれえ、無邪気なもんだなあ。
大作は急に気が楽になって、かえってこっちのほうが余計な神経をつかいすぎていたのが妙におかしくさえなってきた。
そのころ――。
この深川屋からあまり遠くない柳橋の蘭水という料亭で、長坂重蔵は堀留の柏屋惣兵衛と杯をかわしながら、二人きりで密談をしていた。
惣兵衛は小太りにふとったいかにも精力絶倫そうながっしりとした体つきで、目のぎろりとした大きな顔は、世の中になんにも怖いものはないといったふてぶてしい面構えだ。事実、腕力もまだ相当なもので、悪用人長坂重蔵でさえ柏屋には一目おいているといった態度に見える。
「そうかね、長坂さんともあろう札つきの猛者が、二度までそんな若僧にうまくやられるなんて、少しどうかと思うな」
柏屋はなんとなく苦い顔つきのようだ。

8

「いつになく今夜は町方の網の目がひどくこまかい。どうもそれがじゃまになってな」
重蔵はつい苦わらいが出てくる。
「いや、町方の御精勤は結構なことです。当節のように、たちの悪い五人組み強盗があっちにもこっちにもできたんでは、金持ちがたまったもんじゃない。さすがに北の新奉行さまは偉物だと、どこへ行ってもなかなか評判がいいようだ」
「つまりは名声がほしいんだろう。昔からあの仁は人気取りがうまかったそうだな。奉行が岡っ引きのまねなどしてみたところで、なにほどの効果があるもんじゃない」
「なるほど――。すると、迷惑をしたのは重蔵さんの五人組みだけということになるんですかな」
柏屋がひやかすようにいってわらい出す。

「これも忠義のためというやつでな、貧乏旗本の用人ぐらいつまらないものはない。散々働いたあげくが、上へ悪がついて、たいてい悪用人呼ばわりをされるのがおちだ」
「そのかわり、思わぬ役得をすることもある。そうだろう、重蔵さん」
柏屋はちらっとみだらな目をしてみせながら、かまをかけてくる。
そんな手に乗るものかと重蔵は内心せせらわらいながら、
「いや、役得のほうでは柏屋に遠くおよばないらしい。金持ちは金でしばってしまうのだからいやおうなしだ。しかも、後くされはないしな」
と、それとなくすっぱぬいてやる。
惣兵衛の貸した金は一年で倍になる高利だから、三月に一度ずつ証文を書きかえることになる。用人のいない小旗本は、よく妻女や娘を代理によこす。その哀れな女たちが真っ青な顔をして柏屋から逃げるように出てくるのは珍しいことじゃないといううわさが世間にひろまってから、もう相当な年月がたっていた。
「役得といえばなあ、重蔵さん、今夜深川屋へは鈴村という若僧もいっしょに泊まっているんだろう。大丈夫かな、役得のほうは」
柏屋の脂ぎった顔が急にまじめになる。
「それは大丈夫だ。美沙緒という娘は芯じまりで、そう簡単に帯を解くような娘じゃない。おそらく、今夜は一晩中座ったきりだろう」
「ためしたことがあるのか、重蔵さん」
「別にためしたことはないが、親の遺言をまもって家出をするくらいだからな、そのくらいの強さは持っている」
「まあ、信用しておきましょう。そのかわり、わしが試してみてそうでないとわかると、三千両のうち千両は天引きにしますからな。いいだろうね」

そういう損得の算盤は決して人にゆずらない柏屋なのだ。

「柏屋、よく半分にしろと値切らないなあ。あの娘には相当食指がうごいているんだな」

「三千両だよ、重蔵さん。三千両あれば松の位の太夫でも根引きにしてまだおつりがくる。それをあの娘に出そうというんだ。柏屋も我ながら自分でもあきれているのさ。それだけに、若僧なんかに初物をなめられるのはくやしい」

五十男の執念とでもいうか、柏屋の目がなんとなくすわってきて、

「重蔵さん、明日中にきっと手に入る見込みがあるんだろうね」

と、またしても念を押してきた。

9

「重蔵さん、ごちそうになりましたな」

柏屋惣兵衛が裏の桟橋から船で堀留へ帰っていったのは、やがてもう四ツ（十時）に近いころだった。

——因業おやじめ。

桟橋に立って暗い大川をながめながら、重蔵はなんとなく苦わらいが出てくる。

重蔵はよくこの蘭水を用談の席につかうが、柏屋はまだ一度も、今夜の勘定は自分が持つからといったことがない。きまってごちそうになりましたといって帰っていく。

おそらく、柏屋は自分から料亭の門をくぐるというようなことは一度もないのだろう。資産百万両といわれる柏屋だが、酒でも女でもたいていのことは自家用のもので間にあわせている。むだな金は無論一文だってつかわないが、当然の経費でも値切れるだけは値切ってからでないと出さない。

そういうがりがり亡者が、美沙緒にだけは三千両出そうという。この正月芝居を奥方お信の方と美沙緒が見物するについて、重蔵は柏屋を招いた。前の屋敷にいた時も柏屋を利用したことがあるので、こんども柏屋から金を引き出してやろうと考えたからだ。その時、惣兵衛は美沙緒を見そめたらしい。

いや、見そめるなどというしおらしい年でもないし、柄でもない五十男の柏屋なのだ。それは執念といってもいいほどののぼせ方で、こっちは二千両の借用を申し入れ、それでも少し荷が重すぎるかなと心配していたのだが、

「どうだ、重蔵さん、柏屋一世一代の女道楽がしてみたい、三千両の支度金を出すから、あのお嬢さんをわしに取りもってみないか」

と、自分のほうから切り出してきたのである。

つまり、二千両は三島家への支度金、千両はおまえさんへの骨折り料、そういうつもりなのだろう。

「わしも男と生まれたかいに、一度はお姫さまといわれるようなおなごを抱いてみたいのだ」

それで大枚三千両奮発する気になった。ただし、一切の費用はその三千両のうちで重蔵さんに勝手にまかなってもらいましょう」

勘定高い柏屋は、はじめからはっきりとそういいきっている。

だから、今夜の勘定もこっち持ちということになるのだ。

——どうせ人のふんどしで相撲をとるんだから、費用などはかまわないが。

それにしても、今夜の失敗は痛かったと重蔵は思う。

こっちの筋書きには手落ちはなかったのだが、つまりは運がついていなかったのだ。桜の馬場の失敗はともかくとして、二度目の新シ橋、三度目の浅草橋、この両方とも町方にじゃまをされている。いや、三度目の浅草橋は、その町方を利用して、こんどこそこっちのものだと思ったのが、逆にあの二人だけを自身番へつれていかれてしまった。

あの時ちょうど遊び人風の男が通りかかって、ふらりと近くの町家の軒下へ立った。それ

を見てから小林勝之進の態度が急にかわってきたと喜久蔵はいっている。
——それがもし新奉行の微行なら、つまらない時にぶつかったということになる。
が、ここまできてしまっては、もう重蔵も絶対に後へはひけないのだ。

10

——一体、鈴村大作というのは何者なんだろう。
身なりから見ればたしかに旗本で、それもそこいらにころがっている小旗本や御家人ではない。おそらく、千石取り以上の子弟だ。それが、供もつれずに、気軽に、ああしてふらふら出歩いているところから見て、当主や若殿ではなく、いわゆる冷や飯食いといわれる次三男坊だろう。
だいいち、あれだけの腕になるには相当の修行がいる。嫡男では、よっぽど好きでもなければ、そんな苦労はしたがらない。黙っていても親の家禄がつげるからだ。
その辺から考えても、意志はかなり強い。度胸もあるし、頭も決して悪いほうではないようだ。
行儀はいいほうで、道楽はあまりしていない。
その点から見て、侠気から今夜助けた娘を、今夜くどいて物にするなどという器用なことはできないほうだ。だから、柏屋にもそんな心配はたぶんなかろうとはっきりいっておいたのだが、——それだけに敵としては、ちょいとやっかいなしろものだということにもなるのだ。
——気の毒だが、早いところ消してしまうよりほかはしようがあるまい。
重蔵はそんなことを考えながら、別室に待たせてある浪人者たちの座敷へ入っていった。
背の高い、目のぎょろっとしたほうが市川佐二郎で、もう一人は岡田真兵衛という。どっちも腕前からいえば江戸で町道場をひらいても立

派にやっていける剣客なのだが、やくざっ気が多くて身が持てず、重蔵とは以前から腐れ縁のある連中だった。
「やあ、御用人、遠慮なくやっているよ」
二人はお浜の酌できげんよくやっているところである。
「お浜、喜久蔵からまだなんともいってこないか」
重蔵は上座の自分の膳へ座りながらお浜に聞いてみた。
「ええ、まだなんともいってきません」
「すると、二人は今夜深川屋へ泊まる気なんだな」
船宿は客を泊めてはいけないことになっている。重蔵は船でどこかへ逃げる気だろうと踏んでいたのだが、これは外れたようだ。
それにしても、深川屋のほうで二人を泊めるとすると、鈴村のほうは深川屋としてもそれだけのことをしてやらなければならない深いなじみの客ということになる。
「どうなんだろうな、佐の字、これからうまく鈴村を引っぱり出したら、不意打ちのきく相手かね」
「それはなんでもない話だが、うまく引っぱり出せるのか」
「それはいくらでも打つ手はある。ただ、素早く片づかないようだと、今夜はこれから町の警戒がいよいよきびしくなると見なければならないんでね」
「どの辺まで引っぱり出してくれる気だね」
市川はさすがに杯を膳の上へおいてしまう。
「まあ、床屋横町あたりまでだな」
柳橋をわたって両国広小路へ出るまでのほんの一、二町のところへ、昼間はよしず張りの床屋がずらりと店をならべるので、そこを俗に床屋横町と呼んでいる。

11

「よし、引きうけた。こんどこそのがさぬ」
市川はあっさりうなずいた。さっきの勝負も時間の問題で、呼び子のじゃまさえ入らなければのがしはしなかったのだ。
「佐二郎、二番手はおれが引きうける」
岡田がむっつりと自分からいい出す。
「そうか、万一ということがあるからな」
「若僧のは行儀のいい剣術で、腕はそう恐ろしいことはないが、生一本だからすぐに命がけになれる。おれたちにもああいう時代があった。ちょっとうらやましい」
岡田は希望にもえていた若き日の自分の姿を大作に見た気がするのだろう。ちょっと寂しい微笑がうかんで消えた。
「それで、御用人、引っぱり出し役はだれなんだね」
市川は真兵衛の感傷など耳に入れようともしないようだ。
「お浜、おまえ深川屋へ行ってな、長坂がわたしの口をふさごうとしているようだから、馬喰町あたりまで送ってくれと泣きついてみろ。あの男ならきっと引っかかる」
重蔵は大作の純情を逆に利用しようという腹らしい。
「はい。けれど、御用人さま、深川屋はさっきの岡っ引きがまだ張りこんでいやしませんかしら」
お浜は用心深い。
「そうか。なるほど、そうかもしれないな。よし、女中に見せにやろう」
しかし、それは見せにやるまでもなかった。手をたたいて呼びつけた女中は、そういう張りこみなら今夜はこの蘭水のまわりにもうろついているという返事なのだ。
考えてみると、悪党が仕事をして逃げこんでくるのは、たいてい岡場所が多い。岡っ引きが

張りこむとすれば、岡場所はいちばん張りこみがいのある場所ということになる。
「今夜はどこまでも町方にたたられる晩だな」
重蔵は苦わらいせずにはいられなかった。いや、そればかりでなく、自分たちがここから帰ることとさえ、途中が面倒だということになる。
「ちょうどいい。今夜はここへ雑魚寝ということにして、夜明けを待とう」
「夜明けになれば、なにかうまいきっかけがあるんですか」
お浜はふしぎそうに聞く。
「あの二人が明日甲府へ立つとすれば、深川屋を出るのは夜明けごろだろう」
「なるほど、そのころには張りこみも解けるだろうし、機会はいくらもあるわけだな」
すぐ近い目と鼻との間にそんなおかみどもが目を光らせていようとは、大作もついうっかりしていたようである。

翌朝——。
大作と美沙緒は二階へ膳を運んでもらって朝飯をすませた。
明るい若葉どきの朝で、ともかくも一晩ぐっすりと眠りをとった美沙緒は、血色もよく、なるほど、狒々おやじが三千両積んで手に入れようとするだけあって、すばらしい美貌だと、大作はひそかに感心した。
それもなよなよとした病的な美しさではなく、あくまでも健康そうなしんなりとした肢体にさわやかさをみなぎらせているような美しさなのである。

12

「美沙緒さん、遠慮なく聞いておきたいことがあるんだが、聞いてもいいか」
大作は食後の茶をのみながら気さくに切り出した。
「どんなことでございますの」

一晩おなじ部屋に寝て、朝飯は自分が給仕をしながらさし向かいですませたのだから、もうだいぶ気心は知れてはきたが、それでもあらためてそんなことをいわれると、どきりとせずにはいられない美沙緒のようだ。

「甲府へ行ってくるには路銀がいる。行って帰ってくるぐらいの路銀ならわしも持っているんだが、人をさがそうというのだから、ぎりぎりいっぱいの金では心細い。その用意があるかどうか、はっきり聞いておきたいんだ」

「あの、そのお金はお浜にあずけてありますの。ここにはお小遣いをほんの少ししか持っていません。どうすればよろしいでしょう」

「そうか、お浜にあずけてあるんじゃしようがないな。——どれくらいあずけてあるんです」

「父からわたされていた十両ほどですの」

美沙緒は別に惜しそうな顔もしていない。

やっぱりそうだったかと、大作は美沙緒の世間知らずに内心あきれながら、

「よし、わかった。路銀はわしがなんとかしてみよう。お浜の手にわたっていたんじゃ、急場の間にはあわない」

おそらく二度とはもどってこない十両とあきらめるほかはないだろう。

「あの、甲府へはいつ立ちますの」

「今日中にすっかり支度をしておいて、明日の朝立つことにしよう」

「どのくらい日がかかりますかしら」

「江戸から三十六里だから、大体五日ぐらいかかるかな。女の足ではあまり楽な旅じゃないかもしれない」

「あたくし歩けますかしら」

心細そうにひざへ目を落として、しょんぼりしている。

「冗談じゃない、あんたはお浜と二人きりでも行く覚悟で屋敷を出てきたんじゃないのか」

「それはそうなのですけれど」

「なんにしても、路銀をこしらえておかなくち

ゃ話にならない。わしはこれからちょっと出かけてくるから、あんたはなるべくここを動かないほうがいいな」

「あら、お出かけになりますの」

美沙緒はびっくりしたように顔をあげる。

「なあに、できるだけ早く帰ってきます」

「あたくし、なんですか、一人では怖いのですもの」

「いや、ここの家は安心していいんだ。わしの家とは一家一門みたいなもんで、遠慮はいらない。それに、すぐ帰ってくるんだから」

大作はなだめるようにいって、もう立ちあがっていた。

路銀は一人一日三百文（三銭）ほどとして、二人で六百文、往復十日と見て二分二朱（六十二銭）もあれば足りるが、せめて三両ぐらいの用心金を用意しておかないと、女づれの道中だけに安心できない。

「では、あの、きっと早く帰ってきてくださいませね」

美沙緒もいそいで立ちあがって、すがらんばかりの顔をしている。

13

美沙緒は一人になるとなんともいえない寂しさに襲われてきた。

それは、怖いとか不安だとかいう気持ちとはなんとなく違うような気がする。

もう二度と屋敷へはもどらないつもりなのだから、これから先どうなるんだろうという不安はたしかにある。

もし長坂重蔵につかまって、あの勝ち気でどこか底意地の悪いあによめの前へつれていかれたら、どんないじめられ方をするかと思うと、考えただけでも怖い。

ふっと柏屋惣兵衛の脂ぎった顔を思い出すと、これは怖いというより身ぶるいの出るほどいやらしくてたまらなくなる。

しかし、兄嫁にしても柏屋にしても、つかまりさえしなければ怖がることはなんにもないのだ。

——では、どうしてこんなに心細いのかしら。

これから先のことは鈴村さまがきめてくれるだろうし、あの人にすがっていさえすれば安心していられるのだ。

なによりも心丈夫なのは、あの人はただの浪人者ではなく、うしろにしっかりした名門の親戚がついているらしいことである。

昨夜、あの人が、身を持ちくずした伯父さんだよといっていたのは、こんど新しく奉行職についた遠山左衛門尉さまにちがいないのだ。

強いし、親切で行儀がいいし、頭もよく働くし、はじめからたよりにできる人のような気はしていたが、それが遠山家の一門とわかって、その時から美沙緒はすっかり安心してしまったのである。

その大作が甲府へつれていってくれるというのだから、こんな安心なことはないはずなのだ。事実、昨夜はいい人に助けてもらって本当によかったと考えていた。

それがふっと、あたしはなにをしに甲府へ行くのだろうと考えてみて、どきりとしてしまったのである。

——もし甲府で峰村新十郎さまがさがしあたれば、あたしはいやでもそこへ残って、あの人と別れなければならないのだ。

美沙緒は茫然（ぼうぜん）となりながら、思わず隣に寝ている大作のほうを見ていた。

もう明け方で、部屋の中は行燈の灯がいらないほどあかるんでいた。大作は向こうむきになって、たくましい腕、肩をのり出すようにしながら、ぐっすりと眠っている。

——いやだ、あたくし。この人と別れるなんて。

美沙緒ははっきりとそう思った。大作ならこうして安心していられるけれど、峰村新十郎とはじめて会うのだし、一体どんな人柄なのか。いや、たとえどんな人柄でも会いたくないと思った。

——あたしはふしだらな女なのかしら。

親の約束したいいなずけがあるのに、別の男が好きになる、そんな不貞はゆるされないことなのだとちゃんとわかっていながら、

——いやだ、あたし。甲府へなど行きたくない。

美沙緒の心はだだっ子のように叫び出していた。

そして、皮肉にも、兄嫁や重蔵が、甲府にはもう新十郎はいない、浪人して行方さえわからないといっていた言葉に、いまは自分が必死にすがりつきたくなってきたのである。

14

考えてみると、たとえば甲府へ行って、峰村新十郎が浪人していることがわかっても、それでいいなずけの縁が切れたことにはならないのではないだろうか。

美沙緒の胸の中を、秋風が音を立てて吹きぬけていく。

——いやだ、あたくし。どうしてもあの方と別れたくない。

美沙緒ははっきりとそう心をきめてみる。

甲府へ行って、もし新十郎の行方がわからなければ、あの人はまたいっしょに江戸へ帰ってきてくれる。

江戸へ帰ってきても、どこへも行くところのないかわいそうな娘を、あの人はもう知らないとほうり出すような冷たい人ではない。

とにかく、当分あの人と別れなくてすむかもしれないと思いなおして、美沙緒はほっといくらか安心した。それから先のことは、もう考えたくない。

——あたくしの大作さま。

人にはだれにもいえないことだけれど、一人

で胸の中でそうきめておく分にはちっともかまわないことだと、美沙緒は少しうれしくなってくる。

「あたくしの大作さま」

うっとりと目をつむって、それをそっと口にしてみた。

「浪人鈴村大作、これは家内美沙緒——」

なんのちゅうちょもなくてきぱきと答えていた昨夜の大作の男らしい顔が、まぶたの中でにこりとわらってくれる。

「お嬢さま——」

ふいに、小女の声が呼びながら、遠慮そうに階段口の戸をあけた。

「なにか御用ですか」

びっくりして美沙緒は目をあく。

「あの、お嬢さまは喜久蔵という中間さんを知ってますか」

「ええ、知っています」

美沙緒ははっとして、思わずまゆをひそめていた。

「あたし、お客さまのことはなんにも知りませんて何度もことわったんですけれど、その中間さんが下へきていて、お浜という腰元から大切な用をたのまれてきているんだ、ちょっとでいいからここへお呼びしてくれって、あたしを拝んでいるんです。どうしましょうか」

小女は当惑しきっているようだ。

「おかみさんはお留守なのですか」

「いま髪結いさんへ行っているんです。呼んできましょうか」

「いいえ、かまいません。あたくしが出てみましょう」

お浜も喜久蔵も長坂とぐるだと大作から聞かされているし、昨夜の様子ではたしかに怪しいと見てはいたが、屋敷の奉公人だからそう怖いとは思わない。

それに、昨夜とちがって、いまは昼間なのだ。まさか乱暴なまねもできないだろうと思い、美

沙緒は二階からおりていった。

「ああ、お嬢さま、ありがとうござんす。あっしはもしお目にかかれなかったらどうしようと思って、気が気じゃなかったんで——。女中さん、どうもありがとうよ」

上がり框（かまち）の前へ立っていた喜久蔵は、何度もおじぎをして小女にまで礼をいっている。

15

「喜久蔵、あたくしがここにいることがよくわかりましたね」

美沙緒は用心深く、わざと冷たい顔をして聞く。

「へえ、茅町の番屋へ行って、やっとわかりやしたんで」

「あたくしにどんな用があるのです」

「あっしは今朝聞いてびっくりしたんですが、お浜はゆうべお嬢さんの大切なお金をあずかっているんですってね」

「お浜はゆうべどこへ泊まったのです」

「御用人さんにしかられて、お屋敷へ帰ったんですが、この金がないとお嬢さんがお困りになる、またしかられてもいいからあっしにお嬢さんのところへつれていってくれってたのまれたんで、実は船でそこまでつれてきているんです」

「お浜はそこへきているのですか」

「へえ、ぜひお金をかえさなくては気がすまないといいやしてね」

「では、ここへ呼んでください」

あの金が手にかえれば、金のことであの人に迷惑をかけないですむと、美沙緒は内心ほっとした。

「それがねえ、お嬢さん、お浜はゆうべ町方役人にしかられていやすんで、船からあがるのは怖い、すみませんがお嬢さんに桟橋のところまできてもらってくれと、船の中で子供みたいにふるえているんでさ。ここの家の前の桟橋なんで、ちょいと会ってもらえないでしょうかねえ」

喜久蔵は当惑顔で、おじぎばかりしている。
出がけに大作からこの家から出てはいけないと何度もいわれているが、すぐ家の前の桟橋だというし、美沙緒は早く金を手にして大作に安心してもらいたかったので、
「では、行ってあげます」
と、ついその気になって、そこにありあわせの下駄をはいた。
「すんません、こっちでござんす」
喜久蔵は深川屋の前の往来を突っ切って桟橋の上へ出る。
美沙緒がついていってみると、なるほど下に屋根船が一艘横づけにされていた。
「お浜さん、お嬢さんにきていただきやしたぜ」
喜久蔵は気軽に桟橋をおりて船房のほうへ声をかけながら、
「お嬢さん、どうぞ――」
と、こっちを見あげる。
美沙緒はさそわれるように桟橋をおりて船のそばへ行った。
「すみません、お嬢さん。そこでは往来から人に見られますから、ちょっとこっちへお入りになってくださいまし」
お浜が船房の戸を少しあけてすまなそうにいう。
「お浜、どうしたのです」
顔を見ると、いつもかしずかれていたお浜だから、やっぱりなつかしい気がして、美沙緒はなんの気もなく船へ移り、お浜があけてくれた戸口から船房の中へ入った。
「お嬢さん、わざわざお呼び立てして申し訳ありません」
お浜があらためてそこへ両手をつかえているうちに、すっと船が桟橋から離れるような気配がした。

16

「あっ」

美沙緒は、船が動き出すのを体で感じたとたん、どきりとして、素早くお浜の顔色をさぐるように見た。
その視線をまともに見すえかえして、お浜は冷たい薄らわらいをうかべている。そんなふてぶてしいお浜の顔を見るのははじめてなので、美沙緒はびっくりしながら、
「お浜、どうしたのです」
と、思わずあえぐように聞いていた。
「お嬢さん、大きな声を立てると命をもらうよ」
低いがすごみのある声で、お浜はもう残忍な目の色をかくそうともしない。
「まあ、お浜は――」
「ふん、いまさらびっくりしたってもうおそいのさ。お屋敷にいる間は、おまえさんはお嬢さんで、あたしはお腰元だけれどね。世間へ出てしまえばただの女と女、強いほうが勝つんだから、痛いおもいがしたくなかったらおとなしくするんだね」
獲物をねらっている野獣、お浜の全身にそんな荒々しい血がみなぎり燃えているようだ。
「あたくしを、あたくしを、どうしようというのです」
「お嬢さん、おまえゆうべあの鈴村って男といっしょに泊まったんだろう。かわいがってもらったのかえ」
「そんな、あの方はそんな人ではありません」
「そうかしら。だって、おまえあの男がきらいじゃないんだろう」
美沙緒は我にもなくうなずきながら、顔が赤くなってくる。
「好きなら抱いて寝てもらえばよかったのに。あの男はさっきどこへ出かけたの」
「路銀を都合してくれるといって出かけたのです」
「ああ、そうか。二人で甲府へ出かけるつもりだったんだね」
「お浜、お願いですから、あたくしを帰してく

ださい」
　美沙緒は体中がかっと熱くなるほど大作が恋しくなってきた。
「甘ったれるんじゃない、ばか。おまえはもうこっちのとりこなんだ。おまえの体には三千両という大金がかかっているんだからね、つまらないことをおいいでない」
「では、では、あたくしを柏屋へ――」
「そうだよ。おまえは柏屋のめかけに売られていくのさ。いいじゃないか、好きな男と一晩でもいっしょに寝たんだから」
　お浜の目がへびのように光ってくる。
　美沙緒は背筋へ氷のような悪寒を感じて、ふらふらと立ちあがろうとした。
「おや、おまえ逃げる気かえ。ここはもう大川の真ん中だよ」
「帰して――。帰ります、あたくし」
「ばかっ」
　お浜はいきなり美沙緒の腕をつかんで引き寄せ、そのほおへぴしゃりと火の出るような平手をくわせる。
「あっ」
「あたしをなめる気かえ」
　つづけざまに三つ四つ張り飛ばしておいて、こんどは乱暴にもそこへねじ伏せる。恐ろしい腕力だ。

17

　そのころ――。
　金策に出かけた鈴村大作は、浅草橋のたもとまできて、昨夜世話になった岡っ引き天王橋の初五郎にばったり出会った。
「こりゃだんな、おはようございます」
「おはよう。昨夜は、親分、世話になったなあ」
「どういたしやして――。実は、いま深川屋へだんなをおむかえに出てきたところなんですが、どこかへお出かけでござんすか」
「いや、こっちはそう急ぎの用というわけじゃない。わしになにか用かね」
「茅町の番屋へ小林のだんながみえていやしてね。鈴村さんをおつれしてきてくれっていいつけられたんです」
「そうか。じゃ、そっちを先にしよう」
「すいませんねえ」
　金策には出てきたようなものの、さてどこへ行ったものかと、大作は考え考え歩いていたところなので、とにかく初五郎といっしょに茅町の番屋へ行ってみることにした。
　夜はひどく物騒になるこのごろの江戸の街だが、昼間はあいかわらず人の往来の絶え間ないにぎやかな大通りである。
「にぎやかだなあ、親分。ゆうべのことを考えるとうそのような気がする」
「本当でござんすねえ。あのお嬢さん、ゆうべはよく眠れたようですか」
「うむ、案外寝つきはよかったようだ。つまり、無邪気っていうか、世間知らずっていうか、あきらめがいいんだな」
「そりゃ相手が鈴村さんだから安心しているんでしょう。お嬢さんの運がよかったんでさ。一つ間違えば、どんな目にあわされているかわかりやせんからね」
　初五郎が安心しているのは、おれに伯父貴(おじき)といううしろだてがあるからで、昨夜もし伯父貴に出会っていなければ、この連中だってこっちをどう誤解しているかわからないと思うと、大作は恐ろしい気さえしてくる。
「長坂たちはあれからどうしたか、わからないか、親分」
「さあ、あっしはまだ聞いていやせんが、深川屋の近所へはだれも来なかったようです。九ツ(十二時)まであっしが張りこんでいたんだから、これだけは間違いありやせん」
「そうか、親分は九ツまで見張っていてくれたのか。それじゃ先へ寝床へ入っちゃすまなかったな」

「なあに、それがあっしたちの役目なんだから、そんな遠慮はいりやせんや」
茅町の自身番へきてみると、なるほど、昨夜の小林勝之進が切り落としの座敷へあがって一人で待っていた。
「だんな、鈴村さんをおつれしやした」
「御苦労だったな。――さあ、鈴村さん、おあがりなさい」
「失礼する。昨夜はいろいろありがとう」
大作は座敷へあがって、あらためてあいさつをする。
「それがねえ、鈴村さん、わしは今朝親玉に呼ばれて、冷や汗をかいちまった。まだそう焼きがまわるって年でもないんですがねえ」
小林は苦わらいをしながらいきなり切り出してくる。案外明るい顔つきだから、口でいうほどの落ち度でもないのだろう。
「親玉はあれで小言をいいますかねえ」
大作は伯父貴の怒った顔など一度も見たことがない。

18

「それが、なにを寝ぼけてやがるんだ、しっかりしねえかと頭から雷が落ちるんだと小言もたまには夕立のようなもんで後が清々するんだが、親玉のは石頭へちくりと針を刺しこんで、それが後になるほどきいてくるんだから、意地が悪い」
小林は自分の頭を指さしながら、目をぱちくりさせてみせる。
「意地の悪いのは困るなあ」
「困りますとも。――定回り殿、昨夜の桜の馬場のけが人二人はどうしたね、のっけから一本ちくりとやられた。次が、長坂の足だまりはさがしてみたかねと、こいつは前のより針が太い」
「なるほど――。けが人は医者だな。素人の手にはおえない」
「そのとおり――。悪用人は柳橋あたりに足だ

まりを持っている。せっかくの獲物を人に横取りされておとなしく引きさがるような甘い野郎じゃない」
「それはそうだ」
「それにねえ、鈴村さん、平気でこれだけのことをたくらむやつだ、前にも一軒や二軒旗本屋敷をつぶしているだろう、この五、六年の間にいちばんひどくやられているつぶれ屋敷を一応洗ってみろと、針がだんだん太くなりましてな、さすがの定回り殿も今朝は冷や汗のかきっぱなしです」
小林は処置なしというような顔をしてみせながら、
「そうそう、親玉からこれをあなたに渡してくれろといってたのまれてきました。朝っぱらから八丁堀が船宿へ押しかけるのもどうかと思ったんで、御足労を願ったわけです」
と、ふところから小さな袱紗包みを取り出してわたしてくれた。
「ありがとう。金かな」
手ざわりでそれとわかる。
「ほかにもっといいものが入っているはずですよ」
「なんだろう。あけてみようかな」
「そうなさい。遠慮には及びません」
小林はわらっている。
大作は袱紗包みを解いてみると、金包みのほかに木札が一枚出てきた。百人一首の歌留多の札ほどの大きさで、裏に北町奉行所の焼き印がおしてあり、表に、
「遠山左衛門尉配下内与力、鈴村大作、二十五歳」
と書いてある。つまり、身分を証明する鑑札なのだ。
「甲府へ行かなけりゃならないんでしょう。女づれの道中はとかくねらわれやすい。その時の守り札です。きっと役に立つ時がありますから、大切になさい」

「ありがとう」

　大作はじいんと胸が熱くなってきた。昨夜深川屋へ泊まれと伯父貴がいったのは、これを届けてくれるつもりがあったからだろう。

「鈴村さん、くれぐれも油断しちゃいけませんぜ。野郎は一通りのどぶねずみじゃなさそうですからね」

「ありがとう」

　別れぎわに小林はもう一度注意してくれた。

　大作はありがとうをくりかえすだけだ。

　そして、颯爽と表通りへ出ながら、よし、これで甲府へ立てると、身も心も明るかった。

19

　久右衛門町河岸へ曲がった時、大作はふっと、

――美沙緒は大丈夫だろうな。

と、そんな予感がしないではなかった。

　こっちはまさか昼間は化け物は出ないだろうと常識で安心しているが、考えてみると化け物のほうはどうしても美沙緒を手に入れなければならないどたん場へ追いこまれているのだ。

　伯父貴は長坂の足だまりが柳橋あたりにありはしないかと小林に注意していたというが、あれだけ悪才にたけた悪用人が無計画で仕事をはじめるはずはない。昨夜お浜に天王町の実家へ行くといわせたのは、そっちへ引っぱり出せばたとえ途中で失敗しても二度目三度目の手が打てる、そっちにそういう足だまりを持っているから、鴨をそっちへ追いこんだと見ていいのだろう。

　すると、こっちは昨夜うまく彼らの目をまいて深川屋へ泊まったつもりでも、彼らはちゃんとそれを知っていたかもしれない。ただ手出しができなかったのは、初五郎たちの張りこみがあったからだということになりそうだ。と考えてくると、敵の目は今もなおずっと深川屋をねらっていることになる。

　――少しのんきすぎたかな。

　大作の足は急に速くなっていた。

　まもなく深川屋の二階の窓が見えてきたが、別に往来がごたごたしている様子もない。

　やれよかったとほっとしたとたん、その深川屋の店からおときと小女のおたけがすそをけちらさんばかりに飛び出してきて、まっすぐ前の桟橋へ行って立つ。目はいそがしく川下のほうをさがしているようだ。

「どうした、おとき」

「あっ、若だんな、大変なことになっちまって、すいません」

　おときの顔は真っ青である。

「お嬢さんが、お嬢さんが――」

　おたけは口もきけないようである。

「おとき、まあ家へ入ろう。人立ちがすると悪い」

　美沙緒は船でさらわれたなとっさに直感した大作は、とにかく先に立って店の土間へ入った。

「あたしが髪結いさんなんかへ出かけたのが悪かったんです」

　土間へ立つと、おときがいきなり申し訳なさそうにいう。

「そんなことはない。おれのほうがおまえより後から出かけているんだ。――おたけ、心配しなくてもいいから、落ち着いて話してごらん」

　大作はおだやかにいって、上がり框へ腰をおろした。

「喜久蔵っていう中間さんがきて、大切な用できたんだから、ここへちょっとお嬢さんを呼んでくれっていうんです。あたしはだめだとことわったんだけど、じゃとにかくお嬢さんに取り次いでみてくれっていうもんだから」

「そうか、それで美沙緒は喜久蔵に会ったんだね」

「ええ、お浜とかいう腰元が、ゆうべあずかったお金をかえしにきている、町役人が怖くて船からおりられないから、桟橋まで行ってくれと

いっていました」

おたけは考え考え話し出す。

20

「それで、美沙緒は桟橋へ出ていったんだね」

大作は万事休すといった感が深い。

「ええ、あたし心配だから後からついていってみると、女の人が屋根船から顔を出して、それからお嬢さんはその船の中へ入っていったんです。すると、中間さんがもやいを解いて、船頭が船を出したんで、あたしどきりとしてしまって、すいません、大変だ大変だとまごまごしている間に、船はどんどん柳橋の下をくぐって行ってしまったんです」

おたけはおろおろと、いまにも泣き出しそうな顔をしている。

「どうして大きな声で人を呼ばなかったんだろうね」

おときが悔しそうにいう。

「恥ずかしくて、声が出なかったんです。そこへ、久蔵さんが帰ってきてくれて、どうしたんだというから、わけを話すと、それは大変だといって、すぐ猪牙(ちょき)の支度をして後を追ってくれたんです」

「自分が留守にしておいて大きな口はきけないけれど、出がけにあたしは久蔵によくたのんであったんです。しりの落ち着かない人だって知っていながら、——やっぱり、あたしがいちばん悪かった。どうしましょうね、若だんな」

「久蔵がうまく後をつけてくれればいいんだがな」

しかし、当てにもならない久蔵の帰りをここでのんべんだらりと待っているわけにはいかない。

「おたけ、屋根船の中はお浜一人だったようか」

「ええ、一人だけのようでした」

「そうだろうな。ほかに怪しいやつがいれば、美沙緒も用心するだろうからな。すると、その

船は、中間の喜久蔵と船頭、あとは女たち二人ということになるんだね」

「そうだと思います」

「どこの船頭だか、顔におぼえはなかったかえ、おたけ」

「若い船頭さんでしたけど、知らない顔なんです」

「よし。とにかく、おとき、わしは出かけてみる」

大作は意を決して立ちあがった。

「なにか心あたりがあるんですか、若だんな」

「一つだけある。たぶん今戸だろう」

昨夜、彼らは今戸の柏屋の寮へ美沙緒を運ぶ計画だったらしいことを、大作は思い出したのだ。

「じゃ、船の支度をさせましょうか」

「いや、歩いていったほうが早いだろう。できてしまったことはしようがないんだ、おときもあんまり心配するな。おたけをしからないでくれ」

「そんなことはしませんけど、島七でもいれば若だんなのお供をさせるんですけれどねえ」

おときは気が気ではないようである。

「まあいい、やるだけやってみよう。もし久の字がなにかいいたよりを持ってきたら、今戸へよこしてくれ。今戸の柏屋の寮がわしのねらいなんだ」

「わかりました。きっとそうします。気をつけてくださいよ、若だんな」

「うむ、心配するな」

大作はそういいおいて深川屋を出た。

盗人(ぬすっと)の巣

1

——美沙緒は金がほしかったんだ。

大作は茅町通り(かやちょうどおり)へいそぎながら、その気持ち

はよくわかるような気がした。
　いくら世間知らずでも、金の心配まで大作にさせてはすまないと考えていた矢先へ、喜久蔵がうまくお浜をつれてきて一芝居打ったので、たわいなくわなにかかってしまったのだろう。
　しかも、喜久蔵はちゃんとこっちの出かけるのを見張っていて仕事にかかったのだろうから、まったく油断のできない悪党どもである。
　それにしても、せっかくこっちは金が手に入ったところだったのに、皮肉なもんだなあと、大作はがっかりせずにはいられない。いや、がっかりだけではすまされないものがある。なんとかして船からあがるまでに美沙緒を取りかえさないと、柏屋の手にかかってからではもうおそいのだ。
　——世間知らずだけに、変な目にあわされれば美沙緒は自害する。
　大作はむらむらっと激しい忿怒に駆られてきた。平気で主家の娘を金にかえようとする長坂重蔵の悪辣さがたまらなく憎い。肉親の妹をそんな目にあわせようとする三島夫婦の冷酷さにも腹が立ってくる。
　——しかし、間にあうかなあ。
　茅町通りからぐんぐん蔵前のほうへ大股に歩きながら、大作は不安でたまらなくなってくる。
　不安といえば、美沙緒の船はたしかに今戸へ向かっているかどうか、たぶんそうだろうとこっちが一人できめているだけのことなのだから、これも心配だ。万一、それからして見当が狂っているとすれば、万事休すということになる。縁がなかったのだとあきらめるほかはない。
「大作、おまえどうしてそんなに美沙緒のことで夢中になっているんだ」
　ひょいと別の心が冷たく聞いてきた。
「おれは美沙緒を悪党どもの手からまもってやりたいんだ。おれは悪党どもが憎いんだ」
「ただそれだけか——」
「ただそれだけだ。どうしてそれだけじゃ悪い

んだ」
「本当のことをいってみろよ。おまえは美沙緒が好きになったんだろう」
「そんなことはない。きらいじゃないが、あの娘にはいいなずけがあるんだ。好きになっちゃいけないんだ」
「いけないといったって、おまえはもう美沙緒のためになら命がけになれるほど好きになっているじゃないか」
　意地の悪い声が耳の底でわらっている。
　——しっかりしろ、大作。好きなら好きでいいから、それをちゃんと腹の底へしまっておくのが男なんだ。
　大作ははっきりと自分にいって聞かせて、やっと安心した。
　美沙緒の船が今戸へ向かっているとすれば、この足で行けばたしかに先まわりができるはずだ。
　——おれの見当が間違っていてたまるもんか。
　大作は歯をくいしばっていそぐ。
　やがて雷門が近くなって、にぎやかな往来の者がびっくりしたように大作の顔を見ながらすれちがっていく。

2

　今戸橋をわたってから、大作は普通の足なみにかえった。
　橋をわたった左角は慶養寺で、右手は草っ原が隅田川のふちまでひらけ、瓦焼き小屋がいくつも散らばっている。
　慶養寺の隣は本意寺で、その隣が今戸八幡社になる。今戸橋から八幡社までは二、三町もあるだろうか。八幡社の前あたりから寮造りの屋敷がつづき出して、その寮を四、五軒ほど通りすぎると、右へ曲がって川っぷちへ出られる横町がある。
　その横町の正面に大きな酒屋があるので、大

作はその店の前に立って、
「ちょっとたずねたいが、この辺に堀留の質屋で柏屋惣兵衛の寮があると聞いてきたんだが、知らないだろうかなあ」
　と、店先にいた小僧に聞いてみた。
「ああ、柏屋さんの寮ならあそこですよ。あの柳の木のある門が柏屋さんです」
　小僧は横町の角から三軒目の門を指さして、
「けど、柏屋さんの寮はだれも住んでいないんです。時々店の者が雨戸をあけにくるくらいなもんで、空き屋敷になってるんです」
　と教えてくれた。
「そうか、ありがとう」
　大作は礼をいって、横町へ入り、まっすぐ川っぷちへ出てきた。
　強欲でけちんぼうな柏屋が、ぜいたくな寮など自分で建てるはずはない。いずれだれかの寮を抵当に取って、それがそのまま抵当流れになったものなのだろう。
　川っぷちへ出て、右へ曲がると、そこに深編み笠をかぶった浪人風の男が一人、草の土手へどっかりとあぐらをかいて、のんきそうにつり糸をたれている。
　そこから三つ目の裏木戸が柏屋の裏口になり、前に桟橋ができている。
　この辺はほとんど寮ばかりだから、この川っぷちの道はめったに歩いている人の姿は見かけない。
「つかぬことをうかがいたいんだが、さしつかえなかろうか」
　大作はつり浪人のうしろに立って、念のために聞いてみた。
「かまわんです。どうぞ――」
　振りかえってこっちを深編み笠ごと見あげた顔はまだ若々しく、自分とおなじ年ごろだろうか、なかなかがっしりとした顔立ちのようだ。声にも気力があって、暗いかげは少しも感じられない。

「貴公はだいぶしばらくここにおられたんだろうか」
「さあ、半刻（一時間）あまりですかな」
　つり浪人は目を川面にういているうきのほうへもどしながら答える。
「その間に、この辺の桟橋へ屋根船はつかなかったろうか」
「屋根船ねえ。見かけなかったようですな。この辺はめったに屋根船はこないから、くればすぐ目につく」
「なるほど――。すると、これからかな」
　やっぱりこっちのほうが早かったのだと安心しながら、しかし、見当ちがいならどうすると、大作はすぐその後からどうにも安心しきれないものがある。

3

「その屋根船は、必ずここへくることになっているのかね」
　つり浪人はあいかわらずうきから目をはなさずに、気軽に話しかけてくる。
「いや、たぶんくるだろうと見当をつけているだけだ。しかし、この見込みが外れると、ちょいと困ることになる」
　大作は川下のほうを目でさがしてみたが、屋根船らしいものは見あたらない。もっとも、時刻は昼をすぎたばかりで、帆を張った船や伝馬、荷足の上り下りがかなり多く、ひょっとするとその船のかげになっているかもしれないのだ。
　対岸は向島土手で、葉桜になった土手の桜並木が明るい。
「なるほど、この辺は閑静でいいなあ」
　大作はやっと景色が目に入ってきた。
「貴公はどこからきたんだね」
「柳橋からやってきたんだ」
「屋根船は貴公よりどのくらい前にこぎ出したんだろうな」
「たぶん四半刻（三十分）前と見ていいだろう」

「そうか。じゃ、まっすぐこいでくれば、もうそろそろ着く時分だな」
「わしもそう考えている」
はてな、この男がもし長坂の一味の者だとしたらどういうことになるんだろうと気がついて、大作はどきりとした。
そういえば、もうここに半刻もいるというのに、まだ一匹もつっていないらしく、そこにおいてある魚籠は空のようだ。水面にういているうきも、さっきから一度も動かないようである。
こんなつれない場所にいつまでも辛抱強くじっとしているのからして、怪しいということになりはしないか。
「屋根船に乗ってくるのは、たぶん若い女だろう。違うかね」
つり浪人がはっきりと図星をさしてくる。
「うむ、当たった」
大作はなにげなく答える。
「貴公は逃げた女を追いまわすような男ではなさそうだ。すると、その女はだれかに無理に屋根船にのせられてここへ運ばれてくる。それを取りかえしに、貴公は陸をいそいで先まわりをしてきたということになりそうだな」
「それも当たった」
「よし、もう一番いこう。貴公はその女が好きになった。女も貴公とならどこまでもという気になって、親もとを飛び出し、柳橋あたりへ一軒愛の巣をもった。親もとではその巣をつきとめたんで、今朝貴公が外出したすきに女を取りもどして、無理に屋根船へのせてしまった。――はてな、これは少し違うな。貴公のほうが不埒を働いたんなら、親もとは貴公のいない留守をねらう必要はない。不埒は貴公の女を無理に船へのせて逃げたほうにあると見るのが本当だ。すると、どういうことになるのかな。その貴公の女に横恋慕でもしたやつがあって、貴公の留守にうまくだまして女を屋根船でさらって逃げた、このほうだな。そうか、それで貴公の

体に殺気があるんだ」
「貴公はつりはあんまりうまくなさそうだが、当て物はちょいとうまいなあ」
大作はつり浪人の背中をながめながら思わず苦笑が出る。

4

「貴公、おれはこれでも親切心から、貴公のことを心配してやっているんだ」
つり浪人は、あいかわらずうきのほうを見ながら、のんびりと抗議めいたことを口にする。
「ありがとう。わしも親切心から心配しているんだ。半刻の上もかかって一匹もつれない場所は、早くかわったほうがいいんじゃないかと思ってな」
大作もかまわずやりかえす。
「ああ、そうか――。貴公はおれを隠密と間違えたんだな。本当はここをどいてもらいたいんだろう」
「いや、どいてくれなくたっていい。女をさらわれた男というやつは、とかくひがみっぽくもなるし、殺気立ちたくもなるものなんだ」
「おれの場合は貴公と少しちがうな。男をそういうものだときめてかかるのは独断すぎるな」
「そうか。貴公は女を人にとられても平気なのか」
「うむ、平気だ。そのかわり、平気で人の女をとることもある」
「あきれた御仁だなあ」
「おれにいわせると、あきれる貴公のほうこそ、君子退屈してあくびばかりしている気の毒な御仁に見える」
「なかなかやるなあ。つり師退屈してあくびを忘れているのが貴公じゃないのか」
「ありがとう。おれは退屈する暇がないんで、あくびをしにここにきているんだ」
「はてな。すると、盗人の昼寝ということになるのか」

大作はわざとからんで出てみる。
「うまいうまい。あくび君子にしては、ちょいと頭がいいぞ。おれはなあ、どういうものか女にほれられすぎるんだ。おれの主義として、ほれてきた女は決して失望させないことにしている。たとえばそれが人の女房であろうとめかけであろうともな。だから、時々ここへでも来てあくびをしておかないと、体がもたない。もっとも、貴公とちがって、おれにほれるような女はたいてい年増で、生娘やおぼこはすくない。自然そっちの要求のほうが多くなるから、適度にそれをかわす必要があるんだ」
つり浪人は堂々といってのける。
「そうか、貴公は年増にやしなわれている組なんだな」
「それは女を食い者にしている男という意味かね」
「下世話にいえばそうなるな。気にさわったかね」
「いや、そんなことを気にするようなあくび君子じゃない。貴公たちの住んでいる退屈な世界と、おれたちの住んでいる生きがいのある世界とはまるっきり違う」
「おい、うきがうごいているぞ」
「心得た」
つり浪人はさっとさおをあげたが、わずかに散ったのは水ばかりで、どうやら餌をとられただけらしい。それをつり浪人はよく見もしないで、ひゅっとつり糸を水面へ投げる。手つきだけは慣れたものだ。
「おい、餌をつけなくてもいいのか」
「うむ、魚も女とおなじで、餌のない針にあわてて食いついてくることもあるんだ。針には餌をつけるものときめているのはあくび君子の世界でな、だから退屈してあくびばかりするようになるんだ」

5

つり浪人の放言にうっかり引っかかかって相手になっていた大作は、
「こりゃいかん。やっぱりわしの見込みが違っていたのかな」
と、もう一度川下のほうを目でさがした。屋根船らしいものはどこにも見あたらぬ。
「その屋根船でくるというのは、貴公の女房か、それとも恋人か、どっちなんだね」
「そんなんじゃない。ゆうべ悪人どもの手から助けてやった気の毒な娘なんだ」
「ふうむ。すると、よっぽど美人らしいな」
「おれは美人だから娘を助けたんじゃない」
「それはそうだろう。無論、気の毒だから助けた。そして、家へつれて帰って、いろいろとその気の毒なわけを聞いているうちに、美人だから好きになった。好きになったことをなにも照れたり遠慮したりすることはない」
つり浪人は深編み笠の中でわらっているようだ。
「そうはいかん、その娘にはちゃんといいなずけがあるんだからな」
「ふうむ。それなら、なぜゆうべそのいいなずけのところへ娘を送っていってやらなかったんだね」
「そのいいなずけの家は甲府なんだ。だから、今朝わしが路銀をこしらえに出た後で、娘は悪党どもにだまされて船へ乗せられてしまったんだ」
「おかしいな。その娘は美人には美人だが、頭のほうは少しぼんやりしているのか」
「違う。育ちがよすぎるんだ。世間知らずに育ちすぎているんだ」
「良家の子女というわけだな。それで、その良家の子女は、どうして自分の屋敷へはもどれないんだね」
「美沙緒は家出をしてきたんだ。兄貴というや

つが賄賂の金づくりに、妹を三千両で欲張り質屋へ売りこもうとしたんだ」
「なるほど。すると、そこの用人というやつが、相当の悪役ということになりそうだな」
「とにかく、わしは行ってみる。失礼した」
　こんなつり浪人などにわけを話してみたところでむだだし、だいいち、いまはそんなのんきなことをしていられる場合ではないのだ。
「まあ待てよ。行ってみるといって、そんな当てがあるのか」
「ある、わしはそこの柏屋の寮が怪しいとにらんでいるんだ」
「なんだ、その欲張り質屋ってのは堀留の柏屋惣兵衛のことか」
「貴公、柏屋を知っているのか」
　大作は踏み出そうとした足を思わずとめる。
「知っている。あいつは悪名の高い因業おやじだ。おれは女のほうでほれてくるから遊び相手になってやるんだが、あいつのは金でしばって人妻であろうと娘であろうと平気で毒牙にかける。それで自害した女が何人かあるはずだが、あいつはただせせらわらっているだけだ……。そうか、娘の屋根船はそこの柏屋の寮へ着くだろうと貴公は見ているんだな」
　と、ゆっくりこっちへ深編み笠の顔を向けた。
　その時、さっき大作が通ってきた横町のほうから人の足音が耳について、ひょっとその角を曲がってきたやつがある。二人づれの浪人者で、一人は目玉の市川佐二郎、連れは相棒の岡田真兵衛だった。

6

　――来たな。
　と、大作は思わず目を輝かした。この二人がここへくるからには、こっちの見こみに狂いはないはずだということになるからである。
「おお、いたな」
　目玉の市川佐二郎はどきりとしたように立ち

どまって、まず川っぷちにつり糸をたれているつり浪人のほうを気にしたようだ。
「やあ、ゆうべはたいへん失礼した」
　美沙緒がここへくるとわかると急に元気になっているから、我ながら正直なものだと大作は思う。
「おぬし、その深編み笠と友達か」
「いや、ここで会って世間話をしていただけだから、まだ友達というほどの仲ではない」
「そうか。じゃ、こっちへきてくれ」
「わしはまだ貴公たちの名前を聞いていないような気がするんだがねえ」
「おれは市川佐二郎、相棒は岡田真兵衛、よくおぼえておくがいい」
「三島家の用人長坂重蔵さんとどんな関係があるんだね」
「余計なことは聞かなくたっていい。歩け」
「じゃ、一つだけ教えてくれ。屋根船はきっとここへくることになっているんだろうな」
「そんなことは知らん。歩けといったら歩けばいいんだ」
　市川はもうおおかみのようにかみついてくる。
「ちょっと聞くがなあ、市川うじ、わしはどうしてそう貴公からがみがみしかられなくちゃならないんだね」
「なにっ」
「わしはあんまり腹を立てないほうだから、ただあきれているだけだが、少し気の早い人間ならもうとっくにけんかになっている」
「ばかっ、おれは貴様を切りにきているんだ。お世辞なんかつかう必要がどこにある」
「気の毒な御仁だなあ」
「なんだと――」
「人を切るということは、一つ間違うと自分が切られるということだ。無論、お世辞なんかつかう必要はないが、念仏ぐらいはとなえておいたほうがいい」

「くそっ、歩け。――歩かねえとここでたたっ切るぞ」
　市川おおかみは本当にここでやる気らしく、刀の柄に手をかける。
「待った」
　つり浪人が深編み笠のままこっちを向いて、
「せっかくのわしのつり場を荒らさないでもらいたいな。――気ちがいは場所柄を心得ないから困りものだ」
　と、冷笑するようにいいながら川のほうへ向きなおる。
「気ちがい――」
　市川おおかみはたちまち聞きとがめて、
「おぬしの姓名を聞いておこう」
　と、深編み笠をにらみつける。
「おれの名を聞いてどうしようというんだね」
「この鈴村というあほうを片づけてから、あらためてあいさつをしてやる」
「そうか――。おれは南蛮太郎」
「なにっ」
　市川おおかみはぎょっとしたようにとっさに左足をひいて抜き打ちの体勢をとったが、つり浪人は振りかえってみようともしない。

7

「あぶないっ」
　市川おおかみの体勢を見たとたん、大作は一喝するように口走りながら、自分も抜き打ちの構えをとっていた。市川が抜いたら、同時にこっちも市川を切る気だったのである。
　が、それより早くつり浪人がひょいと振りかえって、
「やめろっ」
　鋭く叱咤したのと、木の餌箱を取るなりはっしと市川の顔へ投げつけたのとがほとんど同時だった。
「あっ」
　さすがに木箱だけはよけたが、飛び散るどろ

とみみずはよけきれず、顔中をどろだらけにして、たじたじとうしろへさがった。
「こっちを先にするかね、気ちがい先生」
　つり浪人はすっと立ちあがりながらいった。
「うぬっ」
　明らかに機先を制されて、どうするというように市川はちらっと相棒の岡田真兵衛のほうを見た。
　真兵衛はむっつりときびすをかえして、さっさと横町の角のほうへ歩き出す。
「相棒は都合が悪いそうだから、勝負はあずけておく」
「それがいい。日の悪いときは出なおすのが一番だ」
「南蛮太郎、正体を見とどけたぞ」
　当人はすごみをきかせるつもりで冷笑したのだろうが、その顔に点々とどろがついているので、かえってこっけいに見える。
「おかしな顔になったもんだなあ」
　つり浪人が深編み笠の中でわらっているうちに、市川は真兵衛の後を追って横町の角を曲がっていった。
「市川たちは貴公を知っているようだな」
　大作はぽかんとした顔になって聞く。
「なあに、ちょいとかまをかけてみたんだ。南蛮太郎というのは、このごろやたらに偽五人組み強盗がふえてきたんで、そいつらの上前をはねて歩くやつが出てきた。そいつはきまって南蛮太郎と名乗って、強盗の獲物を横取りしていくんだそうだ。あの二人も南蛮太郎と聞いて殺気立ったところを見ると、多分、夜は偽強盗をやっている組なんだろう」
　つり浪人はつりざおをかたづけながらそんな話をしてくれる。
「おかしいなあ。その南蛮太郎という男は、どうして五人組み強盗の本物と偽物がわかるんだろう」
「なるほど、そういうことになるな。すると多

分南蛮太郎というやつは本物のほうの一人かも知れないな」
　つり浪人はあっさり答えながら、さっき投げつけた餌の木箱をひろいに行く。
「そういえば、本物のほうは裏で高利を貸しているような悪徳金持ちしかねらわないというが、本当かねえ」
「そんな話だなあ。どっちにしたって強盗は強盗なんだから、あんまりほめた話じゃない」
「しかしなあ、貴公、あいつらは貴公を南蛮太郎だと思いこんでいる。訴えられると後が面倒じゃないのか」
　人のいい大作は急にそんなことまで心配になってくる。

8

「おれよりもな、鈴村うじ、貴公こそ気をつけなければだめだぞ。ああいう連中は物騒な世相のしりうまにのってこそこそと悪事を働き、おれが悪いんじゃない、世相が悪いんだと、平気な顔をしていられる野良犬どもなんだ。そういう野良犬どもを金で集めて一仕事しようというやつ、こいつがいちばんあくどい。柏屋にしても、三島家の悪用人にしても、貴公にとっては大敵だ。まあ、しっかりやりたまえ」
　つり浪人はすっかり帰り支度をして、さおを取りあげる。
「ありがとう。もう帰るのかね」
「うむ、あの野良犬どもに、せっかくのみみずをただ取りされてしまったようなもんだ。野良犬なんかつって帰ってもしようがないからな」
「とんだとばっちりをかけて悪かったなあ」
「なあに、そんなことはない。うまく美沙緒さんが貴公の手にかえるように、おれはかげながら祈っている。じゃ、失礼」
　つり浪人はとうとう自分の名は名乗ろうともせずに、きびすをかえして歩き出す。
　考えてみると、顔も下半分しか見ていないの

だ。
　――ことによると、あれが南蛮太郎じゃないかな。
　大作はなんとなくそんな気がしてくる。いうことも変わっているし、市川おおかみに餌箱を投げつけた素早さにしても尋常な腕ではない。
　そう思って見るせいか、川っぷちをゆっくり歩き去るうしろ姿にひどくたくましいものがあるようだ。
　今戸河岸はちょうど中ほどから隅田川がゆるく左へ曲がっていくので、つり浪人の姿はそのあたりから塀のかげへ入って見えなくなった。
「さあ、どうしたもんかなあ」
　大作は我にかえって、川下のほうへ目を向けた。
　まだ屋根船らしい船はどこにもないようだ。
　しかし、市川と岡田たちがここへ様子を見にくるからには、美沙緒はきっと柏屋の寮へ運ばれてくるにちがいあるまい。
　――よし。
　大作はともかく裏木戸から寮の庭へしのびこんでみることにした。
　角から三軒目の木戸が柏屋の裏口である。ほかの寮には番人が住みこんでいるから塀ぎわの雑草がきれいに抜いてあるが、柏屋のほうは草がのび放題に生え、塀越しに伸びている庭木の枝にも久しく手入れがしてないようだ。
　大作は道の前後に人目のないのを見さだめてから、木戸に手をかけてみた。思ったより軽く戸があく、今日この寮を使うとすれば、だれか掃除にぐらいはきているはずだから、戸のあくのは吉と見ていい。
　大作はそう一人できめて、なんのちゅうちょもなく中へ入って戸をしめた。
　入ったところは外庭の雑木林になっていて、緑したたるような若葉がしいんと明るい。
　その林の中の小道を、大作はあたりの気配に耳を澄ましながら、かまわず奥へ歩いていった。

9

林はそう深いものではなく、やがて内木戸の前へ出た。

ここはしゃれた開き戸になっていて、もとはなかなか風雅なものだったろうが、今は半分こわれかかって、一方のとびらはあいたままになっている。しかも、どこを見ても雑草だらけで、なんとなく化け物屋敷という感が深い。

――おかしいなあ。

美沙緒の昨夜の話では、今夜ここへ美沙緒は兄嫁といっしょに招かれることになっていたといっている。柏屋と長坂との間にそんな相談が本当にあったとすれば、昨日のうちになんとかもう少し掃除ぐらいはしてあるはずなのだ。

たとえば、招くというのはお浜が美沙緒をさそい出す口実だったにもせよ、昨夜長坂の一味が美沙緒を手に入れて運ぶ先はやっぱりここだったはずだから、なんの手入れもしていないのはおかしい。

――そうか、わざと荒れ屋敷で美沙緒と三千両を交換して、柏屋は船ですぐ美沙緒をどこかへつれていく、そんな手もないことはないな。

つまり、世間の目をごまかすために、わざと一度荒れ屋敷を使う、そんな小細工を考えていたのかもしれない。

とにかく、市川佐二郎と岡田真兵衛が現にここへ様子を見にきているのだから、美沙緒の船は一度はここへくるものと見ていいだろう。

――待てよ。

市川と岡田は表通りから裏の河岸通りへまわってきている。すると、美沙緒の組もどこかで船をすてて、案外表門からすでにここへ入っているかもしれない。

――油断は禁物だぞ。

大作は急に体中が緊張してきた。

開き戸から内庭へ入ると、植え込みの向こうに母屋の東がわが見え、無論、雨戸はしめきってある、その前の庭から南の庭へかけて、ここにも雑草だらけである。

あたりはしいんとして、それがあかるい春の真昼だけに、妙に不気味な感じだ。

大作は植え込みの中を東の雨戸の前まで行ってみた。気がついてみると、建物は相当古くなって、さすがにゆがみこそきていないが、あっちこっちかなりいたみが目立つ。

耳を澄ましてみたが、人の気配はどこにもないようだ。

大作は表門まで行ってみるつもりで、まず北がわのほうへ足を向けた。建物にそって左へ曲がると、少し行ったところにまた内木戸があり、その内木戸の内がわの右のほう、ほとんど北隣との境の生けがきに近いところに外蔵がある。

内木戸を出たところはたぶん台所になっているのだろう。外蔵とならんだあたりに、竹垣（たけがき）を一つはさんで納屋の屋根が見える。

――はてな。

内木戸はあけっ放しになっていて、外蔵のほうをもう一度見なおすと、そこの観音びらきの表戸も半分あいている。

この土蔵もかなり古びてはいるが、二階建てでがっしりとできているようだ。

大作は思わずそこへ立ちどまっていた。

10

内木戸の戸はしめ忘れるということもあるが、蔵のとびらをしめ忘れるということはないはずだ。たとえ空き蔵にもせよ、前の売り主が一度しめて出れば、蔵というものはそう度々とびらをあける必要はないものなのだ。また、必要があってとびらをあけた者がしめるのを忘れるというようなことは、ほとんど考えられない。

ことによると、あの蔵はいま人が使っているのかもしれないぞ。

大作は足音をしのばせて蔵の戸口前へ近づいていった。夜まで美沙緒を監禁しておくとすれ

ば、この蔵などちょうど手ごろだという気がしたからである。
石段を三段ほどあがって、あいている戸口から中をのぞいてみると、中はがらんとして、日の中を歩いてきた目にはひどくうす暗い。
戸口からさしこむ光線をたよりに、床板を見まわした目が左手の階段のほうへ行って、
「あっ」
大作は思わず息をのんだ。
階段の三段目に女の櫛が一枚おちていて、その櫛にちりばめてある貝がらがひとところ青く光っているのが目についたからである。
――美沙緒の櫛かもしれぬ。
大作は美沙緒の櫛を別に手にとって見ているわけではないが、その櫛に貝細工がしてあったことだけは見おぼえている。
大作は我にもなく蔵の中へ入って、その櫛を手にするなり鼻へ持っていってみた。
――美沙緒のにおいだ。
一晩中一つ部屋にいておぼえているにおいだから、これだけは間違えるはずはない。
――よし、二階だ。
大作はかっと体中が熱くなりながらその櫛をふところへしまって、静かに階段をあがっていった。
敵といっしょかもしれないという気がするので、不意打ちには十分そなえて差し添えのほうの柄に手をかけている。
顔が二階の床板の上へ出た時、素早く二階を見まわしたが、真っ暗でなにも見えない。いや、だれも人のいるような気配は感じられないのだ。
――しまった。
計られたなと気がついた時はすでにおそかった。
下の戸口の格子戸がふいに、がらがらっ、ぴしゃっとしまる音がして、錠までかけてしまったようである。

大作は一気に階段を駆けおりて戸口の前へ立った。
「気の毒だったねえ、大の字」
格子の外のあかるい日の中に立ってわらっているのは、意外にもお浜である。
「なんだ、おまえか」
大作はあきれたように苦笑する。
「あたしじゃ敵にまわして不足だというのかえ」
「一体、わしをどうしようというんだね」
「ばかだなあ、そんなことはあたしに聞かなくたってわかるはずじゃないか。男のくせに、しっかりおしよ」
お浜のふてぶてしい顔が勝ち誇ったように冷笑している。昨夜の腰元お浜とはまったく別人のような鋭い目つきだ。

11

「美沙緒は今どうしているね」
こういう女を相手に怒ってみたところで、それは冷笑を買うばかりだと気がついた大作は、真顔になって聞いてみる。
「大の字、おまえ、ゆうべ美沙緒には手を出さなかったんだってね」
お浜の目が格子の外から大胆にもじっとこっちの目を見すえている。
「あれはいいなずけのある娘だ、手など出しては悪い」
「じゃ、そんな人の女房になる娘のことなんか、なにも心配しなくたっていいじゃないか」
「そうもいくまい。山犬においかけられている子供があれば、その山犬を追っ払ってやるのは大人のつとめだ」
「おっしゃるよ、この人。その大人がこんな蔵の中へ押しこめられたんじゃ、つとめもなにもあったもんじゃない」
お浜はおもしろそうにわらい出す。
「いや、大人はわし一人というわけじゃない。

世間にはいくらも大人がいる」
「まあ、今夜のことには間にあいそうもないな。美沙緒は山犬の中でもいちばんたちの悪い山犬に、今夜売られてしまうんだ。あの惣兵衛犬とくると、どこかの鼻の下の長い大人なんかと違って、つまらない遠慮はしないほうだからね」
　にっと大作が意味ありげにわらう。
「それはどういうことなのさ」
「お浜は長坂犬に手をつけられているほうじゃないのか」
「ぶん殴るぞ。こう見えても、あたしはあんな重蔵犬なんかよりずっと知恵があるんだ。さそりのお浜をばかにするない」
　お浜の目が異様にぎらぎらと光り出す。
「はてな。すると、今夜の三千両は、お浜親分が横取りすることになるのかな」
　大作はわざとおどろいた顔をしながらかまをかけてみる。
「たぶんそうなるだろうよ。あたしを甘く見るやつは、みんなさそりに刺されてころりと死んでしまうことになっているんだ」
「おどろいたなあ。じゃ、長坂はさそり親分を手先につかっているんじゃなくて、お浜親分のほうが長坂犬を手玉にとっていることになるんだな」
「そんなことわかりきってるじゃないか」
「長坂犬はそれを承知しているのかね」
「まだ知らないだろうね。男はみんな、女なんかになにができるもんかって、たかをくくっているのさ。いまに見ていてごらん、そういうやつらがみんなあたしに土下座するようになるんだから」
「親分、いま美沙緒の番をしているのは、中間の喜久蔵じゃないのか」
「そうだよ。それがどうしたのさ」
「あの中間もただのねずみじゃなさそうだ。親分の留守に、美沙緒を横取りするような心配はないのか」

「余計な心配をおしでない。そんなまねをすれば、自分がどんな目にあうか、あいつはさそりの毒をよく知っているんだ」
「そうか。じゃ、わしはまだ殺されないだけありがたがらなくちゃならないな」
　大作はついため息が出てくる。

12

「大の字、おまえずいぶん負け惜しみが強そうだねえ」
　お浜は、じろじろと大作の顔を見ながら、冷やかすように薄らわらいをうかべる。この女は、いつも相手を征服して、自分がお山の大将になっていないと気のすまない精神異常者のようだ。
　それに、白狐(びゃっこ)のような狡智(こうち)を持っていて、すぐに人の気持ちを読んでしまう鋭い勘をそなえているようだから、始末が悪い。
「そうか、どうしてだね」
　大作はなるべく逆らわないようにする。
「おまえさっきから平気な顔をしてるじゃないか。こんなことになって、ちっとも困ったとは思わないのかえ」
「それは困ったとは思っている。わしは美沙緒を甲府へ送っていってやる約束をしているんでね」
「ばかだなあ、美沙緒は今夜柏屋のめかけに売られていくんだと、いまあたしが教えてやったばかりじゃないか。そんな人のことより、おまえ自分のことはちっとも心配にならないのかえ。あたしがこの蔵の戸をしめて帰ってしまえば、おまえはもう二度と日の目は見られずに、ここでひぼしになってしまうんだよ。それでもいいのかえ」
　さそりのお浜は大の男が泣きっ面をして悲鳴をあげるのを待っているようだ。
「いや、わしはたぶんひぼしにならないだろうな」

「どうしてさ」
「おまえに知恵があるように、わしにも知恵がある。わしはこれで案外頭のいいほうなんだ」
「本気かえ、大作」
「姉御は信用しないようだな」
「ふうんだ、そんなに知恵のあるおまえが、どうしてさっき美沙緒の櫛に引っかかってこんな蔵の中へとじこめられたんだえ」
「あれはたしかに失敗だったな。しかし、本当の知恵くらべはこれからだ。知恵くらべといえばな、姉御、おまえさんたちはゆうべからいろいろと人手を使って苦労しているようだが、それでたった三千両は少し度胸が小さすぎはしないか。柏屋の蔵の中には、人を散々泣かせた不浄の金が、どうすくなくても六、七十万両は眠っているはずだ。ついでに一つ、柏屋ともう一度知恵くらべをしてみたらどうなんだね」
「きいた風なことをおおいいでない。六、七十万両を一度に持ってきたって置き場所に困るから、柏屋の蔵にあずけておくんじゃないか。自分でいうほど大作は頭がよくなさそうだな」
「そうか、せっかくほめてくれたんだから、その礼にもう一ついい知恵を貸そう。今夜は南蛮太郎に気をつけることだ」
「なんだって――。じゃ、さっきのつり浪人は本当に南蛮太郎だったのかえ」
お浜の目にたちまちすさまじい敵愾心が燃えてきたようだ。
「自分ではそう名乗っていたようだな」
大作はのんびりとわらっている。
「畜生――」
なんと思ったか、お浜はいきなりばたんと観音びらきをしめきってきた。

13

――えらいことになったぞ。
一瞬視界をうばわれた真っ暗やみの中に立ったまま、大作は体中がかっと熱くなってきた。

知恵で必ずここをぬけ出してみせるとお浜には豪語しておいたが、おそらく自力でここをぬけ出すのはほとんど不可能に近いだろう。
ただ、たった一つ、はかない望みがないではない。ああいうお浜のような精神異常の女は、うぬぼれが強くて、疑い深いから、こっちがいかにも自信ありげにこの蔵をぬけ出してみせるといった言葉が気になって、一度は自分でそれをたしかめにきたくなることだ。
おそらく、お浜はきっとこっちの豪語に引っかかることは間違いないだろう。が、それは時の問題で、夕方になるか、夜になるか、あるいは明日の朝になるか、相手が気まぐれな女だけに、いつになるかわからない。
こっちはどうしても日の暮れるまでにはここを脱出しておかないと、美沙緒のほうが手おくれになってしまうのだ。
お浜が自分でここへこんなわなをかけにくるくらいだから、美沙緒はどこかこの近くの家へつれこまれているにちがいない。
たぶん、この柏屋の寮ではあるまい。彼らはここはこっちが第一にさがしにくるとちゃんと見こみをつけて、まず用心棒浪人を向け、それが失敗したら蔵の中と、二段構えを取っているくらいだから、大切な玉を運びこむはずはない。
ここはきっと、夜になって柏屋が三千両運びこみ、美沙緒と交換をする場所に使われるのだろう。
だから、こっちはどうしてもそれまでにここを抜け出しておかなければならないのだ。
一体、お浜と長坂の関係はどうなっているのだろう。重蔵ほどの悪党が、まさかお浜のような若い女にこきつかわれるとも考えられないから、これは長坂がお浜をそんな女とは知らずに抱きこんで一役買わせたのを、お浜は知らん顔をして長坂のいうなりに動き、今夜どたん場で三千両を横取りしてやろうとねらっている。まずその辺のところが当たらずといえども遠から

ずということになりそうだ。
中間喜久蔵はお浜とぐると見ていい。お浜も、さっきの市川、岡田の二人も、南蛮太郎と聞いておなじようにびっくりしていた。つり浪人の話によると、南蛮太郎は偽五人組み強盗の上前をはねていく男だという。
すると、お浜も、用心棒浪人二人も、一度は南蛮太郎にぶつかっていることになる。そうでなければあんなに驚きもしないだろうし、まして敵意も感じるなどということはありえないはずだ。
ということは、また、お浜も市川、岡田の二人も、偽五人組み強盗を一度はやっていることになるということだ。
——もし、あのつり浪人が、自分では否定していたが、その実南蛮太郎であった場合はどういうことになるだろう。
ひょっとすると、あの男が自分を助けにきてくれるかもしれない。大作はそんな虫のいいことを考えながら、
——これは苦しい時の神だのみよりもっとひどい。
と、苦笑させられてしまった。

14

そのころ、美沙緒は今戸橋に近い下瓦町(しもがわらまち)の平野屋という薄ぎたない船宿の二階に監禁されていた。
柳橋からここへくるまでの船の中で、散々お浜に体中を痛めつけられて、死ぬような苦しいおもいをさせられてから、美沙緒は精も根もつき果てて、この二階へ入れられてからはずっと横になりどおしだった。
悲しいには悲しいが、もう涙も出ない。ただお浜が恐ろしい。
「美沙緒、逃げるんなら逃げてごらん。こんどあたしがおまえをつかまえると、生づめを一枚一枚はがしてやるからね。それが怖かったら、

あたしのいうことはなんでもはいはいと聞いて、おとなしくしているんだ。わかったかえ」
「はい」
ここを出て行く時、お浜はそう念を押して階下へおりていったが、それっきり夕方まで顔を見せなかった。
別になわをかけられているわけではないのだから、逃げようと思えば逃げられたかもしれない。
しかし、美沙緒にはもうとてもそんな勇気はなかった。動くと体中の節々がまだ痛んで、座っているのさえ大儀なのである。
幸いにもここの老婆が親切で、まくらも貸してくれたし、掻巻(かいま)きも出してくれた。そして、小さな握り飯を三つこしらえてきて、
「お嬢さんや、なんにも食べないと体の毒だでな、無理にでもこれをおあがりなされ」
と、渋茶をそえてまくらもとへ持ってきてくれた。
「お浜はどこかへ出かけたのですか」
「ねえさんはちょっと出かけたです。お嬢さんはどんな御身分の人かしらないが、わしにはとてもお嬢さんを逃がしてやるなんて力はないでな、かんべんしてくだされ。あのねえさんには悪い黒ぎつねが乗りうつっていて、それが暴れ出すと、平気で大の男を手玉にとったり、殺したりするです。まあ、きげんのよくなる時を待って、かんべんしてもらうよりしようがないです」
「お浜はたくさん家来を持っているようですね」
「なあに、家来ってわけじゃないけれど、おきつねさまが怖いでな。子分になっていれば、まあ小遣いはくれるし、男って者はばかが多いから、ひょっとねえさんの亭主(ていしゅ)にでもなれたらとねらっているやつがみんな、頭をさげてきげんをとっているのです」
「ここはお浜の家なのですか」
「いいえ、そういう子分のうちの一人の家なん

です」
「おばあさんはここの家の人なんですか」
「それがなあ、わしはたった一人になってしまって、道で行き倒れになっているところを、ねえさんに助けられて、ねえさんのお声がかりでここに置いてもらっているんです」
聞けば聞くほど、お浜という女の正体がわからなくなってくる美沙緒だった。
そんなことは無理にわからなくてもいいことだけれど、恐ろしいのは今夜自分の体は柏屋惣兵衛に売られていくときまっていることである。

15

――大作さま、どうぞ助けて。
美沙緒は自分を助けてくれるのは大作だけだと思いこんでいる。この広い世の中にたった一人、大作だけしかたよりにできる者はいないのだ。
――あの人はきっと助けにきてくれる。
何度も何度もそう思って、その度に胸の中が少しあかるくなってくるのだが、その希望の光はいつか色あせて、今夜の間にあうかしらと、絶望の淵からむくむくとわきあがってくる現実の黒い霧におおわれてしまうのだった。
こんなところへ運びこまれてしまっては、いくらあの人でも、神さまではないのだから、とてもわからないだろうと、胸が痛くなってくるのだ。
――いいえ、あの人は知恵も力も衆にすぐれた人なんだもの。
無理にそう考えて、またしてもその希望にすがりついていくが、目をあいて薄ぎたないあたりを見まわすと、一度に夢は消えてしまう。
それは美沙緒にとって、朝からのことを考えると、長い地獄の一日だった。深川屋の二階で大作と二人でたのしい朝御飯をたべたことなどは、まるで昨日のような気さえしてくる。その

長い一日がようやくたそがれてきたころ、恐ろしいお浜がどかどかと一人で二階へあがってきて、
「美沙緒、起きるんだよ」
と、そこへ立ちはだかるようにしていった。
「はい」
美沙緒がぎょっとして起きあがり、いそいでそこへ座りなおそうとすると、
「座るんじゃない。これから出かけるんじゃないか。さっさとお立ち」
「あの、このままでいいんですか」
髪は乱れているし、いままで精も根もつかれて横になっていたのだから、衣紋もくずれっ放しになっている。
「だから、あたしの出かけている間にちゃんとしておけばいいんじゃないか」
「すみません」
「そのままでいいから、さっさとあたしについておいで。途中で変なまねなんかすると、こんどはその度に生づめを一枚ずつはがしてやるから、忘れるんじゃないよ」
「はい」
そのつりあがっている目を見ると、悪い黒ぎつねがついているといった老婆の言葉を思い出して、美沙緒は身も心も恐ろしさにすくんでくる。
その黒ぎつねにまるでおびきよせられていくように後からついていくと、お浜は土間へおりて、さっさと表へ出ていく。
美沙緒は自分の履き物がないので、おくれるとまたしかられそうだから、足袋はだしのままお浜についていった。
店には五、六人、浪人者やならず者らしい男がとぐろをまいて茶わん酒をのんでいたようだが、美沙緒はそっちを見るひまもなかった。
往来へ出ると、六日ばかりの月がもう青白くあたりをそめて、町筋には家ごとに灯が入っているようだった。

お浜は往来を突っ切って、そこの桟橋から下へおりていく。そこに屋根船が一艘、ひっそりとつないであるのだ。

16

「これへ乗るんだよ」

お浜は自分が先へ船へ乗って、うしろからついてきた美沙緒にいいつける。

「はい」

さっきこの船の船房で散々痛めつけられているので、美沙緒はちょっと足がすくむような気がしたが、少しでもためらってお浜のきげんを損じるとまた黒ぎつねが暴れ出しそうなので、いわれるままに船に乗って、船房へ入った。

船房の灯は消してあるが、月あかりがあるから、たそがれほどに視界はほのあかるい。

「竹、出してもいいよ」

お浜は後から船房へすべりこみながら船頭にいいつけて、あとの戸をしめた。

「へえ」

船頭はぐいと一つ杭を突っぱって船を出し、すぐに艪をこぎ出したようだ。

こんどこそ柏屋の寮とかへ運ばれていくのだと美沙緒にもおよそ見当はついたが、お浜が恐ろしくてとても口などきく気にはなれない。美沙緒は行儀よく座って、じっと目を伏せていた。

――いざとなったら、死ねばいいのだから。

ふっとそう気がついて、そうだ、死んでしまえばつらいも悲しいもありはしないと思うと、なんとなく胸が楽になってきた。恋しい大作の顔がはっきりとまぶたにうかんでくる。

今ごろ、あの人は一生懸命あたくしをさがしていてくれるかもしれない。

そう思っただけで、美沙緒は涙が出そうになるほどうれしくなってくる。

「美沙緒、おまえいま大作のことを考えているんだろう」

ふいにお浜からそう声をかけられて、美沙緒

はどきりとしながら思わず顔をあげた。

「どうして、どうしてそんなことがわかるのです」

やっぱり黒ぎつねがついているのかしらと、美沙緒はあっけにとられて、むしろ子供のようにぽかんとした顔になっている。

「そんなことはすぐわかるさ」

お浜はその次の悪態をちゃんと用意していたのだが、赤くなっていそいで首を振るだろうと見ていたのが、正直に白状して、あんまり子供っぽい顔をされたので、

「おまえはまったく世間知らずなんだなあ」

と、あきれてつい苦わらいが出る。

「そうかしら、あたくし」

「なんだ、おまえそれでも一人前の女のつもりなの。帯ひとつ一人じゃ満足にむすべないでさ」

それはついこの間まで本当にそうだったのだから、美沙緒はひとりでに顔が赤くなる。

「気の毒だけどねえ、美沙緒、あたしはゆうべ散々大作にうまくやられちまったから、今日はこっちがうまくやって、もうだれにもわからない檻の中へ追いこんでしまってある。いくらおまえが大作を当てにしていたって、あいつはとても檻から出られやしないんだから、おとなしくあきらめたほうがいいよ」

お浜はそんな意地の悪いことをいいながら、ふっと思い出したように船房の窓障子を少しあけ、外の様子に目を光らせている。

そのすばしこい動作の一つ一つに、なんだかきつねじみたところがあるような気がして、美沙緒はまたしても背筋がぞくぞくしてくる。

17

お浜と美沙緒を乗せた船は、今戸河岸にそって柏屋の桟橋のほうへこぎのぼっていく。

お浜がいちばん心配しているのは、昼間耳にした南蛮太郎のことだった。

聖天町の地獄長屋にごろごろしている甲州浪

人市川佐二郎と岡田真兵衛は相当の悪党ずれがしているから、江戸に五人組みのすごい浪人強盗が出て大金持ちだけをねらうといううわさが立つと、いつの間にか仲間を三人集めてきて、さっそく偽五人組みを作り、二、三度仕事をやったらしい。

　腕は強いが、頭のほうはそういいというほうではないので、思ったほどうまいかせぎもできなかったようだが、一度五百両ほど手に入れて表へぬけ出したところを、ふいに南蛮太郎と名乗る黒頭巾(くろずきん)の浪人者にぶつかり、仲間の三人を切られて、命からがら岡田と二人で逃げ出したことがあった。それっきり五人組みはやめているが、強奪した五百両はあいにく切られた三人のうちの一人があずかっていたので、その時南蛮太郎に横取りされたとわかった。

　すると、なんにでも偽物はすぐできるもので、また別の五人組みは南蛮次郎というそっちの偽物に盗んだ金をまきあげられたといううわさもあって、このごろではその南蛮組も太郎から五郎ぐらいまであるようだといわれている。

　実は、昨夜、こっちも長坂重蔵の筋書きで五人組みをこしらえ、うまく美沙緒を誘拐(ゆうかい)しようという腹だったが、その時も市川がいちばん心配していたのは南蛮組のいたずらだった。

　事実は案に相違して、昨夜は皮肉にも鈴村大作という白面の若僧にじゃまをされてひどい負け戦になってしまったが、それは今日うまく取りかえしがついた。

　しかも、若僧は柏屋の寮の空き蔵へとじこめてしまってあるし、これで長坂が柏屋といっしょに無事に三千両船で運んできさえすれば文句はないのだ。

　が、市川と岡田はその肝心の柏屋の寮の裏河岸で南蛮太郎と名乗るつり浪人を見かけている。しかも、それが鈴村大作としばらく話しこんでいたようだというから、おそらく大作の口から今夜の三千両のいきさつを聞いているにちがいない。

　ひょっとすると、今夜の仕事も南蛮組に横取りされるのではないかという心配が十分あるのだ。

　もともと、こんどの仕事は、市川が前にいっしょに仕事をしたことのある長坂から相談をかけられて、こっちは千両で引きうけた仕事なのである。

　しかし、今日の働きはお浜一人の才覚で昨夜の負けを取りかえしているのだから、お浜は長坂にもう五百両出させるつもりでいる。もし長坂が出ししぶるようなら、三千両そっくりこっちへいただいてやろうとさえ考えているのだ。

　それだけに、南蛮組などに荒らされてはたまらない。無論、お浜はその場合の戦闘準備は十分ととのえているつもりなのだ。

　――ふん、南蛮め、出るなら出てみろ。

　一方では仲間が怖がっている南蛮組と今夜は一戦をまじえ、みごとにたたきつぶしてやりたい血気にも燃えているさそりのお浜なのである。

18

「姉御、つきやしたぜ」

　船端がとんと杭にあたって、ずるずるとこすっていきながら船がとまると、艫(とも)から船頭が声をかけてきた。

「その辺に喜久蔵はいないかえ」

　お浜がこっちから聞く。

「ここにいやすよ、姉御」

　すぐ桟橋の上から喜久蔵の声が答えた。

　お浜は艫へ出て、素早くあたりを見まわしながら、

「どんな様子だえ、喜久」

　と、小声で聞く。

　ここは柏屋の寮の裏の桟橋で、この辺は宵(よい)も夜半もなく、日さえ暮れればひっそりとなって、どこにも燈影(ほかげ)一つ見えない。悪事を働くにはも

ってこいの舞台だが、そのかわり敵がつけこんでくるにも都合のいい地の利になっているから決して油断はできないのだ。
「今んところまだ別に変わったこともないようですぜ。角々にみんな見張りをつけて、なにかあったらすぐ合図をすることになっているんでさ」
「浪人組はどこに陣取ってるんだえ」
「座敷でひと休みしてるようです」
「のんきなんだねえ。お客にでもきたつもりでいるのかな」
お浜はちょいとむかっとした。
「なあに、みんないざとなりゃおれが引きうけるって腹があるから、落ち着いてるんでしょうよ」
「当てになるもんか。みんな浪人ぼけがしちまってるのさ。市川さんもこのごろ少し焼きがまわったんじゃないかな」
うまくいけば千両という大仕事なのだ。それを南蛮組にかぎつけられたらしいと見たのは市川佐二郎なのである。
南蛮組は今までたいてい一人か二人で仕事をしている。三人出たという話は聞かない。しかし、太郎から五郎まで名が出ているから、これも五人組みと見ていいだろう。だから、こっちは市川、岡田のほかに、強いのを五人集めて七人でかかるようにと市川にいっておいたのだ。日当は一両ずつ、もし南蛮組が出てきてそれに勝った場合は十両ずつほうびを出そうと、そこまでこっちは念を入れている。
それを、座敷で休みながら南蛮組のくるのを待っていようなんて、虫のいいのを通りこして、浪人ぼけがしているとしか思えない間抜けどもである。
「喜久、あたしはおまえさんたちのほうがたよりなんだからね。しっかりたのむよ」
「へえ、しっかりやりやす」
中間喜久蔵は若いお浜に頭があがらないようだ。
「美沙緒、出ておいで」
「はい」
「あたしについてくるんだよ」
お浜はじろりと美沙緒をにらんでおいて、さっさと船からあがる。
喜久蔵はこまめに柏屋の裏木戸をあけてやって、
「案内しなくてもようござんすか、姉御」
と、如才なく小腰をかがめる。
「それより、ここはいちばん大切な場所なんだからね、気をつけてくれなくちゃだめだよ」
お浜はそういいおいて木戸口から中へ入った。

19

木の間がくれの青い月かげをたよりに、外庭の林の中を抜け、内木戸を入って道なりに植え込みを通りぬけると、書院造りの回り廊下の前へ出る。
この十畳と次の間の八畳だけを掃除させて、今夜の取り引きの座敷に使うことになっていた。
この廊下の前を右へ折れていくとこの建物の北側へ出て、そこに大作をとじこめておいた外蔵がある。
――あいつ、今ごろしょげきっているだろうな。
お浜はちょっと大作のそんな姿を思いうかべながら、書院の廊下の前へ進んでいった。
なるほど、あまり柄のよくない浪人どもが、廊下に腰かけているやつ、そのまま仰向けに寝ころんで足をばたつかせているやつ、さすがに座敷へあがりこんでいるやつは一人もないが、七人が七人ともみんなのんびりと骨休みをしている。
「やあ、姉御、きたな」
目ざとくこっちを見つけた市川がいそいで立

ちあがる。
寝ころんでいたやつはむくりと起きあがって、浪人どもの目がいっせいにこっちを向く。
「市川さん、あんたいろは歌留多をやったことはないのかえ」
「いろは歌留多——。犬も歩けばってやつかね」
「そうだよ。ゆの字はなんというんだっけね」
「ゆは油断大敵だろう」
「あんたたち、ここへ油断大敵にきているのかえ」
お浜はすごい目をして浪人どもをにらみまわす。
「まいった。いや、別に油断をしているわけじゃないんだが、化け物が出るにはまだ少し早いと思ったんでな」
市川は苦わらいをしながら、言い訳を口にする。
「なにいってんのさ。おまえさんが化け物を見たのは、今日の真っ昼間じゃないか。こっちがいくら用心していたって手ごわい化け物なんだよ。それを寝ころんで待っているなんて、おまえさんたちよっぽど命がいらない人たちなんだね」
腰元風の若い女が臆面もなく頭から毒づくので、お浜を知らない二十五、六の癇癪持ちらしい浪人が、
「なかなか勇ましいんだなあ。我々は寝ころんでいてもめったに化け物などにひけはとらない達人ぞろいなんだ、つまらぬ心配はしなくてもよろしい」
と、苦々しげに胸をそりかえらせてみせる。
「おめえ、なんていう名だえ」
「おれか——。おれは岩見重太郎」
「そんなに強いんなら、ためしてみてやるから前へ出ろ」
お浜の目にめらめらと殺気が燃えてくる。
「なにっ」
若い浪人はさっと険しい顔になったが、

「なにをためそうというんだ」
と、ふてぶてしくいいながら一足前へ出る。
「坂田、いかんいかん」
市川が顔色をかえて制したが、もうおそかった。
「ばか野郎、さそりのお浜を甘く見るねえ」
つかつかとその浪人の前へ進んだお浜は、いきなり左手で男の右の手首を引っつかみ、右手がぴしゃりと火の出るように横っ面を張り飛ばしている。

20

「無礼者——」
たかの知れた女などに横っ面を張り飛ばされたのだから、癇癪持ちの坂田浪人は憤然としてお浜を突き飛ばし、抜きうちにしようと柄に手をかけた。
——やられた。
その一瞬、見ていた浪人者たちは血を噴いて倒れていくお浜の無惨な姿をまぶたにうかべて思わず息をのんだが、次の瞬間、
「う、うっ」
柄に手をかけた坂田が苦悩に顔をゆがめて体中を硬直させたのを見て、愕然と目をみはった。
突き飛ばされたお浜は、ひらりと六尺ばかり飛びのいて、じっと坂田の顔を見すえている。目じりがつりあがって、物の怪にでもつかれているようなあやしくも険しいお浜の顔、姿である。
みるみる顔から血の気のひいた坂田は、もう視力を失ったうつろな目の色になって、がっくりと両ひざをつき、そのまま前へくずれ倒れていった。
「ざまあ見やがれ。一両でも日当をとってあたしに雇われてくれれば、今夜はあたしが主人じゃないか。あたしは寝ころんで遊んでいてもらうために一両の日当を払っているんじゃないんだよ。そうだろう、市川さん。おまえさんは南蛮

太郎組のやり方をいちばんよく知ってるはずじゃないか。へたをすれば自分たちが切られてしまうんだってことがわからないのかねえ、じれったい」
お浜は真っ向から市川に食ってかかる。
「すまんすまん、わしが悪かった。これからは十分注意する。――おい、おのおのがた、わかったろうな」
市川佐二郎にうながされて、一同もただうなずいているよりしようがない。
「このとおり、一同も今夜は一両分だけきっと働くといっておる。――ところでな、姉御、坂田をなんとかしてやってくれんか。このまま死んでしまっちゃかわいそうだからな」
市川が卑屈に見えるまでお浜に頭をさげているのは、一つにはそれがあったからのようである。
「癇癪をおこしてるんだから、たぶん死にやしないだろう」
「そうかそうか、死なずにすむか。それで、どんな手当をしてやったもんかなあ」
「素っ裸にして土の上へころがしておけば、自然になおるよ」
「どのくらいで正気にかえるかなあ」
「半日ぐらいはかかるだろう。小生意気な口をきくから罰があたったんだよ」
「半日ほどというと、今夜の九ッ（十二時）ごろだな」
「運がよければね」
お浜は、冷たくいって、
「美沙緒、いっしょにおいで」
と、そこに青くなって茫然としている美沙緒をうながし、さっさと廊下から座敷へあがっていく。
「市川さん、坂田はどうしたんだ。なぜ倒れたんだね」
浪人の一人が市川のそばへきて、不気味そうにそっと聞く。

21

「あの女はさそりの毒薬を持っているんだ。それをどういう風にして使うのかわからんが、あまく見てかかるところりとやられる」
市川は苦わらいをしながら答える。
「そうか、大変な女なんだなあ」
「とにかく、こんなところへ坂田を寝かしておくわけにはいかん。ここは戦場になるかもしれないからな。だれか二人ばかり手を貸してくれ。裏のほうへ運ぶんだ」
「心得た」
気軽なやつが二人、坂田の頭のほうと足のほうを持って、どっこいしょと抱えあげる。
「真兵衛、それぞれの持ち場へついていてくれ」
「そうしよう」
表へ二人、裏へ三人、残った二人がこの書院の庭をかためることになっていたのだが、坂田が倒れてそれを二人で運ぶことになると、残ったのは市川、岡田と浪人二人ということになる。
岡田はかまわず浪人二人をうながして、裏門口のほうへ歩き出す。
市川は坂田を運ぶ二人について、北の庭のほうへ進んでいった。
「市川さん、坂田は本当に大丈夫なんでしょうな」
頭のほうを抱えている中垣兼助が心配そうに聞く。中垣は坂田慶三にさそわれて今夜市川組へ入ってきたのだから、心配するのも無理はない。
「まあ、命だけは大丈夫だろう。お浜がああいっているんだからな」
しかし、きっと大丈夫だとは断言できない市川である。
「お浜っていうのはすごい女ですな。ああいうのを毒婦っていうんでしょうな」
「あれにはな、中垣、黒ぎつねというきつねがついているんだそうだ。つまり、黒ぎつねとい

う古ぎつねがなにか人間にいたずらがしたくなると、お浜の体をかりて暴れ出す。あの目つきを見ればわかるだろう。あれはきつねの目だ」
「なるほど、そういえばそうですな」
「どうなんだろう、姉御は特に油揚げが好きだとか、てんぷらに目がないとか、そんな様子はないのかね」
　足のほうをかかえて先に立っている植村八十助がまじめな顔で聞いた。これもどうやら黒ぎつねを本当にしているようである。
「さあ、わしはいつもいっしょにいるわけじゃないんでな。――しかし、こんどひとつ試してみよう」
　ちょうど北がわへ出る角まできて、
「坂田はどこかその辺の人目につかないようなところへ寝かしといてやってくれ。わしは貴公たちのかわりに表門のほうの見張りについているから、仕事がすんだらすぐきてくれなくちゃ困るぞ」
　と、市川は立ちどまった。
「承知しました。すぐ行きます」
「素っ裸にするのを忘れるなよ」
「わかっています」
　市川は今きた道を書院のほうへ気ぜわしげに引きかえしていく。
「市川うじも大変だなあ、中垣さん」
　植村はにやりとわらいながら外蔵のほうへ歩き出す。

22

「どうだ、この辺でいいだろう」
　足のほうを抱えている植村は、外蔵の前あたりまで歩いていって、うしろの中垣に聞いた。
「よかろう」
　坂田の体は死人のように持ち重りがするので、中垣はともかくもそこへ坂田をおろした。
「息はあるのか、おい」
　植村は手ぬぐいで汗をふきながら聞く。

「虫の息ぐらいかな。これで助かるんかなあ」
　中垣は血の気のない坂田の顔をのぞきこみながら、またしてもそれが心配になってくる。
「素っ裸にしておけといったなあ」
「うむ」
「早く素っ裸にしてやっちゃどうだ。手おくれになっちゃかわいそうだぞ」
「しかしなあ、我々がここについていてやるというわけにはいかないんだ。素っ裸にしておいて、野良犬にでも食いつかれるとそれっきりだからな」
「なるほど、そういえばそうだ」
　植村はちょっとあたりを見まわしながら、
「どうだ、この蔵の中へ寝かしておいちゃ」
と、外蔵に気がついていう。
「あくかな。――錠がおりてやしないか」
　中垣が気のなさそうな返事をすると、植村はつかつかと蔵のとびらの前へ行って、観音開きの取っ手に手をかける。
「あいたぞ、おい」
　中の格子戸も輪かぎがかかっているだけで、錠はないから、すぐにあいた。
　無論、蔵の中は真っ暗だ。
「植村うじ、いたちはいないだろうな」
　中垣は思い出したように念を押す。
「いたちか――。なるほど、いたちは犬より怖いな。生き血を吸うからな」
「それに、蔵の中は板敷きになってやしないか。素っ裸にしろってのは、土の上へじかに肌をつけて寝かせておけっていうことなんだろうからな」
「そうか。そういえば、ふぐに当たったやつは、地の中へ首だけ出して埋めておけっていうな。とにかく、素っ裸にしてやろう。早いほうがいいだろう」
　こまめな植村は蔵の戸はそのままにして、坂田のそばへ引きかえし、まず大小を取ってやる。
　その間に中垣は帯を前へまわして結び目を解

いていた。
「まったくつまらん目にあったもんだなあ。相手がきつねつきじゃ文句もいえない」
「坂田は少し鼻っぱしが強すぎるんだ。こっちは一両の日当で雇われているんだからな、黙ってわらっていればそれですんだんだ」
「それにしても、あのお浜の啖呵（たんか）は、なまじ筋がとおっているだけに小面憎かった。まったくすごい女だ」
　そんなことをいいあいながら、二人は坂田の着物をぬがせ、ふんどし一本のまる裸にして仰向けに寝かせた。なんともみじめなかっこうである。
「おい、上からこの着物をかけておいてやっちゃいかんかな」
「さあ、夜露も解毒の役に立つんじゃないのか」
　人間一人の生死の問題だから、中垣も植村もこのままではさすがにちょっと立ち去りにくいようだ。

23

　市川佐二郎が書院の廊下の前まで引きかえしてきた時、ちょうど裏の内木戸のほうから中間喜久蔵がいそぎ足で植え込みの道をぬけて廊下の前へ走り寄っていきながら、
「姉御、柏屋さんの船が着きやしたぜ」
と、威勢よくふれこんだ。
「御用人さんもいっしょかえ」
　十畳の間の正面に陣取っている紫矢絣（やがすり）のお浜は、身なりこそ普通の腰元だが、いまは全身に妖気（ようき）をただよわせて、今夜は特にただごとではない形相である。
　――だんだん黒ぎつねの本性をあらわしてくるようだな。
　いちばんよくお浜を知っているはずの市川でさえ、今夜のお浜はなんとなく薄気味が悪い。話には聞いていたが、さそりの毒を使ったのを見たのは、市川も今夜がはじめてなのだ。

　お浜を取りまく男たちは、無論、いつかはうまくお浜を手に入れてやろうとねらっている悪党ばかりで、それがあるからたいていのやつは姉御姉御と心にもない世辞を使っていっしょに仕事をしているのだが、前にそのうちの二人か三人が腕力に出て、さそりの毒でころりとやられているという話はもうみんな知っていた。だから、市川が聞いているかぎりでは、まだお浜をものにした男はないようである。
　それでも、男というやつは女への煩悩を断ちがたいらしく、むしろ相手が手ごわければ手ごわいほど、おれこそはという野心をあおり立てられるのだから始末が悪い。
　中間喜久蔵などはその一方の旗頭で、いまのところはお浜の一の子分になってきげんをとっているようだ。
「へえ、長坂さまもいっしょですよ。いま金を船からあげていやしたから、もうすぐきやすぜ」
「喜久、見張りは大丈夫なんだろうね」
「こっちは大丈夫でさ。――市川さんのほうも、もうみんな持ち場へついたんでげしょう」
　喜久蔵は目ざとく市川を見つけて声をかけてくる。
「うむ、真兵衛がいまそっちへ行ったろう」
「きやしたよ。だから、あっしはちょいと御注進にきたんでさ」
　そこへ、長坂が先頭で、次に柏屋惣兵衛、うしろに千両箱を二人で持った人足が三組みで六人、ぞろぞろと植え込みの道から廊下の前の庭へ出てきた。
「お浜、待たせたな」
　重蔵はまずお浜に声をかけておいて、
「柏屋、金はひとまず廊下へおいてもらおうか」
と惣兵衛にいう。
「へえ」
「おまえさんたち、それを廊下へ積んでおくれ」
　惣兵衛の指図で、人足たちは廊下へ千両箱を二つを下に、一つを上へ積みかさねる。

「御苦労だった。おまえたちはもう引き取ってもいいよ」
人足たちは、船頭が二人、柏屋の下男が一人、後の三人は長坂がつれてきた若党と中間二人の三人で、柏屋は船頭二人と自分の下男をすぐ船へ帰してしまう。
「長坂さん、三千両はここへこのとおり置いた。さっそくそっちの品物をうけとりましょうかな」
柏屋がずばりと切り出してくる。

24

「待ったなしだな、柏屋」
長坂はさすがに苦わらいをする。
「好事魔多しのたとえでな、取り引きは早いがいい。ここへあがってみたところで、茶一杯の用意があるわけじゃないでな」
柏屋ははっきりという。
「そうか、——お浜、わたしてやってくれ」
長坂は美沙緒のほうを見ないようにしてお浜に目くばせした。
「御用人さん、その千両箱の中身は調べてあるんでしょうね」
お浜も抜け目がない。
「それは大丈夫だ」
「それで、柏屋さん、美沙緒はこのままうけとりますか」
「というと——」
「荷造りをしなくてもいいかと聞いてるんです」
「ああ、そのことか——。お女中さんはどうして、いうことがなかなか黒っぽい」
柏屋はにやりとわらいながら、
「このままで結構ですとも。わしはこれで品物は決して粗末にしないほうだ。大切にあつかいます。そのかわりな、長坂さん、わしが品物といっしょに船へ乗りこむまでは、ちゃんとそっちで責任をもってもらいたい。わしはこのとお

り手ぶらできているんでな」
と、その辺はやっぱり用心深い。
「承知した。責任を持って船までは送らせよう」
「もう一つ、どうせこの寮はいま使っているわけじゃないから、そっちでなにかの用に使ってくれるのはかまわないが、火の元だけはその度にきっと用心してもらいたい。いいでしょうな、お女中さん」
「承知したわ」
お浜は鷹揚にこたえてから、
「美沙緒、お立ち」
と、人心地もなくそばに青くなってふるえている美沙緒にいいつけて、自分もすっと立ちあがる。
「はい」
この哀れな品物は、急には立てないようである。ただ恐ろしさに身も心もすくんでいるのだろう。
「早くお立ちよ。さっさとしないと荷造りをしてわたすよ。そんな目にあってもいいのかえ」
「いいえ、あたくし——」
美沙緒はぎくりとしたようにふらふらと立ちあがった。
その手を引っつかむなり、お浜は引きずるようにして廊下へ出てくる。
あまりにも痛々しい姿に、さすがに男たちは目をそむけている。
——こりゃ天下の名花だ。
ぼたんほどの艶色はないが、谷間に咲く白ゆりの雨にうたれてうなだれながらいよいよにおい深いものがある。そういう姿にじっと目を焼きつけているのは、あくまでも業の深い柏屋惣兵衛一人である。
「さあ、わたすよ、柏屋さん」
お浜は美沙緒の体を縁下に立っている柏屋のほうへ押してやる。
美沙緒の体はくずれるように縁端へ座ってしまう。

25

「さあ、お嬢さん、なんにも心配することはない。決して悪いようにはしませんから、安心していっしょにおいでなされ」

惣兵衛はねこなで声でいいながら美沙緒の手を取ろうとする。

「はい」

美沙緒は本能的に身をちぢめてしりごみしている。

「美沙緒、そのかっこうはなにっ。痛いおもいがしたいのかえ」

そこに突っ立っているお浜の口から、むちのような言葉が飛ぶ。

「は、はい」

美沙緒はどきりとしたように、いそいで沓脱(くつぬぎ)石のほうへにじり寄る。そこにさっきぬいでおいたどろ足袋があるのだ。

「おや、お嬢さんは履き物をどうなされましたな」

「いいえ、よろしいんです」

夢中でそのどろ足袋をはきながら、美沙緒は涙がこぼれてきた。が、その情けなさより、お浜の気ちがいじみた仕置きのほうがよっぽど怖い。やっと足袋をはいて立ちあがると、

「さあ、行きましょうかな。裏に船がついているで、船の中でゆっくり休みなさるがいい」

待ちかねていたように柏屋がさっさと手をとりにくる。

「市川、船まで送ってやってくれ。喜久蔵も行け」

まだ縁先に立っている長坂がさっそくいいつける。

「承知いたした」

市川はすぐ柏屋の先に立つ。

「じゃ、御用人さん、これでわしは失礼しますよ」

「気をつけていくがいい」

「それはもう、大切なあずかりものがいっしょですからな」

柏屋はわらいながら美沙緒の手をつかんで歩き出した。あとから中間喜久蔵がつづく。

「ふん、柏屋の狒々(ひひ)おやじめ、もうすっかり目じりをさげてやがる」

お浜は、柏屋たちが植え込みの道へかかって見えなくなると、さもけいべつしたようにいった。

「お浜、おまえの乗ってきた船をかりてもいいだろうな」

悪態は聞こえないふりをして、長坂は廊下のお浜を見あげる。

「貸してあげてもいいけれど、御用人さん、この金は山分けにしてもらいますよ」

いきなり高飛車に出るお浜だ。

「山分けというと、半分よこせと申すのか」

「そうなんです。今日はこっちがずいぶん骨を折っているんだから、そのくらい色をつけてもらってもいいでしょう」

「鴨(かも)をうまく手に入れたのは、なるほどおまえの働きだ。しかし、この三千両を柏屋から無事にここまで運んできたのはわしだ。働きに甲乙はないはずだが」

「いいえ、こっちはもっと働いてるんです」

「ふうむ、ほかにどんな手柄があるんだね」

「鈴村大作をここの外蔵へとじこめて生け捕りにしてあります」

「なにっ、鈴村をか――」

長坂はさすがにちょっと目をみはっている。

「もう一つあるわ」

お浜はいかにも得意そうである。

26

「もう一つの手柄というと――」

長坂は廊下のお浜をまじまじと見あげている。

「御用人さんは知っているかどうかわからない

けれど、南蛮太郎ってやつが今日のお昼ごろこの裏の川っぷちでつりをしていたっていうんです」
「南蛮太郎っていうと、強盗の盗んできた金を横取りしていくとうわさのあるやつのことか」
「知ってるの、おまえさん」
「うわさには聞いている。その南蛮組も五人だろうということだな」
「あたしも話に聞いているだけだけれど、――大作は今日あたしがここの外蔵へとじこめる前に、その南蛮太郎と話しこんでいたっていうんです」
「ふうむ、どんな話をしていたんだ」
「そこまではわかりゃしないけれど、わかっているのは、南蛮太郎の巣はこの近くだということと、大作はどうせ美沙緒をさがしにここへきているんだから、この三千両の話をうっかり南蛮太郎の耳に入れていやしないかということだわ」
「なるほど、それはそういうことになりそうだな」
「だから、あたしは大作をとりこにして、もし南蛮組がここへ三千両ねらいにきても負けない手だけは打っておいたんです。これだって手柄になるわけでしょう」
お浜は当然三千両は山分けでいいはずだといいたげな顔つきである。
「よかろう、話はよくわかった。じゃ、鈴村はまだ外蔵の中にとじこめてあるわけだな」
「そうよ」
「どんなわなをかけたんだね」
「わざと蔵の戸を半分あけておいて、美沙緒の櫛を階段のところへ落としておいたのよ。うまく引っかかったわ」
「疑うわけじゃないが、その外蔵へこれから案内してみてくれ」
「大作をどうしようっていうの」
「あの男は生かしておいてはまずい。今のうちに片づけておこう」
重蔵はさすがに決断が早い。
「そんなこと、後で市川にやらせればいいわ。じゃまが入らないうちにこの金を運んでしまうほうが、あたしは先だと思うな」
「外蔵にはずっと番人がついているのか」
「そんなものつけておかなくたって、あの蔵から逃げ出せっこありゃしない。それに、あいつが蔵の中へ入っているのを知っているのはあたし一人なんだもの」
お浜は大丈夫と信じこんでいるようだ。
「いや、間違いというものは思わぬところにありがちなものだ。まして、南蛮組と話しこんでいたとなると、油断は絶対に禁物だ」
「いくら南蛮組だって、昼間は出られるもんですか。出ればこれからだわ」
「とにかく、一度見てこよう。案内してくれぬか」
いやなら一人ででも行きそうな意気ごみである。
「そんなに心配なら見てくるといい。この裏なんだし、錠なんかおろしてないんだから。あたしはここで金の番をしています」
強情なお浜はわらっていて動こうともしない。

百鬼夜行

1

――はてな、あいつはことによると、本当に大作を殺す気かもしれない。
長坂が小者たち三人をつれて外蔵のほうへ去っていくのを見おくりながら、お浜はふっとそんな気がした。
大作をただ殺す気なら、あの時すでにさそりの毒を使っている。こっちは、あのいやに高慢ぶった男がどんな面をしてしまいには土下座を

するか、それが見てやりたくてわざと生けどりにしておいたのだ。
――人に殺させちゃつまらない。
お浜はいそいで下駄を目でさがしながら、しかし、重蔵なんかに大作は殺せないんじゃないかなと、そんな気もしてくる。
大作を切るのは、蔵の戸をあけて自分が中へ入っていくか、それとも外へ呼び出すか、どっちかだ。大作はちゃんと両刀を持っているのだから、切りあいになれば長坂などよりずっと強い男なのである。
「ふん、あいつが切られちまうとおもしろいんだがなあ」
お浜はにやりとしながら、思わず千両箱のほうを見ている。三千両あれば、浅草中の貧乏人を家来にしてもっと大きな仕事ができると、お浜は体中の血がたぎってくるのだ。
「お浜どの、蔵の前に素っ裸で死んでいる男がいます。御用人さまがすぐきてくれるようにって申しています」
若党が走りこんできて、顔色をかえながら告げた。
「素っ裸でかえ」
お浜はわざとそらっとぼけながら、
「じゃ、あたし行って見てくるから、若党さんここの番をたのむわ」
と、下駄を突っかける。
「承知いたしました」
お浜が家の裏手へまわっていってみると、蔵の少し手前に素っ裸で仰向けに寝かされ、自分の着物を胸のあたりまで掛けられているのは、やっぱりさっきの坂田慶三だった。
しかも、そのわきに坂田の大小がちゃんとそろえておいてある。
「お浜、これはどうしたんだ」
長坂がまゆをひそめながら聞いた。
「これならいいのよ。これは坂田とかいう聖天町組の浪人さんで、市川さんが今夜の仕事で雇ってきたんです。それが、さっきあたしに小生意気なことをいって刀を抜こうとしたから、見せしめのために、ちょいと毒を刺してやったんです」
「さそりの毒か」
「まあ、そんなところね」
「殺してしまったのか」
「そうねえ、こうして地べたの上へ素っ裸で寝かしておけば生きかえることもあるって話よ。運さえよければね」
お浜は平気でわらっている。
「ほかに手当のしてやりようはないのか」
「知らないわ。たぶんないでしょう」
「味方はなるべく殺さないほうがいいのだ。それでないと大きな仕事はできない」
長坂はそれとなくたしなめるようにいう。
「あたしだって、こいつがこっちを切る気にさえならなければなんにもしやしないわ。ばかや気ちがいじゃないんだもの」

2

この女は使い方一つでもっと大きな仕事ができそうだと、重蔵はお浜の白々しい顔をひそかに見なおしながら、
「鈴村をとじこめてあるのはこの蔵か」
と、気をかえるようにそっちを向く。
「そうよ」
お浜はつかつかと蔵の前へ行って、石段をあがり、観音開きを左右とも一度に引きあける。中はがんじょうな格子戸だ。
「大の字、いるかえ」
からかうように声をかけてみたが、ひっそりとして返事はない。
「助けてやるんだから、返事をおしよ」
そういいながら、月あかりにふっと輪かぎのほうへ目をやって、どきりとした。ちゃんと掛けておいたはずの輪かぎが外れている。
「あっ」

「どうした、お浜」
「逃げちまったらしい。かぎが外れている」
お浜はがらっと格子戸をあけて中を見まわしながら、
「畜生、自分でかぎは外せないから、だれか外から助けにきたやつがあるんだ」
と、いかにも悔しそうだ。
「外からといえば南蛮組かな」
重蔵はそれ見たことかという気持ちもあって、思わず冷やかし半分になっていたが、
「そうだ、南蛮組かもしれない。行ってみよう、御用人さん」
お浜は手早く格子戸をしめ、輪かぎをはめて、ばたんと観音開きをしめてしまう。
「たしかに大作はいないのか」
よく中をしらべもしないで、気の早い女だとあきれながら注意すると、
「そんなことより金のほうが先じゃないか」
お浜はもうさっさと書院のほうへ駆け出していた。
――まさか、裏も表も見張りがついているんだから。
重蔵はまだ半信半疑だったが、
「やっぱりやられているわ、御用人さん」
先を走っていたお浜が、いきなり廊下のほうへ飛びついていく。
「なにっ」
どきりとしてそっちを見ると、なるほど、廊下に積んであった千両箱は三つとも影もなく消えて、その廊下の前に若党吉之助がうつぶせに倒れているようだ。
「畜生、こんなことができるのは南蛮組にちがいないんだ。中間さん、一人は表、一人は裏へ行って、南蛮組が押しこんでいるから気をつけろっていってきておくれ」
「へえ」
中間たちはすぐに駆け出す。
その間に重蔵は倒れている若党を抱きおこし

てみた。どこにも傷はないようだから、ふいに当て身でもくらったのだろう。
重蔵は念のために活をいれて、
「しっかりせい、吉」
と、気つけがわりにぴしゃりと一つ横っ面を張り飛ばしてみた。
「う、うっ」
吉之助はぽかんと顔をあげてあたりを見まわしている。
「どうした、吉。わけを話してみろ」
重蔵はわざとしかりつけるように一喝する。

3

「あっ、くせ者です、御用人さま」
やっと正気にかえった吉之助は、いきなりわめき出した。
「くせ者はわかっている。どんなくせ者が出たか聞いているのだ」
「宗十郎頭巾をかぶったやつで、家の中から出てきたんです。わしがびっくりして、振りかえった時は、もう飛びついてきて、当て身をくわされていたです」
「くせ者はそやつ一人か」
「へえ、わしの見たのは一人です」
そやつが南蛮組の者なら、たぶん一人ではあるまいと重蔵は思った。だいいち、一人では千両箱三つは運びきれない。
そして、まず考えられることは、南蛮組も、三千両の金も、彼らに助けられた鈴村大作も、まだこの寮の中にいるということだ。
「お浜、この寮の出入り口はすっかりかためてあるといったな」
重蔵は座敷のお浜に聞いた。
「かためてあるわ」
お浜は書院の真ん中へ座って、じっとあたりの気配に全身の神経を研ぎ澄ましているようだ。つりあがったきつねのような目が、ぎらぎらと異様な光をおびている。

「くせ者はまだ寮の外へは出ていないはずだ。さっそくさがさせてみてくれ」
重蔵は自分に手兵のないのがちょっともどかしい。そのかわりに市川佐二郎を介して聖天長屋の浪人どもを雇っておいたのだが、こうなると彼らはてんでんばらばらで、あまりたよりにはならないようだ。
「しかし、ちゃんと手配りがあるのに、一体南蛮組はどこから今夜ここへ忍びこんだんだろうな」
ついそんな皮肉が口に出てじろりとお浜をにらんでみたが、お浜は返事をしようともしない。
そこへ市川が喜久蔵といっしょに駆けつけてきた。
「姉御、南蛮組が忍びこんでいるって、本当かね」
「本当らしいわ。市川さん、今夜おまえさんがつれてきた仲間は、みんな強いんだろうね」
「それは強い。はじめから南蛮組を向こうにまわす気できているんだからな」
市川はきっぱりと断言する。市川は一度南蛮太郎に出会ってその強いのを知っているはずだから、自分の身をまもるためにも弱いやつをつれてくるはずはない。
「坂田が一人減ったから、人数は四人、おまえさんと岡田さんを入れて六人、大丈夫だろうね」
さすがに市川の顔に必死な色が出てきたようだ。
「いいかえ、市川さん、千両で今夜の仕事を引きうけておいて、なんの役にも立ちませんでしたじゃ、聖天町組は悪党仲間のものわらいになって、もうこじきになりさがるよりしようがないんだよ。やつらはまだこの寮の中にいるんだ。おまえさんたち、今夜は死んだつもりになって闘っておくれよ。そのかわり、三千両がもとへもどったら、半分の千五百両、おまえさんたち六人にあげる。男ならひとつ男らしいところを

見せてもらいたいな」
ずばりといってのけるお浜だ。

4

「心得た。今夜こそ聖天町組の真価を十分発揮してみせる。まあ、見ていてくれ」
市川佐二郎はぽんと胸をたたいてみせてから、裏木戸のほうへ走り去っていく。
「喜久蔵――」
お浜は縁先に立っている中間のほうへぎらぎらしている目を向ける。
「御用ですか、姉御」
「おまえの組は何人きているんだえ」
「みんなで十人きていやす」
「手配りをいってごらん」
「寮の外の四つの角に二人ずつ、あっしと虎吉(とらきち)は裏の桟橋(さんばし)をうけもっていやす」
「柏屋の船は無事に出たんだろうね」
「へえ、もう今ごろは竹屋のわたしあたりでござんしょう」
「おまえすまないが、これから平野屋へ行って、集められるだけの人間を集めてきておくれ。いそぐんだよ」
「へえ」
「ちょうちんがいるな。七つ八つ持ってきておくれな」
「かしこまりやした」
喜久蔵も猟犬のように走り出す。
「御用人さん、こっちへおあがりになったらどうです」
「うむ」
お浜の采配(さいはい)ぶりを黙って見ていた重蔵は、むっつりとした顔つきで座敷へあがってきた。
「ことによると、美沙緒も南蛮組にねらわれるかもしれない」
お浜は行燈(あんどん)の灯に目をすえながらぽつんという。
「南蛮組は女もねらうのか」

「ほかの女はどうかしらないけれど、美沙緒は金になりますからね」
「柏屋から横取りして、こんどはどこへ売るんだね」
「やっぱり柏屋でしょうね、もう三千両出させる」
「いくら柏屋でも、もうそうは出すまい」
「御用人さん、三千両をただどりにされるのと、六千両で美沙緒を買うのと、どっちが得だと思います」
「なるほど――」
重蔵は思わず苦わらいをした。
「姉御、こっちの三千両はかえってくる見こみかね」
「南蛮組も、三千両も、それから鈴村大作も、まだこの寮の外へは出ちゃいません」
「ぜひそうあってほしいものだな」
「そのかわり、千五百両はこっちへもらいますからね」
「よかろう。三千両をただどりされるより、千五百両でも手に入ったほうが得ということになるでな」
「足りない分は柏屋に出させるんですね」
「なにを抵当にしたらよかろう」
「柏屋に聞いてごらんなさいよ。その方が早い」
「お浜をほしいといったらどうしようかな」
重蔵はからかうようにいって、ひそかにお浜の顔色を見ている。

5

「長坂さん、堀留の柏屋の金蔵には百万両ぐらい積んであるんかしら」
にやりとわらいながらお浜が聞く。
「さあ、資産は二百万両といわれているが、金では五、六十万両ぐらいかもしれぬ」
「そんなものかねえ、さっきも大作のやつが、おまえたちはゆうべから散々骨を折ってたった三千両をねらっているのか、柏屋の蔵には不浄

の金が六、七十万もあくびをしている、どうせおなじ骨を折るんなら、どうしてそっちをねらわないんだって小生意気なことをぬかすから、そんなに一度に持ってきたって置き場所に困るからあずけてあるんだよと、あたしはわらってやった」
「それはあいつを蔵へとじこめてからの話か」
「そうよ。あの野郎の泣きっ面を見てやりたかったんだけど、とうとうやせ我慢をしていたわ。まあ、そんなことはどうだっていいけれど、あの狒々おやじをたぶらかして、蔵ごと柏屋のあり金をもらってしまうのも悪くない気がしてきたわ」
「そうか。では、わしが橋わたしをしてみてやろうか」
重蔵は冗談のように持ちかけてみる。
「あのおやじは御用人さんよりうわてらしいわ。なまじ橋わたしがあるより、あたしが自分でぶつかったほうが早いようだね」
お浜は平気でそんな不敵なことを口にする。
「どうぶつかっていくつもりだな」
「御用人さんにその気があるんなら、一口のせてやってもいいな」
お浜はもうすっかりこっちを見くびっているような口ぶりだ。
――小面憎い女郎め。
重蔵は内心むっとしたが、このきつねつきの女は、成功するしないは別にして、その気になればなにをやり出すかわからない、おだてておくにかぎると思ったので、
「さそりの毒さえ使わなければ、わしも今夜から姉御の子分になってもいいんだがね」
と、苦わらいにまぎらせておく。
「あっ、御用人さま」
庭先で見張りをしていた中間の一人が、ぎょっとしたような声をあげた。
「どうした、五助」
思わずそっちを見て、重蔵は愕然とした。

外蔵のある裏庭のほうから、宗十郎頭巾をかぶった黒装束の武士が二人、つかつかと廊下先へ進んでくるところである。どっちもがっしりとした大柄な男だ。
「貴公たちは何者か」
重蔵はとっさに刀を引きつけながら一喝した。
「今晩は——。突然騒がせてすまないが、そっちが刀を抜かないかぎり、我々は決して乱暴はしません。実は、そのお浜姉御に聞きたいことがあってうかがったんですがなあ」
一人のほうが目に微笑さえうかべながら気軽に話しかけてくる。
「おまえさんはだれなの。人の家へきたらかぶり物をとって、ちゃんと名を名乗ってから口をきくもんだよ。お侍のくせに、知らないのかえ」
お浜は恐れげもなく相手を見すえながらびしりとやりかえす。

6

「礼儀を教えてくれて、どうもありがとう。わしは南蛮四郎、相棒はおなじく五郎、かぶり物だけは大目に見てくれぬか」
その男はあっさり名乗っておじぎをする。
「おおかたそんなことだろうと思ったわ。あんたが四郎で、そっちは五郎なんだね」
これも人見知りはしないお浜である。
「さよう、四郎に五郎です」
「太郎、次郎、三郎はどうしたの」
「我々はいつも忙しいんで、別々に働くことにしているんだ」
「昼間この裏でつりをしていたのは、たしか太郎さんのほうだったね」
「姉御はなかなか頭がいいようだな」
「おだてたってなんにもやらないよ」
「いや、もうもらうものはもらっているんだから、そうは欲ばらないことにする」

「畜生——」
ああそうだったと、お浜は急に腹が立ってきた。
「一体、あたしになにが聞きたいんだえ」
「実は、今日、鈴村大作という男がここにつかまっているはずなんだ。たぶん裏の外蔵じゃないかと思って、いま行ってみたんだが、蔵は空だった。あの男は自力で逃げ出したのか、それとも姉御がどこかほかへ移したのか、それを聞いてかえりたいと思ってね」
「なんだ、蔵から大作を助け出したのはおまえさんたちじゃなかったのかえ」
お浜はちょいと意外である。
「いや、わしたちじゃない。我々は仕事のほうが先なんで、大作のほうは後まわしにしておいたんだ」
「おまえさんたちは一体、どこからこの寮へ忍びこんだのさ」
「そんなことを我々に聞くのは少しおかしいぞ、姉御。姉御が自分で忍びこむとしたら、どこからにするか、考えればすぐわかるはずだからね」
「畜生、いまにどうするか見ていろ」
お浜の血相が次第にかわってくる。
「五郎さん、大作は自力で蔵から出たと見ていいようだな。引きあげようか」
「そうしよう。さそりの姉御は怒るとこわいからな」
「姉御、これはまったく余計な話なんだが、あの蔵の前に素っ裸で寝ている坂田とかいう浪人な、あれは命が取りもどせるのかね」
南蛮四郎は頭巾の中でまゆをひそめているようだ。
「おまえさんたち、この寮から無事に出られると思っているのかえ」
「さあ、姉御のほうがそんな気持ちだと、多少けが人ぐらいは出るかもしれないね」
「ふん、けがぐらいですみゃいいけれどね。強

盗の上前をはねて歩きゃ、南蛮組だって強盗じゃないか、大きな面をするない」
「すまんなあ、あいにく親からもらった面で、これ以上大きくも小さくもならないんだ。じゃ、これで失礼」
「待てっ、四郎、五郎、さそりのお浜が相手になってやる」
　お浜はかっとなったように立ちあがった。顔にも姿にも鬼女のような殺気をみなぎらせているが、手になにも武器は持っていない。

７

「来るかね、姉御」
　お浜が野獣のように廊下まで走り出した時、庭の南蛮四郎はふところの短筒を取り出すより早く、銃口はぴたりとお浜の胸のあたりをねらっている。
「あっ」
　さすがにお浜はそこへ棒立ちになって、
「ひきょう者、――なにさ、男のくせに飛び道具なんか使って」
　と、悔しげにじだんだをふむ。
「我々はなあ、姉御、目的があって不浄の金を集めているんだから、成算のない仕事はしないことにしているんだ。この短筒のほうが姉御のさそりの毒より早いという計算がなければ、わざわざ二人きりでこんな化け物の巣へ乗りこんではこない。まあ、おとなしく我々を見のがしたほうが姉御のためらしいな」
　四郎はわらいながら、じりじりと外蔵のある裏庭のほうへあとじさりにさがっていく。
「くそっ、そんなものがあたしの体へ当たってたまるか」
　弾は一発、それさえ当たらなければ組みついていって、こっちのさそりの毒のほうが早くもあり、絶対に外れるようなことはない。とっさに決心をしたお浜は、大胆不敵にもいきなり庭へ飛びおりようとした。

　だあん。
　とたんに銃口から火が吹いて、弾はお浜の高(たか)島田髷(しまだまげ)に当たり、がくりと髷がくずれる。
　その衝撃でお浜はよろよろとうしろへよろめき、
「うぬっ」
　とうめきながらやっと立ちなおる。
「一発は脅しだ。こんどは胸板を貫く」
　銃口はふたたび胸をねらってくる。
　――畜生。
　弾はそれて髷へきたのではなく、四郎のいうとおり、わざと脅しを一発撃ったらしい。しかも、その短筒は一発打ちではなく、連発打ちになっているようだ。
　どう気が強いお浜でも、こんどは足が前へ出ない。
「くせ者だあ」
「みんな出あえ」
　植え込みの中から、いまの一発を耳にした味方が二人、ばらばらっとこっちへ飛び出してきた。市川佐二郎と本郷とかいう浪人の二人で、二人とももう抜刀している。
　四郎の銃口はお浜のほうへ向いているので、今のうちだと見たのだろう、二人は一気に敵のほうへ突進しようとした。
　だあん。
　銃声と同時に、わあっと本郷がしりもちをつく。五郎も短筒を持っていたようだ。
「いまの一発はわざと太股(ふともも)をねらった。こんどからは遠慮なく命を取る」
「うぬっ」
　市川は歯がみをしながら一刀を上段に振りかぶったが、これもさすがに足が出ないようである。
「行くぞ、五郎さん」
「心得た」
　それと見た四郎は、銃口をお浜から外して裏のほうへ歩き出す。かわって五郎がお浜と市川

の両方をねらいながらうしろむきのまま四郎についていく。まったくなれきった引きあげ振りである。

8

「くせ者だぞう、みんな集まれ」
「南蛮組だあ、たたっ切れえ」
くせ者二人の姿がたくみにすっと北の庭へ消えると、それまで青くなって立ちすくんでいた中間二人が夢中になってわめき出した。
「おう、いま行くぞ」
「くせ者はどっちだあ」
裏からも表からもそんな声がして、寮内は騒然と殺気立ってきた。
「あんた、傷は大丈夫かえ」
お浜は廊下から庭の本郷に聞く。
「うむ、かすられただけのようだ」
本郷は顔をしかめながら太股を手ぬぐいでしばっている。
「まだ戦えそうかえ」
「この分なら大丈夫だろう」
「あんたはなんていうの」
「本郷丑蔵だ」
「いい度胸のようね。あたしきっとお礼をするから、あいつたちのうちどっちか一人を切っておくれよ。このまんまじゃ、あたし虫がおさまらない」
お浜は躍起になっているようだ。
「承知した。まあ、見ているがいい」
本郷は立ちあがって二、三度四股をふんでみてから、そこにおいた刀をひろって市川の後を追っていく。
「姉御、やつらはまだ金を外へは持ち出していないようだな」
もとのところへ座ったままの重蔵は、ひどく落ち着いた顔つきである。
「そういえばそうだねえ。二人きりじゃ三千両一度には運びきれない。どこかへかくしてある

んだ。どこだろう」
「それは後でいい。あの二人を切ってしまうのが先だ。それに、鈴村大作もまだ寮から外へはたぶん出ていないだろう」
「わかったわ、長坂さん、やつらは北隣の寮の庭から忍びこんできたんだ」
この柏屋の両隣はどっちも塀一重で隣と庭つづきになっている。表も裏にも厳重な見張りがあるのだから、その目をくぐるとすれば、隣との庭の境を利用する以外にない。
北隣はだれの寮か、人が住んでいるか空き家になっているかはわからないが、人の庭を利用するとすれば、北隣のほうが母屋に遠く、こっちの外蔵に近い。
「なるほど、姉御のいうとおりかもしれぬ。よし、北庭へ人数を集めて、まず石攻めにしてみよう」
「石攻めはおもしろいな。――中間さん、早くみんなにそういいつけてきておくれ」
「へえ」
中間二人はたちまち裏へ駆け出して、まもなく、石攻めにしろ、石攻めだあとどなる声が口から口へ伝わっていったようだ。
「どれ、わしが行って指揮をとってやろう」
重蔵はたのもしそうにいってすっくと立ちあがる。
「たのむわ、長坂さん」
けしかけるようにお浜はいったが、内心ここに一人でいるのが怖くなったんだと、お浜は重蔵の心を早くも読んでいる。
そして、こっちの仕事はこれからだと思った。

9

――あの時、あたしがいうとおり金のほうの始末を先にしていれば、こんなことにならずにすんだんだ。
それを考えると、お浜はちょっと悔しくなる。
が、その三千両はどう考えてもまだこの家の

中から運び出している暇はないはずだ。
　南蛮組が北隣の庭からこの寮へ忍びこんだのは日が暮れてからまもなくで、こっちが美沙緒をつれてここへ着いた時、聖天町組の浪人どもはみんなこの廊下で骨休めをしていた。その時、南蛮組の二人はもうこの家の中のどこかへ入ってかくれていたにちがいないのだ。
　腕はどんなにできるか知らないが、侍のくせにまったく心がけのなっちゃいない浪人どもである。
　もっとも、そんな心がけだから主家を浪人させられて聖天町の地獄長屋へなど落ちこんでくるんだろうが、ああいう浪人どもは使うほうでよっぽど目を光らせていないと、いつもこんなどじばかり踏むにちがいない。
　坂田という小生意気な青二才をちょいと眠らせてやったのは、いい見せしめなんだ。
　その坂田を三人で北の庭へ運んでいって、市川が引きかえしてきた時、柏屋と長坂が三千両持ってここへ着いた。
　柏屋は根がくず屋あがりで、一代であれだけにのしあがった悪党根性の持ち主だけに、やることは小憎らしいほどてきぱきしている。三千両を廊下へ積ませると、一言も余計な口はきかず、さっさと美沙緒をうけとって帰っていった。
　その後でこっちはもたつくだけもたついて、若党一人に金の番をさせて、外蔵へ行っている留守に、南蛮組に金をさらわれてしまったのである。
　――ばかばかしいってありゃしない。
　しかし、ともかくも金はこの家から外へは出ていないのだ。今のうちにこっちがさがし出してうまく細工さえすれば、三千両は自分一人のものにできる。
　北の庭では味方が総がかりでいよいよ南蛮組を取りかこんだらしく、
「石だ、石攻めにしろ」
「やつらは蔵のうしろだ。油断するなよ」

「わっ」
と、口々に景気をつけながら殺気立っているようだ。
「よし、今のうちだ」
　にやりとほくそえんだお浜は、次の間とのふすまぎわへ行ってさらりとふすまを引きあける。
　そこは八畳の間の控え座敷で、今夜の仕事のために掃除のしてあるのは書院と次の間との二座敷だけである。
「あっ」
　お浜は、ふすまをあけたとたん、どきりとして一足あとへさがった。
「姉御、今夜の勝負は残念ながら引き分けらしいな」
　のそりとそこに立って苦わらいをしているのは鈴村大作である。
「なあんだ、大の字か。びっくりするじゃないか」
　相手があまりにも平気な顔をしているので、こっちもとっさにそらっととぼけながら、その実お浜はどうしてくれようかと内心激しい敵愾心に燃えてくる。

10

「お浜、美沙緒はもう柏屋の手へわたってしまったようだな」
　大作の目にちらっと沈痛な色が走る。
「ふ、ふ、御愁傷さま――。それより、大作、おまえよくあの蔵から一人で出てこられたねえ」
　それだけはふしぎでたまらないお浜である。
「一人で出てきたんじゃない。おまえがさそりの毒で倒した坂田とかいう男を、浪人者が二人で蔵の前まで運んできた。そのうちの一人が、坂田を外へおいて山犬に食いつかれてはかわいそうだから蔵の中へ寝かせておこうといい出して、蔵の戸をあけたんだ」
「なあんだ、それでいきなり飛び出したのかえ」

「いや、いきなりは飛び出さなかった。別の一人が蔵の中にはいたちがいるかもしれないというんで、友達というものは親切なものだ、結局外へ寝かしておくことにきまって、二人であの男を裸にしている間に、わしはそっと蔵から出て裏へかくれたんだ」

「畜生。じゃ、その間中、蔵の戸をあけっ放しにしておいたんだね。あいつらはどうしてああ間抜けばかりそろってやがるんだろうな、じれったい」

「いや、あの蔵の戸は間抜けがあけたんじゃなくて、日が暮れればだれかがきっとあけることにきまっていたんだ」

「ふうんだ、大作が当てにしていたのは南蛮組なんだろう」

「それより、わしは姉御のほうを当てにしていた。わしの見当はやっぱり狂っていなかったようだな」

大作は得意そうににっと白い歯を見せる。

「うぬぼれてやがる。あの時なら、だれがおまえを逃がすようなへまをやるもんか」

「さあ、それはどうだかな。姉御たちは抜け目のない連中が大勢そろっていて、手も足もない千両箱にさえ逃げられている。あんまり大きな口はきけないんじゃないのか」

あっさり一本やられて、お浜はかっと体中に火がついたような悔しさがこみあげてきた。

「なんとでもいうがいいさ。美沙緒だけは逃がしゃしないからね。今ごろは船の中で、もうあの狒々おやじにさんざんかわいがられているだろうよ。ざまあ見やがれ」

「そうか、やっぱり船か——」

一瞬大作は悲痛な顔になりながら、

「ありがとう。それさえわかれば手段はいくらもある」

と、たちまち闘志がわきあがってきたらしく、つかつかとお浜のそばを通りぬけて東の廊下へ出ていこうとする。

「畜生、殺してやる」

その男らしい決断と気魄に、お浜はあっと気をのまれて道をあけようとしたが、とっさにむらむらっと嫉妬にも似たなんともいえない怒りを感じて、狂ったように大作の体へむしゃぶりついていこうとした。

「あぶない」

ひらりと身をかわした大作は、両手で素早くとんとお浜の肩を突き放し、お浜の体がよろよろとうしろへよろめきながらどすんと派手なしりもちをつく間に、

「さそりの毒だけは勘弁してもらいたいな」

にこりと一つわらってみせて、風のように廊下から庭へ走り去っていく。

11

大作は颯爽と内木戸を出て、外庭の林の中へ進んだ。

——腹がすいたなあ。

それを思い出すと、急に全身がけだるくなってくる。今日はまだ昼飯も晩飯も食っていないのだ。

その空腹のつらさより、昼から日が暮れて宵になるまで、じっと蔵の中で当てもなく戸のあくのを待っていた時のほうがよっぽど苦しい生き地獄だった。

——日が暮れれば、必ず戸があく。その時が勝負だ。

大作ははじめからそう覚悟していたので、蔵の二階と下を一通り調べてまわったが、後は体力が疲れないようにと、格子戸の前へ座ったきりあまり動かなかった。

夜になっても戸があかなければ、二階の窓の鉄格子を切ろうと覚悟はしていた。

しかし、どう考えても、この寮は日が暮れれば悪党どもの仕事場になる。この戸が外からあかないわけはないと、大作は辛抱した。

その間に美沙緒はどうされてしまうだろう

と、それがいちばん心配になったが、これも夜になるまでは大丈夫ときめて、心配してもしようがないことは一切考えないことにした。

南蛮組がここへ三千両をねらいにくる、それは断定してもいいと思った。

この辺から橋場へかけて盗賊が巣をかまえるには好適の場所だと考えて、地の利、水の利を自分が盗賊になったつもりでいろいろ頭の中で研究してみた。これは時間つぶしのいい材料になった。

万一、偽五人組み強盗にせよ本物にせよ、これは公儀の大官が利用したらどういうことになるだろう。これも暇っつぶしにはいい課題になったが、空想がどんどん飛躍していくと善人が一人も助からない世の中になってくるので、途中でやめた。

そして、やっと夜がきて、案の定、蔵の戸があいたのは、意外にも市川たちに雇われてきた浪人どもの手によったのだとわかった時は、善人には必ず天の助けがあるものだと、大作は歓喜しながらも、大きな自信を得ることができた。

しかも、大作は刀を用いずにそっと蔵から出ることに成功して、すぐ蔵の裏へかくれた。そこから北隣の塀までは五、六間ほどの空き地になっていて、ここにも雑草がのび放題になっている。

「あっと、若だんな、——しめた」

その雑草の中からむくりと起きあがっていきなり飛びついてきたのは、深川屋の久蔵だった。

「どうした、久蔵」

「しっ」

久蔵は大作を制して、草むらの中へ引っぱりこんでいきながら、

「あっしはねえ、だんな、今夜こそ生きてはけえれねえと覚悟していたんでさ」

と、耳に口をよせてささやき、ぽろぽろと涙をこぼしていた。

「そうか、そんなに苦労したか」

大作も久蔵の手をしっかり握りながら、ひとりでに目頭が熱くなってくる。

12

「若だんな、くわしいことは後にして、お嬢さんはお浜につれられて、いまこの寮へ入りやした。早く助けてあげておくんなさい」

久蔵は早口に告げた。

「よし、わかった」

「お浜ってのはすごい女で、黒ぎつねがついているんだって話です。油断しちゃいけやせん」

「ありがとう。さそりの毒も使うようだな」

現に、坂田という浪人者がその毒にやられて、いまこの蔵の前で仲間に裸にされているのだ。

その仲間たち二人は、どうやら仕事を終わったらしく、そこの内木戸をぬけて表のほうへまわっていくようだ。

「久蔵はどこからここへ入ってきたんだ」

「猪牙(ちょき)でこの隣の桟橋へ着いて、なにしろここは裏も表も見張りがついているんで、どうしようもねえ。しょうがねえから、隣の庭へ忍びこんで、たった今そこの塀をのりこえてきたら、うまく若だんなに会えたんでさ」

「そうか、天の助けがあったんだな。ありがたい」

大作は本当にありがたいと思った。

「天の助けねえ。——あっしは夢中だった」

久蔵はぽかんとしてつぶやいていた。

「こうしよう。おまえは舟へ帰って待っていてくれ。わしは美沙緒を助けて、あとからすぐ行く」

「一人で大丈夫かね、だんな」

「なんとかやってみよう。おまえまでわしといっしょに失敗してしまっちゃ、二の矢のつぎほがなくなる」

「なるほど、そうでしたねえ」

久蔵はのみこみよくこっちの気持ちがわかったらしく、

「じゃ、若だんな、気をつけておくんなさいよ」
と、いって塀ぎわのほうへさがっていった。
大作はなるべく敵の虚を突くつもりで、直接書院の東の庭へ出ずに、表玄関のほうからぐるりとひとまわりして南の庭へ出てみることにした。
が、表玄関前へ出ようとすると、そこにさっきの浪人組が二人で見張りをしている。しばらく様子を見ていたが、どうもその目をぬすんで通りぬけるのは難しそうだ。
ここで刀を抜くくらいなら、いきなり書院の東廊下へ出たほうが美沙緒に近い。
そう考えて、いまきた道を台所口の前あたりまで引きかえしてくると、ちょうどそこから宗十郎頭巾の男が二人、そっと出てくるところだった。
——何者だろう。
どきりとして見ていると、二人は内木戸のほうへ行って中をのぞいて、だれも人のいないのをたしかめると、うなずきあって蔵の前の庭へ入っていった。
——あれはお浜一味の者ではない。
そうは気がついたが、こっちは美沙緒のことが気になるので、いま二人が出ていった台所口から家の中へ入ってみた。
あたりは真っ暗だが、書院のほうからはっきりと人の声が聞こえてくる。
——よし、美沙緒はあそこにいる。
大作は手さぐりで声をたよりにそっちへ幾間もぬけていくうちに、やっと書院の控え座敷へ出てきた。
それがちょうど、さっきの宗十郎頭巾の二人、実は南蛮組の四郎、五郎がお浜とやりあっている最中だったのである。

13

重蔵とお浜は、美沙緒と三千両の両方を失っている。

南蛮組は大作が考えていたとおり三千両をねらい、しかも外蔵から大作を助け出す仕事もその中に入れていたのだ。
大作は昼間出会ったつり浪人の南蛮太郎をまぶたにおもいうかべながら、
——あの男はとにかく怪傑だ。
とみとめないわけにはいかなかった。
しかし、たとえこっちに好意を持っていてくれるとわかっていても、盗賊の行為はゆるすわけにはいかないのだ。
こんど彼に出会えば、好意は好意として感謝しても、やっぱり盗賊として対決しなければならなくなる。
——困ったなあ。
と、大作は胸が重い。
いや、それより、大作の当面の不安は、美沙緒はすでに柏屋の手にわたって、いま船でどこへか運ばれているということだ。
船の行く先はおそらく堀留の自宅だろう。そこが惣兵衛にとってはいちばん安全な城なのだ。強欲でけちん坊の惣兵衛が、外に金のかかるかくれ家を持つはずはあるまい。
——いまから久蔵の舟で追って間にあうかどうか。
絶体絶命になれば美沙緒はいつでも自害する、美沙緒の持っている強さといえばただそれ一つだとわかっているだけに、大作は心配でたまらない。
外庭の林の小道を突っ切って、大作は足早に寮の裏木戸へ出てきた。
「これ、だれかいるか」
大作はわざとあたりへ声をかけてみた。浪人組はみんな南蛮組のほうへかかっているはずだから、ここに見張りがあるとすればお浜の子分のごろつきが一人か二人、そんなものだろうと思った。
「へえ」
ひょいと物置小屋の横から飛び出してきたの

はやくざらしい二十五、六のやつで、長脇差をさしている。
「おまえ、お浜の子分か」
「へえ、金次っていいやす」
「わしは御用人さまの使いで堀留の船を追うことになった。木戸をちょっとあけてくれ」
「お名前は――」
「神田長太郎、三島家の家来だ」
「本当でござんしょうね。あっしなんかをだましちゃ罪ですぜ」
金次はなんとなく疑わしそうな顔つきだ。
「お浜は気が強いから、後でいじめられるのかね」
「姉御はさそりの毒を持っていやすからね」
金次は苦わらいをしている。
「心配するな。早く柏屋の船を追わぬと、南蛮組におそわれる危険があるんだ」
もっともらしく大作がいうと、
「わかりやした。お通りなすって」
金次はどうやら納得して、自分の手で木戸をあけてくれた。
「ありがとう、御苦労だな」
大作は木戸を出て、素早く前後を見まわしながら、あっとそこへ棒立ちになる。

14

大作は川下のほうから御用ぢょうちんを先頭にした一団が走るようにこっちへ近づいてくるのを見たのだ。
「あっ、いけねえ」
とたんに、この寮の南外れを見張っていたらしいやつが、ふいに塀ぎわから立ちあがって、こっちへ駆けもどりながら、
「だんな、そんなところにうろうろしていると、やつらに怪しまれやすぜ」
と大作に注意して、いま金次がしめたばかりの裏木戸を引きあけ、
「兄貴、御用ぢょうちんだ」

と告げながら中へ飛びこんでいった。
――わしは別に御用ぢょうちんをこわがる必要はないんだ。
大作はそう気がついて苦笑しながら、ゆっくり川上のほうへ歩き出す。そして、万一御用の者に誰何されたら、今夜のことを正直に告げたものか、知らん顔をしてすませたものか、ちょっと当惑している。
――そうか、それでおれはどきりとしてたんだな。
もう一度苦わらいが出た時、大作の腹はとっさにきまっていた。こっちは一刻も早く美沙緒の船を追わなくてはならないんだ。ここは知らん顔をしてすませるよりしようがないのである。
「お武家さん、ちょっとお待ちなすって」
案の定、まだ柏屋の寮の塀を通りすぎないうちに御用ぢょうちんが追いついてきて、うしろから呼びとめられてしまった。
「わしか――」
大作はくるりとそっちを向いて、おやと思った。
呼びとめたのは御用ぢょうちんをかざしている岡っ引き風の男だが、そのうしろについている羽織袴の若い男は、たしかに大東竜平のようだ。
竜平の父大東寅太郎はおなじ神保町に屋敷があって、こんど加役（火付け盗賊改め）にあげられたと聞いている。
加役はお先手組の（弓組十組み、鉄砲組十五組み、のちに二十四組み）中から任命され、町奉行とは別に江戸市中を巡回して、火災の予防、盗賊の逮捕、博徒の取り締まりにあたった。役高は千五百石で、与力十騎と同心五十人を組下に持っている。加役には本役一組みと、これを補助する助役一組みとの二組みがあるが、このごろ江戸は強盗の横行が激しいので、大東は特に助役を仰せつけられたのだろう。

町奉行所としては、加役にあまり手柄を立てられると町方の恥辱になるし、加役はどしどし手柄をあげて町奉行をけおとしてやろうとかかるから、それだけに実績はあがるが、双方の仲は決して よくない。

　竜平は大東家の嫡子で、年も大作とおなじだから、少年のころから友達づきあいをしてきたが、嫡子と冷や飯食いとでは格がちがう上に、竜平は才気走った男で、つきあっても自分の得にならないような者は平気で捨てていける冷淡な性分だから、このごろではめったに顔をあわせることもなかった。

　その竜平が、今夜は父寅太郎の名代で、役目の巡回に出てきたのだろう。与力一人、同心二人、小者三人をしたがえて、颯爽と大作の前へ立ったのである。

15

「やあ、竜平じゃないか」

　大作は思わず親しげな声をかけた。

　竜平は冷たい目をして、肩をならべている与力のほうへあごをしゃくってみせる。勤役中だから友達づきあいはゆるさぬ、そういう気持ちなのだろう。

「我らは加役大東寅太郎殿配下の与力伊藤権太夫、役目によって尋問いたす。お手前の姓名は――」

　四十年配の与力が一足前へ出て聞いてきた。底意地の悪そうな、がっしりとした体つきの男である。

「鈴村大作、二十五歳、神保町の滝主水方の冷や飯食いです」

「どこへ行かれる途中かな」

「強盗をつかまえてやろうと思って、ぶらぶら歩いています」

「この辺に強盗がいるのかね」

「いるだろうというわしの見こみです」

「その見こみの出どころは――」

「この辺は寮が多い。しかも、寮は留守番だけで、中には空き家になっているところもある。盗人が昼寝をするにはもってこいのところだと自分で見当をつけた」

「さっきこの辺で短筒の音がしたはずだが、お手前はそれを耳にしているかな」

　そうか、岡っ引きがあの銃声を耳にして、そこでこの連中をつれてきたのだなと大作は思いながら、

「さあ、それはちょいとうっかりしていましたな」

　と、わざとそらっとぼけておく。

「だんなは昼間っからこの辺をうろついていやすね」

　ちょうちんをかざしている三十がらみの岡っ引きが、ふいに口を入れてきた。

「うむ、昼間も一度きた」

「そこの三河屋という酒屋へ寄って、柏屋の寮のことを聞いたそうですね」

「うむ、聞いた」

「特に柏屋の寮のことを聞いたのはどういう目的ですな」

　すかさず伊藤与力が食いさがってくる。

「ここは空き家になっているんで、盗人が利用するにはちょうどいいと見当をつけましてな」

「大作、まさか自分がそれを利用しようと考えたんじゃあるまいな」

　竜平がずばりと切りこんでくる。

「冗談いうなよ、竜平」

「冗談じゃない。加役の役目で尋問しているんだ。役目に友情はない。わしの目から見ると、おぬしの行動は強盗をつかまえるほうよりかくれ家をさがしているほうのようにもとれる。弁明があるか、大作」

「なにっ」

「あきれた男だなあ」

「いや、いまのはひとりごとだ」

　大作は苦わらいをしながら、

「当節の強盗はひどく気が荒いそうだから、十分注意して手柄をお立てなさい。これが友人としてのわしの寸志だ」
と、まっすぐ傲慢な竜平の顔を見てやる。
だあん。
ふいに柏屋の寮の庭から銃声がひびいて、川面にこだました。

16

そのころ――。
柏屋惣兵衛と美沙緒をのせた屋根船は、ゆっくりと吾妻橋の下をくぐりぬけていた。
船房ははじめから灯を消して、月あかりだけにしている。
柏屋が今夜つれてきた下男の与吉は、唖で、子供のころ拾って育てておいたやつだから、主人のいいつけには絶対にそむかない。今年二十五で体もがっしりとしているが、すごい腕力がある上に、猟犬のような鋭い勘を持っているので、なまじっかの用心棒をつれて歩くより、与吉一人を供につれてきたほうが、柏屋としては安心していられるのだ。
だいいち、柏屋が多少あくどいまねをしても、与吉なら人にしゃべるおそれは絶対にない。こっちにそういう気持ちがあるから、惣兵衛はわざと与吉には字を習わせなかった。
船頭の七助も出入りの者で、もう何年となく目をかけてやっているし、与吉とはひどく気があうらしく、暇さえあれば行ったりきたりしているようだから、これもこっちを裏切るような心配はまあないと見ていい男だ。
その七助は艪をこいでいるし、与吉はそのそばで例によって手まねで話しこんでいるだろう。
――さて、どうしたものかな。
惣兵衛は少し離れたところに行儀よく座って、じっとうなだれている美沙緒の端麗な姿を目でたのしみながら、さっきからひそかに胸を

わくわくさせているのである。
この娘は今夜三千両という大金を積んで買ってきたのだから、もうどうしようとおれのものだと、惣兵衛は何度も自分にいい聞かせている。
今まで金でしばって、柏屋は何度も女をねじ伏せてきた。いきなり胸の中へ肩を抱きこんで、
「利子を負けてあげるんだ。いいかね、おまえさんさえ目をつぶれば御主人が助かる。いいかね。黙っていりゃだれに知れることでもない。それも、たった一度だけ目をつぶればいいんだ。いやかね」
と耳もとへ吹きこんでやると、たとえ最後まで身をまもろうと必死にもがいても、決して声を立てる者はない。
声さえ立てなければ、こっちはあわてる必要はないんだから、ゆうゆうと料理する。手ごたえのあるほうが、柏屋にはむしろたのしみだった。
この娘もその伝でいくだろうか。
船の中だけに、声を立てられるとちょっとまずい。与吉は唖だから聞こえないだろうが、七助にあまりあくどいところは見せたくない。
――家までそっとしておくにかぎるかな。
それがいちばんいいことはわかっている。
しかし、これは正当な買い物ではないのだから、いつだれがこの娘を取りかえしにくるかわからない。
その場でものにしてあるのとないとでは、まるっきりこっちの強みがちがってくる。
女というものは、一度身をまかせてしまうと、ひどく弱くなって、たいていのことはあきらめてしまうものなのだ。
――ひとつ悪党になってみるか。
惣兵衛は若い男のように胸の血が甘くわき立ってくる。

17

――この娘はもうちゃんとこっちの気持ちを知っているんだ。なにも遠慮することはない。

そういう目で惣兵衛が美沙緒の体中を見まわしていると、美沙緒は石のようにかたくなって身動きひとつできないようだ。
「お嬢さんはどうしてそうわしを怖がるんでしょうな」
　柏屋はふっと気軽に話しかけていった。
「世間ではわしのことを鬼惣といいましてな、ひどく憎んでいるようです。しかし、わしは別に鬼でも蛇でもない。これでも話のよくわかる男だと、自分では思っています。つまり、世間の貧乏人は、わしが金持ちなのでわしが憎いんでしょうな。たわいのない話です」
　美沙緒は返事はしないが、こっちのいうことはちゃんと聞いているようである。
「わしはこれからお嬢さんを大切にするつもりです。わしは金持ちですからな、お嬢さんのほしいものはなんでも買ってあげますぞ。わしのようなけちんぼうが、お嬢さんのためになら三千両という金を惜しげもなく今夜長坂さんにわたしているんですからな。それほどわしはお嬢さんが好きでたまらないんだ。本当ですぞ。お嬢さんがもし大名の暮らしがしたいというのなら、十万石ぐらいの屋敷を手に入れて、明日からでも大名の暮らしをさせてあげられる。こう見えても、柏屋の金蔵にはちょいと使いきれないほどの金が積んであるんですからな」
「あたくし、なんにもいりません」
　美沙緒はうなだれたままつぶやくようにいって、ため息をついた。
「ほしいものはなんにもないといいなさるんかね」
「たった一度でいい、大作さまにお目にかかりたい」
「大作さんというと、ゆうべお嬢さんが船宿へいっしょに泊まった若い浪人さんかね」
　美沙緒ははっきりとうなずいてみせる。
「よろしい、一度でいいんなら会わせてあげよう」

「本当ですか」
「柏屋はうそはいいません。そのかわり、お嬢さん、あんたはお兄上さまのために今夜三千両でこの柏屋に体を買われてきた、そのことはちゃんとわかっているんでしょうな」
　こんどは返事ができないようである。
「失礼だが、お嬢さん、もしあんたがわしに背くようなら、わしはお兄上三島弥十郎さまを相手にして、お白州で白い黒いをつけなけりゃならない。わしはお兄上さまの印形をおした証文をちゃんともらってあるんですからな。三島家千石のお家をつぶすも生かすも、あんたの胸一つにある、わかっているんでしょうな」
「今夜、一目だけ大作さまに会わせてくださいませ」
　思いきったように美沙緒が顔をあげる。
「その男に一目会わせたら、どういうことになりますな」
「あたくし、もうなにもかもあきらめます」
　恋しい大作に一目会ったら、その場で自害しよう、それよりほかにどう考えても柏屋の手をのがれるすべはないと、美沙緒ははっきりと覚悟をきめたのだ。

18

「いいとも、わしも男だ。きっとその大作さんとかいう人に一度は会わせてあげます。これでもわしはよく話のわかるほうでな」
　惣兵衛はもっともらしくいいながら、ひょいと右手をのばして、美沙緒の左の腕をつかんでいた。
「あっ」
　びっくりして逃げようとしたが、もうおそい。
「なにを驚きなさる。あんたは承知でわしに買われてきたお嬢さんなんだ。それとも、あんたは兄上さまとぐるになって、このわしをだまそうというんかね」
「ゆ、ゆるして――」

「いまさらゆるすもゆるさないもないだろが。おとなしくしなされ」
強い腕力にじわじわと引きつけられて、どう身もがきしても力ではかなわない。とうとう上体が倒れるように柏屋のがっしりとした胸の中へ引きこまれていく。
「あっ、だれか、助けて――」
「な、なにをいう。人から三千両も持っていっておいて、助けてくれとは、なんといういいぐさなんだ。もう一度いってみなされ。わしはこのままお奉行所へ駆けこみますぞ」
柏屋は妙にむらむらっと腹が立ってきて、思わず声が大きくなっていた。
たとえばこの娘はなんにも知らなかったにもせよ、こっちはそのために三千両も積んでいるのだ。いまさら助けてくれなどといわせるものかと、することも急に手荒くなってくる。
「いいえ、あたくしは、なんにも知らないのです。ゆるして」
「よし、そんなことをいうんなら、わしは三島弥十郎さんの首になわをまきつけてやるばかりだ。それでもいいんだね」
惣兵衛は力まかせに美沙緒の体を押し倒して、仰向けに両手でおさえつけながら、かまわずわめき立てる。
船はその度にぐらっぐらっと大きくゆれる。
「殺して、――いっそ、あたくしを死なさせてくださいませ」
美沙緒は朝からお浜にむごい責められかたをして、肉体的にも精神的にもほとんど疲れきっている。目の前に真っ暗な絶望があるばかりで、もう身もがきをする気力さえつきてきた。
「冗談いいなさるな。三千両で買った大切な宝物に死なれてはたまらない。あんたはわしの宝物なんだ。おとなしくさえしていてくれれば、わしはどんなにでもあんたを大切にするつもりなんだ」
ぐったりと意識さえ消えかけているような女

体をおさえつけながら、哀れと思う心などみじんも持ちあわさない惣兵衛は、もうこっちのものだと目にけだものじみた情欲の炎が次第にめらめらと燃えあがってくる。
そして、ごくりと一つ生つばをのみこんだ時、
「だんな、変な船が一艘(いっそう)こっちへこいでくるんですがねえ」
と、艫(とも)のほうからふいに船頭が声をかけてきた。
「変な船って、どんな船なんだ」
惣兵衛は怒ったような声で聞く。

19

「吾妻橋をくぐりぬけた時からなんとなくつけてくる屋根船なんですがね。急に速くなり出したんでさ」
そういいながら、こっちの船も力いっぱいこぎ出しているようである。ぐらっぐらっと船が乱暴にゆれているのだ。
「いまどの辺をこいでいるんだ、こっちは」
「もうすぐ駒形堂(こまがたどう)の沖へかかりやす」
「向こうの船にはだれか乗っているようか」
「いいえ、こっちとおなじで、船房の灯は消えていやす」
「間違いなくこっちを追っているんだろうな」
「へえ」
「与吉にもこがせろ」
「もういっしょにこいでいやす」
「向こうはだんだん近づくようか」
「へえ」
柏屋はまだ美沙緒の両肩をおさえつけたまま、一体何者の船だろうと、やっぱり不安になってくる。
もう金はつんでいないのだから、ねらうとすれば美沙緒なのだ。
――美沙緒をねらうのは大作のほかにない。
そうだ、大作にもせよ、ほかのだれにもせよ、この娘はちゃんと三千両で買ったものなのだか

ら、こっちはちっとも恐れることはないんだ。しかって追いかえしてやればいい。
いっそ自身番へ駆けこんだほうがいいかもしれない。向こうが悪党なら、自身番まではついてこられないはずだ。
「七助、かまわないから船を駒形へつけろ。場合によったら、おまえ自身番へ走って町役人を呼んできてくれ」
「へえ」
「間にあいそうか、駒形へつけるのは」
「それが、あぶねえんでさ」
「なにっ、あぶない」
柏屋は思わず美沙緒を放して窓障子をあけてみようとしたが、ふっと気がついて、
「お嬢さん、おとなしくしているんですぞ。変なまねをしますと、お兄上の家名が立たなくなる、わかっていましょうな」
と、一本くぎをさしておくことを忘れなかった。
「はい」
美沙緒は男の手がはなれたので本能的に座りなおり、いそいで恥ずかしいすそ前をなおす。だれがきてくれても、大作でないかぎり命は助からないのだから、どうにも希望は持てない。
――大作さま。
胸の中で恋しい名を呼んで、涙があふれてくるばかりだ。
「七助、追いかけてくる船はどこにいるんだな」
柏屋はいざるようにして船房の戸口まで行き、さっと戸をあけた。とたんに、
「おい、船頭、艫をすてろ。いうことをきかぬと、一発ぶっ放すぞ」
すぐ近いうしろから野太い声がした。
「あっ、いけねえ」
七助も与吉も一度に艫を放してしまう。
その間に敵の船の舳(へさき)がぐいとこっちの右がわへ突き進んできた。

20

後から追跡してきた船は、たちまち舳からこっちの船端をこすりながら、ぴたりと艫をならべてきてとまった。
敵は見るからに屈強な船頭を二人そろえ、船房の入り口あたりに立ってこっちへぴたりと短筒を向けているのは、宗十郎頭巾を目深にかぶった立派な武士である。
月はもうかなり西へ傾きかけているが川面はあかるく、ほかにこいでいる舟は一艘も見あたらない。時刻はやがて五ツ半（九時）に近いだろう。
「一体、おまえさんはどなたかな。なんでわしの船をとめなさるんだ」
金があって怖いものなしの柏屋惣兵衛は、若いころから腕も強く、また一度もけんかで負けたことのないのを自慢にしているくらいだから、いまも恐れげもなく艫へ出ていって、いきなりこっちから宗十郎頭巾の武士に食ってかかる。
「おぬしは堀留の柏屋惣兵衛だな」
「そうですよ。柏屋ならどんな用があんなさるんだね」
「わしは南蛮組の者だが、近いうちにおぬしのところへ一万両もらいに行くから、そのつもりでいてくれ」
「なにをいいなさる。だれがあんたがたに一万両やると約束したんだね」
「いや、約束はここでするんだ。いいだろうな」
「とんでもない。千両箱が十で一万両、なんでそんな大金をおまえさんにやらなければならないんだ。ばかも休み休みいいなされ」
「いや、おぬしだってあんまり利口なほうとはいえないだろう。いかに蔵に金をくさるほど積んでも、冥土(めいど)までは持ってはいけない。こんなばかげた話はないだろう」
「大きなお世話だ。人の金の心配をするより、

自分のふところの心配をするほうがましだ」
「そのとおりだ。わしは自分のふところの金だけではどうも少し足りないようなんで、おぬしの蔵から一万両ほどもらうことにしたんだ」
「おまえさん、気はたしかなんかね」
「おぬしより気はたしかだ。人の娘を金で買おうなどというばかげたことは考えてみたこともない。まして、貸した金の利子に人の女房の体をいたずらするなんてことは、人間放れがしすぎている。その亭主の恨みがどんなに深いものか、いまにおぬしにも思いあたる時がくるだろう」
頭から嘲笑されても、柏屋の神経はそれを恥じるより、貧乏浪人がなにをぬかすとせせらわらいたくなるのだから話にならないようだ。
「おまえさん、わしにそんなことをいいに、わざわざこの船を追ってきたんかね」
「そのとおりだ」
「御苦労なこったね。じゃ、もういいたいことはみんないったんだろうから、こっちの船を放してもらいたいね」
「そうか――。それじゃ、二、三日中に一万両もらいに行くからな」
「いいとも、きてみなされ。片っぱしからつかまえて、牢屋というところにぶちこんでやりますからな」
決して負けてはいない柏屋なのだ。

21

夜潮にただ流されている両方の船は、舳のほうがいつの間にか六尺ほど別れている。艫のほうはこっちの船頭の一人が向こうの船端をしっかりとおさえているので、ちょうど八の字形になってきた。
「柏屋、どっちが先に牢獄へおちるか、それをたのしみに今夜は別れよう」
宗十郎頭巾の武士はからかうようにいってから、

「船頭、もういい。放してやれ」
と、船頭にいいつけた。
「へえ」
船頭は船端を放すと、すぐに艫について、二人で川下のほうへぐんぐんこぎだした。
「ばかばかしい、たとえ南蛮組だろうと、五人組みだろうと、こっちは堅気の商人なんだ。負けてたまるもんか」
惣兵衛はそれを見送りながら、いまいましそうにつぶやいている。
「けど、だんな、あの野郎たち、よく金を出せといいやせんでしたね」
七助がほっとしたようにいった。
――はてな。
では、あいつはなにをしに短筒などをひけらかしてこっちの船を追ってきたのだろうと気がついて、惣兵衛はどきりとしながら船房の戸をあけてみた。
「あっ、やられた」
そこに美沙緒の姿はなく、ここから逃げましたといわぬばかりに、そこの窓障子があいている。
「どうかしやしたか、だんな」
「あいつたちは美沙緒をさらっていったんだ。七助、すぐにあの船を追ってくれ」
しかし、二人でこいでいく敵の船はもう小一町も離れて、ぐんぐん川下へ下っていくのだ。
「与吉さん、たのむぜ」
それでも七助はすぐに艪をとって、啞の下男に助太刀をたのむ。とにかく、いいつけられたとおりにやらないと、柏屋に頭からどなりつけられた上、祝儀がふいになるおそれがあるからだ。
「だんな、お嬢さんは窓から向こうの船へ逃げたんでしょうかねえ」
「逃げたんじゃない。あっちの船にもう一人だれかのっていて、こっちが短筒のやつに気をとられている間に、そいつが美沙緒をさらってい

ったんだ。――畜生、三千両ふいにしてたまるもんか」

惣兵衛はじだんだを踏みながら、

「七助、あの船に追いついたら一両奮発する。力いっぱいやってみろ」

と、だんだん小さくなっていく敵の船をにらみつけている。

「へえ、根かぎりやってみやす」

口では調子よく返事をしたが、もう追いつける距離ではないし、たとえ追いついたとしても向こうには飛び道具がある、とても船はつけられないとわかっているから、七助は与吉の顔を見てぺろりと赤い舌を出していた。

啞の与吉はこくりと一つうなずいてみせて、その目が冷たくわらっている。

「うぬっ、いまに見ていろよ。きっと番所へ突き出してやらずにおくもんか」

柏屋は悔しまぎれに野獣のようにほえつづけていた。

22

美沙緒は、この船も灯を消している船房で、宗十郎頭巾をかぶっているふしぎな武士の前に体中をかたくして座っていた。

恐ろしい柏屋が艫へ出ていくとすぐ、南蛮組の船がこっちの船の船端へ船端をぴたりとつけてきた。

――どうなるのかしら。

たった今、死ぬより恥ずかしい目にあわされようとしていた美沙緒には、それ以上怖いことはなにもないので、もうどうしようという気力もなく、ただぼんやりと一人で座っていた。

すると、こっちの船の窓が外からあいて、どきりとしながらそっちを見ると、宗十郎頭巾の男が頭をのり出すようにして、

「あんたは三島家の美沙緒さんだね」

と、低い声で聞いてきた。

「はい」

「わしは大作さんからたのまれてきたんだ。わしを信用して、早くこっちの船へ移りなさい」

「あの、大作さまからですか」

はっと目を輝かした時には、もうその男の両手が素早くこっちのわきの下へかかっていて、ずるずるとごぼうぬきにこっちの船へ引きずりこまれていた。

「わけは後で話すから、しばらく口をきいてはいけない」

「はい」

大作はどこにいるのか、どうしてこの船できてくれなかったのか、早く聞きたいことばかりだったが、宗十郎頭巾の男は黙って艫のほうの話し声に耳をすませているので、美沙緒も黙って座っているほかはなかった。

そのうちに、こっちの船は向こうの船端を離れ、急にぐんぐんとこぎ出したようである。

「太郎さん、そっちはうまくいったんだろうな」

艫のほうから、いま柏屋と掛けあいをやっていたおなじ声が船房へ聞いてきた。

「うむ、うまくいった。安心してくれ」

「そうか、そりゃよかった。あの高利貸しめ、今ごろじだんだを踏んで悔しがっているだろう。ばかな野郎だ」

声の主はそういってあかるくわらっていたが、船房へ入ってこようとはしなかった。

「美沙緒、これからあんたをどこへ送ってあげたらいいんだね」

太郎さんと呼ばれた宗十郎頭巾の武士がやさしく聞いた。

「あの、大作さまはいまどこにいるのでございましょう」

美沙緒はなによりもそれが知りたい。

「それがねえ、今のところどうもはっきりしないんだが、たぶんあんたがさっきつれていかれた柏屋の寮のどこかへ監禁されているんじゃないかと思うんだ」

「まあ、それは、それは本当なんですか」

美沙緒ははっと顔をあげて、思わずせきこまずにはいられない。

「実は、わしは今日昼ごろ、あそこの寮の裏でつりをしていてね、その時はじめて鈴村大作さんに会ったんだ。大作さんはあんたの船はきっとあの寮へつくと見ていたんだな」

そう話してくれる太郎の目は、なにか悲しげに美沙緒の顔をじっと見ている。

23

「大作うじとはその時別れたきりなんだが、わしはあんたの船は夜にならなくちゃこないと見ていた。だから、日の暮れるのを待って、盟友二人をあの寮の中へ入れ、わしたちは船からあの桟橋を見張っていたんだ。すると、まずあんたの船が桟橋へつき、まもなく柏屋の船がついて、長坂といっしょに千両箱を三つ運びこんだようだ。そして、あんたは柏屋の手にわたってすぐ出てきたが、大作うじはとうとう姿を見せなかった。無事でいさえすれば、そんなはずはない。もっとも、わしははじめから、ことによると大作うじはわしと別れてから寮の中へさぐりに入ったんじゃないかと考えていたんで、盟友二人によくさがしてみてくれるようにたのんである。要するに、大作うじはたぶんあの寮の中で敵のわなにかかったんじゃないかと思う」

宗十郎頭巾の太郎は、そうやさしく話してくれる。

「そういえば、お浜はあたくしに、あの人はだれにもわからない檻の中に入れてあると申していました。あたくしは、うそだ、あたくしを脅かすのだと思っていたのですけれど、ではやっぱり本当だったのでございますね」

美沙緒はいまさらのように胸が痛くなってくる。

「いや、もう大丈夫だ。お浜がだれにもわからない檻というからには、あの寮の北がわにある外蔵にちがいない。それならわしの友だちがも

うきっと大作うじを助け出している。しかし、あんたはあの寮へつれていかれるまで、どこにいたんだろうな」

「あたくし、喜久蔵にだまされて船に乗ってから、お浜に体中を責められて、もう死ぬかと思うほどひどい目にあわされました。それからは頭がぼうっとしてしまって、あの近くの平野屋とかいう船宿の二階へつれていかれたのですが、夕方まで横になったまま起きることもできませんでした」

「ふうむ、お浜というやつはそんなにすごい女なのかねえ」

「そこのおばあさまが申していましたの。お浜には黒ぎつねとかいう悪いきつねがついていて、その黒ぎつねがあばれ出すと男もかなわなくなるのですって。それに、お浜はさそりの毒を持っていて、それで人を殺すことができるのです。さっき、あたくしの見ている前で、お浜に口答えをした浪人者が一人、あっという間に殺されてしまいました。あたくし、恐ろしい」

思い出しても美沙緒は身ぶるいが出てくる。

「すごい女なんだねえ。どんな風にさそりの毒ってのを使うんだろう」

「あたくしにはわかりません。刀を抜こうとする腕をつかんだと思ったら、もううめき声をあげて倒れていました」

「そうか、指になにか仕掛けがあるんだな」

太郎はひとりごとのようにいってから、

「わしは大作うじから聞いたんだが、美沙緒さんには甲府とかにいいなずけさんがいるんだってねえ」

と、気さくにそんなことをいい出す。

「はい」

美沙緒はどきりとしてうなだれる。

「あんたはそのいいなずけさんに会ったこともないんだろう」

頭巾の中の目が微笑しているようだ。

24

「わしは大作うじにいったんだ。十年もたよりのないいいなずけさんなんかに遠慮はいらない、好きなら美沙緒さんといっしょになったらどうなんだとね」

太郎はさばさばという。

「あの、あなたさまはどなたなのでございましょう」

まだ名前も聞いていないし、だいいち相手はさっきから頭巾のままなのだ。あぶないところを助けてくれたのだから、恩人にはちがいないが、いくら美沙緒が世間知らずでも、この人たちは決して世の中の表街道を歩いている人ではない、そうわかるだけに、なんとなく不安になってくる。それだけ美沙緒もどうやらやっと自分を取りもどしてきたのである。

「そうか、わしはまだ名前も名乗っていなかったな。わしは南蛮太郎とおぼえていてください。本名はとっくに捨ててしまったんで、今のところ盟友がわしとも五人いて、いま艫にいるのが南蛮次郎、四郎と五郎は大作うじを助けに柏屋の寮へ入っている。三郎も今夜は別のところで働いています。かぶり物をとって顔を見せてあげてもいいんだが、仕事中は絶対にそれをしないことに約束しているんで、これだけは失礼します」

頭巾の中の目がわらっている。意志の強そうな目で、濁ったところは少しもないようである。

「あたくし、なんですか怖い」

「大丈夫です。我々は決して女はいじめないことにしている」

「いいえ、もし大作さまがあなたさまたちと敵味方になったらどうしたらいいかと思って、心配です」

「ああ、そのことか――。南蛮組は別に善良な人たちに手をつけるような非道は働いていないが、人の金を奪えばやっぱり盗賊ですからな、

大作うじは手を握りたくないかもしれない。しかし、我々はもうそう長く日本にはいません。だから、大作うじと戦うような機会は、まあないでしょう。安心しておいでなさい」

「どちらへおいでになりますの」

「南蛮へわたるのが我々の目的です。そこには日本などよりもっと大きな豊かな島がたくさんあるはずなんだ」

「太郎さん、船はどこへつければいいんだね」

艫から次郎が聞いてきた。

「ここはどの辺なんだね」

「いま蔵前を通りすぎたばかりだ」

「柏屋の船はどうしたろう」

「ひょっとすると、今戸へ引きかえしたんじゃないかな。もうどこにも見あたらないようだ」

「すると、欲張りおやじめ、急に三千両が惜しくなったかもしれないねえ」

「どうもそうらしいな。へたをするとお浜のやつにさそりの毒でやられるかもしれないぞ」

次郎の声はわらっている。

「美沙緒さん、どこへ送ろうか。柳橋の深川屋じゃあぶないかな」

太郎があらためて聞く。

「いいえ、深川屋にしてくださいませ。そこよりほかに、あたくし行くところがございません」

美沙緒は急に悲しくなってくる。

25

「次郎さん、船を神田川へ入れて、深川屋の桟橋へつけてくれぬか」

南蛮太郎は艫へ声をかける。

「心得た」

すぐに次郎の声がかえってきた。

「美沙緒さん、こんどは悪ぎつねなんかにだまされちゃだめだぜ」

太郎は冗談のようにいう。

「はい、きっと気をつけます、あたくし」

「まあ、だれがなんといっても深川屋の二階か

ら動かないことだ、大作うじが帰ってくるまではね」
「あの人、今夜のうちに帰ってこられますかしら」
　美沙緒はそれがいちばん心配そうである。
「わしはきっと帰ると思う。あんたはどうせもう神保町の屋敷へかえれないんだろうから、後のことは大作うじとよく相談してきめるがいい」
「あたくし、明日はあの人と甲府へ立つことになっていましたの」
「いいなずけさんをさがしにか――」
「ええ」
「わしは、さっきもいうように、それはむだだと思うんだがねえ。だいいち、美沙緒さんはもうそのいいなずけさんより大作うじのほうが好きになっているんだろう」
　ふいに急所を突かれて、美沙緒はどきりとしながら顔が火のようにほてってくる。そして、
――そうだった。もし甲府に新十郎さまがいたら、どうなるのかしら。
　と、そう気がついたとたん、こんどははっきりと顔から血の気がひいてくる。
「あんたにしても、大作うじにしても、どうしてそう物事を窮屈に考えるんだろうな。そりゃ、世の中に生きている以上、義理だとか約束だとかは、ある程度までは大切にしなけりゃならない。しかし、世の中というものはただ律儀だけではとおらないものがあるんだ。たとえばだね、もし甲府のいいなずけさんがほかの女を嫁にもらっていたら、あんたたちはどうするね。約束が違うといって、そのいいなずけさんを責めるかね」
　美沙緒は返事ができない。
「それと反対に、もしあんたと大作うじがいっしょになっているところへ、そのいいなずけさんが文句をつけにきたとすれば、それは今日まで音信をしなかったいいなずけさんのほうに落

ち度があるんだから、それをはっきりいってやればいいんだ。だいいち、あんたは生まれた屋敷を追われて宿なしになっているんだ。三島家の息女ではなくなっているんだ。食うためにはどんなことでもしなければ生きていけない体なんだ。義理もへちまもいっていられる場合じゃありゃしない」
　太郎はむしろばかだなあといいたげな目をしている。
「太郎さん、ついたよ」
　艫から次郎が呼んで、船はとんと桟橋の杭にあたったようだ。
「どうだ、あたりの様子は大丈夫そうか」
　太郎が小声で聞く。
「うむ、大丈夫だと思うがなあ」
　次郎の声が答える。

26

「美沙緒さん、いまのうちだ。この桟橋をあがれば深川屋なんだから、一人で行けるだろう」
　南蛮太郎がやさしくいう。
「はい」
「我々はこんなかっこうをあまり人に見せないほうがいいんだ。ここから見ていてあげるから、早く深川屋へ駆けこむがいい」
「あの、いろいろお世話になりまして」
　さんざん恐ろしい目にあってきた身に、やさしい言葉は胸にしみて、なんとなく涙が出そうになる。
「礼なんかいらない。大作うじによろしくいってください。あの人は立派な男だ。あの人といっしょにしあわせになれるように、陰ながら祈っていてあげる」
「そんなことおっしゃられると、悲しくなります」
「そうか――。じゃ、余計なことはもうよそう。じゃまが入らないうちに、さあお立ちなさい」
　太郎はそういってから船房の戸をあけ、

「次郎さん、いいか」
と、艫へ聞いた。
「いまのうちだ。どこにも人目はない」
「さあ、美沙緒さん」
「はい。では、お言葉に甘えまして——」
　美沙緒は戸口までひざで進み、思いきって船房を出た。
「お嬢さん、あわてなくてもいいから、足もとに気をつけてな」
　そばから次郎が注意してくれる。
「ありがとうございます」
「ああ、あんた履き物がないんだな」
「いいえ、もう足袋はだしで歩いていたのですから」
　美沙緒はそのまま桟橋へ移って、
「みなさん、お世話になりました。御恩は一生忘れません」
　と、船頭たちのほうへ頭をさげる。
「どういたしやして」
　たくましい体軀の船頭二人も、あかるくおじぎをしていた。
　美沙緒は気を取りなおして、一気に桟橋をあがる。
　目の前に深川屋の見なれた掛け行燈に灯が入っている。
　もう一度船のほうを振りかえると、次郎が早く行けと手をふっている。
　それに会釈で答えて、往来を突っ切り、なつかしい深川屋の土間へわき目もふらず走りこんでいった。
「あっ、お嬢さん、——どうして、どうして今ごろ」
　炉端にいたおときがいきなり上がり框へ走り出てきた。
「おかみさん、あたくし——」
　そのおときの手につかまって、美沙緒は安心したのとなつかしさに、思わずわっと泣き声を立てていた。

「ああ、よかった。よくまあ無事で——」
　おときも急には口がきけないようだ。そこへへなへなと座って、ひしと美沙緒の肩を抱いている。

欲と欲

1

　今戸河岸では——。
　加役組の大東竜平たちが短筒の音を聞いて柏屋の寮へ踏んごんでいくのを見送り、大作は久蔵の待っている北隣の桟橋のほうへいそいだ。
「若だんな、ここだ」
　久蔵が猪牙の上へ立ちあがって手で合図をしている。
「おお、そこか」
「お嬢さんはどうしたんです」
「美沙緒はもうずっと前に柏屋が船でつれていったらしい」
「そいつは大変だ。一体、どのくらい前なんです」
「はっきりしたことはわからないが、わしとおまえがあの蔵の裏で出会ったころは、もう船に乗せられていたんじゃないかと思う」
「それじゃ追っても間にあわないかもしれねえ。行く先はわからねえんですか」
「たぶん、柏屋は堀留の家へつれていくんじゃないかと思うんだ。あいつはむだな金は一文だってつかいたくないやつだからな」
「堀留とわかっていりゃ、舟より陸を走ったほうが速い。どうしやす、若だんな」
「いや、やっぱり舟にしよう。おそい速いが問題じゃない。こうなれば天の助けを信じるほかはない。運があればきっと間にあう。わしはきっと間にあうと信じていたい」
　その時の大作はまったく悲痛な気持ちだった。つい少し前、おなじ柏屋の寮の中にいなが

ら、運がなくて会えなかった。しかし、縁がないのだとは思いたくない。縁さえあれば、こんなに努力しているのだから、必ず会える運はひらけると信じていたい。
「久蔵、とにかくやれるだけやってみてくれ」
「承知しやした。ひとつ精かぎりやっつけてみやしょう。このまんまじゃお嬢さんがあんまりかわいそうすぎまさあ」
久蔵は棹をとって、ぐいと一つ桟橋を突っぱる。猪牙はゆらりと岸を放れた。久蔵はたちまち艪を握って舳を川下へなおす。
「あれえ、若だんな、あの屋根は柏屋の桟橋へつける気じゃありやせんかね」
ちょうど川下からそっちへ舳を向けてぐんぐんこいでくる屋根船が一艘ある。船房の灯は消えているが、屋根船にしてはひどく船脚が速い。
「ありゃ若だんな、二人でこいでいるんでさ。ちょいと、だんな、船底へ寝ころんでいてください。少し様子を見やしょう」
「そうだな、よし」
大作はいわれるままに船底へ寝ころぶ。
久蔵はゆっくりと艪をこぎながら柏屋の桟橋の上手のほうへ寄っていく。
その時、柏屋の裏口から飛び出してきた平野屋の船頭が、そこにもやってある自分の屋根船へ行こうとして、こぎよせてくる屋根船に目をつけ、
「おうい、柏屋さんの船じゃないか」
と、向こうの船頭に声をかけた。
「おう、平野屋さんか。まだ御用人さんはいなさるかね」
「おう、いる。どうかしたんかね」
「うむ、大変なことになっちまってな」
寝ころんでいる大作は、思わず聞き耳を立てていた。

2

「久蔵、舟をもどしてくれ」

大作はそっといいつける。
「合点です」
久蔵は目立たないようにゆっくりと舳をまわして、猪牙をもとの桟橋のほうへもどす。
その間に柏屋の屋根船は自分の桟橋へついて、すぐに船房から惣兵衛が出てきたようだ。
「だんな、どうしたんです」
桟橋に待っていた平野屋の船頭竹次が、こんどは小声で聞いた。
「御用人さんはまだここにいるんだろう」
おまえなどに用はないといいたげな顔で、惣兵衛は竹次をかきのけるようにして船をおりようとする。
「ちょっとお待ちなすって、だんな」
「どうしたんだ」
「実は、いま南蛮組のやつらが二人押しこみやしてね、短筒をぶっ放したんでさ。その音を聞きつけて、お役見まわり中の加役大東さまが配下の与力同心をつれて飛びこんできたんです。御用人さまは顔をあわせちゃ具合いが悪いってんで、お浜姉御とそっと奥へかくれて、市川さんと岡田さんが応対してるんです。だんなもいま顔を出しちゃ具合いが悪いんじゃありやせんか」
「ふうむ、こっちへも南蛮組が出たのか」
「へえ、三千両持ってかれちまったようです」
「なにっ」
「いいえね、ほんの短い間だから外へ持ち出すはずはねえんですが、どこかへかくしちまったようなんです」
「まだ南蛮組は屋敷の中にいるのか」
「やつらは北隣の庭へ塀を乗りこえて逃げちまったようです」
「それで、市川さんはなんと加役にいって応対したんだ」
「この空き家をかくれ家にしているやつがあるらしいんで、柏屋さんからたのまれて張りこんでいたら、案の定、南蛮組がなにかかくしに入

ってきた。それでみんなで追いまわしているんだといっていたようです」
「加役はそれで納得したようか」
「一応納得したんでしょうね。いまいっしょになって、南蛮組が乗りこえた塀を調べているようです」
「そうか、よく知らせてくれた。しかし、長坂さんはまだこの中にかくれているにはいるんだろうな」
「そりゃいるだろうと思いやす。やつらが三千両をどこへかくしたか、そいつをさがさなくちゃなりやせんからね」
竹次はもっともらしく説明してから、
「だんなはいまごろどうしてここへ帰っておいでなすったんです」
と、不審そうに聞く。
「こっちへも南蛮組が船で押しょせて、肝心な玉を横どりしていきおった」
「へえ、お嬢さんをねえ」
「とにかく、わしは加役さんに会ってみよう」
「大丈夫ですか、だんな」
「わしは堅気の商人なんだよ。加役さんをこわがるいわれはないじゃないか」
惣兵衛はせせらわらうようにいって、与吉に草履を出させ、どんどん桟橋をあがっていく。

3

往来を突っ切って裏木戸へ手をかけようとした惣兵衛は、ふっと立ちどまって下手のほうを見た。
「やあ、柏屋じゃないか」
なるべく暗い塀ぎわのほうへ身をかくすようにして近づいてきたのは意外にも長坂重蔵で、うしろにお浜もついているようだ。
「どうしましたな、長坂さん」
「わしのほうより、柏屋こそどうしたんだ」
「どうもこうもありゃしません。肝心の玉を南蛮組に見事にさらわれましてな」

「なにっ」
重蔵は思わず目をみはったが、
「ここでは具合いが悪い。ちょっとこっちへきてくれ」
と、いそいで桟橋をおりていく。
竹次が心得て、自分の屋根船を桟橋へつける。
「加役が見まわりにきて、中へ入っているそうだね」
つづいて桟橋をおりながら柏屋が小声でいう。
「うむ、こっちへも南蛮組というやつが二人押しこんできてな、短筒をぶっ放したのが耳に入ったらしい」
重蔵は船に移って、艫に立ちながら答える。
その間にお浜も船に乗って、これはすぐ船房へ身をかくし、戸口から顔だけを出す。
「御用人さんのほうも三千両やられたそうだね」
「なあに、まだ寮の外へ持ち出すすきはないんだから、こっちはさがせば出てくるが、そっちはどこで玉をやられたんだね」
「ちょうど駒形へかかろうとするあたりで、やつらの屋根船がこっちの船端へぴたりと船をならべてきてね、わしが艫へ出ていくと、一人が短筒をつきつけ、近いうちにおまえの家へ一万両もらいに行くからと愚にもつかないことをいってな、つまりそれが手だったんだ。その間に、船房にいたやつが窓からこっちの玉をさらって逃げ出しおった」
「やつらはどっちへ逃げたんだね」
「川下へ逃げた。追いかけても短筒を持っていたんじゃあぶないし、だいいち向こうは船頭が二人がかりで、追いつけそうもない。それで、とにかく一応引きかえしてきたわけだ」
「柏屋さん、もう三千両出せば今夜中に玉を取りかえしてあげるけど、相談にのらないかえ」
船房のお浜がわらいながら口を出す。
「冗談じゃない、わしはさっきの三千両のうち

半分だけ値切ろうと思って引きかえしてきたくらいなんだ。その金も南蛮組にやられちまったんじゃ話にならない。もし、わしがその三千両をさがしあてたら、半分はかえしてもらいますからな。そのつもりでいてもらいましょう」
「おまえさんのいいそうなことだ。いいとも、半分はそっちへあげるから、精々さがしてごらんよ。その間にこっちは玉を取りかえして、別口のほうへ三千両で売ってしまうから、文句はないだろうね」
せせらわらうようにお浜がいう。
「おまえさん、玉がどこへつれていかれたか見当がついていなさるのか」
柏屋は思わず船のほうへ身を乗り出すようにする。

4

「そりゃ蛇(じゃ)の道はへびのたとえでね、南蛮組なんかにそうそうなめられちゃいないつもりなんです」
お浜はいかにも自信がありそうな口ぶりである。
「それが本当なら、どうだろうな、こっちの三千両はわしがさがし出すとして、半分はもらう千五百両に、もう千五百両足して三千両、それで手を打たないかね」
柏屋はまだ美沙緒に十分未練があるようだ。
「こっちの三千両をあたしのほうでさがしちまったらどうします」
「まあ、そうはいかないだろうね。加役さんのいる間は、お女中さんたちはこの寮へ入れないだろうからね」
柏屋はちゃんと長坂組の弱点をつかんでいるようだ。
「じゃ、だんなはこれから加役組の前へ顔を出す気なの」
「わしは堅気の商人だから、加役組だって町方だって平気なもんです」

「さすがは柏屋のだんなだわ。じゃ、ここの三千両はだんなにさがしてもらいましょう。ねえ、御用人さん」
「よかろう。では、こっちは玉のほうへかかることにしよう」
重蔵はお浜に調子をあわせておくほかはないようだ。
「竹、すぐに船を出しておくれ」
「へえ」
竹次は船のもやいを解こうとする。
「お女中さん、今夜のうちに玉はきっと取りもどせるんだね」
「御念にゃ及びません。そっちも今夜のうちにきっと三千両おさがしなさいまし」
「そりゃさがしますとも――。しかし、玉をほかへ売るようなことはないだろうね」
「さあねえ、そちらさんでこっちの弱みをつけこむんなら、こっちだってそう義理を立てることはありませんからね。おたがいに出たとこ勝負ということにしましょうよ」
「というと――」
「あたしのほうは、こっちの三千両さえあきらめてしまえば、ほかへ五千両で玉を売ったっていいわけだもの。ねえ、御用人さん」
「うむ。まあ、それはその時のこととして、我我はなるべく加役組と顔を合わせないほうがいいんだ。――竹、船を出してくれ」
重蔵は竹次にいいつけて、さっさと船房へ入ってしまう。
「お女中さん、こうなるとわしとそっちは仲間割れということになるんかね」
柏屋が念を押すように聞く。
「だんなのほうはそのほうが都合がいいんでしょう」
「竹、もう出してもいいよ」
惣兵衛はちょっと迷っているようである。
お浜はきっと柏屋のほうから待ったの声がかかると見ていた。

「へえ、出しやす」
竹次が棹を一つ突っ張って、船はゆらりと桟橋を離れたが、柏屋はまだ踏ん切りがつかないらしく、黙ってそこに突っ立っている。
竹次はやがて棹を艪にかえたようだ。

5

――欲ばりぎつねめ、おまえたちがどう力んでみたところで、南蛮組からあの娘が取りかえせるものか。
惣兵衛はふっとそんな気がしたので、わざとお浜たちの船を呼びとめなかった。
それに、たとえ長坂たちがあの娘を手に入れたとしても、五千両の買い手がそう右から左へうまく見つかるはずはない。結局はこっちへ頭をさげてくるよりしようがないのだ。
こっちは、寮の中にかくしてある三千両をさがして、これは自分のものにしてしまい、あの娘を売りにきたら、こんどは千五百両に値切って買ってやる。つまり、こっちは千五百両得をすることになるのだ。
――福の神はやっぱりわしについているんだ。
惣兵衛はにやりとほくそえみながら、お浜たちの船が川下へこぎ出したのを見とどけて、
「与吉、供をするんだ」
と、こっちの船に突っ立って見ている唖(おし)の与吉に手まねでいいつける。
与吉はうなずいて、すぐに船からおりてきた。
「七助、ことによるとだれかがこの船を貸せといってくるかもしれないが、その時はことわるんだ。いいだろうな」
「へえ、きっとことわりやす」
「それだけの骨折り賃はやるから、しばらく待っていてくれ」
惣兵衛はそういいおいて、往来へあがっていった。
その時、木戸から出てきたのは、同心風の若い男と岡田真兵衛である。
「やあ、柏屋じゃないか」
真兵衛はちょっと困ったような顔をする。打ち合わせがしてないのだから、へたなことを口走られるとぶちこわしだと心配したのだろう。
「岡田さん、御苦労さま。やっぱり南蛮組が出たそうですな」
「うむ、出た。幸い加役組の大東殿が短筒の音を聞かれてすぐに駆けつけてくれてな。いまその采配(さいはい)で隣の庭をさがしにかかるところだ」
「それはそれは――。お役目御苦労さまでございます」
柏屋は如才なく若い同心のほうへ頭をさげる。
「その方は堀留の柏屋惣兵衛か」
「はい」
「わしは大東組配下の若林良平だ。奥にお組頭がおられるから、さっそくあいさつに出るがよい」
「はい、では、そうさせていただきます」
惣兵衛はおじぎをして、木戸から中へ入った。
――とにかく、加役組をうまく追っ払わぬことには、三千両のほうへかかれない。
そんなことを考えながら、惣兵衛は外庭の林の中を早足に通りぬけ、内木戸から例の書院の東の庭へ進んでいく。
その書院の廊下へ腰かけて庭に立っている市川佐二郎となにか話している組頭は思ったよりずっと年の若い若僧だったので、惣兵衛はなあんだと思った。

6

「やあ、柏屋か」
足音に振りかえった市川は、岡田とおなじようにちょっと困った顔になりながら、
「柏屋、この方は加役の大東さまでな」
と、あわてて説明しようとする。
「市川さん、いまそこで岡田さんにお目にかか

りましてな、お話はあらましうかがってきました」

惣兵衛は安心しろと目でいってから、

「大東さま、御出役御苦労さまでございます。手前は日本橋堀留の柏屋惣兵衛と申します」

と、丁重におじぎをした。

「柏屋か――。名前は聞いている。ここはおまえの寮だそうだな」

大東竜平は鷹揚に声をかける。

「はい」

「どうして空き家にしておくのだ。もったいないではないか」

「これは抵当流れでございましてな、手前は別に使う気はありませんので、留守番もおきません。留守番をおくと、それだけ物入りでございますからな」

「南蛮組はそれを知っていて、ここを利用しているんだそうだな」

「はい、そういううわさを耳にしましたんで、今夜は市川さんの組をお願いして見張っていてみてもらいました。やっぱり、南蛮組は出ましたそうでございますな」

「うむ、二人出た。つかまえてやろうとすると、いきなり短筒をぶっ放して、北隣の庭へ逃げこんでしまったんだ」

市川がもっともらしくそばから説明する。

「北隣へはいま表と裏から組の者が浪人たちといっしょに調べに行っている。これは京橋のほうの唐物屋で丸屋の寮なんだそうだ。二人ともまもなくつかまるだろう」

竜平は至極簡単そうにいう。

「拙者はちょっと様子を見てきます」

市川は忠義顔をして、その実、加役の前は煙ったいので、さっさと北の庭のほうへ去っていく。

「どうでしょうな、大東さま、たとえばここに南蛮組の財宝なり金なりがかくしてあったとして、それが見つかった場合、ここを使った場所代として半分ぐらいは手前がもらってもいいものでしょうかな」

二人きりになると、惣兵衛がぬけぬけとした顔つきでそんな欲の深いことをいい出す。

「さあ、本来ならそうはいくまい。これは公儀の手で盗まれた者にかえしてやる。持ち主がわからなければ、公儀であずかるということになるんだ」

「なるほど、それでは骨を折ってさがしてもつまりませんな」

「惣兵衛、まあ掛けろ。少し話してみたいことがある」

竜平は微笑しながら自分のわきの廊下を指さしてみせる。

「では、お言葉に甘えまして」

惣兵衛は少し離れたところへ遠慮なく腰をおろす。

啞の与吉は北の袖垣のところへしゃがみこんで、じっとあたりを見張っているようだ。

「話と申しますと、どんなことでしょうな」

なにげなく柏屋は若い竜平の顔を見ながらうながす。

7

「柏屋、世間には魚心あれば水心ということがあるな。知っているだろう」

竜平は意味ありげに切り出す。

「それはもうよく承知しております」

「加役にあげられることはな、お先手組としては名誉なことなのだ。しかし、それだけに、組の与力十人、同心五十人、その他配下の小者たちを十分に働かせるには、役料だけでは足りない。相当の軍資金が必要なのだ」

「ごもっとも――」

きたなと惣兵衛は思いながら、大きくうなずいてみせる。

「どうだ、柏屋、三千両ほど大東組へ貸してくれぬか。そのかわり、この寮から南蛮組のかくした財宝が出た場合、こっちも半分は目をつぶ

ることにする。手を打ってみる気はないか」
「失礼ですが、お若いのに大東さまはなかなか切れものでいられますな。よろしゅうございます、それなら手前も正直に申し上げましょう。この寮の中に、はたして南蛮組が財宝をかくしているかどうかは、さがしてみてからでないとわかりません。しかし、手前のほうは現物で三千両御用金をだすのですからな、そこを含んでいただいて、もう一つお願いがあるんでございますがな」
　柏屋の顔にずるそうな微笑がうかぶ。
「よし、三千両出してくれるなら相談にのろう。話してみろ」
「実は、大東さま、手前は今夜三千両の支度金を出しまして、あるお屋敷のお嬢さまを花嫁にもらいうけました。それを船にお乗せしてもどる途中、駒形でこれも南蛮組のやつら二人におそわれましてな、やっぱり短筒をつきつけられ、花嫁を横取りされてしまいました。その折、南蛮組の一人が、近いうちにおまえのところへ一万両もらいに行くから、そのつもりでいろというのです。これがどう考えましても冗談だと思えません。恐れ入りますが、今夜から五日と日を切って、堀留の手前の家を特にまもっていただくのが一つ。もう一つは、なんとかしてその花嫁を取りかえしていただく、この二つをお願いしたいのですが、どんなものでございましょう」
「その花嫁はどこの娘だね」
　竜平はじっと柏屋の顔を見すえながら聞きかえす。
「神保町に三島弥十郎さまという千石取りのお旗本がございますな。そこのお妹御で美沙緒さまというお嬢さんでございます」
「なんだ、三島家の美沙緒か」
「御存じでございますか」
「わしの屋敷の近所だから、美沙緒さんならよく知っている。しかし、柏屋は一体、今夜どこからその美沙緒さんを船へ乗せたんだ。だいぶ神保町とは方角がちがうじゃないか」
「それにはまたちょいとした子細がありましてな、美沙緒さんが腰元のお浜というのをつれて、ゆうべどこかへおまいりに出たところを、おなじ神保町のお旗本で鈴村大作というやくざっけのある男にうまく誘拐(ゆうかい)され、ゆうべは柳橋の深川屋という船宿に監禁されまして、それが今日浅草の観音さまへ二人きたところをお浜が見つけて、すきを見てやっと取りかえして、今戸橋のそばの平野屋という船宿へかくれていたんだそうです」
　惣兵衛はまことしやかにうそをならべる。

8

　柏屋は多少話をこしらえているなと竜平にもすぐわかった。
　三島弥十郎はあまり才能もないのに長崎奉行をねらっている。三千両はその運動資金で、美貌(びぼう)の美沙緒は兄の野心の犠牲にされたのだ。美沙緒はそれをきらって、昨日腰元をつれて家出をしたのだろう。
　大作はどっちかといえばばかっ正直なたちで、女を誘拐するどころか、くどきおとすだけの度胸も才気もない。だから、美沙緒を誘拐したのではなくて、家出はしたものの夜の物騒な町で行くところもなく困っている美沙緒と出会って、彼の行きつけの船宿柳橋の深川屋へつれていったのだろう。
　竜平は一度それとなく弥十郎に美沙緒を妻に申しうけたいと持ちかけて、あれには親どものきめたいいなずけがあるからと、やわらかくことわられている。
　――もし、大作のかわりに、ゆうべおれが美沙緒に会っていればなあ。
　と、その点、竜平はひどく惜しい気がする。
　三島家の用人長坂重蔵は渡り用人で、悪才にたけたほうでは定評のあるやつだ。

美沙緒がつれて出た腰元のお浜というのは、たぶんその長坂の息のかかっているやつなのだろう。だから、ひそかに長坂と連絡をとって、今日になって美沙緒を大作の手から奪いかえした。

　さっき大作がこの辺をうろついているところから見て、長坂はここへ美沙緒をつれこみ、夜になるのを待って柏屋にわたしたということになるのだろう。

　——よし、うまくいけば三千両柏屋に出させた上に美沙緒までおれの手に入る。

　竜平はそう考えたので、一応柏屋のこしらえ話をうのみにしておくことにした。

「柏屋、花嫁のほうの話にはちょいと無理があるようにも思えるが、魚心あれば水心だ、両方ともおれが引きうける。そのかわり、おれがたのんだほうの三千両はいつわたしてくれるね」

「さようですな、花嫁が手に入ってからと申しあげたいところですが、相手が南蛮組ではそう簡単にもいかないでしょうからな。よろしゅうございます、三千両は明日の夜五ツ（八時）におわたしいたしましょう。あまり世間に目立たないほうが、大東さまのほうでも都合がよろしいでしょうからな」

　惣兵衛は声をひそめていう。

「よかろう、それで話はきまった。店の警固のほうは、今夜はとりあえずおまえが帰るとき配下の者をつけてやるが、これからすぐ店へ帰るかね」

「いいえ、せっかくまいったのですから、せめて隣の様子がわかるまでもう少し待ってみることにしましょう」

「とかなんとかいって、実は南蛮組のかくしておいた財宝をさがしてみようという腹じゃないのか。それならおれに遠慮はいらないぜ」

　竜平は快適にわらってみせる。

「それがそう簡単にさがし出せるようならしめたものなんですがなあ」

　惣兵衛は苦わらいをしながら、正直にあたりを見まわしている。

9

　——そのころ。

　大作をのせた久蔵の猪牙は、平野屋の屋根船をはるかうしろからつけて、向島（むこうじま）の土手寄りにこぎ下っていた。

　大作はさっきから船底へ仰向けに寝ころんだまま、きれいな星空を見あげている。

「若だんな、そんなところで眠っちまうと風邪をひきやすぜ」

　久蔵が艪をあやつりながら心配して声をかける。

「心配するな。おれはなあ、久兄い、腹がすいて眠るどころの話じゃないんだ」

「そりゃ、若だんな、あっしだっておんなじでさ。まだ晩飯を食ってるひまがなかったんでね」

「そうか。おれのほうは朝飯を食ったきりなんだ」

「へええ。じゃ、若だんなは昼飯前からあの蔵の中へとじこめられていたんかね」

「残念ながら、まあそういうことになる」

「けど、それから日の暮れるまで、よく辛抱していたもんですねえ。気の小さいやつならたいていげっそりして半病人になっていまさあ」

「そうそう、久兄いはどうしてあの蔵がわかったんだ」

　大作はそれをまだ聞いている暇がなかったのだ。

「あっしはねえ、今朝この猪牙ですぐお嬢さんの屋根船を追ったんでさ。もしその船が見つからなけりゃ、申し訳なくて兄貴の家へは二度とけえれやせんからね。けど、運がよかったんですね。まだ朝のうちで屋根船は一艘も大川にゃ出ていねえ。ただお浜の船だけが川上へこいでいく。てっきりこいつだと見当をつけて、ゆっくりと後をつけ出したんですがね。お嬢さんは

その船の中でだいぶお浜に痛めつけられたらしい、かわいそうに、船が平野屋の桟橋へついてお浜のあとからあがっていくのを見たら、髪も着物もさんざんにくずれて真っ青な顔になっていやしたからね」
「そうか——。お浜には黒ぎつねがついているのだそうだから、そのくらいのことはやりかねないだろう」
「後で近所の話を聞いてみやすとね、あの女は聖天裏の地獄長屋にすんでいる悪の女親分で、市川浪人や岡田浪人でさえ頭があがらねえすごい女なんだそうで、あっしも驚いちまった。まもなくそのお浜がどこかへ出かけたんで、よし、この間にお嬢さんを助け出そうと思ったんだが、あの平野屋って船宿が実はお浜の巣なんだそうでしてね。いつも目つきの鋭いやつが二、三人はごろごろしていて、近づくこともできねえ。そのうちに日が暮れて、お嬢さんはさっきの柏屋の寮へつれていかれた、あっしもその後を追って、隣屋敷の庭からしのびこんだってことになるんです」
「そうか、兄いにもずいぶん苦労をかけたことになるんだな」
「おや、若だんな、お浜の船は平野屋の桟橋へつきやしたぜ」
「まあ、そんなところだろう。当てもなく南蛮組の船を追ったところでしようがないし、だいいち、今戸の寮にはまだ三千両かくしてある。柏屋にそれをさがし出されちゃ悔しいから、ひとまず平野屋で善後策を相談する気なんだろう」
大作ははじめからそうにらんでいたのである。

10

久蔵は長坂とお浜が船からあがって平野屋へ入っていくのを見てから、その沖をさっさとこぎ抜けた。

「千松のだんな、やっぱり一度柳橋へ帰ってみやすか」
「うむ、そうしてみてくれ」
大作はあいかわらず星空を見あげたまま答える。
もし美沙緒が本当につり浪人の南蛮太郎に助けられたのなら、ことによると深川屋へ送っていってくれたのではないかという一縷の望みがたのみの綱なのだ。
「その前に、どこかへ舟をつけて、夜鷹そばでもさがしやすか」
「いや、まっすぐかえることにしよう。久兄いも千松だろうが、まあ我慢してくれ」
「なあに、あっしはこれでも時々千松にゃなれていやすから平気ですがね」
「ふうむ、そりゃまたどういうわけなんだ」
「賭場ですってんてんになりゃ、家へ駆けこむまではいやでも千松でさ」
久蔵は艪をこぎつづけながら苦わらいをしている。
「なるほど、飯よりさいころが好きというやつか」
「それが病で、まだかかあさえ持てねえ。——はあてね、若だんな、ちょいと起きておくんなさい」
「どうかしたか」
「川下から屋根が一艘こいでくるんでさ。灯を消している屋根なんだ」
「どれ——」
大作はむくりと起きあがる。
こっちの猪牙はちょうど吾妻橋の下をくぐりぬけたところで、なるほど駒形のほうから灯を消した屋根船がこぎのぼってくる。
柏屋の話では、美沙緒は屋根船の窓から窓へ移されたということだから、ひょっとするとあの屋根船は南蛮組の船かもしれない。
月はもうほとんど西へ傾いて、西河岸の家並みの影がだいぶ川のほうへのびていた。

「久蔵、かまわぬからなるべく向こうの近くをこぎぬけるようにしてくれ」
「合点だ。けど、若だんな、南蛮組は短筒を持っているっていいやすぜ。大丈夫ですか」
「心配するな、こっちは別にけんかをする気はないんだ」
「あれえ、向こうは船脚が速いと思ったら、二人でこいでやがる」
見ていると、その船脚がこっちが近づいていくと急におそくなったようだ。
「おうい、その猪牙のだんなは鈴村大作さんかね」
やがて、船頭の一人が艪を離れて、こっちへ声をかけてきた。
「さよう、わしはその鈴村大作だが」
大作はそう答えながら立ちあがる。
「そうかね。昼間のつり浪人からのことづけなんだが、お嬢さんはたしかに深川屋へ送りとどけたから、早く帰ってあげるようにってことだ」
「ありがとう。心から感謝すると伝えてくれ」
予期していたことではあるが、大作はかっと歓喜が胸いっぱいにあふれてきて、思わず涙があふれてきた。空腹で、いつもの意地が多少弱っていたのかもしれない。

11

つり浪人の南蛮太郎はたしかに暗い船房の中にいるにちがいないと大作ははじめから見ていたが、向こうが黙っているので、こっちも声をかけるのは遠慮することにした。
その間に船はすれちがって、向こうはこぎ手二人でぐんぐん川上へこぎのぼっていく。
「若だんな、南蛮組ですねえ」
こっちも力いっぱいこぎ出した久蔵が、ちらっとうしろを振りかえりながら小声でいった。
「うむ」
大作は張りつめていた気がゆるんだようにぐったりとすわりこみながら答える。

「あの船頭二人も仲間なのかな、目の色がただじゃなかった」
「無論そうだろう。こんな仕事に普通の船頭は使わないだろうからな」
「すると、あの連中はこれから柏屋の寮へ押しかけようってんですぜ。これから引っかえすと、おもしろい芝居が見られるんだろうけどなあ」
なんとなく目を光らせている久蔵だ。
「おまえも荒っぽい仕事があんまりきらいなほうじゃなさそうだな」
大作は思わず苦わらいをさせられる。
「別にそんなわけじゃありやせんがね」
久蔵ははっと気がついたように照れた顔になりながら、
「けど、若だんな、お嬢さんはようござんしたねえ」
と、これは本音のようである。
「うむ、やっぱり天運があったんだ」
「そりゃまあ天運といやあ天運でしょうがね。南蛮組は今夜二手に分かれて、一組みは寮のほうへ若だんなを助けに押しこんでいる、一組みはこっちへきてお嬢さんを助けた、あっしは天運だけじゃねえと思うな」
久蔵は不服そうな顔をする。
「無論、わしは南蛮組に感謝はしているんだ」
大作にも今夜の南蛮組のやってくれたことは好意のほかになんにもない、そうは思うが、一方で、ともかくも柏屋の三千両をねらっている、その行為が悲しかった。
恩義は恩義として、自分の立場はどうしても南蛮組と相いれないものがある。つり浪人もそれを承知しているから、いまわざと顔を出さなかったのだろう。
――いまのところ、おれにはどうしても南蛮組は憎めない。
それが大作の実感なのだ。しかし、それをうっかり人に口外してはならぬ立場にいるだけ、大作はつらいのである。

「久兄い、なんだか急に腹がすいてきたなあ」
大作は気をまぎらすようにいって、ごろりと船底へ仰向けに寝ころぶ。目にしみるようなきれいな星空がそこにある。
――ありがとう、つり浪人うじ。
昼間見た深編み笠姿の南蛮太郎をはっきりとまぶたにおもいうかべて、大作はもう一度心から感謝する。
――くそっ、柏屋や長坂重蔵はあの男よりもっと非情な悪党じゃないか。
むらむらっと怒りと涙がいっしょにこみあげてきて、それとは別に、おれは美沙緒といっしょにあのきれいな星の世界へのがれたい、ふっとそんな気もしてくる大作だった。

12

「若だんな、つきやしたぜ」
きれいな星空の中でうつらうつらと眠るともなく眠っていた大作は、はっと我にかえりながらむっくり起きあがった。
「すまん、久蔵。わしは眠ってしまったようだなあ」
「なあに、ようござんすよ。あっしはお嬢さんの寝言なんか聞かなかったことにしておきやさあ」
久蔵はわらいながら舟を桟橋の杭にもやっている。
「そうか、寝言までいったか。すまんなあ」
いささか照れながら立ちあがると、月はすでに落ちて、暗い往来を越した向こうになつかしい深川屋の掛け行燈が黄ばんだ光をやみにぼうっとにじませている。
「若だんな、早くあがっていっておやんなせえ。いまさらなにも照れることはねえでしょう」
「そうか――。そうだな」
大作は舟からおりて、しゃっきりと桟橋をあがっていった。ひと眠りしたせいか、頭は妙にさえかえっている。

――こんどこそ美沙緒に会える。
それは大きなよろこびではあったが、そうはっきりとわかっている今は、感情が表面に出て波立つようなことはなかった。
往来を突っ切って深川屋の前に立ち、油障子をあけて土間へ入っていく。
「まあ、若だんな――」
炉端で向かいあっていた島七とおときがいっしょにこっちを見て、いきなりおときが立ってきた。
「心配をかけたなあ、おとき」
「ああ、よかった。本当にどうなすったかと思って、今まで気が気じゃありませんでした」
「あのひとは帰ってきているだろう」
そこにぬいである女のどろ足袋を目ざとく見て、大作が安心しながら聞く。
「ええ、さっき――」
おときの目がうるんでいる。
そこへ久蔵が艪をかついで入ってきた。
「久さん、おまえ――」
「久兄いはずっとわしといっしょでねえ、とんだ苦労をかけてしまった」
大作はその間にどろ足袋をぬいで美沙緒のとならべて置き、わらいながら店へあがる。
「ねえさん、どうもすんません」
久蔵は口で兄嫁にあやまりながら、羽目板へ艪を立てかけていた。
「でも、よかった、若だんなといっしょになれて――」
おときはほっとしたようである。
「島七、とんだ心配をかけてすまなかったな」
大作は炉端へ座って、あらためて島七にあいさつをする。
「ようござんしたねえ、若だんな。今朝はなんとも申し訳のねえこっちの油断で、なんだっておめえつまらねえ時に家をあけたんだ、髪結いなんかいつでも行けるじゃねえかっておときをしかってみたってもう追っつかねえ。さっきお

嬢さんが足袋はだしで駆けこんでくるまでは、本当のところ、あっしも生きた空はありやせんでした」
　島七は渋い顔に苦わらいをうかべて、さすがにほっとしたようだ。

13

「若だんな、お嬢さんは大変な目にあわされたんですって。ここへ駆けこんできた時は、おかわいそうに、まるで半病人なんです。すぐに二階へおねかせして、さっき振り出しをあげておきましたから、とにかく早く一度お顔を見せておあげなさいまし」
　そばからおときが気をきかせていってくれる。
「そうか、じゃそうしよう」
「それがようござんす。お嬢さんは若だんなのことしか考えちゃいなさらねえようだ」
　島七も口をそえてくれるので、大作は立って二階へあがっていった。
　入り口の戸をあけると、なんとなく煎じ薬の香ばしいにおいが鼻について、美沙緒は昨夜とおなじところに向こうむきになって、こっちへ房々とした黒髪を見せている。
　——眠っているらしいな。
　そっとまくらもとへ寄って座ると、行燈を背にした薄暗い光の中になつかしい横顔が軽い寝息を立ててぐっすりと寝入っている。ひどくやつれた顔のようだ。
「美沙緒——」
　もう大丈夫だよ、二度とこんな目にはあわせないからな、と心の中でいいながら、やっぱり目がうるんできた。
　いや、それよりそっと抱きしめてやりたいような激しい愛情に駆られてきたが、それだけはじっとおさえつけた。せっかく安心して眠っているものを、いま起こすのは本意ないわざと気がついたからだ。

　大作はしばらくそのまま美沙緒のやすらかな寝顔を目に焼きつけていた。
　——しかし、このひとには甲府にいいなずけがいるんだ。
　ふっと水のような哀愁が愛情の胸をひたしてくる。
　どんなに自分が美沙緒を愛していても、結局、美沙緒はそのいいなずけの男にわたしてやらなければならないのだ。
「貴公はばかっ正直すぎる。好きなものなら、遠慮なく女房にしたらいいんだ」
　つり浪人はさばさばとそんなことをいってわらっていた。しかも、あの男は、人の女房でも娘でも、向こうからほれてくるものは決してこばまない主義なんだと、平気で放言していた。
　——美沙緒にそれだけの強さがあるだろうか。
　いや、たとえ美沙緒にその強さがあっても、わしは一家一門の名誉にかけて、そこまでずぶとい根性にはなれないかもしれぬ。
　しかし、甲府へその男をたずねていって、長坂のいうように、その男が行方知れずになっていれば、話はまた別である。
　そうだ、明日、美沙緒をつれて甲府へ立とう。後のことはそれからでいい。一切を白紙にして、とにかく甲府まで行くことだ。
「それでいいだろう、美沙緒」
　美沙緒にというより、大作はむしろ自分の胸にいってきかせて、そっとまくらもとを立ちあがった。
　なにか胸あたたまる気持ちである。

14

　店へおりてくると、久蔵から話を聞いたらしく、膳の支度がしてあって、一本つけてもらった久蔵はもう顔を真っ赤にしていた。
「お嬢さんはどうでした」
　炉端に島七と向かいあっていたおときがさっ

そく聞く。
「ぐっすり眠っているんで、起こさなかった」
「よっぽど疲れていなさるんですね、いじらしい」
「ここへきて安心したんだろう。——この膳をもらってもいいのか」
「さあ、どうぞ——。ほんの有りあわせなもんですけれど、一本おつけしましょうね」
おときは気さくに立とうとする。
「いや、酒はやめておこう。わしのほうはすきっ腹すぎるんだ」
「そうですか——。本当にすぐ御飯でいいんですか」
「うむ、すぐ飯でいい」
「若だんな、昼飯ぬきで晩まで蔵の中にとじこめられていたんですってね。いま久蔵から聞いていたんだが」
島七がまゆをひそめながらいう。
「今日はまったくひどい目にあった」
大作はおときが給仕をしてくれる飯茶わんをうけとって、ゆっくりと飯をよくかみながら、飯はありがたいなあと思った。
「久蔵、よくおぼえときな、あんまり腹のすいた時、がつがつ飯をかっこむと腹痛をおこす。若だんなのように、よくかんでたべるのが秘伝なんだ」
「そういうもんかなあ。けど、おれなんかはそうはいかないかもしれないな。ふだんからがっついているんでねえ。——ねえさん、あっしももう飯にしやす」
久蔵は一本の酒がかなりきいたらしく、もうすっかり目がとろんとしている。
「久兄いにも、今日はずいぶん苦労をかけてしまったな。蔵の裏でぱったり顔があった時は、おたがいに手を取りあったまましばらく口がきけなかった」
「夢、夢のようですね、若だんな、こうして無事に家へ帰ってこられるなんて」

「本当だ。しかも、美沙緒まで無事に帰ってきているんだからな」
「冗談でしょう、若だんな。お嬢さんが無事でなけりゃ、二人ともまだこうしておまんまなんか食っちゃいられやせんや」
久蔵はわらいながら箸の手でひょっと目をこすっている。
「あたしもねえ、お嬢さんが足袋はだしで駆けこんできて、おかみさんて泣きながらすがりついてきなすった時は、うれしくって涙ばかりこぼれてしまってねえ」
おときがそばからいって鼻をすすりあげる。
「こいつはおかしいや。今になって涙がこぼれやがる」
「泣き上戸か、久蔵」
島七も目をしばたたきながら、
「けど、若だんな、お嬢さんを助けてくれた南蛮太郎ってのは何者なんでしょうね」
と、不審そうな顔を向ける。

15

「実はな、その南蛮太郎という男に、わしは今日のひるごろ今戸河岸で一度出会っているんだ」
大作の顔にちらっとかげりが出て言葉がとぎれたが、すぐにあかるい顔になって、
「あれは今の世の中になにか不満のある男らしい。深編み笠をかぶって河岸でつりをしていたところへ行きあわせて、しばらく話しこんでいたが、とうとう顔は見ずじまいだった」
と、軽く飯を終わって箸をおく。
「おや、もうおしまいですか、若だんな」
おときが意外そうに聞く。
「ごちそうさま——。今夜はこれくらいにしておこう」
大作は微笑しながら、茶茶わんを取りあげる。
「ねえ、若だんな、その南蛮さんの不服ってのはどんなことなんでしょうね」

久蔵が目を光らせながら話のつづきをうながす。

「つまり、柏屋だの、長坂重蔵だの、それを取りまく有象無象、みんな世間なみに善人面をしていて、かげで押しこみ強盗よりもっとたちの悪いことをやっている。たとえば、美沙緒の兄の三島弥十郎さんにしたって、自分の出世のためには、なんとか手前勝手な理屈をつけて、妹を地獄へおとそうとしているんだ。そういう人たちは無論憎いが、それを許しておく世間もどこか狂っているんだ。正しいことがあながち正しいで通る世の中じゃない。そこに不満があるんだな。早い話が、長坂は主家の妹を三千両で柏屋へ売った。柏屋は今夜三千両で美沙緒を買った。どっちも正しいことだとはいえない。だから、南蛮太郎は三千両も美沙緒も自分の力で横取りしてやろうと考えて、それを実行したことになるんだ」

「おもしろいねえ、若だんな。やることは命がけだが、おれは太郎さんのほうへ味方するな」

「しかしなあ、久兄い、人のものを取ればやっぱりどろぼうの罪に問われることになるんだ」

「そいつはまあしようがねえが、けど、義賊だからね、そういうのは」

「久さん、おまえさんそんな乗り気な顔をして、まさか義賊をやるつもりじゃないでしょうね。そんなことをしたら、うちの人の首へまでなわがかかるんですよ」

おときが真剣な顔になってたしなめる。

「心配するな、おとき。久蔵にそんな肝っ玉があるもんか」

島七は苦わらいをしている。

「けどな、兄貴、おれは時々そういう肝っ玉がほしいなあと考える時はあるんだ。柏屋だの、長坂だの、お浜だの、さっきの加役の若僧、小生意気な顔をしやがって。ねえ、若だんな、おれだって世の中に不服ってやつがいくらだってありやすぜ。考えてみりゃ不服だらけだ。くそおもしろくもねえ」

久蔵が妙な啖呵を切り出した時、がらりと表の油障子があいた。障子をあけたのは若い同心で、その門口からぬっと土間へ入ってきたのは加役の大東竜平である。

あっと久蔵は思わずしりごみをする。

16

竜平は、柏屋惣兵衛とある程度の秘密協定ができたので、後見役伊藤権太夫といっしょに堀留へ帰る柏屋の船へ乗りこんでそこまで大川を下ってきた。

今戸の丸屋の寮へ逃げこんだ南蛮組の二人はとうとうつかまらずじまいだったが、竜平は柏屋から美沙緒の話をいろいろ聞いているうちに、結局美沙緒は深川屋へ帰っているんじゃないか、ふっとそんな気がしてきたのだ。

そこで、柏屋にはほかに役目もあるからと柳橋へ船をつけさせ、同心若林良平をつれて自分だけ船をあがり、柏屋には権太夫をつけてそのまま堀留まで送らせたのである。

深川屋の土間へ入った竜平は、目ざとくそこに大作のきているのを見て、しめた、おれの勘は当たったらしいと見て取った。

「これ、当家の亭主はいるか」

ずるい竜平は、わざと大作を無視しておときのほうへ聞く。

「へえ、あっしがここの亭主島七でござんす」

島七がすぐ立っていってあいさつする。

「わしは加役大東竜平だ」

「お見まわり御苦労さまに存じやす」

「つかぬことを聞くが、昨夜当家へ神保町の旗本三島家の妹御美沙緒どのが泊まったそうだな」

「へえ、あいにくあっしは稼業で留守にしていやしたが、日ごろごひいきをいただいている家の若だんながおそくなってどこぞのお嬢さんをおつれになり、夜明けまで二階でお話しになっ

ていたそうでござんす」
　船宿は人を泊められないことになっているので、さすがに島七は抜け目のない返事をする。
「そうか――。美沙緒どのは今夜もここへ帰っているそうだな」
「いいえ、今朝御家来衆がむかえにきて船でお帰りになりましたそうで、それっきりでござんす」
「島七、わしは役目でまいっているのだぞ。たしかな筋から美沙緒どのがここへ入ったと耳にしているんだ。正直に申さぬにおいては家さがしをするが、それでもよいか」
　竜平は十分すごみをきかせてずばりと出る。
　島七はちょっと返事に詰まったようだ。
「竜平、加役は家出娘の世話までやかなくちゃならないのか。この物騒な御時勢に、のんきなお役が加わったもんだな」
　大作がくるりとそっちを向いてわらいながら声をかける。
「黙れっ、大作。わしは役目できているんだぞ。その役目にない者の余計な口出しは許さん」
　竜平は役目を嵩にきて一本きめつけようとする。
「おかしなことをいうぜ。おれはその役目のことを聞いているんだ。加役の役目はこれまでは火付け盗賊改めの名称どおり、御府内の火付け、盗賊、博徒を取り締まるのが任務だったはずだな。いつから家出娘まで取り締まるようになったんだね」
　大作はなじるというより友達だから心やすく聞くんだという口ぶりである。

17

「大作、冷や飯食いの身分にしちゃよくお役のことを勉強しているようだな。感心したぜ」
　竜平はひやかすようににやりとわらいながら、
「おぬしも知ってのとおり、おれの屋敷は三島

家と筋向かいになっているんだ。弥十郎どのとは日ごろ懇意にしているんで、妹の美沙緒がどういう不心得をおこしたか昨夜腰元をつれて家出をした、ほかの者にはいえない家の恥辱だが、竜平さんなにぶんたのむといわれてみると、おれは人情家のほうなんでな、それはお役以外のことだからとはいいかねるんだ。わかったろう、大作」
　これでも文句があるかといわぬばかりの憎い秀才面をする。
「竜平、堀留の柏屋惣兵衛になにかたのまれたな」
　大作は平気な顔でわらっている。
「なにっ」
　ちょっとけわしい目になる竜平だ。
「三島さんは三千両の支度金をとって美沙緒さんを柏屋のめかけに売ろうとしたんだ。中に立って女衒の役をつとめたのは悪用人長坂某というやつだ。三千両で人の娘を買う柏屋も柏屋だが、あいつは札つきの金貸しだからそんなことは平気なんだろう。これは近隣のよしみとして忠告するんだが、李下の冠というたとえもある。あんまり柏屋と近しくなるのは考え物だぜ」
「大作、たとえどんな事情にもせよ、家出娘をかばって恩に着せ、うまい汁を吸えば、女たらし、かどわかしの罪はまぬがれない。瓜田の沓というたとえがあるから、おぬしもあまり美沙緒さんの世話などやかないほうが身のためだ。近隣のよしみとして忠告しておく」
　竜平も負けてはいない。
「ありがとう、十分注意はすることにしよう」
「これは役目で聞くんだが、大作、おぬしは今夜まさか美沙緒さんをここへつれこんではいないだろうな」
「うむ、つれこんだおぼえはない」
「家さがししてもいいのか、大作」
「もし美沙緒さんがいたら、三島家へつれていくのかね」

「そんな当然なことを聞くもんじゃない」
「せっかく貴公が助けてつれていった美沙緒さんが、あらためて柏屋へ売られていったら、その責任をどうする気だ、竜平」
「よく余計な口をききたがる男だ。竜平が美沙緒さんをあずかって帰るからには、そんなまねをさせるはずはないじゃないか」
「それを聞いて安心した。美沙緒さんは南蛮組につれていかれたとわしは柏屋の口から聞いている。もし運よくここへ帰ってくるようだったら、貴公の気持ちを美沙緒さんにつたえておく」
「ぬけぬけとよくそんな白々しいことが口にできる男だ。大作、おぬしには南蛮組の一味ではないかという嫌疑がかかっているんだ。念のために耳に入れておくから、一門のことを考えたら早く善処するがいい。——深川屋、じゃまをしたな」
すごい冷笑をうかべた竜平は、若い同心をうながして、さっと土間から出ていった。

18

「いやな野郎ですね、若だんな。さっき今戸で出会った時も高慢ぶった野郎だと思ったが、まったく癪にさわるやつってありゃしねえ」
竜平が出ていくとすぐ、久蔵は口をとがらせて悪態をつく。
「まだ聞こえるよ、久さん」
おときが小声でたしなめる。
「若だんな、加役はあの方が二階にいるのをどうやら勘づいているようですぜ」
島七はそれどころではないという顔つきだ。
「うむ、そうらしい。どうしても家さがしをするというようなら、腕力に出るほかはないとわしは覚悟していた」
大作は苦わらいをしながら、
「島七、わしたちは明日の朝、七ツ（四時）立ちにしよう」
と、きっぱりいい出す。

「若だんな、あっしたちのことを心配してのことなら、それにゃ及びやせんぜ。この深川屋は先代さまに買っていただいたんだ。御自分の家だと思って、遠慮なく使ってもらいやす」
「ありがとう、島七。——しかし、そうじゃないんだ。わしは美沙緒を一度、どうしても甲府までつれていかなくちゃならんことになっている」
「その話はおときからも聞いていやす」
「それになあ、わしは北の伯父貴からそのための路銀と鑑札まで今朝とどけてもらっているんだ」
「遠山さまからですか、若だんな」
「うむ」
「路銀はわかりやすが、鑑札ってえとなんの鑑札なんです」
「道中でいちばん困るのは悪役人、悪目明かしだ。悪党退治は刀でもすむが、おかみの十手はそういうわけにいかぬ。つまり、十手よけのおまもりをこしらえてくれたんだ」
「なあるほど——。さすがに金さん、といっちゃ失礼ですが、北の親玉はよく気のつくお方でござんすねえ」
島七はいまさらのように感心している。
「どうしても甲府へおいでになるんですか、若だんな」
おときが浮かない顔をして聞く。
「うむ、これも浮き世の義理というやつだからな」
「もしそこでいいなずけさんが見つかったら、どういうことになるんです」
「さあ、それは行ってみなけりゃわからないさ」
「お嬢さんは甲府へ行きたがるかしら。あたくしにはそうは考えられないんですけれどね」
おときはいかにも不服そうである。
「おとき、若だんなには若だんなの考えがあってのことだ。おまえが不服をいったところでしようがないやね」

島七は女房をたしなめてから、
「久蔵、お二人のじゃまになるかもしれねえが、荷物持ちがいなけりゃ道中はなにかと不自由だろう。おめえな、おれのかわりにお供してくれ。いいだろう」
と、久蔵のほうへいう。
「合点だ、兄貴。――おつぎは途中で酒はのむなとおいでなさる」
先まわりをしてわらっている久蔵だった。

暁闇（ぎょうあん）

1

大東竜平は御用ぢょうちんを持った小者を先に立て、浅草橋のたもとへかかるまで黙って歩いた。すれちがう者があって、もし竜平の顔を見たら、あっと思わずよけて通ったにちがいない。それほど彼の表情はけわしく殺気立っていた。
――大作は生かしておけぬ。
竜平はひそかにそう思いつめているのだ。
あいつは弥十郎から美沙緒のことをたのまれたといううそも知っているし、こっちが柏屋惣兵衛から三千両用立てさせるかわりに柏屋の不正をある程度黙認しようという腹まで、どうやら読んでしまっているようだ。
あいつ一人なら、たとえ少しぐらいこっちの弱みを握られようと、こっちには加役という役目があるのだからそう恐れる必要はないが、あいにく大作には北の町奉行遠山左衛門尉という伯父（おじ）がついているのだ。
さっきもふっとそう気がついたから、無理に二階の家さがしはできなかった。
それはまあそれでいいとしても、柏屋との三千両の件をあばかれると、相手が相当あくどいことをやっている柏屋だけに、お役御免の罪だけではすまなくなるだろう。

それに、美沙緒をむざむざ大作に取られてしまうのも癪（しゃく）にさわる。
大作さえいなければ、美沙緒をこっちの手に入れておいて、こんどこそ弥十郎に有無をいわせず妻にもらいうけることができるのだ。
――どう考えても、大作はじゃまだ。
竜平の胸の中に巣くう悪魔は、次第に大きくなってくるばかりだ。
「良平――」
浅草橋のたもとで立ちどまった竜平は、若い同心若林良平に呼びかけた。
「はっ、御用ですか」
若林もすぐに立ちどまって小腰をかがめる。
「深川屋の二階に、美沙緒はたしかにいるんだ」
「手前もそう思います」
「こっちはわざと家さがしはしなかったが、それは手なんだ」
「といいますと――」
「あの時無理に家さがしをすると、大作は刀を抜く。人間は愚直だが、あいつは腕はできる。けが人を出しては気の毒だからな」
「はあ、そのとおりです」
「大作は平気だろうが、ああして黙って帰ってくると深川屋は平気ではいられない」
「なるほど――」
「大作も美沙緒も、ていよく深川屋を追い出される」
「それはそうでしょうな」
「そこでなあ、おまえ御苦労でも同朋町河岸（どうぼうちょうがし）のほうからしばらく深川屋を見張っていてくれ。わしも人数をそろえて後からすぐ行く」
「はい」
「そうだ、作造を残してやろう。もしわしの着くまでに二人が出かけるようなら、後をつけて、作造を屋敷へ走らせてくれ」
竜平は用意周到だった。

2

そのころ——。

山ノ宿河岸の船宿平野屋では、目を引きつらせたさそりのお浜が、長坂重蔵と善後策の相談をしていた。

加役組はそういつまで柏屋の寮にいるはずはないから、三千両のほうは彼らが帰ってからさがせばいい。

柏屋惣兵衛も一人ではどうしようもないから、加役組が帰ればやがて引きあげていくだろう。

いちばん問題なのは、寮からみんな引きあげてしまうと、南蛮組がかくしておいた三千両を取りに引きかえしてくるだろうということだ。

「どうだ、お浜姉御、南蛮組をうまくわなにかけてやる工夫はないか」

ずるい重蔵はお浜をおだてるように持ちかける。この跳ねっかえり女郎めとは思っても、手勢を持たぬ重蔵は、いまのところお浜をうまくおだてて使うほかはないのだ。

「さあ、あいつらは大作と違って用心深いからね、わなにかけるのは難しいけど、三千両を取りかえす手はあると思うわ」

「そうか、どんな手だね」

「どうせやつらは今夜中にきっと三千両を運び出しにきます。こっちは伏せ勢を用意しておいて、やつらが金を運び出したところを一度に騒ぎ出せば、金をおいて逃げ出すよりしようがないでしょう」

「なるほど、それもたしかに手だな」

「三千両はどっちにしたって寮の中にある間はこっちのものだけど、あたしはそれより美沙緒を取りかえして柏屋をあっといわせてやりたいんです」

お浜が意外なことをいい出す。

「ふうむ、なにかうまい手があるのか。相手は南蛮組だぞ」

長坂はちょっと目をみはる。

「さっきやつらが二人であたしたちの前へきてなんていっていたか、おぼえてる、長坂さん」

「さあ、やつらは大作のことをいっていたな」

「それなんです。やつらは三千両を手に入れるのと、大作を助けるのと、その二つが目あてで今夜寮へ押しこんだんです。すると、やつらは大作となにかつきあいがあると見ていいはずですね」

「うむ、すくなくとも好意を持っていることだけはたしかだろうな」

「その南蛮組が柏屋の船から美沙緒を助けたとしたら、どこへつれていくと思います」

「なるほど、そうか。柳橋の深川屋だな」

きらっと長坂の目が光り出す。

「あの娘はいまのところ深川屋よりほかに身を寄せるところはないんです。だから、きっと深川屋へ送ってもらっている。それをもう一度こっちへいただいてしまう工夫が、なにかある、長坂さん」

お浜は重蔵をためすようなことをいって、にやにやわらい出す。

「そういうお浜には、なにかうまい計略があるようだな」

「ないことはないわ」

「わしはどうもお浜にはかなわないようだ」

あくまでも下手に出ていく長坂である。

3

「長坂さん、あんたもう一度五人組み強盗に化けてみる度胸があるの」

お浜はそういいながらじろりと重蔵の顔色を見ている。

「深川屋へ押しこむのか」

「そうじゃない。美沙緒の話だと、今朝大作が深川屋を留守にしたのは、甲府へ行く路銀をこしらえに行ったんだといってたわ。だから、今夜大作が美沙緒と会えば、こんな物騒な江戸に

ぐずぐずしているより、明日の朝まだ暗いうちに美沙緒をつれてきっと甲府へ立つ気になるとあたしは踏んでいるのさ」
「なるほど。そこへ五人組みが出て美沙緒をさらうという趣向か」
「そうよ」
「それはおもしろい。しかし、問題は五人組みの人選だな。大作というやつは思ったより腕がたつからな」
一度お茶の水で失敗している重蔵は、そんなだめを出す。
「そんなことはやり方ひとつだわ。いくら強くたって、五人でいっしょにかかれば負けっこありゃしない。あんたがいやなら、あたしがやってみせてやろうか」
お浜はせせらわらってみせる。
この女は本当にやりかねない度胸を持っているし、万一この女の手に美沙緒が入ると、重蔵はのけ者にされるおそれがある。
「いや、無論わしは後へはひけぬが、わしと市川と岡田、あとの二人はだれがいいだろう」
「そんなことは市川に選ばせればいいわ。こんどはあたしが後見をしてあげるから、しっかりおやんなさいよ」
お浜はもう長坂をすっかりみくびってしまっているようである。
そこへさっき寮の様子を見にやってきた喜久蔵が風のように土間へ飛びこんできた。
「姉御、いま柏屋が船で帰りやすぜ。加役の大東と与力の伊藤権太夫、同心の若林の三人がいっしょに乗っていやす。どうします」
「もう一人の同心はどうしたんだえ」
「そいつがおもしろいんだ。隣の丸屋の寮をさがしたんだが、とうとう南蛮組の二人は見つからねえんです。それで、大東は小宮とかいう同心を柏屋の寮へ残し、柏屋は啞の下男を、こいつは内緒で残していきやがった。市川さんが、おれたちはどうすればいいか姉御に聞いてきて

くれっていってるんですがねえ」
「岡っ引きはどうしたんだえ」
「そりゃ小宮がいる間は引きあげるわけにゃいきませんや」
「こっち組はまだみんな持ち場を見張っているんだろうね」
「そいつはみんなまだ張りこんでいやす」
「長坂さん、柏屋はどうして大東といっしょに帰る気になったんだろう」
お浜はなにか目をすえているようだ。
「おそらく、柏屋は南蛮組の脅迫を真にうけて、加役に店の警戒をたのみこんだんだろう」
「そうか――。じゃ、柏屋は大東にいくらか御用金を出させられたな」
お浜はじっと考えこんでいるようである。

4

「喜久蔵、とにかく柏屋の船はだれか二人ばかり船で後をつけさせてみておくれ。一人は柏屋、一人は加役をつける、わかったね」
「へえ」
「それから、市川さんたちはもうここへ引きあげてもらっていいよ。そのかわり、寮へもだれか二人そっと残って様子を見張るんだ」
「かしこまりやした」
「外の見張りはもうしばらくそのままつづけてみよう。ことによると、南蛮組か大作のやつが引っかかるかもしれない」
「わかりやした。じゃ、行ってきやす」
喜久蔵はすぐに飛び出していった。
「姉御、市川たちが引きあげると、南蛮組が例の三千両を運び出しにきはしないか」
長坂が注意するようにいう。
「大丈夫よ。同心さんと岡っ引きの親分は今夜一晩中あの寮から引きあげやしません。だから、柏屋も啞の下男をそっと残して家へ帰る気になったんです」
「そうか。すると、寮の三千両は明日の勝負と

いうことになるな」
「それよりねえ、長坂さん、今夜は美沙緒のほうへ山を張ってみようよ。船を久右衛門河岸の船宿のどこかの桟橋へつけておいて、もし大作と美沙緒が出てきたらすぐに五人組みに化ける。あたしはこの山はきっと当たると思うんだ」
お浜は自信たっぷりのようである。
「それも悪くはないが、もし南蛮組が短筒を持って寮へのりこむと、同心も岡っ引きも手が出せなくなりはしないか」
長坂は寮の三千両のほうにまだ未練があるようだ。
「長坂さん、毒をくらわばさらまでってこと知らないの」
「それはどういう意味なんだ」
「どうせ五人組みに化けるんだもの、うまく柏屋の金蔵を破れば、一万両でも二万両でもつかみ取りじゃないか。しかも、柏屋は南蛮組におどかされているんだから、罪は南蛮組がしょってくれるわ」
「なるほど――」
長坂は啞然としたように目をみはりながら、
「しかし、柏屋は加役がかためているぞ」
と、わざと苦い顔をしてみせる。
「あんたにはそんな心配をしなくてもいい、うまい役があるんだけどね、どうお、一口のってみない」
「というと、どんな役なんだ」
「それはうっかりいえませんねえ。話してしまってからいやだといわれたんじゃ、いやでも生かしちゃおけないもの」
ずばりといってのけるお浜だ。
「さそりの毒は怖いからな」
長坂は苦わらいをする。
「とにかく、美沙緒のほうが先なんだから、そっちからかかることにして、柏屋のほうは考えといてもらうわ」
「よかろう。こっちは昨夜から失敗つづきで、

少しくさっているんだ。なんとかここでひとつ縁起なおしにうかびあがらなくちゃ立つ瀬がない」
それは長坂の本音であった。

5

「若だんな、もうじき七ツ（四時）ですぜ。目がさめていやすか」
階段の中ほどから久蔵が呼ぶ声で、ごろ寝をしていた大作はふっと目がさめた。
「うむ、起きたぞ」
夜着をかきのけてむくりと起きあがると、
「大作さま」
自分の布団の上へ起きてきちんと座っていた美沙緒がそっと呼んだ。燃えるような目で、じっとこっちを見ている。
「やあ、起きていたか、美沙緒さん」
大作は思わず目を輝かしながらそっちへ両手を出している。
「大作さま――」
美沙緒はいざり寄って、いきなりその胸の中へ身を投げかけていく。
「よかったなあ、美沙緒さん。わしはもう生きて会えないかと思った。――ゆうべ、帰ってきたら、あんたはあんまりよく寝ているんで、起こさなかったんだ。よかったなあ、こうして会えて――」
しっかりと美沙緒の肩を抱きしめて、大作は自分がなにをいっているのかよくわからなかった。
「あたくし、うれしい。目がさめたら、あなたがおやすみになっていて、――夢かと思いました」
美沙緒も離れじとすがりついて、切れぎれに口走りながら泣きじゃくっているようである。
ふっともう一度その人かと見あげてきた目が、しっとりと涙にぬれている。
大作はその目にさそわれるように顔を近づけ

ていきながら、みなぎりあふれてくる愛情に、我にもなく美沙緒の熱いくちびるにくちびるをかさねていた。
　切ないほど胸をはずませながら、美沙緒は男の強い愛情を全身に感じて、じっと目をつむっている。
　男はいつまでもくちびるを放そうとしない。美沙緒もまたしっかりと両手で男の胸へすがりながら放れようとしない。
「美沙緒――」
　大作がいとしそうに呼ぶ。
「大作さま」
「わしは、わしは――」
　しかし、大作はその先をいいきれずに、狂ったようにまたくちびるをかさねてくる。
　口にしなくても、美沙緒には男のいおうとしたことはわかっていた。
「あたくしも――。大作さま、あたくしも」
　美沙緒はこのまま死んでもいいと思った。もう別れるのはいやだと思った。胸が張りさけそうに狂おしくなってきて、美沙緒は自分からも男の口を力いっぱい吸っていた。
「さあ、落ち着こう、美沙緒さん」
　大作はようやく我にかえってきた。
「わしはこれからあんたをつれて甲府へ立とうと思うんだ」
「甲府へ――」
　びっくりしたように目をみはった美沙緒は、
「いや、あたくしはいや」
　はっきりと口走って、男の胸へ顔をうずめてしまう。

6

「美沙緒さん、ちょっとそこへ座ってごらん。わしはあんたに見せたいものがあるんだ」
　大作はそういって、美沙緒を胸から引きはがすようにそこへ座らせる。
「なにを見せてくださいますの」

　美沙緒はちょっと不安そうな顔である。
「これだよ」
　大作は胴巻の中から今戸の寮の外蔵で拾った櫛を取り出してみせる。
「ああ、あたくしの櫛――」
「これがあの寮の外蔵の階段の三段目あたりへ落ちていたんだ。だから、わしはてっきりその蔵の二階にあんたが縛られていると思って、中へ飛びこんでいったら、お浜に蔵の戸をしめられてしまった。つまり、お浜の計略にうまく引っかかってしまったんだ」
「まあ――」
「ようやくその蔵から出られたのは、ちょうどあんたが柏屋の船に乗せられてこぎ出したころだったんだろう。それはまあいいとして、ゆうべこの二階へ帰ってきて、あんたの寝顔を見ながら、わしはふっと考えたんだ。この櫛は甲府へ行くまではあんたにかえすのはよそう。甲府へ行って、もし峰村新十郎という人がいたら、わしはあんたをもらいたいとその人にたのんでみよう。その人がわしにあんたをくれたら、その時この櫛をあんたにかえす。その人がどうしてもいやだというようなら、わしは一生この櫛をわしの胴巻に入れておこうとね」
　大作はさびしい微笑を見せながら、その櫛をまた胴巻の中へしまってしまう。
　美沙緒は青ざめた顔になりながらじっとうなだれてしまう。
「わかったろう、美沙緒さん。だから、わしたちはどうしても一度、甲府へ行ってこなければならないんだ。それが武士の家に生まれた者の義理なんだ」
「あの、あの、あたくしを助けてくれた南蛮太郎という方は、いままでたよりをしない峰村さまのほうが悪いのだから、そんな遠慮はいらないといっていました」
「太郎さまはわしにもそんなことをいっていた。だからといって、その人に黙ってわしは美

沙緒さんをお嫁にするわけにはいかないんだ。そんなことをすれば、あんただっていつまでも後味が悪いだろうと思う」
「もしも、もしも甲府へ行ってみて、峰村さまの行方がわからなかったら、どうなりますの」
「それは、その時になって、また二人で考えよう。いまわしがあんたの櫛を一生わしの胴巻の中へ入れておくといったのは、わしは美沙緒さんのほかに一生妻は持たないということなんだ。これだけはきっと約束しておきます」
「うれしい、あたくし」
美沙緒はいきなり大作のひざへ泣き伏してきた。
「だから、いっしょに甲府へ行ってくれるね」
「はい、まいります」
美沙緒は泣きじゃくりながらはっきりと返事をする。

7

美沙緒が涙をふいて顔をなおし、大作といっしょに店へおりてくると、そこにはもうちゃんと朝の膳が出ていた。
台所へ出て、洗面をすませてもどってくると、島七が神だなに燈明をあげ、二人の前へきて、
「おはようございます。外は降るような星空ですから、お天気の心配はいりやせん」
とあいさつをしてくれる。
「せっかくのお旅立ちですから、なにかお頭つきをと思ったんですが、あんまり急な話なんで間にあわなかったんですよ。勘弁してくださいね、若だんな」
おときがそんな言い訳をしながら、みそしるを運んできて給仕についてくれる。
「こんな朝っぱらから、世話をかけるなあ、おとき」
「いいえ、家はこんな稼業で、朝も夜もありゃ

しません。お嬢さんはゆうべよく眠れたんですか」
「ええ、なんにも知らずに――」
「ようござんしたねえ。旅ははじめてなんでしょう」
「ええ」
「あたしも一晩泊まりで川崎のお大師さまへおまいりに行ったことしかないんですけれど、所が変わって目にはたのしみがあっても、歩きつけないもんですから足がくたびれるもんなんです。どうか途中お気をつけになって、無理をなさらないように、御無事でお帰りをお待ちしています」
うれしい旅ではないとわかっているだけに、おときの声もついしめりがちになる。
「なにをいってるんだ、おとき。お嬢さんにはちゃんと若だんなという人がついていなさるんだ、なんにも心配することはありやしねえ。あ、そうだ、若だんな。生水だけは気をつけておくんなさいよ。薬はお持ちなんでしょうね」
島七も内心は心配でたまらないらしい。
「ありがとう、薬は一通り印籠に用意してある」
大作はあかるく答えたが、美沙緒は胸がいっぱいで口もきけないようだ。御飯もほんの軽く、一膳は不吉といわれて、二つだけ無理にのみこんでしまったようである。
先へ飯をすませた久蔵は、もうすっかり旅支度をして、二人のわらじをこしらえたり、美沙緒の菅笠をしらべてみたりしていた。
美沙緒はおときに手甲脚絆をつけてもらい、着物をすそ短にしごきでたくしあげるのまで、いちいち教えてもらっていた。
肌着や身のまわりのものを小ぶろしきにつつんで用意しておいてくれたのもおときである。
わらじは久蔵が、ゆるくなく、きつくなく、何度も美沙緒に具合いを聞きながらはかせてやっていた。
「いいか、美沙緒さん」

「はい」
美沙緒はやっと立ちあがった。
「じゃ、島七、おとき、行ってくる。いろいろ世話をかけてありがとう」
大作が土間に立ってあらためてあいさつをすると、
「御無事で行っておいでなさいまし」
島七がおじぎをしている間に、おときが神だなから火うち石をおろしてきて切り火を切ってくれる。

8

外へ出ると、なるほど、降るような星空だった。
肩に振り分け荷物をかつぎ、道中差しを一本さして、小田原ぢょうちんをさげながら一足先を歩く久蔵が、
「若だんな、今日はいい道中日和ってやつになりやすぜ」
と、威勢のいい声をかける。
「そうらしいなあ。どうだ、今からだとちょうど内藤新宿あたりで夜が明けてくると思うんだがなあ」
「まあ、そんなところでござんしょうねえ」
美沙緒は大作の左へならんで、しっかりと手にすがりながら黙って歩いている。
「ねえ、若だんな、お嬢さんは初旅なんでしょう」
久蔵は決してうしろを振り向こうとはしない。そんなことをしちゃ悪いと思って、気をきかせているんだろう。
「うむ、はじめての旅だ」
「それに、昨日はさんざっぱらくたびれて、それがまだすっかりなおっちゃいないでしょうからね、今日はなるべく早めに旅籠につきやしょうや」
「そうだなあ、まあ精々府中あたりかな」
「そいつはちょいと無理かもしれやせんぜ。こ

こからだと八里はたっぷりありやすからねえ」
「そうか。じゃ、それはその時のことにしよう。なにもいそぐ旅じゃないんだ」
道は神田川にそって筋違橋のたもとへ出て、お茶の水から水道橋、肴町へぬけることにしている。
「美沙緒さん、おとといの晩の道だねえ」
筋違橋のたもとへかかった時、大作は美沙緒に話しかけた。
「ええ」
美沙緒は足もとへ目を落としながら顔をあげようともしない。
「今日はもうすぐ東が白んでくる。五人組みなどの出る時刻じゃないんだから、心配しなくてもいいよ」
「あたくし、心配などしていませんわ」
そんな心配より、もっと大きな不安が甲府にあるといいたいのだろう。
「そりゃお嬢さんは若だんなといっしょなんだもの、心配なんかありやせんや。あっしはねえ、若だんな、本当のことをいうと、若だんながあんなに強いとは思わなかった。感心しちまいやした、おとといは」
「いや、わしも感心していることが一つあるんだ」
「へえ、どんなことです」
「久兄いが昔の金さんと兄弟分だとはちっとも知らなかったからなあ」
「あれえ、おぼえがいいねえ、若だんなは。そんなことは早く忘れちまったほうが体の薬ですぜ」
「どうして――」
「人間なんてものは、あんまり頭にいろんなことをおぼえていると、つい頭が重くなって中気になるんでさ」
道は聖坂をあがって、やがて桜の馬場へかかってくる。まだ一人も人の歩いているのには出会っていない。

9

「出た、若だんな」
桜の馬場へかかったとたん、突然ばらばらっと覆面のくせ者が五人、抜刀して躍り出してきたのだ。
「久蔵、うしろへさがれ」
とっさに、また長坂組だなと見てとった大作は、久蔵と美沙緒を崖っぷちのほうへさげ、すっと二足ほど前へ出て抜きあわせる。
「何者だ」
叱咤するように一喝したが、敵は無言で、剣陣を作ってきたのは四人、一人はうしろに立って見ている。そのやり方から見てもたしかに長坂組で、うしろに立っているのが重蔵にちがいない。
が、今朝の四人ははじめからこっちを切る気で、その一人一人が激しい闘志を持ってすきをねらっているから、大作も余計な口をきいているゆとりはない。
いや、四人のうちの二人はたしかにこの間の市川佐二郎と岡田真兵衛で、この二人でさえ大作には大敵なのだ。その上、新手の二人もそれに劣らぬ遣い手を今朝はそろえてきているようだ。
目的は美沙緒を略奪にきたとわかりきっているだけに、
――憎い悪党。
大作は火のような忿怒に駆られてくるが、こっちからはどうにも切って出ようがない。
久蔵のちょうちんはすでにくせ者たちが飛び出した時からびっくりしたはずみに消えているので、視界は星あかりがあるばかりだ。
せめて東の空が白み出してくれればくせ者たちのほうにあせりが出てくるだろうが、夜明けまでにはまだ一刻(二時間)足らずあるだろう。
――それまでおれの命があるかな。
大作は歯をくいしばった。

「えいっ」
「とうっ」
敵はそれぞれに誘いの気合いをかけてくる。それは行くぞという残忍な脅迫の気合いでもあるのだ。
「大作さま、美沙緒もいっしょに死にます」
うしろで美沙緒がはっきりといった。懐剣のひもをといて、それを抜いた気配がする。
いっしょに闘うという心ではなく、万一の場合は乳の下を一突きにして自害するという心なのだろう。
「まだ早い、お嬢さん。おれが切りこんでからにしてくんな」
久蔵も道中差しを抜いているようだ。
――あわてちゃいかん。
そういってやりたいが、大作はそれさえ口にするだけの余裕がないのだ。
「とうっ」
「えいっ」
どの一人が切りこんできても、引っ払って二の太刀で一人をなぎ立て、前へ飛びぬける以外に手はない。
それとも、こっちから一人をねらって捨て身のもろ手突きに出るか、どっちにしてもその時はこっちもどこかに手傷をうけることになるだろう。
――美沙緒、おれは死なないぞ。
大作はまたしても歯ぎしりをした。

10

四人ならんでいる右から三人目のやつが、どうやら一番手柄をねらっているようである。
そやつの初太刀を払ってもかわしても、間髪を入れずその左右にいるやつが今朝は必ず突っこんでくる。
後手にまわって不利を招くくらいなら、先手をとってこっちから突っこんだほうがけがをしても軽くすみそうだと見たから、大作は決断よ

く、
「えいっ」
　一気に三番目のやつへ切りこんでいった。
　突きに出るのがいちばん早いのだが、それがまともにきまると刀を抜く間に左右の敵から挟撃を食うおそれがある。大作は一刀を右へたたきつけるようにして、かえす二の太刀で左、つまり四人目のやつを左片なぎにして、だっと前へ飛びぬけていった。
　ねらった三番目のやつは、自分からも仕掛けようとして、
「とうっ」
　一刀を振りかぶろうとした出鼻を逆襲された形になり、右籠手肘のあたりへ鋭い切っ先をうけて、
「う、うっ」
　どっと前へ突んのめっていく。
「おうっ」
　案の定、追いうちをかけてきた左のやつはあやうくこっちの二の太刀を腰のあたりへまともにうけるところだったが、
「あっ」
　狼狽しながらもとっさに飛びのいたので、これは軽く高股のあたりを切っ先でかすられただけですんだらしい。
　前へ飛びぬけた大作がくるりと向きをかえると、その目の前へ残る三人が、
「おうっ」
「えいっ」
　早くも三つの切っ先をそろえてじりじりと迫ってくる。
　――しまった。
　大作はうっかり美沙緒と久蔵を崖っぷちへ残して、その中間へ敵の三人に立たれたことになるのだ。
　三人のうち一人は軽くても手負いでもう多少闘志を失っているようだが、無傷の二人はどうやら市川佐二郎と岡田真兵衛らしく、これはど

っちも強敵だ。おとといの夜、新シ橋際でその腕前は十分わかっているだけに、こんどは大作も迂闊に飛びこんでいくわけにはいかない。
「えいっ」
「とうっ」
　しかも、市川と岡田は気をそろえてじりじりっと前へ出てくる。
「おうっ」
　大作はどっちかにすきの出るまでとにかくじりじりとさがって剣先の間合いをまもっておく外はないのだ。
　――美沙緒、待っているんだぞ。
　その美沙緒のほうへさえもう目を向けているひまがないのだ。
「あっ、大作さま」
　突然、美沙緒の悲鳴にも近い声が耳へ突き刺さってきた。

11

　久蔵は、大作が敵の剣陣の向こうへ切りぬけたので、抜き身の道中差しを右手にさげて、
「お嬢さん、あっしがついているから大丈夫だ。しっかりしているんですぜ」
　と、美沙緒をかばいながら八方に目をくばっていた。
「はい」
　美沙緒はただ大作のほうにばかり気を取られて、懐剣をしっかりと右手に握っている。もういつでも自害をする覚悟はできていた。
　そこへ五人組みの覆面強盗の中で、ただ一人うしろに立って味方の働きぶりを見ていたやつが急につかつかとこっちへ進んでくるなり、
「下郎、行くぞ」
　と声をかけながらいきなり抜刀したのだ。
「くそっ、なにをしやがる」
　久蔵もとっさに抜き身を構えたが、これはけ

んか度胸だけのことで剣術は知らない。

じっと構えられたのではとてもかなわないと見たから、

「畜生、やっつけろ、くそっ」

思いきりよく死に物狂いで、びゅんびゅんと道中差しを左右に振りまわしながら覆面のほうへ突進し出した。

「うぬっ」

覆面は相当心得のあるやつらしいが、竹刀と違って一つ間違うと自分もけがをするから、大事をとって思わずじりじりと後へさがり出す。

「よいしょ、——くそっ、よいしょ」

道中差しを振りまわすこっちの力がつきれば、敵は一気に切りこんでくる、たぶんその時がこの世の終わりと久蔵は知っているから、もう無我夢中だった。

いつの間にか美沙緒のそばを七、八間離れてしまったのを、久蔵は無論のこと、美沙緒もついうっかりしていた。

その美沙緒のそばへ、いつの間に、どこから忍び寄ったか、お高祖頭巾の女がすっと近づくなり、

「美沙緒——」

鋭く叫んで、いきなり懐剣を持った右手をつかんできた。

「あっ、お浜」

声でそれとわかった美沙緒は、ぞっとして思わず懐剣を取りおとしている。いや、お浜の強い力でひじの関節をつかまれたので、もう全身の自由がきかなくなっていたのだ。

「おとなしくこっちへおいで——。いうことをきかないと、また痛いおもいをするだけだよ」

「大作さまあ——」

美沙緒が悲しい声をあげたのはこの時だった。

「甘ったれるない」

お浜は空いた手でぴしゃりと一つ美沙緒のほおを張りとばし、

「こっちへこい。歩くんだよう」

そのまま美沙緒を引っ張って桜の馬場のほうへ歩き出す。

腕の急所をしっかりとつかまれている美沙緒は、逆らえば激痛を増すばかりだから、もうどうすることもできなかった。

12

桜の馬場の東がわは聖堂の塀になっていて、ここには道はない。が、そこの草っ原を抜けていくと旗本屋敷の角へ出て、そのまままっすぐ行くと湯島四丁目の通りへ出る。

——もうだめだ。

さそりのお浜に右腕の急所をつかまれて、美沙緒は悲しく絶望しながらその角までくると、

ぴ、ぴい。

ぴ、ぴい。

と、ふいに呼び子の音が暁闇の静寂を破って鳴りひびき、

「御用だっ」

「御用だっ」

と、その横町からふいに三、四人の人影が二人の前へ躍り出してきた。

「あっ」

お浜は思わずそこへ棒立ちになったが、この時その呼び子の音を聞きつけた捕り方たちが、これは御用ぢょうちんを先頭にして、

「御用だっ」

「御用だっ」

と、湯島通りのほうから二十人にあまると思われる人数が風のようにこっちへ殺到してくるのが目に入った。

「畜生——」

お浜は悔しそうに口走りながら美沙緒の腕を放して、ひらりといま出てきた馬場の中へ身をひるがえしていく。

「御用だっ」

「神妙にしろ」

御用ぢょうちんを持った組が茫然と立ちつくしている美沙緒のそばを通りぬけ、もうどんどん馬場のほうへなだれこんでいった。
　そのちょうちんの光で前に立っている男の顔をちらっと見た美沙緒は、
「あっ」
　愕然として一足うしろへさがる。
「どうした、美沙緒さん。なにをそんなにびっくりしているんだ」
　加役の大東竜平がわらいながら聞く。
「いいえ、あたくし、あの――」
「話はゆっくり後で聞きます。わしは弥十郎どのからたのまれてあんたを迎えに行くところだったんだ」
「いいえ、あたくし、屋敷へはもどりたくないのです」
「それもわかっている。まあ任せておきなさい」
　竜平は冷たくいって、
「おい、駕籠――」
　と、うしろへいいつける。
　竜平は女乗り物までちゃんと用意してきているのだ。
「あの、あたくしには向こうに大作さまが――」
「大作にも後からいっしょに来てもらいます」
「本当ですか、大東さま」
「わしも男だ、二枚舌はつかいません」
　そうきっぱりといわれては、美沙緒もこれ以上駕籠に乗るのをこばむわけにはいかない。
　――だまされるのではないかしら。
　そんな不安はあったが、美沙緒はうながされるままにその駕籠へ乗った。

13

「御用だっ」
「御用だっ」
「神妙にしろっ」
　桜の馬場のほうから御用ぢょうちんといっしょに捕り方勢がなだれを打って駆けつけてくる

のを見ると、大作が相手にしている三人の覆面どもも、久蔵が夢中で道中差しをふりまわしている相手も急に狼狽し出して、いっせいに水道橋のほうの坂道へ逃げ出しはじめる。
「それっ、逃げた」
「一人も逃がすな」
　捕り方勢は十五、六人、風のように大作の前を走りぬけていく。
　――やれ、助かったか。大作はほっとして、ともかくも刀をぬぐって鞘におさめ、急に美沙緒のことが心配になって、向こうにぼんやり突っ立っている久蔵のほうへいそごうとした。その目の前へすっと同心らしい中年の男が立って、
「あなたかな、いま五人組みらしいのに取りかこまれていたのは」
　と、声をかけてきた。
「そうです。おかげで命拾いをしました」
「それは結構でした。御姓名は――」
「浪人鈴村大作といいます」
「旅支度のようですな」
「はあ、三人づれで甲府へ行くつもりで出てきたばかりです。失礼ですが、あなたは」
「加役大東組の配下の同心木下五郎右衛門です」
「御出役御苦労に存じます」
　口ではそう答えたが、大作はどきりとせずにはいられない。
「若だんな、大変だ」
　そこへ久蔵がばたばたと走り寄ってきた。
「美沙緒は――久蔵」
「それが、どうやらお浜のあまにさらわれちまったようなんです。あっしは覆面強盗の一人と夢中になって切りあっていたんで、どうすることもできなかったんでさ」
「どっちへつれていかれたかわからないかね」
「馬場のほうにちがいねえんです」
「もう一人のおつれは婦人ですか」

そばから木下が口を入れてくる。
「はあ、若い娘です」
「拙者はいま馬場から出てきたんだが、婦人は見かけなかった。聖坂のほうへでも逃げたのと違うのか」
木下同心は久蔵のほうへ聞く。
「そいつが、こっちは夢中なんで、はっきりしねえんでさ」
「お浜というのはどんな女だね」
「さそりのお浜といいやしてね、黒ぎつねがついているすごいあまなんでさ」
「その女の住所はわかっているのか」
「山ノ宿河岸の船宿平野屋へ時々くるって話ですが、あっしはよく知らねえんで――」
「久蔵、とにかく馬場のほうをさがしてみよう。――木下さん、失礼します」
大作は大股に馬場のほうへ歩き出しながら、しまったと思った。
覆面組の長坂たちも、加役の大東組も、偶然にここへきあわせたとはどうしても考えられないからである。

14

長坂組がここへ出たのは、柏屋から美沙緒は南蛮組の手にわたったと聞いて、落ち着く先は深川屋だと見当をつけ、見張りをつけておいたのだろう。
その長坂組に仕事をさせておいて、ちょうどいい時に大東組が御用ぢょうちんに物をいわせ美沙緒を横取りしたのは、これも竜平が深川屋を見張らせておいて、長坂組がここで仕事をするのをあらかじめ見ぬいていたにちがいない。
――竜平には三島家のために美沙緒をさがしてやるなどという親切気はない。
すると、わざわざこんな余計な手数までかけて美沙緒を横取りしたのは、自分に妙な野心があるからだと見るほかはない。
――しかし、美沙緒ははたしてお浜の手から

竜平の手へ移っているだろうか。
お浜という女がただの女でないだけに、ふっとそんな疑問もおこってくる。
が、加役組は馬場から殺到してきたのだ。お浜が美沙緒を引っぱって馬場のほうへ逃げたとすれば当然加役組とぶつかることになるから、美沙緒は竜平の手に移ったと考えるほかはない。
「若だんな――」
いっしょに走っていた久蔵が、ふいに大作のたもとをひいた。聖堂の塀にそってやや馬場の中ほどまできたと思うあたりで、行く手に立ちふさがるように突っ立っている黒い人影が目についたのだ。
「うむ」
大作はうなずいて少し足をゆるめた。いま時分こんなところに立っているのは、加役組の見張りか、それでなければくせ者のたぐいと見るほかはないからだ。
かまわず近づいていくと、彼らは二人とも覆面をしていて、しかも無言で同時に抜刀した。
「貴公たちは何者だ」
大作はとっさに久蔵を手でうしろへ押しやって、柄に手をかけながら立ちどまる。
くせ者は答えようともせず、じりじりと前へ出てくる。二人とも相当以上の腕前のようだが、真剣勝負ははじめてなのだろう、多少体中がかたくなっているようだ。
「物取りか、遺恨か、どっちなんだ」
大作はまだ柄に手をかけたままである。
くせ者は返事をしない。
「うぬっ、竜平の指図だな」
一喝すると、案の定、ぎょっとしたように死に物狂いになって切って出ようとする。
と見た大作は、竜平のあまりにも卑劣なやりかたにはじめて激しい憤りを感じ、
「えいっ――とうっ」
こっちからも思いきって飛びこみざま、抜き

うちに右を払い、かえす二の太刀で左をなぎたてる。大作得意の先制攻撃である。
「う、うっ」
「わあ」
　こっちの太刀さばきが一瞬早かった上に、刺客二人はかたくなっているから二人ともどうしようもなく、同時に悲鳴をあげてぶっ倒れていく。
「久蔵、来い」
　大作はそのまま旗本屋敷のほうへ走り出す。

15

　馬場を走りぬけながら、大作は刀を鞘におさめた。馬場をぬけると旗本屋敷の角へ出る。
　この横町を湯島通りへぬけたにちがいないと見たから、一散に駆けこんだとたん、
「お待ちよ、大作」
　ふいにうしろから女の声が呼びとめてきた。
「だれだ」
　惰性で二、三歩走りすぎてから立ちどまった大作は、そこに立っているお高祖頭巾の女を見て、
「お浜姉御だな」
　といいながらその前へ行って立つ。
　久蔵がすっと一足大作のうしろへさがったのは、お浜のさそりの毒が怖いからだろう。
「大作、美沙緒は加役組の竜平に駕籠でつれていかれてしまったよ」
　お浜はけろりとしていう。
「なんだって、おまえ、黙って見ていたんだ」
「黙って見ていたわけじゃないけど、向こうは御用ぢょうちんを持っているんだもの、いくらあたしだってしょうがないじゃないか」
「今から追っても間にあわないだろうな」
「大作は御用ぢょうちんは平気なのかえ」
「平気だとも――。おれは悪いことはなんにもしちゃいないからな」
「いま加役組の者を二人切ったじゃないか。気

をつけないと、竜平って野郎はすみにおけないやつなんだから、その罪におとされるよ」
「見ていたのか、お浜」
「見ていたよ。大作は強いんだね。それとも、美沙緒を横取りされたんで死に物狂いだったんかな」
　お浜は頭巾の中でわらっているようだ。
「見ていたんならわかっているはずだ。今のは二人のほうから黙って切りかかってきたんだ」
「ばかっ正直だな、おまえさんは。そんなことあたしが見ていたってしょうがないじゃないか。あたしは御用ぢょうちんはきらいなほうなんだもの。たとえどっちが悪いにせよ、浪人が加役の組下を切ったとなると、おまえさんはきっと罪におとされる。いいかえ、大作、竜平ってやつは美沙緒がほしいんだ。それには大作がじゃまになる。まあ、十分気をつけたほうがいいね」
「ありがとう。もう用はそれっきりか」
「もう一つだけいいことを教えてあげる。耳を貸してごらん」
　大作が無造作にお浜のそばへ寄ろうとすると、
「若だんな、あぶねえ」
と、うしろから久蔵がたもとをつかんでしまう。さそりの毒を注意しろというのだろう。
「心配するな、久蔵」
　大作は苦わらいして、そのままお浜の前へ出る。
「おい、三下、今日はさそりは使わないから安心おし」
　お浜は久蔵を三下あつかいにして、
「竜平はねえ、今夜の五ツ（八時）ごろ柏屋へ三千両の軍資金を借りに行くことになっているんだ。ひょっとすると、美沙緒はそのために入用だったかもしれない。わかったかえ」
　耳もとへそっとささやいたお浜は、大作がうなずいたのを見ると、もうさっと馬場のほうへ

身をひるがえしていた。

16

「若だんな、あいつはまったくたいへんな女ですねえ」
久蔵はあきれてお浜を見送っている。
「とにかく、湯島通りへ出てみよう」
むだだとはわかっている。しかし、そうしてみなければどうにも気のすまない大作だった。
「大東の屋敷は裏神保町とわかっているんだ。ひとつ先まわりをしてみちゃどうなんでしょうね」
「いや、駕籠は屋敷へ向かったんじゃあるまい。美沙緒の屋敷は大東の筋向かいだから、屋敷へつれていけば美沙緒を三島家へかえさなければならないからな」
「いまお浜が変なことをいっていやしたね。すると、大東はお嬢さんを柏屋へつれていって三千両で売る気なんですかねえ」
「そうじゃないとわしは思う。三千両のほうは無論ほしいが、あの男は美沙緒も自分のものにしたいんだ」
「そいつはだめだ。だいいち、お嬢さんがうんといいやせんや」
大作は答えなかった。竜平は平気で女を手ごめにできるような性格なのだ。
今まで大作の心のどこかにあった竜平への友情は、この時かぎり消えた。万一、美沙緒を不幸におとしいれるようなことがあったら、もうゆるさぬという怒りさえこみあげてくる。
湯島通りへ出てみたが、無論どこにも人影一つない。
美沙緒の駕籠は、右へ行ったものか、左へ行ったものか、見当さえつかない。いや、たとえ見当はついても、おそらくその駕籠に追いつくことは不可能だろう。
竜平はそういう段取りをはじめからつけているのだ。

第一に、配下の同心木下五郎右衛門というのにいいつけて、こっちを引きとめさせている。それだけでも、駕籠に追いつけない時は十分かせいでいる。
次に、刺客二人を桜の馬場に残してこっちを切らせようとした。切ってしまえばいちばん安全なのだ。しかも、その罪は長坂組に押しつけることができる。
幸いこっちは一気に二人を倒すことができたものの、いまお浜がいっていたように、こんどは大作を南蛮組にむすびつけ、役人を切った罪におとすという手が決してないとはいえないのだ。
——うぬっ、そんな手を食ってたまるもんか。
そっちはいくらでも闘いようがあるが、美沙緒の駕籠はどこへつれこまれるか、肝心のそっちは皆目見当がつかない。
「久蔵、運を天にまかせて、こっちへ行ってみよう」
大作は大股に昌平橋（しょうへいばし）のほうへ歩き出した。ちょっとすると駕籠から船へ移して運ぶという手もあるからである。
「若だんな、申し訳ありやせん。あっしがもう少し強けりゃ、こんなことにならずにすんだんでさ」
久蔵はいまさらのように歯ぎしりをしながらついてくる。

今戸の寮

1

百鬼夜行の夜があけると、江戸はふたたび鐘一つ売れぬ日はなしというにぎやかな繁盛さを取りもどしてくる。
その朝、昨夜芝の金杉橋（かなすぎばし）の近くで質屋へ押しこんだ五人組み強盗が御用になり、二人はその場で切られたが、三人は北の奉行所へつれてい

かれたといううわさがたちまち江戸中にひろまっていた。
　もっとも、この五人組みも奉行所では偽物のほうらしいと見ているということまで、どこからそんなことが漏れるものか、町の者たちはもうみんな知っているようである。
　これで南北両奉行所であげた偽五人組みは三組みだということである。
　それが、加役組のほうではまだ一組みもあげていないので、
「もちはもち屋さ。年季がちがうからねえ」
と、そんな陰口をきいている者も決してすくなくはないという話である。
　一般にあくどいまねをして町家をいじめるのは加役配下の与力同心に多いという定評があるので、どうしても加役組は町の人気が悪いようだった。
　神田明神の裏がわのほうに妻恋町というのがある。美沙緒はその妻恋坂の上の鳶職らしい家の二階へおくりこまれて、悲しい朝をむかえた。
「いいか、美沙緒さん、すぐ大作をつれてきてやるから、おとなしくここに待っているんだぞ」
　竜平はそういいおいて、玄関先から組下の者と引きかえしていった。
　駕籠に乗せられてからそう遠くへ運ばれたようにも思えない。だから、ひょっとすると、竜平の言葉は本当かもしれないと、美沙緒は多少心がおちついてきた。
　それに、ここの家にはさっき自分を二階へ案内してくれた中年の女房一人しかいないようである。二階は六畳一間で、下も二間ほどのそう広い家ではない。
　女房はもう一度茶を運んできて、
「かまいませんから、お足をのばしてゆっくりくつろいでおやすみくださいまし」
　そういって降りていったきり、二度と二階へはあがってこなかった。
　竜平もまた、夜があけてきたのに、いまだに

大作をつれてきてくれない。
　――やっぱりだまされたのかしら。
　美沙緒はだんだん不安になってきた。
　しかし、階下にはさっきの女房が台所でごとごと朝の支度をしているらしく、ほかにはだれもいないようだ。そっと逃げ出そうと思えば、いつでも逃げ出せそうである。
　いざとなればそういう安心があるので、もう少し待ってみようと美沙緒は思った。
　それに、あのままお浜につれていかれていれば、今ごろどんな恐ろしい仕置きをされているかわからないのだ。それを思えば、ここにこうしていられるのは天国なのである。
　窓の雨戸の透き間からあかるい朝の日がさしてきたので、美沙緒は気がついて行燈だけは吹き消した。が、他人の家の雨戸を黙ってあけるのは悪いと思い、そのままそこに座っていた。

2

　――大作さまはどうかなすったのではないかしら。
　美沙緒はさっきからそれがいちばん心配だった。
　あの時、大作は一人は切ったが、まだ三人のくせ者たちに取りまかれていた。
　相手はおとといの晩からの因縁つきの長坂組である。久蔵に向かってきたのは長坂重蔵にちがいない。
　その後で、自分はすぐあの恐ろしいお浜につかまっているのだ。
　あの人に向かっている三人のうちの二人は、市川佐二郎と岡田真兵衛にちがいない。
「あの二人はわしより腕が上なんだ」
　後であの人はそういっていた。
「ちがいます。大作さまはあの二人と一歩も後へひかずに闘ったのですもの、大作さまのほう

が強いのです」
美沙緒はすぐにいいかえした。今でも美沙緒はそう信じている。いや、ぜひそうあってほしいと念じている。
しかし、敵はその二人の上にもう一人加わって三人なのだ。
いまだに竜平があの人をつれてきてくれないのは、もしやけがでもしたのではないだろうか。それも軽いけがで、自分で歩けるのならきっとすぐきてくれる人なのである。
――どうしよう、あたくし。
それがいまだにきてくれないのは、歩けないほどの重傷をうけたのではないかしら。
美沙緒はそう考えはじめると、居ても立ってもいられない気持ちになってくる。
――こんなことなら、あの時どうしても甲府へ行くのはいやだと言い張ってしまえばよかった。
今となってはそれも愚痴である。
「大作さまにもしものことがあったら、美沙緒だって生きてはいない」
美沙緒は思わずくちびるをかみながら、ああそうだ、あたしはお浜につかまったとき大切な懐剣を落としてきていると気がついて、それがまたなにか不吉な前じらせのような気さえしてくるのだ。
もう我慢ができなくなって思わず立ちあがろうとした時、がらりと階下の格子のあく音がした。
「まあ、あの人かもしれない」
はっとして耳をすませていると、
「いらっしゃいまし」
女房が出て客を迎える声がした。
「勝はまだ帰ってこないのか」
それはたしかに竜平の声である。
「ええ、まだなんです。あの病がおこると、三日でも四日でも家のことなんか忘れちまっているんでしょう」

「しょうがないやつだな」
後は小声になって二言三言なにかいっていたようだが、まもなく階段をあがってくる足音がする。
竜平は一人のようだ。
我ながら急に顔から血の気のひくのがよくわかった。
「やあ、どうして窓をあけないんだね」
竜平の冷たい顔がわらいながら入ってきて、そこへゆったりと座る。

3

「あの、大作さまはどうかなすったのでございましょうか」
美沙緒は必死な気持ちでいきなり竜平に聞いてみた。いまの美沙緒にはそのことよりほかになにも頭の中にないのである。
「ああ、そうか。あんたは大作といっしょに甲府へ出かけるところだったんだそうだね」
いまさらしく竜平がいう。
「はい」
「それがねえ、美沙緒さん、大作はなにを勘ちがいしたのか、わしの配下の同心二人を切ってどこかへ逃げてしまったらしいんだ」
「まあ――」
「いまわしの配下たちがそれぞれ立ちまわりそうなところへ手を打っているから、今日中にはつかまるだろうが、大作はどうも南蛮組となにか関係があるらしいんだ。だから、加役につかまっちゃ面倒だと思って逃げたんだね」
美沙緒は真っ青になって、がくりとうなだれてしまう。
「大体、無断で家出をしている美沙緒さんをつれて甲府などへ出かける気になったのからして、大作は間違っているんだ。現に、わしはあんたの兄弥十郎どのから、ぜひそっとあんたをさがして表ざたにならないようにつれてきてくれと、くれぐれもたのまれているんだ。これは

あんたの耳に入っているかどうかわからんが、わしは一度弥十郎さんにあんたを妻にもらいたいと申し入れて、あれにはいいなずけがあるからとことわられたことがある。兄上から聞いているかね」

　美沙緒は石のようにかたくなったまま顔をあげようとしない。

「それはまあそれとして、ここに困った問題がもう一つあるんだ。それは、堀留の柏屋惣兵衛から、これも内密にわしのところへ訴え出があって、柏屋はゆうべ三島家の用人長坂重蔵に三千両の支度金をわたして、あんたの身柄を一度引き取った。それを、船でつれて帰る途中、駒形の沖あたりで南蛮組の者に略奪された。ぜひ加役の力で取りかえしてもらいたいとたのまれていることだ。その南蛮組の手で略奪されたあんたが、今朝は大作といっしょに歩いている。この辺にも大作は南蛮組となにか引っかかりがあると見られてもしようがない理由がある。——そうだろう、美沙緒さん」

　竜平の顔に冷たい微笑がうかんでいるのが、美沙緒は見なくてもはっきりわかっている。

「そこで、結論はこういうことになるんだ。加役の大東竜平としては、大作はどうしても一度つかまえて事の真相を取り調べなければならない。これが一つ。もう一つは、美沙緒さんを三島家へ送りとどけたものか、それとも柏屋へわたすことにしたものか、これは美沙緒さんの考えにまかせてもいいとわしは考えている。これが二つ。そして、最後の一つは、美沙緒さんさえ承知なら、わしはこんどこそあんたを妻に申しうける権利があると思うんだ。前のいいなずけの件は、弥十郎さんはこんど自分から放棄していることになるからね。——どっちを取るね、美沙緒さん」

　竜平はいよいよ美沙緒の胸へ匕首を突きつけてきたのである。

4

——どうしよう、あたくし。

　美沙緒はかたくなにうなだれたまま口をきこうともしなかった。

　自分も、そしてあの方も、とうとうこの男のわなにおとされてしまったのだと思うと、目の前が真っ暗になってくる。

　竜平は時々兄のところへ碁を打ちにきていた。本当は碁をたのしむのが目的ではなく、あなたをもらいたいからああして兄上のきげんをとりにくるのですよと、兄嫁はいつだったかそういってわらっていた。そのころから美沙緒はなんとなく竜平が好きにはなれなかった。うぬぼれが強くて、どこか剃刀のように冷たいところがあるような気がしたからである。

　案の定、兄が縁談をことわったと兄嫁から聞いた時から、竜平はぱったり碁を打ちにこなくなってしまった。

「あれは怖い男よ」

　そのとき兄嫁はそういってまゆをひそめていたが、竜平がどうして怖い男なのか美沙緒にはわからなかったし、また聞こうともしなかった。

　その怖い男と兄嫁がいった意味が、いまはっきりとわかったような気がする。

「美沙緒さん、あんたはまだ考えがつかないようだな」

　竜平はしばらく無遠慮にこっちの体中を見まわしていたようだが、ふっと苦わらいをして、

「わしは今日忙しいんだ。大作のほうの始末もつけなければならないんでね。昼からもう一度ここへくるから、それまでに今のことをよく考えておいて返事をしてもらうことにしよう。いいだろうね」

　あらためてそう念を押してから、ゆっくりと立ちあがった。

　——大作の命ごいをするんなら今のうちだぞ。

そういっているのかもしれないと美沙緒にもわかったが、しかし、美沙緒はもう口をきく気力さえ失っていたのである。
やがて、竜平は黙って階下へおりていった。
——死ぬ前に、もう一度大作さまに会いたい。
昨日も美沙緒は散々そう思って泣いたが、今日もまたその絶望の淵へおとされてしまったのだ。
しかも、今日は自害しようにも、懐剣は鞘だけしか残っていない。
——そうだ、すきを見てここを逃げ出そう。
そうすれば、ひょっとしてあの方に会えるかもしれない。急に勇気が出て、思わず階下へ耳をすますと、
「おい、わかったろうな。二階のひとは大切なあずかりものなんだから、絶対に外へ出してはならん。しかと申しつけたぞ」
竜平の冷たい声が聞こえて、
「はっ、必ず気をつけます」
だれか男の声が答え、がらりと格子があいて、竜平は表へ出ていったようである。
——だめだ、やっぱり。
美沙緒はくらくらっとめまいを感じながらそこへ突っ伏して、すうっと意識がかすんでいくのをどうすることもできなかった。

5

そのころ——。
大作は重い胸を抱いて今戸橋をわたっていた。
美沙緒はどこへ運ばれたか、まったく見当がつかない。しかし、竜平が柏屋から今夜三千両の軍資金を借りることになっているというお浜の言葉が本当だとすれば、ことによると美沙緒はまた今戸の柏屋の寮へ運びこまれるのではないか、ふっとそう考えると、足は自然に今戸のほうへ向いていた。それ以外に当てがないからである。

「けどねえ、若だんな、あの寮にはゆうべ南蛮組が三千両どこかへかくしていったっていうんで、長坂組も柏屋もそっと人を入れている。その上、加役の見張りがついているんですからね、いくらあの野郎がずうずうしくても、そんなところじゃお嬢さんをくどくわけにゃいかねえんじゃないかな」
いっしょについてくる久蔵はあまり気乗りがしないようだ。
「じゃ、おまえ、たぶんここだろうと見当のついたところがほかにあるのか」
「あっしは野郎の屋敷じゃねえかと思うんだが、そうじゃないとすると、悔しいがまるっきり見当はつかねえ」
「いや、屋敷へはつれていくまい。もっとも、美沙緒があの男の妻になることを承知すればまた別だが」
「そんなことはねえ。野郎が無理にそんなこと押しつけりゃ、お嬢さんは自害しちまいまさ」
久蔵は怒ったようにいってから、
「お嬢さんは今朝どうしても甲府へ行きたくないようだった。かわいそうに、虫が知らせたんでさ、ねえ、若だんな」
と、泣きべそをかいているような声でいう。
「うむ」
大作はむっつりとそれっきり黙りこんでしまう。
こっちが悪いんじゃない、世の中が悪すぎるんだと思う。長坂重蔵や柏屋は札つきなんだからしようがないとしても、まさか竜平までこんな卑劣なまねをしようとは、実に心外である。
いや、ただ心外だけではすまないのだ。一刻も早く美沙緒をさがし出して取りもどしてやらないと、久蔵のいうとおり、切羽つまれば美沙緒は自害してしまうにきまっている。
——そうだ、こうして当てもなくさがしまわるより、むしろ竜平をつかまえて口を割らせるほうが早いかもしれない。

しかし、それはもし竜平が口を割らなければ切る覚悟をきめておかなくちゃならない。
「しようがないじゃないか。おれは切る」
大作は思わず口走っていた。
「切る――。だれをです、若だんな」
一足うしろから歩いていた久蔵が、びっくりしたように肩をならべてきた。
「久蔵、たのみがある。聞いてくれるか」
「聞きやすとも――。どんなことです、若だんな」
ちょうど今戸橋へかかって東の空が白々とあけてきたようだ。

6

「本当なら今ごろ内藤新宿あたりを歩いていたんだ」
白みかけた東の空を見て、大作は我にもなく愚痴が出る。
「お嬢さん、どこにいるんかなあ、今ごろ」
久蔵もついつりこまれてそういってから、
「おれは兄貴やねえさんにあわせる顔がなくなっちまった」
と、やるせなげにつぶやく。
「たのみというのはな、久蔵、これから竜平の居どころをさがして後をつけてもらいたいんだ。その竜平の行く先のどこかに美沙緒は監禁されている」
「ちげえねえ、若だんな。それがいちばん早道だった」
「やってみてくれるか」
「やってみやすとも。畜生、あっしはきっとお嬢さんをさがしてみせる」
「しかし、万一感づかれると命がない。それだけは十分気をつけてくれ」
「なあに、あっしはこれでも人の後をつけるのは名人なんだ。よく岡っ引きにおだてられて若い時は手伝ってやったもんでさ。それで、若だんなはこっちがすんだらどこへ行く気なんです」

「わしはここがすんだらとにかく一度深川屋へ帰ることにしよう」
「じゃ、お嬢さんの居どころがわかったら家へ駆けこめばいいんですね」
「うむ、そうしてくれ」
「よしきた。あっしはここから引きかえしやす。けど、若だんなも気をつけておくんなさいよ。あの寮は化け物屋敷もおなじなんですからね」
「ありがとう。――たのむよ、久蔵」
「合点だ」
久蔵は急に元気よくそこから引きかえしていった。
――かえって久蔵のほうが成功するかもしれないな。
そんなことを考えるだけ、大作は柏屋の寮はむだ足のような気がしているのだ。
そこここですずめが鳴き出してあたりはようやく明けてきたが、まだ人通りは一人もなかった。
大作は途中から草原を突っ切って川っぷちの道へ出た。表門はどうせしめてあるだろうから、裏木戸から柏屋の寮へ入ってみるつもりである。
陸を駕籠でくればもう寮へついているはずだが、途中で船にするとまだ着いてはいないことになる。
そんなことを考えながら、こっちから二軒目の柏屋の寮の裏口までくると、ふいに中から木戸があいて、ぎょっとしたようにそこへ棒立ちになったのは、昨夜の岡っ引き今戸の平吉だった。
「なんだ、だんなか」
平吉は苦わらいをしながら、往来へ出てきた。
「おはよう、親分。ゆうべは夜っぴてここへ詰めていたのかね」
大作は気軽に話しかけていく。
「そうですよ。――はあてね、今朝のだんなは旅支度のようでござんすね」

平吉はじろりと大作の身なりを見なおしている。

7

「親分、加役組の人はまだいるかね」
「いやすよ」
「たしかゆうべは親分もいっしょだったから聞いていたろうが、わしは大東とは幼友達なんだ。大東にちょっと会って聞いてみたいことがあるんだが、いつごろここへまわってくるか、その人に聞いてもらえないだろうかな」
大作はわざと用ありげにたのんでみる。
「それなら、だんな、自分で行って聞いてみなさるがいい。ゆうべここへ詰めていた方は、小宮松吉さんていう同心の方でさ」
平吉は昨夜大作が竜平からお軽くあしらわれていたのを見ているから、なんとなく冷淡である。
「そうか、それならそうしよう。会えるものなら今日会っておかないと、当分会えなくなるんでな」
「どこへ行くんです、だんなは」
「甲府へ出かけることになっているんだ」
「そいつは大変ですねえ。――じゃ、ごめんなすって」
平吉は口でそういうと、おじぎもしないで川上のほうへ歩き出す。
――あの男は町内の者によろこばれている岡っ引きじゃなさそうだな。
大作は苦わらいをしながら裏木戸から寮の中へ入って後をしめる。
別に小宮同心に会う必要もないんだがと思いながら、ふっと気がついた。もし竜平がここへ美沙緒をつれてくるようなら、小宮に使いをよこしてじゃまな人間を追っ払っておくはずである。
よし、やっぱり会ってみよう。
大作はそう決心して、まだ朝もやのただよっている林の小道へ入っていった。

それに、長坂組にしろ、柏屋にしろ、南蛮組が昨夜ここへ三千両の大金をかくしていったと見ている。ひょっとすると、加役組には知れないようにだれか見張りを入れているかもしれない。
そういえば、昨夜外蔵の前に寝かされていた坂田とかいうお浜のさそりの毒にやられた浪人者はどうなったろう。
そんなことを考えるとつい足音をしのばせるようになるから、人間という者はふしぎな根性を持っているものである。
内木戸から中へ入っていくと植え込み越しに例の書院の廊下が見え、二十五、六とも見える若い同心がぼんやりと一人でそこへ腰をおろしているようだ。
もう足音をしのばせる必要もないので、大作は大股（おおまた）にそっちへ近づいていった。
こっちへ気のついた小宮同心は、ぎょっとしたように立ちあがって、鋭い目を向けている。
「おじゃまいたす。小宮さんですな」
大作はていねいに会釈をしながら立ちどまった。
「貴公は――」
「ゆうべ裏の河岸でお目にかかった大東の友人の鈴村大作です」
「ああ、あんただったか」
小宮はすぐに思い出したようである。

8

「いまそこで今戸の親分に会って、小宮さんがここにいると聞いたんでおたずねしたんだが、大東は今朝いつごろここへくるかわかりませんか」
大作は気さくに持ちかけていく。
「さあ、わかりませんな」
寝不足がはっきりと顔に出ている小宮は、ふきげんをかくそうとしない。これもゆうべの竜

平の冷たい態度を見ていたからだろう。

「わかりませんか。じゃ、待っていてもむだかな」

「あなたは旅支度のようだが――」

「実は、甲府へ出かけるところです」

「竜平どのになにか用があるんですか」

「用というほどでもないんだが、ゆうべちょっと妙なうわさを耳にしたもんだから」

大作はわざと気をひくようなことをいう。

「どんなうわさですな」

はたして、小宮は少し乗ってきたようだ。

「これは柏屋の用心棒たちが話しているのをちらっと耳にしたんだが、ゆうべここの外蔵の前に素っ裸にされた浪人者らしいやつの死骸が一つころがされていたというんです。――本当でしょうかなあ」

「いや、我々が乗りこんだ時はそんなものはなかった。それはなにかの間違いでしょう」

なんだ、つまらない、といいたげな小宮の顔である。

本当なら加役組の同心として聞きのがせない話なのだ。それを自分が見なかったからといって頭から否定するようでは、あまり能のある男じゃないと見たので、

「そうですな、わしもちらっと耳にしただけなんだから、たしかにそうだとはいいきれないが、あなたがたは短筒の音を耳にしてからこの寮へ乗りこんでいる。その前にどんなことがあったか、これは一応調べてみたほうがいいと思ったんで、それを竜平に話しておこうと考えてわざわざここへ寄ったんです。やっぱり、わしのは素人考えだったかもしれない。とんだじゃまをしました。失礼――」

大作は人のいい顔をしながらおじぎをして、すたすた内木戸のほうへ引きかえす。

さすがに小宮ははてなというように目を光らせていたが、別に大作を呼びとめようとはしなかった。

――あの男ばかりをわらえないな。わしもとんだ見当ちがいをしたようだ。

大作は寮の裏木戸から外へ出て川上のほうへ歩きながら思わず苦笑している。

竜平からまだなんの使いもきていないようでは、美沙緒はたぶんほかのどこかへ運ばれてしまったのだ。お茶の水からこんな今戸の果てまできたのは、まったくむだ足だったことになる。

――生きているんだぞ、美沙緒、どんなことがあってもな。

胸いっぱいにあふれてくる悲痛な感情をかみしめながら、しかし大作にはもうどこをさがすという当てがない。一度深川屋へ帰ってみるほかはないのである。

しかも、足はなんとなく柳橋とは反対の橋場のほうへ向いているのだ。

9

――そうか、おれはつり浪人をさがしているんだ。

大作ははっきりとそう考えたとたん、思わずそこへ立ちどまっていた。

苦しまぎれに南蛮組の力にたよろうとする。その根性が我ながらあわれにも苦々しく反省されてくる。

物の考え方も、歩いている道もまるっきり違う南蛮太郎をたよってはならない。

それは公儀役人の中にも竜平のごとき俗物が何人もいる。彼らは南蛮太郎よりはるかに信頼のできない不信の徒ではあるが、その憎むべき彼らと闘うのは、あくまでも世の中の正道を行く自分たちの力でなければならないのだ。

――だいいち、人の力にすがって美沙緒を取りかえそうとするような男を、美沙緒がよろこんでくれるはずはないじゃないか。

大作はそうはっきりと反省した。万一、おれの力が竜平に負けるようなら、そんな弱いやつは世の中に生きていたってなんの役にも立たな

いということになるんだ。
　――よし、おれはきっと自分の力で闘ってやる。
　そして、ふっと気がつくと、そこはすでに今戸町の外れらしく、そこの船宿らしい表口の雨戸をあけてふらりと河岸へ出てきた若い船頭らしい男がある。
　見るからにたくましい体つきの男で、ちらっとこっちを見ると、
「だんな、おはようござんす」
　案外愛想よくあいさつをしながら、前の桟橋へおりていってざぶざぶと川の水で顔を洗っている。
「船頭、朝っぱらからすまんが、猪牙をひとつ柳橋へやってくれぬか」
　大作はそこへ行ってたのんでみた。
「いそぐんですか、だんな」
　船頭はもう顔をふきながら聞く。
「うむ、いそぐんだ」
「ようござんす。まだ朝飯前なんだが、ひとつやっつけやしょう」
「そうか、すまんなあ」
「なあに、稼業でござんすからねえ。――ちょいとここでお待ちなすって」
　船頭は家へ入っていくと、すぐに艪とござをかかえて出てきた。
　そこにもやってある猪牙舟を引き寄せて、ござを敷き、
「さあ、お乗んなすって――」
　といっているところへ、相棒らしい船頭がたばこ盆と茶道具をのせた盆を運んできて、
「だんな、おはようござんす」
　と、これはまだ寝まき姿だが、きびきびと持ってきたものを手わたしてくれる。
「ありがとう。すまんなあ」
「どういたしやして――。兄貴、じゃ行ってきなせえ」
「うむ、けえってから飯にするからな」

　兄貴の船頭は舟のもやいを解いて、棹を一つぐいと桟橋の杭へ突っぱる。
　猪牙は朝の澄んだ水の上をゆらりと力強く岸放れした。

10

　日の出前の川風はすがすがしいが、肌に少し冷たかった。川をのぼりくだりする船もまだ数えるほどしかない。
　――もし美沙緒を船で今戸の寮へつれこむとすれば、その船に途中で出会うかもしれないな。
　大作はそう思いながら、いまちょうどこぎぬけようとしている柏屋の寮の裏木戸のあたりを見ていたが、ひっそりとして人の出入りもないようだ。
「だんな、今日もいい天気になりやすねえ」
　なめらかに気持ちよく猪牙を進めていく若い船頭が、艫から声をかけてきた。
「そうらしいなあ」
　川下のほうを目でさぐりながら、大作はうわの空で答える。その目の前をかもめが二羽、すうっと水面をすべってきては反転して仲よく空へ舞いあがっていくのがいかにもたのしそうで、美しくも悲しい。
　――本当なら、今ごろ、わしも美沙緒ともう甲州路へかかっているころなんだ。
　胸の中を秋風が吹きぬけていくように味気なくせつない。
「ねえ、だんな、あっしはどこかで一度だんなにお目にかかったような気がするんだがなあ」
「そうかなあ」
　大作は我ながら気のない返事をする。
「あれえ、素っ気ないんだなあ。だんなはなんか心配ごとがあるんですね」
「うむ」
「もしや、だんなはゆうべやっぱり猪牙でここを下って柳橋へ行った方じゃないんかね」
「なにっ」

はっとして振りかえってみると、若い船頭は邪気のない顔をしてわらっている。

「そうか、思い出した。貴公は、ゆうべさっきの仲間と二人で船をこいですれちがった時、つり浪人のことづけをくれた船頭さんだな」

「貴公だの、船頭さんだのって、よしておくんなさいよ、照れっちまわあ。あっしは今戸の船米の船頭で忠吉っていうんでさ。だから、忠公でたくさんでさ」

「そうか、あの時の忠さんか。ゆうべはどうもありがとう」

大作は思わず頭をさげている。

「だんなはたしか鈴村大作さんてんですね」

「うむ、その鈴村だ」

「あっしはさっきぱったり顔があった時、あれえ、どこかで見た顔だなあと思ったんだが、だんなに猪牙をたのまれた時、ああ、ゆうべの鈴村さんだったと、すぐにわかりやした」

「そうか――。わしはうっかりしていた」

「そりゃ、あっしはあのとき月をしょっていたし、だんなの顔はまともに月をうけていやしたからね。――それで、だんなはゆうべ帰ってお嬢さんに会ったんでしょう」

「うむ、たしかに会った」

「お嬢さんよろこんだでしょう。お嬢さんはとってもだんなが好きらしかったなあ」

「本当をいうとなあ、忠さん、美沙緒よりわしのほうがもっとよろこんだんだ」

「あれえ、正直なんだなあ、だんなは」

忠吉はにやにやわらい出す。

11

猪牙は吾妻橋の下をくぐりぬけて、ようやく東の空に朝焼けがしてきたようだ。まもなく朝日がのぼるのだろう。

右手の浅草河岸のほうの町筋はもうほとんど表戸をあけて、早出の職人たちがちらほらと道をいそいでいるのが目につく。

「ねえ、だんな、だんなは旅支度のようだが、どこへ出かけるところなんです」

若い忠吉が艪の手を休めずに、ふっと気がついたように聞く。

「実は、美沙緒をつれて甲府へ行く気だったんだ」

「へえ、そいつはおかしいな。難波のだんなは、ゆうべ船の中で、甲府へなんか行かなくたっていいってお嬢さんにすすめていたようだったがなあ」

忠吉はうっかりそれを口にしてしまったようである。

「難波のだんなというと、つり浪人の太郎さんのことか、忠さん」

大作はすかさず聞きかえす。

「そうですよ、その太郎さんなんでさ」

「太郎さんは今戸に住んでいるんかね」

「たぶんそうだろうと思いやす。よくうちをごひいきにしてくれやすからね」

忠吉は気軽に答えながら、内心しまったといいたげな顔色だ。

それが大作にもすぐわかったので、

「実はなあ、美沙緒も、難波さんがそういってくれたし、甲府へはあんまり行きたくないようなことをいっていたんだ」

と、軽く話をもとへもどす。

「そうでしょうってさ。お嬢さんはだんなが好きなのに、いまさらいいなずけさんをさがしになんか行きたくねえはずなんだ。で、どうしやした、お嬢さんは」

「お茶の水でまたゆうべの五人組み強盗が出たんだ」

「なんですって――」

「わしと供をしていた深川屋の久蔵と二人で賊と闘っているうちに、さそりのお浜が出てきて、美沙緒を桜の馬場のほうへさらっていったんだそうだ」

「そいつはたいへんだ。そこで、だんなはどう

したんです」
　忠吉は顔色をかえて、ぐいぐいと艪をこぎ出す。
「そこへ、その桜の馬場のほうから加役の大東組が御用ぢょうちんを振りかざしてきて、五人組みはそのまま逃げ出したが、わしが久蔵と二人でいそいで桜の馬場へ飛びこんでいくと、また覆面をしたやつが二人、いきなり切りかかってくるんだ」
「じゃ、だんな、五人組みじゃなくて七人組みじゃありませんか」
「いや、それがな、その二人を幸い切り倒して湯島通りのほうへぬけようとすると、さそりのお浜がうしろから呼びとめて、今のは加役の組下の同心だ、美沙緒は大東竜平が女駕籠に乗せてどこかへつれていったと教えてくれたんだ」
「へええ、——さあわからねえ」
　忠吉はきょとんとした顔になって、こんどは艪の手が急にのろくなる。

12

「ねえ、だんな、お嬢さんが加役さんに助けられたんなら、無事にだんなの手にかえってくるはずでしょう」
　忠吉がふしぎそうに聞く。
　猪牙はすでに蔵前沖までこぎ下って、すぐそこに首尾の松が朝露にぬれて緑ふかく見えている。
「それがなあ、竜平はおれの幼友達だからあんまり悪くいいたくないんだが、実は美沙緒をねらっているらしいんだ」
「なあるほどねえ」
「それから、これはお浜のいうことだから当てにはならないが、竜平は今夜堀留の柏屋から三千両の軍資金を借りることになっているそうだ。加役は入費がかかるからな。そのためにも美沙緒が必要なのかもしれぬ」
「そうか、それでだんなは、もしやお嬢さんが

今戸の柏屋の寮へ運ばれているんじゃねえかと思って、いそいでやってきてみたってわけなんですね」
「正直にいえばそうなんだが、残念ながらこれはわしの見当ちがいだったようだ」
　大作は思わずため息が出てくる。
「その加役の竜平って野郎はひでえやつですねえ、だんな。友達のいいひとをねらうなんて、男じゃありませんや。——難波のだんなが、当節の役人の半分ぐらい盗人（ぬすっと）よりたちが悪いっていうけど、本当なんだなあ」
　半分はひとりごとのようにいって、若い忠吉は感心しているようだ。
「忠さん、難波のだんなは、昨日わしに、おれは向こうからほれてくる女はみんなかわいがってやるんだって威張っていたが、本当なのかね」
　大作はわらいながら聞いてみた。
「さあ、どうだかなあ」
　一度はそらっとぼけようとしたが、
「難波さんはねえ、だんな、頭は切れるし、腕は立つし、まあ、男の中の男っていうなあ、ああいう人なんだなとあっしは思っているんだが、女に弱いのがたった一つ玉に傷かもしれねえんでさ。もっとも、女のほうから夢中になるんだからしようがねえけどね」
　と、本音を吐いてちょっと心配そうな顔をする。
「そうか、うらやましい話だなあ」
「あれえ、だんなは口がうまいなあ。本当は、そんなの、だんなは感心しねえんでしょう」
「いや、ただまねをしようと思わないだけだ。また、まねをしようったってわしにはできないことだしな」
「そうですともさ。だんなはお嬢さんのことばかり考えてあげていりゃいいんだ。かわいそうに、早く助けてあげねえと、お嬢さんどうされちまうかわかりやせんぜ」
「うむ、今日中にはきっと助けてみせる」

話がこうもとへかえってきては、もう難波のことへもどしにくい。

しかし、これで忠吉はおそらく難波こと南蛮太郎の子分らしいとわかった。当てにするわけではないが、美沙緒の話はおそらく太郎の耳にも入るだろう。

猪牙はまもなく神田川へ入るはずである。

13

大作の猪牙が柳橋の深川屋の桟橋へついたのは、朝日がのぼってからまもなくであった。

「御苦労だったな、忠さん」

大作は船賃にそえてなにがしの祝儀を忠吉にわたし、礼をいって桟橋へあがった。

「ありがとうござんす」

忠吉はぺこりと頭をさげてから、

「だんな、もし今戸のほうでなにかお嬢さんの手がかりがつかめたら、すぐ深川屋さんのほうへお知らせしやす」

と、親切にいってくれた。

「ありがとう、なにぶんたのむ」

大作は忠吉に別れて往来へあがった。

この辺は色街のうちだから、まだ往来は真夜中のように静かである。

大作は往来を横切って、今朝暗いうちに一度出た深川屋の油障子をあけて、悄然と土間へ入っていった。

「おや、若だんな――」

あれから二度寝をしていま起き出したばかりらしいおときが、炉端で一服つけながら、大作の顔を見るとびっくりしたように目をみはって、

「どうかしたんですか、若だんな――お嬢さんは」

と、急に顔色が変わってくる。

「すまん、おとき。またやられてしまったんだ」

大作はそこに立ったまま照れたように寂しい微笑をうかべている。

「やられたっていうと――」

「ゆうべの五人組み強盗がな、お茶の水で待ち伏せしていたんだ」

「長坂たちですか」

「うむ、美沙緒はまたお浜につれていかれたが、それが桜の馬場をぬけて往来へ出たとたん、ゆうべの加役大東組が出てきて、美沙緒はお浜の手から竜平に横取りされたらしいんだ。しかも、お浜の話だと、竜平はちゃんと女乗り物まで用意してきていたそうだ」

「うちの久蔵はどうしたんでしょう」

「久蔵は竜平をさがし出してあとをつけてみようということになって、今戸橋で別れた」

「じゃ、若だんなはもう今戸の寮へ行ってみてきたんですね」

「うむ」

「お嬢さんは大東さんの手でお屋敷へつれもどされるなんてことはないんですか」

「それはまあないだろう。竜平は前から美沙緒をもらいたがっていたらしいし、あの男は平気でどんなまねでもやれるずぶとい根性を持っているんだ」

「まあおあがんなさい、若だんな。いつまでそんなところに立っていたってしようがありません」

まるで自分のおもちゃをよその子に取られて帰ってきた子供みたいといいたげなおときの顔が、思わず目でわらっている。

「島七はどこへ出かけたのか」

大作は上がり框に腰をおろして、まだ真新しいわらじをぬぎながら聞いてみる。

「ええ、今日はつりのお供で、あいにく出かけちまったんです。どうしたらいいかしらねえ、若だんな」

おときは胸へ手をさしこみながら暗い声になる。

14

今のところ、大作のたのみの綱は、久蔵の知らせを待つ以外になにもなかった。しかも、その久蔵からいつどんな知らせがくるのか、それは来てみなければわからない。

——おれはこんなことをしていていいのか。

いつまでもここでおときを相手に愚痴ばかりこぼしていたってしようがないじゃないか。ふっとそう気がつくと大作は自分の無能さが急に情けなくなってくる。

「おとき、わしにかまわないで用をしてくれ」

さっきから話し相手になっているおときこそいい迷惑だろうと思ったので、大作はすまなそうにいった。

「いいえ、用なんてかまわないんですけど、ねえ、若だんな、こんな時おみくじなんか当てにならないでしょうかねえ」

「そうだなあ、なんだか苦しい時の神だのみみたいでおかしいじゃないか」

「じゃ、易者はどうでしょう。矢ノ倉にとてもよく当たる易者で、白竜子っていう先生がいるそうですよ」

「なるほど——。易はいいかもしれないな」

おときはまじめなのだから、それも当てにならないとはいいかねる大作である。

「あたしはねえ、若だんな、長坂やお浜のほうだってお嬢さんを取られっ放しにしちゃおかないと思うんです。きっと今ごろは八方へ手わけをしてさがしているにちがいありません。だから、早くなんとかしてあげなくちゃと思うんですけれど、当てがなけりゃどうしようもありませんものね」

おときにすれば、だから易を見てもらってこいといいたいのだろう。

「よし。じゃ、その白竜子という先生をたずねてみよう」

当てもなくじっと座りこんでいるのはおときに対しても気恥ずかしくなってきたので、大作はともかくも外へ出てみることにしようと思った。

「そうなさいよ、若だんな。物は試しってことがあるじゃありませんか」

目の前に傷心の大作をいつまでも見ているのは、おときとしてもつらかったのだろう、ほっとしたようにそういった時、がらりと表の油障子があいた。

見ると、大作が昨夜今戸河岸で出会った加役大東組の与力筆頭伊藤権太夫が、配下の若い同心二人をしたがえてつかつかと土間へ入ってきた。

「浪人鈴村大作どのだな」

陰険そうな鋭い目を向けて、権太夫がいきなり大作に聞く。

来たなと思った大作は、

「さよう、鈴村大作はわしです」

そう答えながら、少し上がり框のほうへひざを進めて座りなおす。

「拙者は加役大東寅太郎さま配下の与力伊藤権太夫だが、役目によってたずねたい儀があり、まかり越した者です」

「承知しました。なんなりとおたずねくだされたい」

大作は悪びれずにじっと伊藤の目を見あげる。

炉端のおときは思わず息をのんでいるようだ。

15

「あなたは今朝がたまだ暗いうちにお茶の水の桜の馬場の前で覆面の五人組みに襲われたそうだな」

伊藤は役目によって尋問をはじめたようだ。

「そうです」

「そんな時刻に、どこへ行かれる途中だったのかな」

「美沙緒をつれて甲府へ行くところでした」
「美沙緒というと、三島家の令妹美沙緒どのだな」
「そうです」
「その折、大東組配下の同心木下五郎右衛門の組が五人組みを召し捕りに向かい、あなたと出会って二、三尋問をした。その時、美沙緒どのはいっしょにいなかったそうだが」
「美沙緒はすでに五人組みのまわし者にさらわれていたのです」
「木下が尋問なかばに、供の者がきてあなたにそれを告げた。すると、あなたはいきなりその供といっしょに桜の馬場へ駆けこんでしまった。——そうなのかね」
「そうです」
「そのとき木下は、自分は桜の馬場から出てきたのだが、それらしい者、つまりさらわれていく美沙緒どのは見かけなかったとあなたに注意したそうだが——」
「桜の馬場は広いし、しかもあたりはまだ真っ暗なので、木下さんだけの目を信用するわけにはいきませんからな」
「なるほど——。あなたは人の目が信用できないから、桜の馬場でなおも制止しようとする加役配下の同心二人を怒りにまかせて切って駆けぬけたということになるのか」
　来たなと思ったので、
「それは違う」
　と、大作ははっきり否定した。
　それは、さっきから尋問を書き取っている同心が思わず筆をとめてこっちを見たほど、強い声になっていた。
「どう違うのかね」
　伊藤が冷静な声で、すかさず反問してくる。
「その二人は覆面のままものをもいわずにわしに切りかかってきたんだ」
「真っ暗やみの中で、しかもあなたは逆上していられる、あなたが木下の目を信用できないように、わしもあなたのその時の目を信用するわけにいかぬ。それとも、だれかその場を見ていた証人がおありかな」
「供の久蔵がちゃんと見ている」
「そのほかにだれかいるかな」
「わしはそんな証人をさがしているより美沙緒を助けてやりたい気持ちのほうが先だったんだ」
「その美沙緒どのについても、——美沙緒どのは、ゆうべ堀留の柏屋惣兵衛が今戸からおなじ船に乗せて送っていく途中、駒形あたりの沖で南蛮組の者に略奪されたという届け出が柏屋から出ている。すると、当然南蛮組の手におちているはずの美沙緒どのが今朝あなたとお茶の水を歩いているということは、あなたと南蛮組の間になにか関係があると見るほかはない。——一応わしといっしょにこれから組屋敷へ同行されたい」
　伊藤はいよいよ奥の手を出してきたようである。

16

　加役は屋敷に牢もあるし、お白州もひらけるようになっている。うっかり同行して、吟味中入牢ということにでもなれば、牢内で一服盛られてもそれまでの話で、おそらく竜平にはそんな下心があるのだろう。
　大作は念のために聞いてみる。
「あなたのいわれるその桜の馬場の同心二人というのは死んだのですか」
「いや、重傷だがまだ息はある」
「すると、その同心二人の口からわしの名が出たわけですな」
「そういうことになる」
「ほかにもだれか証人があるのですか」
「当人の口から名前が出ればそれでたくさんではないか」
「では、念のためにその同心二人の姓名をうか

がっておきたい」
「なにっ」
伊藤はむっとしたように大作をにらみながら、
「そんなことは同行すれば自然にわかることだ。黙ってお立ちなさい」
と、一本きめつけてくる。
「それは伊藤さん、少しおかしい。その同心二人はあなたがたの組の者だ。しかも、わしのいうこととその二人のいうこととは、あきらかに事実が反対になっている。後々のためにもわしはその同心二人の姓名を聞いておく必要があるのです」
「お黙りなさい。伊藤権太夫は加役配下の権限をもってあなたを連行にきているのだ。いうことがあればお白州でいうがよろしい。たって同行をこばめば、仮なわを打ってもつれてまいるぞ」
伊藤は居丈高になってきた。
「よろしい、あなたがあくまでも加役の権限を振りまわすのなら、わしはわしの分限で即刻の同行はことわる。これをお目にかけよう」
大作は昨日定町回り小林勝之進からとどけてもらった遠山左衛門尉配下内与力の鑑札を取り出して伊藤にわたした。
「なにっ」
伊藤はその鑑札の表裏を素早く見て内心あっと思ったらしいが、さすがに顔色には出さず、
「失礼いたした。これはおかえしいたす」
と、鑑札を大作にもどし、
「あなたがそういう身分では、あなたをここから連行するというわけにはいきませんな。しかし、あなたと南蛮組との関係、桜の馬場で加役配下の同心二人を切った嫌疑は、その鑑札一枚で晴れたというわけではない。いずれ当方から直接北町奉行所へ掛け合いますから、そのつもりでいられるがよい。今日はこれで引きとることにいたす」

老猾な伊藤はにやりと冷笑をうかべて、同心たちをうながし、ゆうゆうと土間から出ていった。
「若だんな、なんて憎いやつなんでしょう。塩をまきましょうね」
おときはほっとしたように台所へ行ったが、
——こりゃいかん、久蔵があぶない。
万一、久蔵が彼らの手であげられると虚構の罪を作るために拷問にかけられるおそれがあるので、大作はいきなり大刀を取って立ちあがった。

17

大作はふっと気がついて、もう旅支度でもあるまいと思い、手甲脚絆を取って普通の身なりになおした。
門口へ塩をまいてきたおときが、
「若だんな、お出かけになっても大丈夫なんですか」
と、心配そうに聞く。
「うむ。大丈夫だ。あんなやつらに負けちゃいられない」
「本当にねえ。若だんなを罪におとそうなんて、あんまりたちが悪すぎます」
「恋のうらみは怖い。しかも、向こうには欲がからんでいるんだ。正気の沙汰とは思えない」
「それなんです。おまけに敵は若だんなに自分たちの悪だくみを見破られてしまったんですから、躍起になって若だんなをねらうんじゃないかと思うと、あたしそれが心配で」
「なあに、そいつはこっちも十分覚悟の上だから、めったにやみ討ちなんかくらうものか。じゃ、ちょっと出かけてくる」
久蔵をさがしに行くんだとは、わざといわなかった。余計な心配をさせることはないと考えたからである。
朝が早かったから、もうおひるごろの気はするが、外へ出てみるとまだやっと四ツ(十時)ご

ろの日ざしである。

　さて、いきおいこんで出てきたようなものの、久蔵はどのへんにいるのかまるっきり見当がつかない。

　——とにかく、一度桜の馬場へ行ってみよう。

　つまり振り出しへもどることになるんだなと、大作はひそかに苦笑しながら、浅草橋のたもとを突っ切って左衛門河岸のほうへ入っていった。

　——美沙緒も久蔵も無事でいるんだぞ。

　そう心に念じながら、大作の足はぐんぐん早くなっていく。

　そのころ——。

　妻恋坂の上の鳶職勝造の家の二階へ軟禁されている美沙緒は、何度かここを逃げ出そうとして階段口に立ってみたが、その度に階下で人のひそひそ話がする。留守番は女房一人のようだが、どうやら家の中にも玄関の外にも竜平の見張りがいるらしいとわかってきた。

　あとは窓をあけてそこから逃げるほかはないが、その窓はまだ雨戸がしめたままになっている。雨戸をあければ、その物音を聞きつけてきっとだれかあがってくるにちがいないと思うと、美沙緒はそれがいやさに、どうにも雨戸をあける勇気が出なかった。

　——どうすればいいのかしら。

　いくら考えてみても、世間知らずの美沙緒にはなんの考えも出てこない。恥ずかしい話だが、子供のようにただ泣くよりほかに知恵がないのである。

　——大作さま、早く助けて。

　そこへ突っ伏して、両腕の上へ額をのせ、さめざめと泣いているうちに、疲れきっている体だからついうとうとと睡魔におそわれてくる。

　眠ってはいけないと思いながら、とうとう眠っていたらしい。

18

　美沙緒はだれかに肩をさわられたような気がして、はっと目がさめ、いそいで身を起こした。

　その目に近々とうつったのは、いつの間にきたか竜平の顔で、竜平はあらためて両手で美沙緒の肩をつかみ、ゆがんだような微笑をうかべながら、その目が野獣のようにぎらぎらと燃えている。

　一瞬ぽかんとしていた美沙緒は、次の瞬間、男がなにを求めているかをとっさに感じて、激しい恐怖に体中をかたくしながら、

「いけません」

　はっきりと口走ってしりごみをしている。

「いけない——?」

　竜平は聞きかえしながら苦わらいをした。が、肩の手にはいっそう力がこもって、このまま押し倒そうか、それとも胸の中へ抱きすくめてやろうかと、こっちの出方を待っているようである。

「いけません」

　美沙緒は真っ青な顔になりながら必死に後ろへさがろうとする。

「どうしていけないんだ。おれがきらいなのか」

　男の自尊心を傷つけられた竜平は、たちまち狂暴な顔になって、力いっぱい美沙緒の肩をゆする。

　その度に美沙緒の首ががくがくとゆれて、いまにも髷がくずれそうになる。

「ゆるして——」

　美沙緒には男の手を払いのけるほどの勇気はもうないようである。ただあえぐように口走るだけだ。

　——このまま押し倒してしまえばそれまでの話じゃないか。

　そんな衝動に駆られているらしい竜平の心がはっきりと濁った目の色にあらわれて、美沙緒は絶望しながら、

「ゆるして――」
と、もう一度消え入るような声でいった。
「美沙緒、大作が死んでもいいんだな」
竜平は思わず脅迫めいたことを口にして、しまったと思った。それはあきらかに大作に負けたことになるからだ。
――くそっ、もうこうなれば腕力だ。
破れかぶれになった竜平は、いきなり美沙緒をそこへ押し倒して、上からのしかかるように両肩を畳へおさえつける。
薄暗い光の中で、美沙緒の娘らしい派手なすそがみだれ、真っ白な脛が目をかすめる。
「いけません、――ゆるして」
美沙緒の悲しそうな目が哀願するように見あげてくる。
「おまえは、おまえは大作に――もう大作にこの体を」
かっと竜平の胸へ火のような嫉妬がうずをまいてくる。
「助けて、――大作さま」
それを必死に祈っているような美沙緒の目から、すうっと大粒の涙があふれてくる。
「うぬっ、もう一度いってみろ」
反抗すればまだ鬼にもなれる。が、美沙緒は身もがきする力もなく、ひたすらに大作を求め、その幻影にすがり訴えているようだ。
「大作さま――、助けて」
涙にぬれた目が空にただよって、もう竜平の顔は見ていないようだ。

19

竜平は煩悩に駆り立てられて、何度かそのまま美沙緒の上へ体ごとのしかかっていこうとした。
しかし、今はあまり反抗しなくても、いざとなれば金切り声をあげるかもしれない。下に配下の者がいるから、まさか二階へあがってこないまでも、男がいやがる女を手ごめにしたと思

われるのは、さすがに竜平の自尊心がゆるさない。
いっそ絞め落としてからとも考えた。
男がここまで煩悩をさらけ出して目的を果たさずにやめると、後まで美沙緒に頭があがらなくなる。ものにしてしまえば男のほうが勝ちなんだ。
――もっとずぶとくなれ。
そうも自分をしかってみたが、ここまできてもまだいちずに大作という男を思いつめているような美沙緒のきれいなうるんだ目を見ていると、竜平はなんとなく興が冷めて、急に憎悪さえ感じてくる。
「美沙緒、おまえどうしてもおれのいうことはきけないんだな」
「ゆるして――。大作さまに会いたい」
「よし、起きろ」
おれは美沙緒をあきらめる。そのかわり、思いきり苦しめさいなんで柏屋へ売ってやる。だれが大作などに会わせてやるものかと、そんな残忍な気持ちがむらむらっと胸の中へうずをまいてきた。
竜平がおさえつけていた手を放して少し離れた座布団の上へかえると、美沙緒ははっと起きあがって、なにより乱れたすそをいそいでなおしている。
「美沙緒、おれはもう乱暴なまねはしないから、そのかわり正直にいえ。いいだろうな」
「はい」
髪のみだれをなおそうともせず、両手を畳へついて体を支え、肩で息をはずませている。その女になりきっている体つきが目に焼きつくほどなまめかしい。
「おまえ、もう大作に体まで許しているんだろう」
「はい」
美沙緒ははっきりとうなずいて、ほおを赤らめながら、

「あたくし、もう大作さまの妻です」
と、つぶやくようにいう。
「ふうむ。じゃ、ゆうべもうさんざかわいがられてしまったんだね、深川屋の二階で」
竜平はわざと露骨な言葉を口にしながら、やっぱり悔しくてたまらない気がしてくる。
「はい」
美沙緒は消え入るような声で答え、こんどは耳まで火のように燃えてきたようだ。
「気の毒だがなあ、大作はもう牢屋へぶちこまれてしまったぜ。あの男は南蛮組といっしょに強盗を働いていたことがわかったんだ」
「違います。大作さまはそんな方じゃありません」
美沙緒はぎょっとしたように座りなおって必死に顔をあげる。
「しかし、証拠があるんだからしょうがねえだろう。うちの屋敷の牢に入れてあるんだから、当人の口からそれが聞きたいんなら会わせてやってもいいな」
竜平の顔は白鬼のように冷たい。

20

美沙緒は体中をかたくしたまま、もう顔をあげようともしない。
そのかっこうが竜平には、あなたのいうことなど信用できないといっているようにも見える。
「本当にしていないようだな、美沙緒」
竜平はむっとしたようにいった。
それでもまだ答えようとしない。
「そうか、おれのいうことが本当にできないんならそれでもかまわない。しかし、これだけはいっておくぞ、美沙緒、後でうらまれるのはいやだからな」
竜平はせせらわらいながら、
「南蛮組に関係があるとわかれば、大作はどうせ獄門首だ。そんな男に身をまかせたおまえは、自分のふしだらとあきらめるよりしょうがない。だいいち、親がわりの兄の屋敷を無断で飛び出して、大作のような男にうまくだまされるなどというのは、日ごろからおまえの心の中に淫婦の性根があるからなんだ。わしはもうおまえを武士の娘だとは考えないからそう思うがいい」
と、憎々しげにいい放つ。
ついさっき自分がやろうとした醜い行動などけろりと忘れて、竜平は美沙緒が本当に憎くなってくる。いや、おれのいうことをきかないような女は、どうなったってかまうもんかと、悔しさが怒りになってこみあげてくるのだ。
「おい、聞いているんだろうな、美沙緒。おれはおまえに今朝もいっておいたはずだ。おまえの兄貴からは、美沙緒がつかまったらそっと屋敷へつれてきてくれとたのまれている。また、堀留の柏屋惣兵衛からは、美沙緒は三千両で自分が三島家から買った娘なんだから、ぜひさがしてくれと泣きつかれているんだ。つまり、おれがおまえを三島家へつれていっても、結局はおまえの体は柏屋へ運ばれてしまうんだ。そんな面倒な手数をかけるより、いっそおれの手から柏屋へわたしてしまったほうが、弥十郎さんも手間がはぶけてよろこぶだろう。柏屋は評判の女好きで、たいてい女は三月とたたないうちに生き血を吸いとられて死んでしまうそうだ。おまえも男はきらいのほうじゃなさそうだから、散々柏屋にかわいがられて、うれし泣きに泣きながらあの世へ行くがいいだろう。——じゃ、たのしみに待っているがいい」
竜平はいいたいだけのことをいってすっと立ちあがった。
美沙緒の顔は死人のように青ざめているようである。
——ざまあ見やがれ。
冷酷な竜平はもうすっかり鬼になっていた。
とんとんと二階からおりてくると、ちょうど

配下の伊藤権太夫が格子をあけて入ってくるところだった。
「どうした、権太夫」
竜平はそばへ寄って声をひそめながらいそがしく聞く。
「失敗でした」
「なにっ」
「あの男は北の奉行の内与力の資格を持っています」
権太夫はいまいましそうにいうのである。

21

「とにかく、外へ出よう」
竜平は後のことを配下の者たちにいいおいて、権太夫といっしょに外へ出た。
密談は歩きながらするのがいちばん安全なのである。
「そうか、大作がどうして屋敷を出たか、女道楽のできるやつじゃないし、実はおかしいと思っていたんだ」
妻恋坂を明神下のほうへ下りながら、竜平は吐き出すようにいう。
「そうですな、あの人は女道楽のできる柄じゃない。大道で居合い抜きぐらいはやれるでしょうがねえ」
権太夫は苦わらいをしている。
「あれは北の遠山とは近い縁びきになっている。おまけに冷や飯食いの身分だし、遠山は隠密に使うつもりなんだろう」
「なるほど――」
「それも不器用なやつだから、ほかの役には立たない。配下の隠し目付に使っているんだ」
「すると、ちょいとまずいことになりましたなあ」
こっちは明らかに役目を嵩にいいがかりをつけ、屋敷へ引っぱりこんで虚構の罪におとそうとしているのだ。しかも、証拠こそないが、桜の馬場では同心二人にやみ討ちをかけさせている。

一つ間違うと、こんどは逆に町奉行所のほうからこっちの非道を上司へ申告されないとはかぎらない。
「娘のほうはどうしました、竜平どの」
「美沙緒の口がいちばんあぶない。ひとつ考えてみよう」
「すると、いうことをきかないんですか」
「うむ。あれはもう大作のものになっているらしいんだ」
「なるほど、そういえば二晩いっしょに深川屋へ泊まっていますからな」
竜平は返事をするのさえ癪にさわってくる。あんなに組み敷かれてまで大作の名を呼んでいた。それだけに、大作にはどんな甘い顔を見せていたか、――これだけはあきらかにこっちの負けだった。
「しょうがねえ、二人ともうまく口をふさいでしまうんだ」
「といいますと――」
「美沙緒を今戸の柏屋の寮へ運んで大作を呼び出す。下手人は長坂組の浪人どもということにする」
こんどは権太夫が急には返事ができないようだ。
「この策はまずいか、権太夫」
竜平はきげんをとるように聞く。
「今戸の寮は南蛮組の目が光っていやしませんか、若だんな」
「そういえばそうだなあ」
一応なるほどとは思ったが、
「権太夫、その南蛮組をついでに御用にできれば、大東組の株をあげることができるんだ。なにかいい策はないか」
と、若いだけに竜平はそんな野心に燃えてくる。
「なるほど――」
権太夫は大きくうなずいてみせる。

日が暮れる

1

その日の八ツ（二時）ごろ、山ノ宿河岸の船宿平野屋へ、三十がらみの大店の手代とも見える身なりの、物腰のおだやかな男がなにか用ありげに入ってきた。

「おいでなさい。舟の御用ですか」

ちょうど店にいた船頭の竹次が客だと思って愛想よくむかえると、

「いや、舟じゃないんだ。わたしは堀留の柏屋の番頭で庄吉という者なんだが、だんなにいいつけられて、ちょいと妙なことを聞きにきたんだがねえ」

と、客は意味ありげにわらいながら上がり框へ腰をおろす。

「てえと、どんな御用です」

「失礼だけど、おまえさんはここの親方さんかね」

「あっしはここの船頭で竹ってんですがね、あいにく親方は出かけているんでさ」

「竹さんはここは長い人らしいな」

「というほどでもありやせんが、もう五、六年にはなるかな」

「じゃ、竹さんでも話がわかるかもしれない」

番頭は手早く一朱紙にくるんで、

「はい、これはお近づきのしるしだ、取っておいてください」

と、如才なく竹次の前へおく。

「すんませんねえ、番頭さん。遠慮なくいただきやす」

「そうしてくれるとこっちも話がしやすい」

「堀留の柏屋さんてえと、たしか大きな質屋さんでしたね」

昨夜美沙緒という娘を三千両で買って帰る途中、駒形沖で南蛮組に横取りにされた狒々おやじだとははじめからわかっている竹次である。

「そうなんだ。わがままなだんなでね、困ったもんです」

「番頭さん、大きな声じゃいえねえが、あっしは昨日だんなが今戸の寮へ金を運びこむ時いっしょに手伝っているんでさ。用ってのはなにかそんなことにつながりがありそうだなあ。遠慮はいりやせんぜ」

一朱は職人二日分の手間だから、竹次はそれだけの仕事はしてかえす気になっている。

「ありがたい。恩にきるよ、竹さん。わたしはどうもこういうことには慣れないもんだから」

「一体、どんな用なんだね」

「実は、ここへきて聞けばわかるからってだんなにいいつけられてきたんだが、お浜さんて人に会わせてもらえないだろうかねえ」

「ああ、姉御にねえ」

なあんだ、そんなことかといいたげな顔はしたが、

「さあ、うまくうんといってくれるかなあ。姉御はひどくつむじ曲がりで、気が向かないとくどき落とすのに骨が折れるんでさ」

と、これは竹次の本音である。

「そこをなんとかたのむ、竹さん。ここにいなさるんかね」

「いることは二階にいるんだが、今日はあんまりごきげんのいいほうじゃないようなんでね」

竹次も気軽には立ちかねている。

2

「とにかく、ちょいとごきげんをうかがってきやすから、待っていておくんなさい」

竹次は番頭に小声でそうことわっておいて二階へあがってきた。

「ねえさん、入ってもようござんすか」

入り口から中へ声をかけてみると、

「なにか用かえ、竹」

と、お浜の眠そうな声が聞く。

「へえ、ねえさんにお客さんがありやすんで」
「じゃお入り――。だれだえ、あたしにお客さんてのは」
　竹がふすまの三尺戸をあけて中へ入ると、お浜は横になって、下半身へ小掻巻をかけ、ばあやに肩をもませている。うっとりとまぶたの重そうな目が顔全体を甘くゆるませて、ひどく色っぽい。
　――畜生、これでさそりの毒さえ持っていなけりゃただじゃおかねえんだが。
　竹次はちらっとそんな煩悩を感じながら、
「その客ってのは、三十がらみの男で、堀留の柏屋の番頭なんですってさ」
　と、もっともらしく声をひそめる。
「ふうむ。柏屋の番頭がなんだっていうのさ」
「だんなからなんか用をたのまれてきたんだそうでしてね、ここへきて聞けばたぶんねえさんの居どころがわかるといわれてたずねてきたんだって、おどおどしているんでさ。よっぽど気の小さい野郎なんですね」
「ああ、わかった。あの狒々おやじのことだから、どうせ美沙緒のことだろう。ここへあげてごらん」
　お浜は小掻巻をのけてむくりとそこへ起きなおる。身なりはまだ紫矢絣の腰元姿だが、窮屈な帯をとっているので、そのかわりにくるくるとまいて前で結んでいる淡紅色のしごきがぱっと目についてしどけない。
「すぐ呼んでもようござんすか、ねえさん」
「どうしてさ」
「あんまり色っぽいところを見せて、野郎が目をまわすといけやせんからね」
「ばか、番頭に会うのに、いらせられましょうと改まることもないじゃないか。――ばあや、そのまくらと掻巻きだけは押入へしまっといておくれ」
「はい」
　ばあやがまくらと小掻巻を押入へ片づけて

いる間に、竹次が下へ行って取り次いだらしく、
「ごめんくださいまし」
　と、もう柏屋の番頭があがってきてそこの出入り口へ両手をつく。
「さあ、遠慮なくこっちへ入ってくださいな。取りちらかしたまんまだけど」
「それでは、お言葉に甘えまして」
　番頭はおずおずと入ってきて、
「手前は堀留の柏屋の番頭で庄吉と申します。どうぞよろしくお願いいたします」
　と、あらためてていねいにおじぎをする。
　ばあやは番頭のそばへ座布団を出しておいて、黙って下へおりていった。
「番頭さん、なにかあたしに用があるんですってね」
　お浜はもうすっかりいつもの強い顔になっている。

3

「ねえさんは鈴村大作という浪人者を御存じだそうですね」
　庄吉が急に声をひそめるようにして聞く。
「知ってますよ」
「うちのだんなはゆうべその浪人者にひどい目にあいましたそうで、恨みが深いんだそうです」
「へええ、どんな恨みなんだろう」
　大作は直接柏屋にはなんにもしていないはずである。
「それが手前にははっきりいわないんですが、その浪人者は南蛮組とかとなんか引っかかりがあるんだろうということですね」
「ああ、わかった。だんなはゆうべその南蛮組に美沙緒って娘を横取りされているんです。その娘がまた大作にほれているんで、それがきっと悔しいんだわ。年寄りの色恋は若い者よりずっと執念深いもんだっていうからね」

お浜はあけすけにそんなことをいいながら、ついおかしくなってくる。
「申し訳ございません。うちのだんなにはそういう悪い病があるんです」
「聞いてるわ。よく証文の書き換えにくる娘や若い女房をくどくんだってね」
「それだけはどうぞ御内聞にお願いいたします」
「番頭さんなんかも、時々だんなのまねをして口をぬぐっているほうじゃないのかえ」
「とんでもございません。手前などは至って気の弱いほうで、まだ下女の手さえ握ったことはありませんので」
「さあ、そいつはどうかな。あたしは男なんか一人も信用しないな」
「それは、ねえさんほどの御器量になれば、どんな男だって、ついその煩悩というやつを起こしたくなるでしょうからね」
「へええ、番頭さんはその口で女をくどくんだな」
「それが、あいにく一向先さまがくどかれてくれませんから、情けない話で」
　庄吉は苦わらいをしている。その冷たい目の色が、なんとなく油断のできない男に見える。
「それで、柏屋さんはあたしになにをたのみたいっていうの」
「大きい声でいえることじゃないんですが、だんなは千両積んでもいいからその大作という男をなんとかしてもらえないだろうかっていうんです」
「つまり、消してくれっていうの」
「それが無理なら、人中へ出られないようなかたわ者にしてもらいたいんだそうで」
「そっちにうまい手があるのかえ」
「へえ、もし承知なら、今日中に大作を今戸の寮へさそい出すといっています」
「あそこはだめだよ、加役の手が入っているからね」

「いいえ、大東組とは懇意にしていますので、話がきまればすぐにも寮はあけてもらえるんだそうです」
「ああ、そうか――。加役さんも金がかかるんで、なにかそんな約束があるんだってね」
　お浜はそういいながらふっと気がついたことがある。

4

　加役の張りこみがなくなれば、昨夜南蛮組が座敷のどこかへかくしていった三千両をゆっくりさがせる。お浜が考えついたのはそれだった。
が、その三千両のことは柏屋もよく知っているはずだ。すると、あの欲張りおやじのことだから、あらためて千両出さなくても、その三千両をおまえたちにやるから大作をうまく切ってくれとまず掛け合いそうなものである。
　だいいち、たとえ大作を切ったって、肝心の美沙緒は竜平がさらっていっているんだから、すぐには手に入らない。算盤高い柏屋が、ただ悔しいからというだけで、千両もかけて大作を切らせたがるだろうか。
　――こいつは臭い。
　お浜の頭は急に火のようにまわり出す。
　いま大作がいちばんじゃまになるのは、美沙緒を横取りした加役のせがれ竜平のはずだ。現に、竜平は今朝桜の馬場で配下の者に大作をやみ討ちにさせようとしている。
　その上、いわくつきの柏屋から軍資金を出させる秘密まで大作にかぎつけられると、大作もしかるべき旗本の次男坊らしいから、加役としては公儀へ訴えられるとただのおとがめではすまなくなる。
　――そうか、畜生、この番頭は竜平のまわし者にちがいない。どうも目つきが気にくわないと思った。
　お浜はどうしてくれようかしらと黙って庄吉の顔を見ている。

「どうでしょう、ねえさん、千両では安いでしょうか」
番頭はおずおずとした顔つきで聞く。
「そうだねえ、金のことじゃないんだけど、大作は人間はばかっ正直であんまり怖いほうじゃないが、ちょいと腕が立つんでねえ」
「五人ぐらいでかかってもだめでしょうかねえ」
「実は、今朝ねえ、ある場所で大作を五人で待ち伏せして、もう少しでうまくいくところだったんだけれど、あいにく加役組がでしゃばってきやがったもんだから——」
お浜はわざと悔しそうな顔をしてみせる。
「へえ、加役組っていうと、大東さまの組なんですか」
いかにもそらっとぼけた庄吉の面がまえである。
「じゃ、こうしよう、番頭さん、いますぐ今戸の寮から加役さんに出ていってもらって、あたしたちはわなをこしらえておくことにするから、今日の暮れ六ツまでに大作を寮へ追いこんでもらう、それができるんならこの仕事を千両で引きうけようじゃないか」
「ありがとうございます。ねえさんのほうでそう引きうけてくれるんでしたら、こっちもすぐに仕事にかかります」
「番頭さん、いくらか前金を持ってきているんだろうね」
「なるほど、前金がいるんでしたねえ。ついこういうことに慣れないもんですから。よろしゅうございます、前金として五十両、七ツ(四時)までに寮の裏口へおとどけする、これではいかがでございましょう」
番頭庄吉は一生懸命のようだ。

5

千両の手金がたった五十両、ばかにするないとは思ったが、どうせその千両も五十両も当て

にはできない金なのだ。
それどころか、竜平という青二才は、こっちにうまく大作を殺させておいて、とたんに今戸の寮を加役組で取りまき、こんどはこっちの口をふさいでしまう、そんなあくどいまねを平気でやりかねない小せがれなのである。
畜生、いまに見てやがれと、お浜は内心せせらわらいながら、
「番頭さん、その言葉に間違いがなければ、この仕事、引きうけてもいいわ」
と、もっともらしくいってやる。
「ありがとうございます。それをうかがって安心しました。では、これから帰って、すぐに手金の支度をしてきますから、どうぞよろしくお願いいたします」
番頭はていねいにおじぎをしてすぐ座を立とうとする。
「お待ちよ、番頭さん」
「はい」
「その前に加役のほうをなんとかしてくれなくちゃ、もうすぐ夕方だからね」
「それはもう、ここから帰りに寮へ寄りまして、そのほうはきっとうまく引きあげてもらいますから」
「じゃ、もう四半刻(三十分)もしたら、こっちは裏木戸から入っていってもいいんでしょうね」
「かまいませんとも——。どうぞそうしてもらいます」
番頭庄吉はあっさりそう引きうけて、何度もおじぎをしながら帰っていった。
——ばか野郎、金の力だって、柏屋の番頭風情が加役の張りこみをそう簡単に動かせてたまるかい。
これ一つでも、あいつが竜平のまわし者だということは、もう自分で白状したのもおなじことなのだ。
「ねえさん、あの野郎はなにをたのみにきたん

です」
　柏屋の番頭を門口まで送り出した竹次が、二階へあがってきてふしぎそうに聞く。
「うまい仕事をたのみにきたのさ」
「へえ、うまい仕事っていいますと――」
「三千両の大仕事なんだよ」
「すごいねえ、そいつは。本当ですか」
「入ってみなけりゃわからないんだがね」
「あれあれ、それじゃゆうべのほうが千両箱を三つ見ただけでもまだましってことになりやすね」
「そのゆうべの三千両をこれからさがしに行くんだから、地獄長屋へ行ってね、市川浪人に殺し屋を五人ばかりすぐつれてくるようにいっておくれ」
「なるほど、――すると、人足も四、五人いりやしませんか」
「人足はおまえと金次の二人でいいよ。勘の悪いやつを何人つれていったって、ただほこりが立つばかりだからね」
「合点だ。なにしろ、あっしと金次は、勘のいいほうじゃだれにもひけはとりやせんからね」
「なまおいいでない。おまえたち二人はあたしの手足に使ってやるのにちょうどいいからつれていくのさ」
「おありがとうございい――」
　竹次はぺろりと赤い舌を出して、いそいで階下へ逃げていく。

6

　その日、大作は途中で深編み笠を求め、それで顔をかくして、とにかく一度振り出しの桜の馬場へもどってみた。
　が、そこにはもう今朝の乱闘の足あとさえ残ってはいなかった。無論、大作もほかに当てのない苦しまぎれにきてみたまでの話なのだから、それが当然だとは思うが、足はまだ未練がましくそこを通りぬけてぶらぶらと湯島通りのほうへ向かっている。
　――こんなことなら、むしろあの時すぐ権太夫のあとをつけてやればよかった。
　権太夫は一度必ず竜平のところへ報告に帰るはずだ。その竜平のあとをうまくつけていさえすれば、おなじ目的で動いている久蔵にも会えたろうし、美沙緒の監禁されている家もわかったはずなのである。
　こけの知恵はあとからつくの御多分にもれず、やっぱりおれは能なしの手本みたいな男だと、大作は我ながら味気ない。
　湯島通りへ出て意味なく二丁目のほうへ歩いてくると、左手に神田明神の大鳥居が目につく。こけの足はなんともつかず、その大鳥居をくぐって明神の境内へ入っていった。
「若だんな、こんな時おみくじなんかだめですかねえ」
　さっきいっていたおときの言葉が頭に残っていて、ついこっちへ足が向いてしまったのだろうか、そう気がついてみると、
　――苦しい時の神だのみか。
と、さすがに気恥ずかしくなって、深編み笠のまま遠くから拝殿のほうへ会釈をしただけで、そこから男坂のほうへ抜けることにした。
　高い石段の上に立つと、下谷から浅草へかけての下町一帯が初夏のあかるい日ざしの中に広広と目につき、その果てに筑波山が夏がすみにややかすんで見える。
　――江戸は少し広すぎるなあ。
　そんな気がするのもたずね人を持っている切なさからで、大作は苦わらいをしながらゆっくりと高い石段をおりはじめる。
　そこを下りきったところ一帯を明神下と呼び、道はまっすぐ御台所町と同朋町の間をぬけて明神下通りへ出る。右へ曲がればすぐに昌平橋、左へ行けば上野池ノ端のほうへ出ていく。
　――さて、風来坊どの、どっちへ行きますかな。

ちょっと立ちどまって考えている大作の目の前を、見おぼえのある顔が二つ、連れ立って昌平橋のほうへ通りすぎていく。大東竜平と伊藤権太夫である。

「あっ」

大作はあまりにも偶然すぎるのであやうく声をのみながら棒立ちになっていた。

――よし、こんどこそ逃がさぬ。

とっさにそうきめて、二人のうしろ姿をにらみながらやや距離のひらくのを待っていると、

「やっぱり若だんなだった」

ふいにうしろへ立って、つぶやくような声が耳についた。

「だれだね」

振りかえってみると、意外にも日よけに手ぬぐいを吉原かぶりにしている久蔵だった。

7

「おまえ、あの二人のあとをつけてきたのか」

大作はいそいで久蔵に聞いてみた。

「まあ、こっちへきておくんなさい」

久蔵は昌平橋のほうへ去っていく竜平と権太夫のほうをちらっと見ながら、さっさと石段のほうへ入っていく。

――そうか、あの二人を見のがすようなら、美沙緒の居どころを突きとめたな。

大作はそう考えたので、黙って久蔵の後につづく。気がついてみると、久蔵もどこで旅装をすてたか、いつもの突っかけ草履姿に変わっていた。

「若だんな、お嬢さんの送りこみ先がやっとわかりやした」

案の定、久蔵は同朋町の裏側と神田明神の石崖の間の横町へ曲がってから、やっとほっとしたようにいう。

「そうか、わかったか。じゃ、この近くなんだな」

大作は我ながら急に目の前が明るくなったような気持ちである。

「ついそこの妻恋坂の上に、鳶の勝造っていう男の家があるんです。その鳶勝の家へ、さっき竜平が入っていくんでさ。玄関へ出迎えたのは同心らしいやつで、家のまわりにも手下の小者らしいやつが二、三人張りこんでやがる。あっしは知らん顔をしてその前を通りぬけ、妻恋稲荷の境内へ入りこんでそこから見張っていたんですがね」

「そうか、妻恋坂の上とはまた皮肉なところへつれこんだもんだな」

自分に当てつけられているようで、大作はなにかおかしい。

「なるほど、妻恋か。野郎、お嬢さんになぞをかける気なんだな、いけ好かねえ」

久蔵はそっちへ取ったらしく、吐き出すようにいう。

「権太夫は後からきたのか」

「そうなんです。あの野郎はついいいましがたきて、すぐいっしょに出てきやがった。若だんなはいま竜平の顔を見たでしょう。あっしが見た時は、白鬼がとうがらしをなめたような苦い顔をしてやがった。妻恋もへちまもあったもんじゃねえ、ざまあ見やがれ、お嬢さんに振られやがったなと、あっしはいい気味だった」

「久蔵、実は、わしはおまえのことが心配になって出てきたんだ」

「といいやすと――」

「伊藤権太夫はここへくる前に深川屋へわしを召し捕りにきたんだ」

「なんですって――」

「今朝、桜の馬場で、おまえは大東組の同心二人を承知の上で切ったろうという理由が一つ、もう一つは南蛮組と深い関係があるはずだという理由だ」

「畜生、――それでどうしたんです、若だんなは」

久蔵は顔色をかえてせきこんでくる。
「なあに、わしは北の与力格の鑑札を持っているから、それを見せて追いかえしたが、そうなるとおまえを召し捕って、おまえの口からわしの罪をこしらえるというあくどい手がある。あいつたちはそれをやりかねないので、すぐに家を出てきたんだ」

8

「あくどいやつらですねえ、若だんな。道理で権太夫のやつもむっつりと苦い顔をして歩いてやがった」
久蔵は自分のことはそう気にもしていないようだ。
「人間は一つうそをつくと、そのうそのためにまたうそをつかなくちゃならなくなる。それと同じで、悪事というやつも、前の悪事をかくすためにまた悪事を重ねなければならないようになるものなんだ。とにかく油断をしちゃいけない」
「なあに、あっしなら大丈夫でさ。だいいち、あいつらはまだあっしの顔を知りやせんからね。そうだ、竜平はゆうべちらっとぐらいは見ているかな」
同朋町の裏の道は、内藤豊後守の上屋敷の塀に突きあたって右へ折れ、いやでも元の明神下通りへ出るようになっている。そして、内藤家の表門の前を通りすぎて、その塀にそって左へ曲がると妻恋坂のある横町になるのだ。
「それで、若だんな、どうしやす。まさか、この真っ昼間から、いきなり鳶勝の家へ踏んごむってえのもまずいでしょう」
「そうだなあ。どうせ見張りがついているだろうからな」
すぐにも踏んごんでいきたい大作だが、そうなるとこんどこそ白昼加役組の配下を何人か切らなければならない。
といって、町方役人をたのんでくるというの

も、日ごろ加役組とは犬猿の間柄なので、事が面倒になるばかりでなく、なんといっても美沙緒は無断で家出をしているだけに立場が不利になる。
「どうでしょうねえ、若だんな、やつらはいつまでもあんな家にお嬢さんをおいとくはずはないから、いずれどこかへ運び出すにきまってまさ。その時は途中でうまく取りかえす、もし夜までもあそこへおいとくようなら、あっしがなんとかあの二階へ忍びこんでつれ出すようにしやすから、もうしばらく敵の出方を待ってみることにしたら」
「まあ、それよりしようがあるまいな」
それがちょうど昼飯どきの刻限だった。
こっちの見張り場所は坂の中途から坂上までつづいている妻恋稲荷の境内ときめて、二人はかわるがわる昼飯を食ってきて、その時のくるのを待っていた。
それは実にじりじりするような長い時間ではあったが、大作は我慢がしきれなくなりそうになると、
――まあ待て。こんどはちゃんと当てがあっての辛抱じゃないか。今朝のあのまるっきり当てのなかった時のつらさにくらべればずっと我慢しいいはずだ。
そう思いなおして、あせる心をじっとおさえて辛抱した。
こうしてどうやら一刻半（三時間）ばかりたった時、大作は、明神下のほうから人足が二人、荷車に長持ちを積んで坂をあがってくるのをふと目にした。
――はてな。
その長持ちは空らしく、人足たちは楽々と坂をあがってくる。

9

荷車の上の長持ちには唐草模様のついたよもぎの上おおいがかけてあるが、人間一人が楽に

寝て入れる大きさがある。

しかも、その荷車はがらがらと轍の音をひびかせて妻恋坂をのぼりきり、右へ曲がれば三組町から湯島天神へ出る道だが、そっちへは曲がらずに、突きあたりの一間幅の路地の前でとまったようだ。

その角から二軒目の家が鳶勝の住まいである。

——いよいよ美沙緒を運び出す気だな。

大作はどきりとしたが、自分の持ち場は動かなかった。

いちばんそっちに近い境内の外れに久蔵がひそんでいる。なにかあれば久蔵のほうから知らせにきてくれるはずだ。うっかりこっちから久蔵のところへ行って、深編み笠は人目につきやすいから、万一敵の目にでもつくとまた裏をかかれるおそれがあるからだ。

案の定、ややしばらくたってから、久蔵がまるでりすのように足音を立てずにちょろちょろとこっちへ引きかえしてきた。

「若だんな、ついいましがた荷車へ長持ちを積んできたやつを見たでしょう」

「うむ」

「あれを鳶勝の家の玄関先まで引きこんでいったと思ったら、一度それを家の中へ運びこんで、それをいま四人がかりで車へ積んでいやす。中はお嬢さんにちげえありやせんや」

ほおかぶりの目を光らせながら、久蔵はどうしやすといいたげな顔である。

「よし、とにかくわしはその長持ちの後をつけることにする」

「それで、あっしは——」

「おまえはしばらく後へ残ってもう少し様子を見ていてくれ」

「どうしてだね」

「抜けめのないやつらだから、ひょっとすると一杯くわされるおそれがある。荷車が出た後でもしやつらが鳶勝の家の見張りをとくようなら、長持ちの中は美沙緒と見ていい。なお見張りをつづけるようなら、こっちが一杯くわされたことになるんだ」

「なるほど——」

「長持ちの中が本物なら、行く先はたぶん今戸の寮だ。おまえも後から追いついてくれ」

「わかりやした。じゃ、あっしはしばらく後へ残ってみます」

久蔵が納得して元の場所へ帰っていくとまもなく、さっきの荷車が例の長持ちを積み、こんどは重そうに、注意深く坂道をおりてきた。

一人が梶棒をとり、一人がうしろからしっかりと車が走り出さないように引っ張っている。

その後から、今朝今戸の寮で会った同心小宮松吉が二人ばかり小者をしたがえてついてくる。

——この分なら本物かもしれぬ。

大作は荷車が坂道をおりきるまでやりすごしておいて、ふらりと往来へ出た。

荷車は明神下通りへ出て、案の定、上野のほうへ曲がっていく。

——やっぱり今戸だな。

そう直感して、今戸の寮ならよく勝手を知っているだけに、大作はもう大丈夫だという自信が出てくる。

10

神田明神下から今戸までは一里あまりある。時刻はすでに七ツ(四時)に近いだろうから、向こうへ着けばもう夕方になる。たとえば、竜平がどんな手配りをしていようとも、日が暮れてしまえばこっちのものだ。

——しかし、まさか一杯くわされているんじゃあるまいな。

大作はふっとそれが気になってきた。道は明神下からやがて湯島天神下へかかろうとしているが、まだ久蔵が追いついてこないからだ。

長持ちを運び出した後で、見張りの者たちも

ほっとして鳶勝の家で茶でものみながらしばらく油を売っているか、あるいは自分に尾行でもついていてうっかり近づけないでいるのか。

どっちにしても、ここまで来てしまってはもうしばらくこのままで様子を見るほかはないのだ。

前を行く荷車は、まもなく湯島天神下へ突きあたって右へ折れ、上野広小路のほうへ出ていく。

――それにしても、あの長持ちの中に詰められているとすれば、今ごろ美沙緒はどんな気持ちでいるか。

それを考えると、大作は胸をしめつけられるようなつらい気持ちにされてくる。そして、そのつらさは、なんの罪もない者がどうしてこんなむごい目にあわされなければならないんだと、またしても激しい憤りにかわってくるのだ。

荷車は上野の盛り場をさけて中御徒町（なかおかちまち）のほうへ入っていくようだ。

そのころ――。

今戸の柏屋の寮では、加役組の張りこみの去った後へ入りこんだお浜が、竹次と金次をあごで使って、家中縁の下から天井まで、ここはと思うところを片っ端からさがしまわっていた。

さがし物は千両箱三つで、昨夜の南蛮組はたった二人なのだから、どう考えても家から外へ運び出す時間はない。必ずこの家の中のどこかへかくしてあるはずなのだ。

しかし、台所の上げぶたの下まで念入りにさがしてみたが、どこにもそれらしい物は見あたらぬ。

「姉御、こいつはやっぱり、ゆうべやつらが運び出してしまったんじゃないでしょうかねえ」

すすとほこりで真っ黒な顔になりながら、竹次ががっかりしたようにいう。

「そうだなあ、これだけさがしても見つからねえとすると、竹のいうとおりかもしれねえなあ」

金次も半分あきらめてしまったような顔つき

だ。

「まだあきらめるのは早いよ。もう一度振り出しへもどって考えてみようよ」

執念深いお浜は、きらりと目を光らせながらもとの書院の間へ引きかえしてきた。

そして、東の廊下のほうを向いて座敷の真ん中へ座り、じっと庭のほうへ目をすえる。

――家の中にないとすれば、庭のどこかへ埋めていったのかしら。

しかし、穴を掘って埋める暇があったとはどうしても考えられないお浜だ。

11

――畜生、あいつらはどこへ三千両かくしていきやがったんだろう。

せっかくこの寮を自分たちの手で自由にさがせる時がきたのに、その自由の時もすでに残りすくなくなっている。

しかも、その三千両の手がかりさえまだつかめないのだから、お浜もさすがにじりじりせずにはいられなかった。

時刻はもうとっくに七ツ（四時）をすぎて、庭の日ざしは次第に夕日になろうとしているのだ。

ふっと、その庭の林の小道から、さっきの番頭庄吉がいそぎ足にこっちへ近づいてくるのが目についた。

――あの野郎、前金を持ってきたのかな。

黙って見ていると、庄吉は目ざとくこっちを見つけて廊下へ走り寄ってきた。

「ねえさん、約束がおくれて申し訳ございません。手つけ金の五十両持参いたしました。どうぞおうけ取り願います」

庄吉は縁先に立ったままそこへ二十五両包みを二つ出しておく。

「あら、あのけちん坊のだんなが、よく五十両出しましたね。あたしは、約束の七ツがとっくにすぎているんで、そろそろ引きあげようかと

考えていたんだけど——」
「申し訳ありません。途中でつい手間どってしまいまして——。それで手配りのほうはどうなんでしょう」
「裏に浪人者が二人いたでしょう」
「へえ、市川佐二郎さんともう一人」
「あれは中垣兼助っていう一刀流の達人さ。表は岡田真兵衛と植村八十助、外蔵のほうに根津鬼丸、みんな一度は大作を取りまいて、もう一息というところでじゃまが入って切れなかった。今日はじゃまが入らないだろうから、きっと大丈夫だわ」
「なにぶんお願いいたします」
「大作のほうはどうなんだえ。うまく引っぱり出せそうかい」
「へえ、もう雷門ぐらいまできているはずです。まもなく表門のほうへ荷車がついて、長持ちを一棹積んでいますから、それがついたらどこからか大作がここへ忍びこむと思ってください」
「長持ちの中身はなんなの」
「美沙緒のように見せかけてありますが、中は沢庵石です」
「ふうむ。じゃ、美沙緒でつり出したんだね」
「へえ」
「ちょいとうまい考えだねえ、それならきっと乗せられる。後は引きうけたわ」
「どうぞ間違いなくおたのみします」
番頭庄吉はそれだけいうと、せかせかともときた林の小道へ引きかえしていく。
——この金は本物かしら。
お浜は立っていって二十五両包みを一つ取りあげ、いきなり封を切ってみる。
たしかに黄金色をした小判で二十五枚、もう一つのほうも本物だった。
——ふん、三千両がたった五十両に変わってしまったのかしら。
お浜は苦わらいをせずにはいられない。

12

「ねえさん、小判でござんすね」
すすだらけの顔の竹次と金次が目を丸くしながら廊下へ出てきた。
「竹、手を出せ」
「へえ」
出した手も真っ黒によごれている。
「そら、五両、今日の駄賃だ」
お浜は小判五枚をその手の上へのせてやる。
「ありがとうござんす」
「金次、おまえにもやる」
「すんません。小判なんかを手にするなあ久しぶりでござんしてね」
金次も竹次も手の上の小判の色にちょいと見とれているようだ。
「金次は裏、竹次は表へ行って、浪人さんたちを呼んできておくれ。留守はおまえたちが見張っているんだよ」
「かしこまりやした」
金次と竹次はそれぞれのほうへすっ飛んでいく。
その間にお浜は自分の小判十五枚を帯の間へしまってしまう。
「なにか用か、姉御」
表組の岡田真兵衛と植村八十助が一足先に縁先へきて立つ。
「岡田さん、今日の手つけ金だよ。はい、五両ずつ」
「そうか、すまんなあ」
岡田も植村も五両手にして悪い気持ちではなさそうだ。
「いま表門へ柏屋から長持ちがつくそうだからね、それを受け取ったら、門もくぐりもしめて、しまりをしてしまっておくれ」
「心得た」
二人は表門のほうへ帰っていく。
入りかわりに裏のほうから、市川佐二郎と中

垣兼助が廊下の前へきて立つ。
「姉御、柏屋が手つけ金をとどけてきたそうだな」
「たった五十両ばかしね。はい、お二人さんにも五両ずつ」
「五両はありがたいが、後金の九百五十両はあてにならないんだろう」
「まあねえ。どうする、市川さん、もうすぐ大作がここへくるそうだよ」
「そうか——。しかし、五両でももらったにはちがいないんだから、やっぱりやるだけはやるよりしようがあるまい」
「そうだねえ。大作はどうせこっちにだってじゃまになるやつなんだから、うまく片づけておいて逃げるとしようか」
「それがいいだろう」
「じゃ、隣の塀の細工をもう一度見に行きながら、これを根津さんにもやってきておくれよ」
「心得た」
市川は別に五両をうけとって外蔵のほうへ去っていく。
「姉御、わしはやっぱり裏口の番だな」
「そうしておくれ。大作が入ってきたら、かくれていて、そっと裏木戸のかぎをかけてしまうがいい。修羅場(しゅらば)はこの庭ときめておこう」
「承知した」
中垣兼助は裏口のほうへ引きかえしていく。

13

そのころ——。
大作は怪しい長持ちを積んだ荷車の後をつけて、とうとう今戸橋をわたっていた。
ここまでくればもう美沙緒は柏屋の寮へ運びこまれるにちがいないと見たので、よそながら長持ちを警固している小宮たちに怪しまれないうちに、わざと川っぷちの道へ出た。
日はどうやら西の空へ落ちたようだが、まだ明るい夕方である。

——ちょっとまずいなあ。
川っぷちの道を柏屋の寮の裏木戸のほうへ歩きながら、大作は深編み笠の中でまゆをひそめる。抜けめのない竜平のことだから、寮の表裏ともに組下の者で厳重にかためているにちがいないのだ。こう明るくては塀を乗りこえることもできない。
が、うっかり手間取っていると、こんどは町中とちがい空き屋敷の中だし、しかも表裏を味方にかためさせてあるから、竜平はどんな暴力に出るかわかったものではない。
——かまわずやる。
美沙緒一人をみじめに死なすには忍びない。闘うだけ闘って、美沙緒といっしょに死んでやる、大作はそれでもいいような気がしてくる。
大作は、ゆっくりと一度、柏屋の裏木戸の前を通りすぎてみた。中はひっそりとして、人声ひとつ聞こえない。
しかし、安心はできない。そういうことにかけては、彼らはよく訓練された猟犬もおなじなのだ。ことによると、もうどこかからこっちの様子を息をこらして見ているかもしれない。
大作はゆっくりと北隣の塀へかかって、一応隣の裏木戸まで行ってみるつもりだ。そして、ふっと気がついたのである。昨夜、久蔵は隣の庭へしのびこんで、そこから柏屋の外蔵のうしろの塀を乗りこえたんだといっていた。
——そうだ、その手があるにはあるな。
それにしても、こう明るくてはしようがない。いや、隣の裏木戸のしまりがあいていてさえくれれば、そこから入るという手がある。寮番に見とがめられたら、事情を話せばいいのだ。
そんなことを考えながら隣の裏木戸へかかっていくと、その木戸からひょいと出てきた男がある。意外にも、今朝猪牙(ちょき)をこいでくれた船米(ふなよね)の若い船頭忠吉だった。
「やあ、忠さんじゃないか」
「へえ、忠吉でござんすが——」

忠吉はふしぎそうにこっちを見て、
「ああ、わかった、今朝の鈴村のだんなですね」
と、にこりとしながらそばへ寄ってくる。
「今朝は朝っぱらから世話になったな」
「どういたしやして――。それで、だんな、お嬢さんは見つかりやしたか」
「いや、それがまだなんだが、実は美沙緒が詰められていると思われる怪しい長持ちが、たった今、荷車で柏屋の表門から中へ運びこまれたはずなんだ」
「なんですって――」
「わしは神田からその荷車の後をつけてきたんだから間違いはない」
大作は手短に朝からのことを忠吉に打ちあける。

怪盗

1

「だんな、そいつはちょっとおかしいや」
忠吉は小首をかしげながら、
「とにかく、ここの木戸内を借りましょう。いつまでもこんなところにいて人目につくといけねえ」
と、ふっと気がついたように、いま出てきた隣の木戸をあけて中へ入る。
「忠さんはここの寮番と懇意にしているのかね」
「ここのとっつぁんとは将棋友達でしてね、ここへくるとついしりが長くなるもんだから、よく親方に小言を食わされるんでさ」
木戸の中はここも雑木林になっていて、奥の様子はまるっきりわからない。

「それで、なにがおかしいんだ、忠さん」
大作ははじめて深編み笠を取って左手にかかえる。
「なにがって、いまのだんなの話だと、隣の寮には加役の組下が待っていてその怪しい長持ちをうけとるのが本当でしょう」
「うむ」
「ところが、どういうわけか加役組はもうさっきみんな引きあげちまって、いま隣へ入っているのはお浜たちと地獄長屋の浪人どものようですぜ」
「本当か、忠さん」
大作は思わずどきりとなる。
「本当ですとも。あっしがさっきここへ将棋をさしにくる時、お浜が竹次と金次という平野屋の船頭二人をつれて、舟からあがると平気で柏屋の寮へ入っていくんです。こいつはおかしいと思いやしてね、そら、隣の外蔵のあるところの塀ね、あそこへ行ってしばらく様子を見ていると、市川佐二郎ってやつが根津鬼丸というのと二人で塀の向こうへきて、いいか根津、野郎を切ったらすぐこの塀を乗りこえて逃げるんだから、なにかここへ踏み台を用意しておいてくれといいつけているんだ。すると、根津ってのが、どうしてそんなにあわてて逃げるんだって聞いていましたが、それは後でわかるといって、市川は向こうへ行ってしまったんです」
「ふうむ」
それが本当だとすると、長持ちの中は無論美沙緒ではないことになる。そして、野郎を切ったらの野郎というのは、おそらく自分をさしているのだろう。
「わかった。だんなは一杯くわされたんでさ。加役の若僧は長持ちでだんなをここまでおびき出し、一方ではうまくお浜をたきつけて、じゃまなだんなを消してしまおうって腹なんだ」
「なるほど――」
そんなことより、大作としては美沙緒のこと

のほうが気になる。一体、竜平は美沙緒をどこへ運ぶ気なのか。こっちをこんな風に一杯くわせるからには、無論、美沙緒も鳶勝の家からどこかへ運び出す気にちがいない。

　そっちは久蔵が後をつけてくれるではあろうが、こうなると久蔵一人では心もとない。

「いけねえ、だんな、だれかくるようだ」

　忠吉は手早く木戸の輪かぎをかけて、大作を林の中へ押していく。たしかに三、四人の足音が木戸の表へ立ちどまった気配である。

2

　この時、隣の寮の裏木戸へ集まってきたのは、市川佐二郎、中垣兼助、根津鬼丸の三人で、案内役は金次だった。

　金次は戸の透き間から深編み笠の侍が目の前をゆっくり通りすぎていくのを見て、

——あっ、大作かもしれねえ。

　と、とっさに気がついた。

　いそいで塀にのぼって、首だけ出してうしろ姿を見送っていると、深編み笠は隣の寮の裏口に立ち止まった。隣の裏木戸は往来から少しさがっているので、相手は見えないが、だれかと立ち話をしているようだ。

「金的、どうした」

　そこへお浜から日当をもらって帰ってきた中垣兼助がうしろから聞く。

「中垣さん、大作らしい深編み笠の野郎が、いま隣の裏口でだれかと話しこんでいやすぜ」

「どれ——」

　中垣も塀の上からのぞいてみて、

「なるほど、大作かもしれないな。おれは奥へ知らせてくるから、おまえここで見張っていてくれ」

　と、すぐに奥へ引きかえしていった。

　その間に金次は、深編み笠の男が隣の木戸の中へ入ったのをたしかに見ていた。

「よし、行ってみよう。いま長持ちを持ちこん

できた柏屋の番頭の話だと、大作は深編み笠をかぶっているといっていたから、そいつにちがいないんだ」

　中垣の知らせで、根津といっしょに出てきた市川はそういって、すぐに隣の裏木戸へ駆けつけたのだ。

　市川は、一昨日の夜の新シ橋と、今朝の桜の馬場と、二度大作と刃をあわせ、油断のできない相手ではあるが、じゃまさえ入らなければ必ず勝てるという自信がある。

「金次、木戸をあけてみろ」

「へえ」

　金次は戸に手をかけてみたが、

「あきませんぜ、市川さん。かぎをかけてしまったらしいや」

　と、振りかえっていう。

「そうか——。かまわないから、塀を乗りこえて中からあけるんだ」

「大丈夫かね、市川さん」

「なにが——」

「塀の中へ飛びこんだとたん、ばっさりなんてなあ情けないからなあ」

「だから、よく中を見てから飛びおりるんだ」

「上から見ただけでわかるかなあ」

「まあやってみろ」

　金次はそれでも木戸のわきの塀へ飛びついてするりと塀の上へあがり、中をよく見まわしてから庭へ飛びおりる。

　まもなくかぎを外す音がして、がらりと木戸があく。

「だれもいねえようです」

　金次はほっとした顔つきだ。

「おまえはここへ残れ。もし大作がこっちへきたら、大声で知らせるんだ」

「へえ」

「さあ、行こう」

　市川は中垣と根津をうながし、先に立って木戸の中へ入っていく。

3

「市川さん、ここは無断で押しこんでも大丈夫かね」
三人のうちではいちばん年下の根津鬼丸が聞いた。
「そんな心配はいらん。まあまかせておけ」
昨夜加役組といっしょになってここへ南蛮組を捜索にきている市川は自信ありげに答える。
「それはそうと、さそりの毒にやられた坂田慶三は一体どうしたんだろうな、市川さん」
中垣は昨夜植村と二人で坂田を外蔵の前へ運んでいって、裸にして介抱している。
それからまもなく南蛮組の短筒騒動がおこり、それを聞きつけて加役組が駆けつけてきたので、だれもしばらくは坂田のことなど忘れていた。
そして、柏屋が引きあげる時、それといっしょに浪人組も、後は加役組にまかせて寮を出た。
その前に中垣は気になるので、ちょっと坂田の様子を見に行ったのだが、どうしたのかもうそこには影も形もなかったのである。
「あれだけはどうもわからないな。いくら南蛮組が物好きでも、裸の人間まで持っていくはずはないしな。——仲間に聞いても、だれも知らないというんだ」
雑木林の中の小道をぬけていきながら、市川も小首をかしげている。
「犬がくわえていくなんてことも考えられないしな」
「犬やけだものの仕業なら、まさか着物や刀までくわえてはいくまい」
「それはまあそんなもんだが、——すると、加役組がかたづけたと考えるよりしようがなくなるな」
「そんなことはない。加役組の目にとまれば、役目柄大騒ぎになるはずだ。おれは、ひょっとすると、柏屋がこんなものを加役組に見せては

事が面倒になると見て、あの唖の下男と船頭にいいつけて、そっと運び出させたんじゃないかと考えているんだ」
市川はいまそれを思いついて、もっともらしく口にしてみる。
「なるほど、ありそうなことだな」
中垣は口ではそう答えながら、すぐには納得できないような顔つきである。
この寮には別に中囲いはなく、林をぬけると庭は芝生になっていて、そこに農家造りのわらぶき屋根の家が一軒建っている。
東から南へ回り廊下がついているようだが、そこには無論雨戸がしまっていて、表門から入ると納戸が玄関がわりになっているようだ。
「ずいぶん変わった寮のようだなあ、市川さん」
根津は目を丸くしている。
「うむ、ここの持ち主は大いに凝ったつもりなんだろう」
市川はそういいながらも、あたりへ鋭い目をくばりながら先に立ってどんどん表門のほうへ歩いていく。
表門のわきに納屋のような寮番小屋があるのだ。
「まさか寮番小屋へかくれるような大作でもないだろう」
中垣が不審そうにつぶやいている。

4

こっちが寮番小屋へ近づいていくと、足音を聞きつけたか、寮番のおやじがのそりと小屋から出てきた。
年はもうとっくに五十をすぎているだろうが、渋紙色の顔の造作もがっしりとした体つきも大柄で、目のぎょろりとしたいかにも一癖ありげなおやじである。ただ、左の足が少しびっこをひく。
市川は昨夜加役組の伊藤権太夫といっしょにきているので、このおやじの名は九郎助といっ

て船頭あがりだということも、この寮が京橋の唐物商丸屋善兵衛の持ち物だということも、ちゃんと聞いて知っている。
「やあ、おやじ、ここへいま深編み笠をかぶった若い浪人者が一人、入ってこなかったかね」
　顔見知りだから、市川は心やすだてにこっちから声をかけた。
「おまえさんたちは一体どこからここへ入ってきたんだね」
　九郎助はにこりともしないで、むしろとがめだてるような目の色だ。
「実は、その若侍を追って裏口から入ってきたんだ」
「裏木戸はかぎがかけてあったはずだぞ」
「いや、深編み笠の若僧がそこからここへ逃げこんだのをたしかに見ているんだから、たぶんかぎはかけてなかったんだろう」
「その浪人者はどんな悪いことをしたんだね」
「我々はそいつを南蛮組の片われとにらんでいるんだ」
「じゃ、おまえさんがたは加役組の家来になったんかね」
「いや、別に家来になったわけじゃないが、南蛮組は強盗だからな、武士として見のがすわけにはいかないんだ」
「そんなら勝手にさがすがいい。本当なら加役組でもないおまえさんがたには人の家を家さがしする格式はないんだが、家さがしさせねえとおれがいったら余計おれを疑いたくなるだろう。これも悪い隣を持った因果だと、こっちは目をつぶっておくよりしようがないものな」
　おやじはずけずけといって苦わらいをしている。
「おやじ、まさかおまえ、そこへ若僧をかくまっているわけじゃないだろうな」
　なんとなく市川はこのおやじくさいぞというような気がしてきたのだ。
「そんな気がするんなら、中へ入って見ていったらいいだろう」
　おやじはあけっ放しの入り口からあっさりわきへ体をどける。
　中は三坪ほどの土間で、その向こうに切り落としの一間があって、一枚だけ障子があいている。無論ひっそりとして、人のいるような気配は感じられない。
「おやじ、母屋のほうも一通り家さがしするぞ。いいだろうな」
「いいとも。——おまえさんたちはやっぱりとうしろうだな」
「なにっ」
「おれがその若僧なら、逃げ道の窮屈な家の中へかくれるより、裏から表へ通りぬけている」
　おやじはにやりと皮肉な冷笑をうかべる。

5

「おやじ、さては、貴様、大作を表へ逃がしたな」
　市川はたちまち目を光らせながら、思わず刀の柄に手をかけている。
「あわてちゃいけねえ。そんなことができるかどうか、自分の目でくぐりからそっと表をのぞいてみるがいい」
　寮番の九郎助はびくともしない面魂でうすらわらいをうかべる。
「よし、——中垣、ちょいと表を見てくれ」
「心得た」
　中垣はつかつかとくぐりのほうへ寄っていったが、その時ふいに表から戸をたたく音がして、
「寮番、ここをあけてくれ。御用の者だ。寮番はいないか」
　と、横柄な声で呼ぶ者がある。
「寮番はここにいるよ。どなたさんだね」
「加役組の配下の小宮のだんなだ。ちょいとここをあけてくれ」
「小宮さんていうと、ゆうべここへ来た人かね」
　おやじは余計なことを聞きながら、目は市川を見て、おまえさんたちはどうするねと聞いて

いる。

「おい、引きあげろ」

加役は苦手だから、市川は低い声で二人をうながし、足音をさせないように南の芝生のほうへ走り出す。

――ふん、意気地のねえおおかみ浪人どもだ。

おやじはにやりとしながら、ゆっくりとくぐりのそばへ行って桟をあける。

見ると、昨夜の小宮松吉が小者を二人つれてそこに立っている。

「なんか御用かね、だんな」

「おやじ、今ここにだれかいたようだな」

小宮は中へ入って、じろりとあたりを見まわしている。

「なあに、さっきからおやじ一人だ」

九郎助は平気で答える。

「いや、たしかに人声がした。かくすとためにならんぞ」

「そんなら、おまえさま、勝手にどこでもさがしてみなさるがいい」

その間に小者の一人は寮番小屋の中へ入り、一人は素早く南の庭へ走っていく。

「小屋にはだれもいないようです」

土間から出てきた小者が告げる。

小宮は黙ってうなずいてみせてから、

「おやじ、しばらく庭を借りる。そのくぐりはしまりをして、だれか来たらわしのところへ知らせてくれ。無断であけてはいかん」

と、九郎助のほうへいいつける。

「大きな声でそっちへ呼んじゃいけないかね。おやじはびっこなんで、行ったり来たりに手間がかかるんでね」

苦い顔をした小宮は、それには答えずにさっさと庭のほうへ入っていく。

――また隣の庭をのぞこうっていうんだろう。

間抜けな小役人になにがわかるもんかと、九郎助は腹の中でわらいながらくぐりのしまりをする。

6

そのころ――。

大作はこっちから塀を乗りこえて柏屋の寮の庭へしのびこんでいた。

他人の庭を血でけがしては悪い、大作はとっさにそう考えたので、外蔵の裏へ出るあたりの塀を乗りこえたのだ。

「だんな、無理はしねえほうがようござんすぜ」

忠吉はそこまで案内してきてそういうと、自分は素早く林の中へ身をかくしたようだ。

大作が隣の庭へ移ってみると、その塀の下に木の空き箱が二つ三つおいてある。察するに、浪人どもはいざとなったらこの箱を踏み台にして塀をのりこえ、丸屋へ逃げることにしているのだろう。

さすがに用心のいい連中である。

あたりはすでにたそがれかけて、こっちの庭にも人影は見えない。

大作は外蔵の前へ出て、それからゆっくり東の廊下の前へ進んでいった。

――あれだな。

書院の廊下が見とおせるところまでくると、その廊下にさっきまで荷車の上にあったおとりの長持ちがそのままおいてある。

美沙緒が入っていれば、いつまでもそんなところに置いておくはずはないから、やっぱり一杯くわされたのだ。

かまわずつかつかと廊下の前まで出ていくと、

「きたね、大作」

と、座敷に座っていたお浜がからかうようににやりとわらった。

「うむ、どうやらうまく引っかけられたようだ」

大作も思わず苦わらいをする。

「どうなの、ついでだからその長持ちをあけてみちゃあ」

「中から沢庵石が出てくるくらいのもんだろう」
「当ったよ。柏屋の番頭もそういっていたっけ」
「ふうむ、姉御たちは柏屋にたのまれてここで網を張っていたのか」
これはちょっと意外である。
「そういうわけさ。気の毒だけど、おまえさんを首にすれば千両、手つけ金が五十両、あんまり悪い仕事じゃないからね」
「それで、手つけ金の五十両はもううけ取ったのか」
「うけ取ったよ」
「じゃ、そろそろ引きあげたほうがいい。わしもうまく一杯くわされたが、姉御たちもどうやら引っかけられているようだ」
「それも承知の上さ。いまいちばん大作がじゃまなのは、柏屋じゃなくて、加役さんのほうだろうからね」
「なんだ、知っているのか」
「なにいってんのさ。あの若僧に気をつけるんだよと、今朝教えてやったのはあたしじゃないか」
お浜のあやしい目がわらっている。
「そうか――。そうだったな。わかった、姉御たちはゆうべの三千両をさがすために、わざと加役さんに引っかかったんだな」
「大作、おまえその三千両を南蛮組がどこへかくしていったか知らないかえ」
お浜はさぐるような目になって、平気でそんなことを聞く。まったくいい度胸を持っている女だ。

7

「残念ながら、わしは金には一向縁のない男なんでねえ」
大作は苦わらいをした。
「ついでに、女にも縁がなさそうじゃないか。

気の毒だなあ」
すかさずお浜がそんな憎まれ口をきく。
「ありがとう。その上、命にまで縁がないとなると形なしだから、この辺で退散することにしよう。じゃまをした」
くるりと大作がきびすをかえしたとたん、
「そうはいかん。千両の鴨だからな」
そこの袖垣のかげから岡田真兵衛と植村八十助が身支度をしてつかつかと出てきた。
「ほう、今日は覆面なしだな、殺し屋どの」
大作は胸に怒りがあるから、じろりとそっちを見て冷笑する。
「行くぞ」
元来口数のすくない岡田は、もうさっと抜刀する。
つづいて植村も抜刀したが、これは岡田にたよりきっているらしく、まださきほどの闘志はないようだ。
左手の深編み笠をすてるなり同時に抜きあわせた大作は、いきおい剣先をぴたりと岡田に向ける。
「えいっ」
「とうっ」
岡田は一気に切って出ようとする気ぐみに見えたが、おやというように踏みとまったようである。
一対一になってみてはじめて大作の力量がはっきりわかったのか、それともこの二、三日の度々の真剣勝負で多少大作の腕があがってきたのか。
――むやみに飛びこむと相討ちになる。
岡田はそう見たのだ。
腕はたしかにこっちが上だ。それはわかっているが、竹刀での勝負と違って、相討ちだから勝負なしというわけにはいかないのである。だから、真剣勝負は腕より気魄ということになるのだ。
その気魄という点になると、五両で雇われて

いる岡田真兵衛と、美沙緒のためにも是が非でも勝たなくてはならないと捨て身になっている大作とでは、かなりの差が出てくる。
「おうっ」
「えいっ」
　岡田はうっかり前へ出られないから、じりじりと右へまわりこみはじめた。なんとかしてすきをつかもうという気持ちが半分、こんな若僧を相手にじっとしていては体裁が悪いというみえが半分、つまりいつの間にかごろんぼ剣客の根性が身についてしまったのだ。
　しかし、大作がその岡田の切っ先を追っていくと、岡田の左にいた植村は自然大作の側面に出ることになる。しかも、大作はまったく植村を無視しているように見える。
　――しめた。
　この時になって、植村は急に闘志をあおられてきた。というより、大作をしとめて男になってやろうという功名心に燃えてきたのだ。
　おまけにお浜がちゃんと見ている前なのだから、いっそう張りあいもあれば、やりがいもある。

8

「おうっ」
　植村は九尺の間合いを一気に白刃を振りかぶって大作の左側面から切りこんでいった。大作の目は正面の岡田真兵衛の切っ先を見ているから、この一撃はどうしようもあるまいと植村には必勝の勝算があった。
　が、その自信が植村に上段から切って出る派手な構えを取らせたので、そこに心のすきがあったのだ。
　大作の目は正面の岡田にあっても、極度に緊張した神経の半分は絶えず横になった植村のほうにある。これが行動をおこせば、右へ飛んで両方の切っ先から逃げるか、むしろ左の植村のほうへこっちからも思いきって踏みこみざま岡

田の切っ先からのがれるか、この道しかない。しかし、どっちを取っても、当然敵の二の太刀を覚悟しなければならぬ。それなら植村のほうへ踏んごんで勝負を決したほうが、後の敵は真兵衛一人ですむと、大作ははじめからその決心でいたので、
「えいっ」
　植村が動作をおこすと同時に、思いきり左足をひいて、とっさに左足を植村のほうへなおしざま、だっと一刀を横なぐりに左へたたきつけた。
「わあっ」
　植村は十分踏みこんだつもりでも、真剣勝負はとかく足がすくみがちだから、わずかに切っ先が外れて空を切ったところへ、逆にさっと大作の横なぐりが走ったので、悲鳴をあげながら前へ突んのめる。
「とうっ」
　それと見た岡田が、すかさず横合いから必殺の切りこみをかけて出た。これは十分に踏んごみがきいていたが、植村の仕掛けが意外だったので、思わずそっちへ目を取られた一瞬だけおくれ、
「おうっ」
　岡田のふりおろす一刀より大作のつばめ返しの二の太刀のほうがわずかに早く、岡田は腰のあたりへしたたか切りこまれて、
「う、うっ」
　とうめきながら、どっとそこへしりもちをつく。
　それを見とどけた大作は、血刀をさげたまま黙って林の小道のほうへ走り出す。
　――運がよかったんだ。
　大作はほっとして、自分が強いんだなどとは到底思えない。
　だから、一刻も早くこの寮をぬけ出す必要がある。だいいち、美沙緒のいないところにいつまでぐずぐずしていてもしょうがないのだ。

といって、これから妻恋坂へ引きかえしても、おそらくもうおそいだろう。

——久蔵、たのむよ。

なんとも切ない気持ちである。そして、竜平がたまらなく憎い。

大作は一気に外庭の林の中を駆けぬけて、柏屋の寮の裏木戸から川っぷちの道へ出た。

「あっ」

ちょうど北隣の裏口から市川たちがおなじ道へぬけ出してきたところだった。

9

その夜——。

大川の上は風がややなまぬるく変わって、薄い霧がただよいはじめていた。

大東竜平は日が暮れるとすぐ屋根船を堀留の柏屋の裏の桟橋へつけ、約束どおり惣兵衛から三千両の軍資金を用立てさせ、ついでに惣兵衛をおなじ船に乗せて大川へ出てきた。

「竜平さん、わしにくれる土産物というのはなんでしょうな」

船へ乗ってからも柏屋はそれが気になるように何度も聞いたが、

「さあ、それは見てのたのしみにしておけ」

と、その度に竜平は口を濁して、それがなんであるかはいわなかった。

「大川でわたしてくれるといわれましたな」

「うむ」

「すると、それは船で運んでくるものだ。大きいものですか」

「無論、小さいものじゃない」

「生き物ですか」

柏屋も大体の見当はついているらしく、目を輝かしている。

「くわしいことはおれも知らないんだ。組下の者が、土産物はこっちで用意しておきますからというんで、一切まかせてあるんでね」

「なるほど——。なんにしても、それはたのしみですな」

千両箱を三つ積んだ船房の中は竜平と柏屋の二人きりだったが、艫には船頭のほかに同心二人がいて、八方に目を光らせている。

金船のすぐ後には、同心三人と小者四人をのせた伝馬船がそれとなく護衛についている。南蛮組にそなえているのだ。

「そういえば、竜平さん、鈴村大作って男はどうしました」

惣兵衛はふっと思い出して聞いてみた。もしその土産物というのが美沙緒だとすると、当然用心しなければならないのは大作という男と南蛮組ということになるからだ。

「あの男は、たぶん、お浜の手下どもに今ごろ切られているんじゃないかと思うな」

竜平は冷たい顔をしてあっさりといってのける。

「へえ、それはまたどういうわけなんです」

「わしはよく知らないが、大作は今日朝一度、今戸の柏屋の寮のあたりをうろついていたそうだ。それから、夕方近く、また夢中になって今戸橋をわたったのを見た者がある。そのころ組下の者はわざと寮の警戒をといてみた。南蛮組をおびき寄せるためにな。すると、それをどうして知ったか、お浜が例の浪人者たち五人をつれて、そっとおまえの寮へ入っていったそうだ」

「なるほど」

しまったと柏屋は思った。お浜は南蛮組のかくしていった三千両をさがしに行ったにちがいないからだ。

「まあ、そんなわけで、大作はいやでもおまえの寮でお浜の組とぶつかることになる。ぶつかればただではすまない敵と味方だからな」

「一体、鈴村はなんの用でそう度々今戸の寮へ行くんです」

柏屋はじっと竜平の顔を見ている。

10

「大作がどうしてそう度々今戸へ行くのか、わしはよく知らんが、あの男はどうも南蛮組となにか引っかかりがあるんじゃないかと思う」

竜平は冷たい声でいう。

「なるほど、たしかにそうかもしれません。ゆうべわしの手から美沙緒をさらっていったのも南蛮組のやつらだし、寮へ押しこんできて短筒をぶっ放したのもやつらだって話だ。なんでも、寮のほうへきたやつらは、お浜に大作はどうしたって聞いていたそうですからな」

南蛮組に恨みのある惣兵衛は、いかにも苦々しげな顔つきだ。

「なあに、やつらはいまに加役組の手で必ずあげてみせる。もうやつらの娑婆（しゃば）もそう長くはない」

「ぜひそうしていただきたいもんです。——なるほど、ひょっとすると、こっちが引きあげると南蛮組が寮へ出てくるかもしれない。大東さまはそいつをつかまえてやろうという計略なんですな」

「うむ」

「それを知らずにお浜が浪人組をつれて寮へそっと入りこんだ。そこへまた大作がなんにも知らずに入りこむ。こいつはただじゃすみませんね」

「だから、たぶん今ごろはもう切られていると思うんだ」

「一体、お浜のやつはなにしにうちの寮へ入りこんだんでしょうな」

柏屋はそれとなくさぐりを入れてみる。

「それは現場へ行っている組下の者に聞いてみないとわからんが、あの連中もただのねずみじゃない、またなにか悪事をたくらんでいるんだろう」

竜平はまだ今戸の寮の中へ南蛮組が昨夜かくしていったと思われる三千両のことはなんにも

耳にしていないようだ。

しかし、お浜に今日それをさがされてしまっては、こっちはまる損になると、欲の深い柏屋はちょいと気が気ではない。

「大東さま、まさかこの船が南蛮組にねらわれるなどということはないでしょうな」

「それはまあなかろうと思うが、万一やつらが出てくればしめたものだ。飛んで火に入る夏の虫も同然だからな」

「しかし、やつらはいつも短筒を用意していますぞ」

「その用意ならこっちにもある」

竜平はふくらんだ自分の胸をそっとおさえてみせる。

「竜平さま、土産物の船がきたようです」

艫の同心がそっと声をかけてきた。

「よし、すぐに船端をつけさせろ」

竜平は艫のほうへそういいつけてから、

「柏屋、土産物はな、そのまま家へ運びこんでから、だれもいないところであけてみるんだ。いいか、途中で妙な欲をおこしてはいかん。もう一つは、今夜のことは絶対に外へもらすなよ」

と、鋭い目になって念をおす。

「それはもう、ちゃんと心得ています」

「では、艫へ出てみよう」

竜平は先に船房から艫へ出ていく。

11

船は中州の西側をぬけて、三ツ俣（みつまた）のあたりへ出ていた。

空に七日ばかりの月があって視界はほのあかるいが、正面の新大橋も、両岸の灯も霧にぼんやりとにじんで、その霧は次第に濃くなってきそうな気配を見せている。

その霧の中を荷足船（にたりぶね）が一艘（いっそう）こっちへこぎ寄せてきて、すれちがうように船端をあわせ、艫と艫とが出会ったところで、こっちの小者が向こうの綱をうけとってぴたりと船端を引きよせ

た。
　向こうの荷足には船頭が二人乗っていて、上からむしろをかぶせてあるがどうやら長持ちを一つ積んでいるようである。
「柏屋、土産物はあの船に積んである。家まで送ってやるから、早くあっちへ移れ」
　竜平はあたりを見まわしながらそっと惣兵衛をうながす。
「ありがとうございます。しかし、大東さま、やつらのほうは大丈夫でしょうかな」
　あの長持ちの中が美沙緒だとすると、昨日のことがあるから、惣兵衛は急に南蛮組が心配になってきたのだ。
「あれを見ろ、ちゃんと護衛の船がつけてある」
　そういわれてそっちを見ると、少し離れた深川寄りのほうに、御用ぢょうちんを持った船が一艘、わざとゆっくりこぎながらこっちを待っているようだ。
「わかりました。では、お言葉にしたがいます」
「うむ、途中であけるなよ」
「わかっております。ごめんなすって」
　惣兵衛はぞくぞくするようなよろこびをかみしめながら荷足のほうへ移った。
　とたんに、竜平の屋根船はすっと荷足を離れ、もうゆっくりと新大橋のほうへこぎ出している。これにもちゃんと護衛の船が一艘ついているようだ。
　――さすがに用心深いなあ。
　惣兵衛は感心してじっとそっちを見送っているうちに、こっちの船もぐんぐん永久橋（ながひさばし）のほうへこぎ下ってくる。
「船頭さん、御苦労だね」
　胴の間の長持ちのそばへ座って惣兵衛がねぎらうように声をかけると、二人いる船頭のうち艪（ろ）をこいでいないほうの船頭が、指で自分の口をおさえて、黙っているようにという身ぶりをしてみせた。
　惣兵衛はうなずいてみせて、

　――しかし、なにをそんなに用心しているんだろう。
　と、ちょっとふしぎな気がする。
　が、すぐにその気持ちはわかるような気がした。
　この船頭たちはおそらく本当の船頭ではない。加役組がこんな長持ちをこしらえたと世間にわかれば、それこそえらい騒ぎになる。だから、竜平は腹心の組下を船頭にこしらえているのだろう。
　しかも、今夜はちゃんと護衛の船までついている。
　――これじゃいかに南蛮組でも今夜は出られないだろう。
　惣兵衛はやっと気持ちが落ち着いてきた。

12

　船は鎧（よろい）ノ渡しへかかって、やがて江戸橋が近い。
　霧は次第に濃くなっていくようだ。
　――今夜の三千両は安い。さすがは加役さんだ。
　惣兵衛は長持ちのわきへ黙って座りながら、ともすれば独りわらいがこぼれそうになる。
　昨夜の三千両はまったくむだ金になってしまった。それとあわせれば六千両で娘一人を買ったことになるのだが、なあに、昨夜の三千両はまだ今戸の自分の寮にあるのだ。お浜などにさがし出せるものじゃあるまい。運はたしかにこっちに向いているんだと、そんな気さえしてくる惣兵衛だ。
　――しかし、加役さんはどこでこの娘を手に入れたんだろう。
　どっちでもいいようなものの、ちょっとそれが気になる。美沙緒は昨夜南蛮組の手に入っていたはずだからだ。
　いくら加役組はにらみがきくといっても、南蛮組の手から美沙緒を取りかえしたとは思えな

い。それができるくらいなら、南蛮組はもう加役の手で何人かあげられているはずなのだ。
——そうか、大作というやつは南蛮組と引っかかりがあるというから、美沙緒は一度大作の手にかえったんだな。
相手があの若僧なら、加役組も仕事が楽なはずだ。
いちばん安心なのは、まさか加役さんの手から娘が柏屋の手へ移るとはだれも思いも及ばないことにちがいないということだ。その上、これからどんなことがあっても加役さんは柏屋のために働いてくれなくてはならない因果関係がむすばれたのだ。
——たしかに今夜の三千両は安い。
惣兵衛はまたしてもにやりとせずにはいられなかった。
まずこの長持ちは裏の桟橋から庭をとおって内蔵の前の自分の座敷へそっと運びこませる。そこは十畳と八畳の二間つづきで、廊下の杉戸にかぎをかけてしまえば、店の者はだれも入ってこられない。
鴨はいつもそこへ案内させてうまく料理してしまう。まだ一度も失敗したことのない惣兵衛なのだ。
だいいち、金という力で縛ってあるから、必死に身をまもろうとしても決して声だけは立てないから、女は弱いものである。
また、そのもみあっている間が、千金にもかえがたいたのしみなのだ。そのもみあっている間が長ければ長いほど、後はたわいなくなすがままになってしまうものなのである。
——なにしろ、今夜の鴨は三千両ですからな。どういう羽ばたきを見せてくれるか、わしは大名になったようなものだ。
惣兵衛は我にもなくそっと長持ちの横を手でなでていた。
「柏屋、あの桟橋だな」
手をあけている船頭が、ふっと声をかけてきた。堀留へ突きあたっていちばん左の桟橋を指さしている。
「さようで——、御苦労さまでしたな」
その桟橋も、家の塀も、濃い霧に薄ぼんやりとぼやけていた。

13

用心深い柏屋の家だから、表の店も、裏の塀も戸じまりは至極厳重である。
船から桟橋へあがった惣兵衛は、裏木戸の戸を軽くたたいて合図をした。今夜ここの木戸番をいいつけておいたのは啞の与吉で、啞だから戸をたたく音は聞こえないが、戸にもたれて番をしているから、その震動で主人の帰ったのがわかるらしく、木戸は中からすぐにあいた。
それと見た船頭が、二人がかりで船から長持ちを木戸の中まで運び、そっとそこへおろして、
「柏屋、たしかにわたしたぞ」
と、小声で念をおしてから、さっさと船へかえっていく。
「御苦労さまでございました」
惣兵衛は礼をいって、船が桟橋から離れるのを待ち、もう一度よくあたりを見まわしてから木戸をしめた。
与吉がちゃんと戸じまりをして、これをどこへ運ぶんだねというように主人の顔を見る。
「おまえそっちを持て——。座敷へ運ぶんだ」
口でいいながら身ぶりで見せて、惣兵衛は長持ちの一方を両手で持ちあげる。
人が一人つめてあるのだから、なかなか重い。が、そう広い庭ではないから、すぐに雨戸のしまった縁先へきた。
庭に与吉がいるのだから、雨戸のしまりはせずに出ている。惣兵衛は長持ちを一度そこへおろして、雨戸を一枚あけ、暗い座敷へ入って手さぐりで行燈に灯を入れる。
そこは八畳の居間で、右に十畳の客間がある。そこのふすまを左右にあけひろげておいて、も

との縁先へかえってきた。

「さあ、こいつを座敷へ運びこむんだ」

与吉はうなずいてみせて、ふたたび長持ちの一方を持ち、惣兵衛が先に立って十畳の客間のほうへ運び入れた。

「さあ、これでよし」

惣兵衛はほっとして、

「与吉、おまえは今夜ずっと裏木戸の番をしているんだ。もういいという時に、おれのほうから合図をしてやる」

と、手まねでいいつける。

与吉はにっとわらいながらうなずいて、廊下から庭へおりていった。長持ちの中が女で、たぶん美沙緒だろうという見当までついているにちがいない。

――しょうのないやつだ。

惣兵衛は苦わらいをしながら雨戸をしめて、念入りにしまりをする。

それから杉戸のほうへ行って、もう一度そこのしまりを調べ、客間のほうへ入った。

時刻はすでに五ツ半（九時）をまわっているだろう。店のほうの奉公人もそろそろ寝床へ入るころである。

「やれやれ、やっとこっちのものになった」

もうこの座敷へはどこからも人は入れないのだ。惣兵衛はわざと行燈は八畳の間のほうへおいて、長持ちのそばへ座った。いつも腰からはなさないかぎの束ががしゃりと鳴る。

――どんなかっこうをして長持ちの中へ入れられているのかな。

惣兵衛はぞくぞくするようなよろこびをかみしめながら長持ちのふたに手をかけた。

14

惣兵衛は長持ちの錠を外して、静かにふたをはねてみた。

立ちこめていた甘い脂粉の香が生娘の肌のにおいに醸されて、むらがるように惣兵衛の貪欲な男心を激しく刺激する。

そして、目は、両手両足を縛られて、手ぬぐいでさるぐつわをされ、やや乱れた衣紋をそのままに仰向けに寝かされている美沙緒の姿をまぶたに焼きつけるように凝視して、

「おお、かわいそうにな」

と、惣兵衛はうめくようにつぶやいた。そのかわいそうはただ口先だけのことで、胸の中では、こりゃすばらしい獲物だと狂喜している。

行燈を次の間において、こっちの座敷のすみずみには灯のとどかぬ薄やみがあるほどのどんよりとした光の中で、美沙緒はぱっちりと目をあいて、その目はまだうつろに、大きく胸をはずませながら切なげに空気をむさぼっている。死人のように蒼白になった額のあたりに、じっとりと脂汗さえうかんでいるようである。

「そうかそうか、苦しかったか。そうだろうとも。こんな狭いところへ詰めこまれていたんだものな。いま楽にしてあげますぞ」

惣兵衛は美沙緒の項の下へ右手を差し入れ、ゆっくりと美沙緒の半身をおこしてやる。

美沙緒はまだ半分正気がつかないらしく、体中に力がなく、人形のようにがくりとうなだれてしまう。根のおちた島田髷がひどく痛々しい。

惣兵衛は手早くさるぐつわを取ってやり、そのままうしろから両手を胸へまわして立ちあがり、ずるずると美沙緒の体を長持ちから畳の上へ引きずり出す。むっちりとした豊かな胸乳の感触がなんとも手に生々しい。

「さあ、これでいい。いまなわをといてやりますからな」

そこへ女体を寝かしてやろうとして、ずるい惣兵衛はふっと気がかわったのである。

昨夜は船の中でこの女体を抱こうとして、毛虫のようにきらわれている。いまなら思いのままだ。そう考えたとたん、惣兵衛はなわつきのままの女体を抱きしめて、座ったひざの上へのせ、いきなりくちびるを美沙緒のくちびるの上

へかさねていこうとした。
「いやっ――いけません」
　美沙緒はやっと正気を取りもどしたらしく、急に全身をかたくしながら力いっぱい顔を左右に逃げようとする。
「おとなしくしなされ。わしはあんたの命の恩人じゃ。そうきらうものではない」
　惣兵衛はねこなで声でいいながら、なおも執拗にくちびるを追おうとする。
「助けて――。いやです」
「どうしてそうわしをきらうんでしょうな」
　しょせんはわが物にする娘なのだ。惣兵衛は気長にかまえて、あくまでもくちびるをねらう。
「ゆるして――。これは大作さまのものです」
「なにっ、あんたはもう大作に体までゆるしてしまったんかね」
「はい。大作さまに会わせて」
「冗談じゃない。わしはあんたの体を三千両で買ったんだ」
　惣兵衛はむらむらっと腹が立ってきた。

15

――うぬ、かまうものか。
　惣兵衛はくちびるを追うのをやめて、自分の腕の中にある美沙緒の顔をじっと見すえているうちに、たまらない嫉妬を感じてきた。
　朝からの監禁と、度々の地獄の責め苦に、すでに疲労しきって精も根もつきはてている美沙緒はげっそりとした蒼白な顔になって、軽く目を閉じながら、その目じりに涙さえ光って、切なげにあえいでいる。
　生娘ならともかく、すでに大作といたずらをして男を知っている体なら、そういたわってやる必要はない。生娘だと思うから、こっちは三千両という大金を出しているのだ。いや、昨日の三千両とあわせれば、六千両というばかばかしい金額にのぼるのだ。
　いわば傷物に六千両をかけたばからしさ、その高価な代償をこの女体から今夜は思う存分にむさぼり取ってやらなくては腹の虫がおさまらない。
　惣兵衛はいきなり右手で美沙緒の乳房を着物の上からわしづかみにした。
「あっ」
　びくりとして目をあいた美沙緒は、またしても身もがきしてそのいやらしい手をのがれようとしたが、こんどはむだだった。手足の自由がきかない上に、自分の体は男のひざの上にあって、左手でしっかりと胸へ抱きしめられている。がんじょうな体つきをした惣兵衛は、腕力も普通の男よりは強い。
「助けて、大作さま」
「また大作さまか――。気の毒だが、大作はもう切られてしまった」
「うそです、うそです」
　怒ったように美沙緒がいう。
「加役の竜平さんから聞いたんだから間違いはないさ。切ったのは今戸の浪人どもだそうだ」
「うそです。――そんなはずはありません」
「それならそうしておきなさい。大作が生きようと死のうと、わしの知ったことじゃない。わしはおまえさんの体を御用人長坂さまから三千両で買ったんだからね」
「やめて――。あたくしにさわらないで」
「虫のいいことをいいなさる」
　乳房だけではあきたらなくなった惣兵衛は、畳の上へ女体を仰向けにおいて足のなわをときはじめた。
「ゆるして――」
　足のなわがとければ次にどんなまねをされるかわかりきっているので、美沙緒は必死に体を横にしてのがれようとしたが、
「おとなしくしなされ」
　ひざで股のあたりをぐいっとおさえつけられると、もう身うごきできなかった。
　足のなわはついにとけたようだ。

惣兵衛は顔のほうをちらっと見て、悪魔のような薄らわらいをうかべていた。
「助けて――」
もう大きな声さえ出ない美沙緒である。
「うふふ――」
惣兵衛はのどでわらいながら女体の上へのしかかろうとする。
「柏屋、なにをしているんだね」
ふいに、障子の外から、低いが野太い声が聞いた。

16

「だれだっ」
絶対に人の入ってこられない座敷なのだから、惣兵衛はぎょっとして美沙緒を放して座りなおる。
「南蛮太郎――」
声の主は低く名乗りながらさらりと障子をあける。宗十郎頭巾(ずきん)をかぶった男が、右手の短筒を柏屋の胸に向けてぬっと立っている。
「おまえさん、どこから入ってきたんだ」
惣兵衛はとっさに度胸をきめて、悔しまぎれに聞く。
「庭からだ」
「そんなはずはない。雨戸にはちゃんと戸じまりがしてあるはずだ」
「いや、戸じまりのないうちに入ってきて、おまえの帰りを待っていたんだ」
「なにっ」
すると、自分が竜平といっしょに裏の桟橋(さんばし)から船で出ていった留守の間に押しこんできたことになる。
「裏には下男がいたはずだぞ」
「下男だってたまには骨休みがしたくなる」
「一体、なんの用があって来なすったんだ」
「一万両ばかり借りていきたいと思ってな、金蔵のかぎをこわすぐらいはできないこともないが、おまえが加役の大束といっしょに船で出かけたんで、ことによると土産物をもらって帰ってくるかもしれないと思い、気長に待っていたんだ」
南蛮太郎は落ち着き払っている。
「おい、むやみにそんなものをぶっ放すと町方に取りかこまれるぞ」
惣兵衛は脅すようにいう。
「人の心配までしてくれなくてもいい。――おい」
南蛮太郎は目でわらいながら八畳の間のほうへ声をかける。
そこの金蔵のほうのふすまがあいて、おなじような宗十郎頭巾の男が二人、つかつかとこっちへ入ってきた。
「おまえさんたち、金はあきらめるから、この娘だけはおいてってくれ。おまえさんたちは女には手をかけないはずだ」
惣兵衛はそんな虫のいいことをいい出す。
「まあ、おとなしくしているがいい」
その間に二人の宗十郎頭巾は美沙緒のなわをといて、そのなわで惣兵衛を縛りあげ、そこに落ちていた手ぬぐいでさるぐつわまでかませてしまう。美沙緒に使ってあったものがそっくり惣兵衛に間にあうのだから、皮肉なまわりあわせである。
「次郎さん、金のほうをたのむ」
「心得た」
南蛮次郎は柏屋の腰からかぎ束をぬきとって金蔵のほうへ行く。
「三郎うじは庭のほうを見てくれ。たぶん、もうそっちの支度もできているはずだ」
「承知した」
三郎は廊下のほうへ出ていく。
「美沙緒さん、歩けるか。立ってごらん」
「はい」
美沙緒は夢のような気持ちでふらふらと立ちあがる。

17

「大丈夫そうだねえ」

「はい」

美沙緒はふらつく足で必死に廊下まで出て、けがらわしい柏屋から見えない障子のかげへかくれて座る。

「柏屋、あんまりあこぎなまねばかりしていると、しまいには大切な命を失うようになるぞ。まあ、よく考えてみることだな」

南蛮太郎はおだやかな声でいう。

なにをいう、おまえたちこそ強盗のくせにと惣兵衛はいいたげに、へびのような目をして南蛮太郎をにらんでいる。

「業の深い男だ。結局、おまえは自分がむさぼり集めた小判の下敷きになってもがき死にをすることになるんだろう」

南蛮太郎はあわれむようにいって、それっきりもう口はきかなかった。

仲間の者は金蔵をあけて、何人かで千両箱をどんどん庭へ運び出しているようだ。

だれも口をきかないから、足音だけが重々しく耳につく。

まもなく蔵の戸のしまる音がして、さっきの二人が座敷へもどってきた。

「太郎さん、すんだぞ」

「そうか——。じゃ、かぎをかえしてやれ」

「そら、柏屋、かぎをかえすぞ」

次郎頭巾はがしゃりとかぎ束を惣兵衛の前へ投げ出して、

「どうせ人ののろいの血のついた金ばかりだろうが、蔵の中は千両箱の山だ。ついでにもう一万両借りていこうかと思ったが、やめておいた。一万両あればいいんだろう、太郎さん」

と、欲のないことをいう。

「うむ、一万両でいい。不用の金はかえって荷やっかいになるばかりだからな。さあ、引きあげよう」

太郎が目でわらいながらいうと、

「柏屋はこのままでいいか。ついでだから長持ちの中へ入れていってやろうか」

と、三郎頭巾が憎々しげに柏屋のほうを見る。

「まあ、今夜は勘弁しておいてやれ。どうせこの男は畳の上では往生できそうもないやつだ。さあ、美沙緒さん、出かけよう」

太郎は先に立って歩き出す。

「はい」

美沙緒はただこの恐ろしい家から早く出たさに夢中になって立ちあがった。

「美沙緒さん、手を取ってやってもいいんだが、そんなことをしちゃ大作うじにすまんからな。一人でしっかり歩くんだ」

「はい、歩きます」

美沙緒は太郎のそういう心づかいがなにか涙が出るほどうれしかった。

庭へ出ると、霧がもうかなり深くなって、六尺先は見えないくらいである。

「美沙緒さん、足もとに気をつけるんだ。ここから先は桟橋だ」

木戸を出ながら太郎が注意してくれた。

「太郎さん、柳橋の久蔵って男を知っているかね」

桟橋へかかると、下の舟からそう聞いてきた者がある。

18

「まあ、久蔵がまいってくれたのでしょうか」

美沙緒が思わず口走ると、

「知っているのか、美沙緒さん」

と、南蛮太郎が振りかえって聞く。

「はい。今朝、供をして甲府まで行ってくれることになっておりましたの」

そういううちにも桟橋をおりきってみると、南蛮組の舟が三艘もやってある向こうに久蔵の猪牙（ちょき）がとまって、しきりにこっちを見ているようだ。

「久蔵——」
「ああ、お嬢さん、いまそこへ行きやす」
　久蔵がいそいで猪牙をまわそうとすると、
「待て、久蔵、舟をわたっていくほうが速い」
　太郎は久蔵をとめて、
「美沙緒さん、久蔵の舟で帰るか」
　と、美沙緒に聞く。
「はい、そうさせていただきます」
「そうか。じゃ、この舟をわたっていくがいい。——おい、船頭、手を取ってあげろ」
「へえ」
　こっちの舟の船頭が手を出してくれたので、美沙緒はその手につかまり、胴の間を横切って久蔵の猪牙へ移る。
「出発——」
　太郎がその舟に乗って低い声で命じる。
「出しやす」
　両方の船頭が素早く棹を取って、二艘の舟はたちまち柏屋の桟橋を離れた。
「次郎さん、先へ行け」
「心得た」
　向こうの三人乗っている次郎組の舟がぐいぐいと艪をこぎ出す。
　太郎組の二人乗っている舟がすぐにその後につづいた。
「だんながた、ありがとうござんす。おかげで助かりやした」
　久蔵が猪牙を太郎の舟とならべてうれしそうに礼をいう。
「久蔵、霧が深いから、舳から目を離すなよ」
「へえ」
　柏屋の桟橋はもう霧の中へかくれて見えない。
「おまえ、どうしてここがわかったんだ」
「へえ、あっしはお嬢さんの長持ちのあとをずっとつけていたんです」
「そうか、それならわかるはずだな」
「その長持ちが柏屋へ運びこまれちまったん

で、どうしようかと思って困っているところへだんながたの舟が着きやしたんで、しばらく様子を見ていたんです」
「見ていたのがおまえでよかった。町方の者だとただではすまない」
　太郎は苦わらいをしたようである。
「美沙緒さん、霧は冷たいから、腹にしっかり力を入れていないと風邪をひくよ」
「はい」
「大作うじに会ったらな、何度も女を敵にさらわれるのは男の恥だとしかってやりなさい」
「いいえ、あたくしが、あたくしが意気地がないものですから」
「あは、は、いまのは冗談です。しかし、あんたももう少し強くならなくちゃいけないな」
「はい」
　舟は江戸橋の横へ出てきたようである。

19

「久蔵、柳橋まで送っていってやりたいが、こっちも少しいそがしい体なんだ。おまえ一人で大丈夫だろうな」
　舟が箱崎橋の横手へかかった時、太郎が念をおすようにいう。
　ここをまっすぐ行けば永代橋の下へ出るし、左へ折れて箱崎橋の下をくぐれば三ツ俣へ出る。柳橋へ行くには三ツ俣へ出たほうが速いのだ。
「へえ、もう大丈夫でござんす。幸いこの霧ですから、怪しい舟が出てもきっとうまくこぎぬけてみやす」
「そうか——。おまえの腕ならそれができるだろう」
「こうなりゃあっしも命がけでござんすからね」
「じゃ、たのむよ」

太郎は久蔵にそういってから、
「美沙緒さん、大作うじに会ったら、加役の竜平に気をつけろといっておきなさい」
と、美沙緒のほうへいう。
「はい、そう申します」
「ひょっとすると、加役は深川屋をねらうかもしれない。これも大作うじとよく相談してみることだ」
「はい」
「では、ここで別れよう」
「だんな、どうもありがとうござんした」
「御恩は一生忘れません」
「油断するなよ、久蔵」
「へい」
南蛮太郎の舟はたちまちまっすぐこぎ下って霧の中へ消えていく。
久蔵は猪牙を左へ入れて箱崎橋の下をくぐりぬける。
「お嬢さん、あっしはさっきもいったとおりずっとお嬢さんの長持ちをつけていたんだが、それが柏屋の手に移ってあの家の中へかつぎこまれた時は、本当にどうしようかと思いやした」
「ありがとう、久蔵。あたくし、こんどこそもうだめかと思いました」
「二度まで南蛮組に助けられるなんて、ふしぎな縁ですねえ」
「あの、大作さまはどうしたのでしょう」
美沙緒は思いきって聞いてみる。
「ちげえねえ、お嬢さんがいちばん会いたいのは鈴村の若だんなだった」
久蔵はぐいぐい猪牙をすすめながら、
「お嬢さんの長持ちがあの鳶勝の家を出る前に、もう一棹あそこから長持ちが出たんでさ。つまり、こっちの目をくらますためなんですね。若だんなはその長持ちのほうの後をつけていったんです。念のためにあっしを後へ残しやしてね」
と、この時のことを話し出す。

「それで、前の長持ちはどこへ行ったんです」
「たぶん、今戸の柏屋の寮だと思いやす。はあてな、加役はそんなことをするくらいだから、今戸へなにかわなをこしらえているかもしれねえ。――大丈夫だろうなあ、若だんなは」
久蔵ははっとそれを思い出して、急に顔色をかえたようだ。
美沙緒はまたしてもどきりとせずにはいられない。

20

「お嬢さん、寒くはありませんか」
久蔵は力いっぱい猪牙を進めながら聞いた。
霧でじっとりともう着物はぬれているようだし、疲れきってもいるだろうから、美沙緒の顔色は次第に青ざめてくるように見える。久蔵はなんとかして一刻も早く舟を深川屋の桟橋へつけてやりたかった。
「いいえ、寒くはありません」
口ではそう答えたが、その実、美沙緒はなんとなく悪寒さえ感じてきて、歯をくいしばっているのだ。
が、そんな体の心配より、美沙緒にはもっと大きな不安がある。
「久蔵、いまから今戸へ行ってみても、もうおそいでしょうか」
思いきって聞いてみた。
「そうですねえ。とにかく、一度深川屋へ帰ってみやしょう。案外若だんなのほうが一足早く帰ってきているかもしれやせんからね」
「それだとうれしいのですけれど――」
しかし、美沙緒の不安は大きくなるばかりだった。
竜平はさっき恐ろしいことをいっていた。
「あんたは柏屋にわたしてやる。大作は南蛮組と怪しい関係があるから召し捕ってやる」
そんな風なことをいいおいて怒って帰っていったが、はたして自分は長持ち詰めにされて、

柏屋へ運ばれてしまった。

そして、大作は偽物のほうの長持ちについて、今戸の寮へ行ったという。そんな手をつかうくらいだから、今戸の寮にもきっとむごたらしいわながこしらえてあるにちがいないのだ。

だいいち、竜平としてはこっちをこんなひきょうな目にあわせているのだから、生かしておいては自分の身があぶなくなる。それだけに、どうしてもこっちを殺さなくてはならないと必死になっているにちがいない。

――恐ろしい男。

美沙緒はがたがたと身ぶるいがとまらなくなってきた。

大作さまがもし死んでいたらどうしようと思ったとたん、美沙緒はくらくらっとめまいさえ感じて、思わずそこへ突っ伏していた。

「あっ、お嬢さん、いけねえ。もう少しだから、しっかりしておくんなさい」

久蔵の声が夢のように耳に入って、大丈夫ですといってやりたかったが、もうその気力さえなかった。

「お嬢さん、――お嬢さん、もう少しの辛抱だ」

艪をはなすわけにはいかない久蔵は、無我夢中で猪牙を進めた。

やっと両国橋の下をくぐりぬけて、霧で見えないが、もうすぐ神田川の河口へ入るはずである。

じっとそっちをにらんでいる目に、霧の中からぼんやりとおなじような猪牙が見え出して、ぐんぐんこっちへこいできた。

「おい、久蔵じゃないか。どうした」

その猪牙に乗っていたのは意外にも大作だった。

「あっ、若だんな――」

そう叫んだ久蔵は、急に力がつきて、へなへなとそこへ座りこんでいた。

かくれ家

1

翌朝――。

堀留の柏屋から迎えをうけた大東竜平が組下の筆頭与力伊藤権太夫と同心小宮松吉をつれて惣兵衛をたずねたのは、まだ四ッ（十時）には少し間のある時刻だった。

惣兵衛は客たちを例の十畳の座敷へむかえると、あいさつはぬきにして、

「大東さま、ゆうべはまた南蛮組にしてやられましてな」

と、いきなり頭から切り出したほど興奮していた。

「なにっ、南蛮組にか――」

竜平はどきりとして目を光らせながら、

「それで、なにをやられたんだ」

と、思わずせきこんでいる。

「あの長持ち詰めの娘と、金を一万両、さっそく町方へ届け出ようかと思いましたが、これは大東さまのほうがいいと気がつきましてな」

「そうか――。しかし、娘をつれていかれたのはまずかったな」

「いいえ、一万両のほうだってまずくないことはございません。ちょっとやそっとでかせぎ出せる金じゃございませんからな」

惣兵衛は怒ったように口をとがらせている。

「それはそうだろう。しかし、小判は口をきかぬが、生きた娘は口をきくぞ。それとも、口のきけないようにしておいた後か」

「それならまだいくらかあきらめもつきます。長持ちから出したところを、いきなりやられました」

「おかしいなあ。こんな用心のいい家へ、どこから南蛮組は押しこんだんだ」

「それがまったく抜け目のないやつらで、わし

が大東さまと裏から船で出かけるのを見ていたんですな。そのすぐ後で家の中へ入りこみ、わしの帰るのを待っていたようです」
「庭番はどうしたんだ」
「あいつが間抜けなんですな。わしらを送り出して、裏木戸のしまりをしてから台所へちょいと腹ごしらえに行ったんだそうで、それをねらわれたようです」
「こっちはできるだけの手を打ったんだが、そんなところにほころびが切れていたんじゃしょうがない。押しこんでいたのは五人か」
「いや、太郎、次郎、三郎の三人で、四郎、五郎の二人は裏で舟の用意をして待っていたようです。わしをここで縛りあげると、次郎、三郎の二人がわしの腰からかぎ束をぬいていって、金蔵から千両箱を十箱運び出し、裏へ合図をして舟へ積んだようです」
「そのとき庭番はどうしたんだ」
「当て身をくらって、これも縛られていたそうです」
「ゆうべは霧が深かったからな。やつらが仕事をするにはちょうどよかったんだろう。しかし、金のほうはよく一万両ぐらいですんだな」
「ひどいやつらで、金は一万両でいい、余分の金は荷やっかいだといっていました。一万両がどんなに大切なものか、人の金だからやつらにはありがたみがわからないんだ」
「しかし、柏屋、それほどの大事を、なぜゆうべのうちにこっちへ知らせてくれなかったんだ」
権太夫がそばから不審そうに聞く。

2

「日ごろあんまり用心をよくしておくのも考え物ですな。ゆうべはまんまとその裏をかかれてしまいました」
惣兵衛は権太夫のほうにいって苦わらいをする。
「なるほど、この座敷は、廊下の板戸をしめて中からしまりをすると、店の者は入ってこられないようになっているな」
役目柄、権太夫はもうちゃんと間取りを見てとっている。しかもこの狒々おやじは、だれも店の者が入ってこられないようにしておいて、借金というひもで引き寄せられてくる婦女に不埒を働いていたのだから、決して同情は持てない。
「まったくえらい目にあいました。わしも与吉も手足を縛られ、さるぐつわまでされているんで、朝までどうしようもありません。今朝になって店の者が庭の与吉を見つけて、それから騒ぎになったというわけです」
「権太夫、なんとかして今日中に二人の行方を突きとめてしまわぬとことだぞ」
竜平はそれどころではない。早く大作と美沙緒の口をふさいでしまわぬと、自分たちが窮地におちいるのである。
「二人は柳橋の深川屋へ帰っているんじゃないでしょうかねえ。ほかへ行くところはないようですからな」
惣兵衛はたかをくくっているようだ。
「いや、深川屋へはもどっていない。ゆうべせっかく大作を今戸の寮へおびきよせたんだが、とうとう逃げられてしまったんで、深川屋へはずっと網が張ってあるんだ。美沙緒にしろ大作にしろ、深川屋へ帰ればすぐに知らせがあるはずなんだ」
竜平の顔は暗い。
小宮松吉は昨夜今戸で失敗した組の中の一人なので、目を伏せたまま顔をあげられないようだ。
「大作というやつはよっぽど運のいいやつなんですな。しかし、二人とも深川屋へもどらないとすると、美沙緒はまだ大作の手に帰っていないかもしれませんな。それとも、二人とも南蛮組がどこかへかくまっているか」
「権太夫、わしは南蛮組の巣はどうも今戸か橋場あたりと見ているんだが、どうだろうな」

「たしかにその辺が臭いでしょう。万一、二人が南蛮組にかくまわれているとすれば、二人の口はそう恐れるに足りません」
「なるほど、それはそうなるな」
竜平は急に気持ちが軽くなって、
「よし、とにかく一組みは深川屋、一組みは今戸、橋場方面、今日はそっちへ全力をそそいでみよう。それでいけなければ、なあに、こっちにはまだ切り札がある」
と、冷たいうすらわらいがうかんでくる。
「たぶんそうなるだろう」
「大東さま、南蛮組が今日中に御用になれば、一万両は無事にかえってきそうですな」
「その節は、半分の五千両、軍資金に献上いたします。そのかわり――」
「後はいうな、わかっている」
竜平は苦わらいをしながら立ちあがったが、こんど美沙緒が手に入っても柏屋へわたす気はない。その場で切ってしまわぬと災いが後へ残るからだ。

3

おなじ朝――。
橋場の対岸隅田村の農家の離れを借りた大作と久蔵は、熱が高くてまだうわごとばかりいう美沙緒のまくらもとに座って、薬を買いに行ってくれた忠吉の帰りを待ちかねていた。
「医者にきてもらわなくても大丈夫ですかねえ、若だんな」
久蔵はひっきりなしに病人の額のぬれ手ぬぐいをしぼりかえてやりながら目をしょぼつかせている。
「うむ、忠吉が帰ってきたら相談してみよう」
大作は火のような美沙緒の左手を握って、時時脈搏をとりながら、荒い息づかいをじっと見まもっていた。
ここは忠吉の兄の家で、医者を呼ぶにしても忠吉が帰ってきてくれなければ勝手がわからな

いのだ。
「ゆうべここまでくるのは、やっぱり無理だった。どこか旅籠屋へ泊まればよかったんでさ」
「うむ。――まあ、愚痴はよそう」
どこか旅籠屋へと考えないこともなかった。しかし、人の出入りの多い旅籠屋ではなんとなく安心できなかったし、
「だんな、あっしの兄貴の家へ行きやしょう。ちょうど離れがあいているし、あんまりきれいじゃねえが、そこならゆっくり休めます」
と、せっかくいってくれる忠吉の親切も無にできなかった。
大作は昨日、今戸の柏屋の寮の裏木戸から出て、隣の丸屋の寮の裏から出てきた市川たちとぱったり顔をあわせてしまった。
――よし、切りぬけるほかはない。
とっさに覚悟して、一度鞘におさめた刀の鯉口を切って三人のほうへ進んでいくと、
「鈴村うじ、今日はよそう。ここはもう加役組に取りかこまれている。勝っても負けても後が面倒だからな」
と、意外にも市川のほうから妥協を申し入れてきた。
彼らは岡田と植村とが切られているのを知らないからそんなのんきなことをいうんだなと大作は思ったが、無用の血はなるべく流したくないので、
「よかろう、承知した」
と、あっさり答えて彼らとすれちがった。
そのままいそぎ足に川上のほうへ進んでいくと、例の酒屋へ出る横町から忠吉がふいに飛び出してきて、
「あっ、だんな、よくぬけ出してこられやしたね。さあ、大いそぎだ」
と、たもとをつかまんばかりにして船米のほうへ走り出した。
「忠さん、この辺は加役組が取りまいているって、本当かね」

大作は走りながら聞いてみた。
「なあに、これから取りまこうってところでさ。やつらはいま今戸八幡の中へ集まっているんです」
「そうか。じゃ、うっかり陸は帰れないな」
「とにかく、一度うちへおいでなせえ。あっしがよく様子をさぐってから帰りの道は考えることにしやしょう」
日はもうすっかり暮れかかって、そのころから川面に少しずつ霧がおり出していたのである。

4

市川たち浪人組は、岡田と植村が切られたとわかると、血相をかえて大作をさがしまわっているという。
加役組はそれを遠まきにするように本陣を今戸橋のあたりへ移したと、忠吉はそこまでさぐり出してきてくれた。
「川筋はどうだろう」
「無論、平野屋から舟だって出ているでしょうよ」
しかし、ぐずぐずしていると加役組の手が船米までのびそうなので、忠吉はすぐに大作を猪牙に乗せて、対岸の隅田村のほうへ移ってしばらく様子を見ることにした。
「おかしいねえ、だんな。今日は浪人組にだんなを切らせて、加役組が後見をしているような寸法ですぜ」
「うむ、それが序幕で、わしが浪人組に切られると、次の幕は加役が不逞浪人どもを召し捕るということになるんだろう」
「なあるほど、あくどいってことになると、加役のほうが一枚上ってことになる。なにがなんだかわからねえ御時勢でさ。だから、世の中は悪くなるばかりなんですね」
「そういうことがいえないこともないだろうな」

大作は胸が重くなるばかりだった。
そのうちに、いいあんばいに霧が深くなり出したので、忠吉はその猪牙で大作を柳橋まで送ってくれることになり、思いがけなくも神田川の入り口で美沙緒を乗せた久蔵の猪牙と出会ったのだ。
しかし、その時は美沙緒も久蔵もほとんど疲れきっていた。
やっとこっちの猪牙へ移った美沙緒は、しっかりと大作に抱きしめられて、
「寒い、――寒い」
と泣きじゃくりながら胴ぶるいがとまらないのである。
しかも、久蔵が念のためにと一人で柳橋のほうへ猪牙を入れてみると、深川屋はどうやら加役組の張りこみに取りかこまれているようだという。
おそらく、この張りこみは、大作が今戸でうまく姿をくらましているので、万一のためにこっちへも手をまわしたものなのだろう。
ともかくも深川屋へは入れない。
そこで、久蔵が屋根船を知りあいの船宿から都合してきて、もう一度大川をさかのぼり、昨夜この離れへ落ち着いたのはもう九ツ(十二時)に近い時刻だったのだ。
そのころから美沙緒の胴ぶるいはやっとおさまったが、体中が燃えるように発熱して、おびえたようなうわごとばかり口走り出したのである。
忠吉が心配して、母屋から買いおきの風邪薬を持ってきてあれこれと無理にのませてみたが、いまだにそのしるしさえ見えない。
「怖い、――大作さまは、大作さまは」
はっと目がさめると、美沙緒はすぐに大作をさがす。
「ここにいるじゃないか。しっかりするんだ」
「ああよかった。手をしっかりと、握っていてくださいませ。あたくし怖い」

そして、またうつらうつらと眠りはじめる。その顔はみるみるげっそりとやつれていくのだ。

5

「久蔵、少し横になれ」

障子に朝日がさしてきてから、大作は何度も久蔵にそうすすめた。二人ともここへくる船の中で居眠りをしたぐらいのもので、昨夜からまだろくに寝ていないのだ。

「なあに、もう忠さんが帰ってくるだろうから、それまで待ってみやしょう」

久蔵は目を真っ赤にしてしょぼつかせながら、美沙緒のまくらもとを離れようとしなかった。

「若だんなこそ、少し横になっちゃどうです」

「いや、わしは船の中でかなり眠っているから」

考えてみると、あの時は美沙緒の体が心配ではあったが、その美沙緒をしっかりと胸の中へ抱いて、抱かれている美沙緒もすっかり安心したのだろう、あたたかい体温をかよわせながらうつらうつらと甘い眠りにさそわれてくる、そのしばらくの間がいちばんしあわせな時だったような気がする。

「しかしなあ、久蔵、美沙緒はよく助かってくれたもんだなあ」

それを考えると、大作はいまだに奇跡のような気がしてしようがないのだ。

「本当ですねえ。あの長持ち詰めにされていた間だってかなり長い。しかも、竜平のやつはどうしてもお嬢さんがうんといわねえもんだから、柏屋へわたしてやるとはっきりいったんだそうですぜ。たいてい気の弱い娘っ子なら、あの長持ちの中でもう死んでいまさあ。これでお嬢さんは芯はなかなか強いんでさ。あっしは感心しているんでさ」

「うむ、芯はしっかりしているんだ」

はじめての晩、あの深川屋の二階で、美沙緒はどうしても寝床へ入ろうとしなかった。その

潔癖さが、竜平のような男でもついに破れなかったのだろうと大作は思う。弱々しく見えていて、いざとなればいつでも死ぬという覚悟をはっきり見せる美沙緒なのである。

「けど、若だんな、あの太郎さんて人もどうしてなかなか立派な男でしたぜ。あっしにゃどうしても盗人のようにゃ思えなかったな」

「あれは人間としては竜平などよりはるかに優れた男なんだ。惜しいことに、物の考え方が少し荒っぽい。戦国乱世の時代に生まれていたら、すくなくとも一方の大将になれる男だろうな」

「なるほど、太閤記の野武士の大将蜂須賀小六ってところですかねえ。とにかく、柏屋の金蔵から一万両、千両箱にして十だ、こいつを舟に積んで堂々と引きあげていくんだからいい肝っ玉でさ。あっしはすっかり感心しちまったなあ」

「久蔵、家へ帰ってもおときにはいわないほうがいいぞ。また心配するからな」

「いいやせんとも――。女子供にわかる話じゃありやせんや。けどねえ、若だんな、あっしは本当の話、太郎さんがつかまらなけりゃいいがと思って心配しているんですがねえ」

「いや、あの連中はつかまらないうちに日本から姿を消すだろう」

二度まで美沙緒を助けられてみると、大作としても早く無事に日本を出発してくれるようにと祈らずにはいられなくなる。

ふっと庭のほうから足音が近づいてくるようだ。

6

足音は忠吉が帰ってきたのだった。

「だんな、ただいま帰りやした」

縁側の障子をあけて入ってきた忠吉は、大きなふろしき包みをそこへおく。

「世話になるなあ、忠さん」

「そんなこといいっこなしさ、だんな。お嬢さんどうです」

「うむ、よく眠っているようだ」
「熱は――」
「一向それがな」
「いけやせんねえ。けど、いい薬をもらってきたから、もう大丈夫でさ。これなんですがね」
　忠吉は紙入れの中から大切そうに半紙にくるんだものを取り出して、大作にわたしてくれる。
　大作がそれをあけてみると、金色をした小さな丸薬が十粒ほど入っていて、ぷうんと高いさわやかなにおいが鼻をうってくる。それだけでも決して安い丸薬ではなさそうだ。
「なんという薬だろうな、忠さん」
「金命丸とかいいやしてね、どこかの藩の秘伝で、ふつうの薬屋には売ってないんだって話です。いいあんばいに姉がそいつを持っていて、そんなに熱が高いんなら五粒ぐらいのませてみろ、半日で熱がさがってくるはずだ、さがってこないようならその時もう五粒のませてもいいが、いいほうに向いたとわかったらもうのませないほうがいい、あたりまえの風邪なら二粒でいいんだそうです」
「ありがとう。目がさめたらさっそくのませてみよう」
「それからねえ、だんな、そんな風ならお嬢さんの用意もないんだろう。このふろしきの中へ一通りのものを入れておいたから、使えるものは遠慮なく使って、使いすてにしてもらっていいってことです」
「なにからなにまですまんなあ」
　実は、昨夜から発汗がひどく、母屋から借りてきてくれた浴衣も三枚取りかえてしまったので、どうしようかと思っていたところなのだ。
　無論、久蔵が最後まで大事に持ってまわってくれた美沙緒の旅支度の入ったふろしき包みの中の肌着類もとっくに使ってしまっている。
「これをくれた姉さんというのは、ゆうべ会った船米のおかみさんかね」
「そうなんです」

それは深川屋のおときよりも二つ三つ若いだろうか、なかなかきりっとした大年増で、前身は玄人あがり、そんな感じの気性の勝った女のようだった。
「いずれあらためて礼には行くが、忠さんからもよろしくいっておいてくれ。たしかおさわさんとかいったな」
「そうです。それからねえ、だんな、今朝は今戸から橋場へかけてすっかり手がまわっているようですよ」
「加役のか――」
「そいつが聖天町の浪人組まで駆り出されているんだからおかしい。お目当てはだんなとお嬢さんにきまっているんだが、例の南蛮組の巣を洗えというのが表向きの命令なんですってさ」
　忠吉は首をすくめてくすりとわらっている。

7

「忠さん、やつらこっちへわたってくるような心配はないかねえ」
　久蔵がそばから聞いた。
「そいつはまあ大丈夫だと思うがね、出入りだけは気をつけていねえと、後をつけられるという心配がある。だから、おれはいまわざわざ舟を綾瀬のほうへ入れて遠まわりをしてきたんだ」
「そうだなあ、おれたちはうっかり外へ出ねえほうがいいってわけだな」
「それは用心するに越したことはない。善人がびくびくしてかくれまわるなどと、考えてみればおかしな話だが、まあ当分はしようがあるまい」
　大作は苦わらいをせずにはいられなかった。しかし、物は考えようで、こっちは苦わらいをしてすませていられるが、竜平はこっちの口をふさがないかぎり一刻も安心していられないだろうから、まるで生き地獄に座っているのとおなじ気持ちにちがいない。
　あわれな男だという気もするのである。

「大作さま、――大作さまは」
ぬれ手ぬぐいで目をふさがれている美沙緒が、おびえたように身もがきする。
「ここにいるよ、美沙緒さん」
大作は左の手で額の手ぬぐいをとりのけてやり、右手で美沙緒の熱い手を握ってやる。
「ああ、よかった。そこにいらしたのね」
ぱっちりと目をあいて、美沙緒の顔は熱で赤く汗ばんでいる。
「若だんなはお嬢さんをおいてどこへも行きゃしませんよ」
久蔵がわらいながら手ぬぐいをしぼりかえに立つ。
「そうだ、忠さんがよくきく薬をもらってきてくれたから、ついでにのもうな、美沙緒さん」
「はい」
美沙緒はもう目をあけているのが大儀なのか、長いまつげを見せて軽く目をつむっている。呼吸もかなり早いようだ。
「だんな、あっしたちは飯の支度をしてきやすから、ついでにお嬢さんの寝まきを取りかえてあげるほうがいいや。汗で気持ちが悪いでしょうからね」
忠吉は気をきかせて、久蔵にも目くばせをしながら縁がわから庭へ出ていく。
大作は金命丸を五粒手のひらへのせて、
「さあ、口をあいて」
と、熱い口の中へ移してやる。
「少しかんだほうがいいな」
「はい」
その丸薬をかむのが聞こえるほど、あたりはしいんと明るい。
「もういいだろう。こんどは水だ」
急須の口を口へ持っていってやる。
ごくりと薬はのどをとおったようだ。
「浴衣を取りかえようかな」
「はい」
これは昨夜から二、三度やって手なれている

ので、項の下へ右手を入れて、そっと半身起こしてやる。
「このふろしき包みは忠さんの姉さんがとどけてくれたんだ」
その中から浴衣を一枚とってやると、美沙緒は自分で大儀そうに寝まきのしごきをといている。

8

美沙緒は昨夜からそうされつけているので、大作がうしろから浴衣をひろげてやると、
「すみません」
するりと汗になった寝まきをぬいで、惜しげもなく白々とした肌をさらす。
夜とはちがって、朝の明るい日ざしが障子一面にみなぎっている中だった。なるべく見ないようにしていても、すんなりとした肩越しに豊かな胸の双の乳房が形よくあざやかに目にしみて、大作はなにか乙女の秘密をのぞいてしまったような意識に、あわてて肩から浴衣をおおいかけていた。
さすがに美沙緒がいそいで胸をあわせるのを待って、
「さあ、いいかね」
こんどは両わきから手を入れてそっと抱き立たせてやる。
「すみません」
しっかり自分で立っていようとしても、まだふらふらと足もとが定まらないようである。
やっとしごきをしめおわるのを待って、ぬいだ浴衣をどけ、元のように座らせてやる。
「まだ熱がだいぶあるなあ」
「でも、さっぱりして、少し楽になりましたの」
「一度汗をすっかりふくといいんだが、女手がないんでねえ」
「よろしいんですの」
「おなかがすいたろう。ゆうべかゆを無理に少したべたきりだからね」

「いいえ、なんにもほしくありません」
「今朝は重湯にしてみてくれとたのんであるんだ。――さあ、横になろう」
項へ右手をまわしていくと、
「大作さま――」
と呼んで、うるんだような目を向ける。
「どうしたの」
「もう、どこへも行かないで」
いきなり感情的になって、胸へ顔を押しあててきた。
「行かないとも――。こんどはあんたをさらわれるようなへまは絶対にやらないつもりだ」
そっと抱きしめてやったが、それだけでは不服らしく返事をしない。
ああそうかとほおを寄せていくと、目をつぶってくちびるを待っている顔になる。
それは熱でうるおいを失った熱いくちびるだったが、口中の薬の香気がはっきりとこっちへ移ってくるすがすがしい口だった。
「うれしい――」
息苦しそうにあえぐような声にならない声なので、おどろいて顔を離そうとすると、激しくしがみついてくる。
「わしのお嬢さん――」
うっかりいってしまって、それをまだ口に出してはいけなかったんだと良心にとがめるものはあったが、ここまできてしまってはもうしょうがないじゃないかと、大作も胸いっぱいに愛情をたぎらせながら、ふたたびくちびるをかさねていく。
そして、そのまま静かに横にしてやりながらくちびるを離して、
「もう約束したんだから、いいだろう」
と、我ながらつい甘い声になっている。

9

「どこへも、どこへも行かないで」
ぱっちりと目をあきながら、美沙緒の息づか

いはひどく苦しげである。
「苦しいのか、美沙緒」
大作はぎょっとして、思わず美沙緒の左の乳の下へ手をあててみた。心臓が激しく波打っている。あまりにも興奮させたのがいけなかったらしい。
「悪かったなあ。どこへも行きやしないから、少し静かに眠ってくれ」
大作は上から掛け布団をかけてやって、ゆっくり心臓をさすってやる。
幸い、まもなく興奮はおさまったらしく、こんどは急に疲れが出てきたのだろう、美沙緒はうつらうつらし出したようだ。しかし、多少さがっていた熱がまたひどくあがってきたらしく、顔が燃えるように赤い。
「若だんな――」
ちょうど久蔵が井戸端から帰ってきたようなので、すぐぬれ手ぬぐいをしぼってくるように目くばせした。
「あれえ、また熱があがったようですね。あの薬をのませたんですか」
なんにも知らない久蔵は、びっくりしてまゆを寄せていた。
しかし、美沙緒の発熱もそれが峠だったようである。のませた金命丸もちょうどきいてきたのだろう、昼ごろまでぐっすりと眠って目がさめた時にはだいぶ熱がさがって、食欲さえ訴えていた。
「だんな、やっぱり薬がきいたんだ。ようござんしたねえ。あっしはちょいと家へ帰って、夜になったらまた来てみやす」
忠吉もやっと安心したようにそういって今戸へ帰っていった。
そのころ――。
今戸の柏屋の寮へは、例の十畳の書院へ竜平が陣取って、伊藤権太夫、木下五郎右衛門、小宮松吉、これに昨日柏屋の番頭庄吉に化けた馬場庄之助もまだそのままのかっこうで集まり、

しきりに密議をこらしていた。
　南蛮組の手がかりはおろか、大作や美沙緒の手がかりさえいまだになに一つつかめないのである。
「いや、これだけ手をつくしているのですから、今日中には必ずなにか引っかかります」
　老練な権太夫は、ともすればあせりたがる若い竜平を一人でおさえて落ち着いていた。
「しかしなあ、権太夫、大東組は今日ほとんどこっちへ出張っている。役目の手前も、手ぶらで引きあげるというわけにはいかないぞ」
　竜平は加役の面目ということも考えているようだ。
「その御心配には及びません。いざとなったら、ちゃんと立派な土産物を用意してあります」
「それはどんな土産物だ」
「とにかく、五人組み強盗をあげていけば、必ずしも南蛮組でなくても一応の面目は立つはずですからな」
　権太夫は陰険な目でちらっとわらってみせる。

10

「そうか、地獄長屋があったな」
　竜平はさすがに察しが早い。
　いざとなれば、市川佐二郎一派の浪人どもをあげていけば、必ず偽五人組み強盗ぐらいは働いているやつらにちがいないのだ。
「庄之助、やつらは今日も働かせているんだろうな」
「はい、五十両という大金をわたしてあるのですから、遊ばせておくわけにはまいりません」
　番頭姿の庄之助はきっぱりという。彼らにそれだけの働きをさせなければ、後でその責任が自分にかかってくる。それが怖いからだ。
「無論、やつらは柏屋の名義で使っているんだろうな」
「その点は十分心得ています」

「大作は昨日の夕方ここで岡田と植村を切っている。その時はもう今戸は出口をこっちの手ですっかりふさいであった。そうだろう、松吉」
「はい、手前は北隣の丸屋の寮から切り合いの声をはっきり聞いております」
　小宮はまたしてもそれを口にする。
「しかし、大作はどこの網にもかかっておらん。いまだに今戸の中にいるとすれば南蛮組の巣にかくまわれていると見るべきだし、今戸を脱出するとすれば川筋ということになる」
　竜平にはそのどっちかだとしか考えられないのだ。
「ゆうべはあいにく更けるにしたがって霧が濃くなりましたからな」
　権太夫はつぶやくようにいいながらなにか再検討をしているようだ。
「蛇の道はへびで、南蛮組の巣が今戸の中にあるとすれば、浪人どもはなにかかぎつけているはずなんだがな」
　竜平はじっと庄之助の顔を見すえながら、
「どうだ、庄之助、働いている浪人どもに一応こっちのひもをつけてみることにしては」
　と、一策を考えつく。
「さようですな。こっちの目とはまた違った目を持っているでしょうから、案外おもしろいかもしれません」
「お浜はいまどこにいるんだ」
「平野屋にいるはずです」
「まさか、あの女が大作をかくまうということは考えられないだろうな」
「そんなことはまあ絶対にないと思います。現に、岡田と植村が大作に切られるのをここで見ているんですから」
「しかし、ああいう女は強い男にひきつけられやすい。どこでどう気が変わるか、常識では考えられないものがある。それが毒婦の特徴なんだ」
　竜平はそういっているうちに、ふっと自分で

お浜に会ってみてやろうという気になってきた。

「庄之助、一度ここへお浜をつれてきてくれ。口実はなんとでもつくだろう」

「それはつきますが、用心しませんと、あの女はさそりの毒を持っているそうですから」

庄之助はちょっとまゆをひそめている。

11

「わしは今日は別にお浜を吟味してやろうという腹はない。あれは大作とも美沙緒とも引っかかりがあるし、南蛮組とも全然無縁なはずはあるまい。加役の大東としてではなく、竜平として会って、それとなく口裏をひいてみようと思うのだ。そのつもりでここへ誘い出してみてくれ」

いつになく竜平はおだやかにそう説明して、もう一度庄之助をうながす。

「よくわかりました。はたしてお浜がすなおにうむといいますかどうか、とにかくすぐに行ってみることにします」

庄之助はどうやら納得して立ちあがった。

「松吉、おまえは浪人どものひものほうを受け持ってくれ」

「かしこまりました」

小宮も早々に座を立つ。

「竜平さん、お浜の口裏をひいてみるのでしたら、ほかにだれもいないほうがお浜も安心するでしょう。手前はこれからもうひとまわり川筋を洗ってみることにしましょう」

「そうか。では、そうしてみてくれ」

「ごめん――」

権太夫もつづいて立ちあがる。

庄之助と小宮は表門のほうへまわったが、権太夫は小者たちをつれて裏木戸から川っぷちの道へ出た。

今戸町には銭座の手前の瓦焼き場へ出ようとするところに一軒しか船宿はない。大作が昨夜

川筋から今戸を脱出したとすれば、この船宿を利用しているかもしれないと権太夫は考えたのである。

権太夫が隣の丸屋の裏口を通りすぎて例の横町の前へかかってくると、そっちから岡っ引きの平吉がひょいと飛び出してきた。

「こりゃ伊藤のだんな、どちらへ御出役なさるんで――」

「平吉か、ちょうどいいところで出会った。おまえはどこへ行くところなんだ」

「実は、あっしもだんなをさがしていましたんで」

「そうか。じゃ、歩きながら話そう」

権太夫は川上のほうへ歩き出しながら、

「わしになにか用か、平吉」

と、あらためて聞く。

「ちょいと思いついたことがございましてね。というのは、もうあらかたこの町中は洗ってみたんですが、いまだにこれというものにはぶつかっていやせん。まだ手をつけていないのは寮と名のつく屋敷ばかりです。こいつを一軒一軒当たってみる、なるべくなら屋敷中を見せてもらう、なにか手がかりがつかめやしないかと思うんですが、どんなもんでございましょうね」

「なるほど――」

寮にはたいてい寮番がおいてあって、柏屋のようにまるっきり空き家にしてあるのはすくない。それに、町人の寮はいいとして、旗本の寮となると町方が入りこむのはちょいと面倒だ。それだけに、大作や南蛮組は案外それを利用しているかもしれないということにもなる。

よし、手をつけてみようと権太夫は思った。

12

「平吉、それはいい思いつきだ。さっそくやってみるとして、その前に一応米屋と酒屋に最近寮へ入れた売り掛けをあたってみてくれ」

権太夫はさすがに抜け目がない。

「なるほど、たしかにそうでござんした。ところで、だんなはこれからどちらへお出かけになりやすんで」
「この先の船宿へ出かけるんだが、今戸では船宿はあの一軒だったな」
「へえ、船米一軒でござんす」
「亭主はなんというんだ」
「米吉という深川のほうで船頭をやっていたいい顔の男でしたが、二年ばかり前に病死しやしてね、今は後家のおさわってのが実の弟の忠吉といっしょに跡をついでいやす」
「船頭は何人くらい使っているんだね」
「忠吉も船頭で、そのほかに辰造ってのが一人いやす」
「すると、家族は三人か」
「へえ」
「後家はいくつぐらいだね」
「二十七、八ってところです。これは元は深川の女で、まあ女っぷりも十人並み以上ってとこですから、船頭仲間がよく遊びにきて稼業を手伝っていくようでござんす」
「特にひもらしいやつはいるのか」
「そいつははっきりしやせん。利口な女ですからね、どうせいい金づるのだんながついちゃいるんでしょうが、なかなかぼろは見せやせん」
　平吉はにやりと意味ありげにわらっている。
「そのだんならしいというやつの姿を近所で見かけた者はないのかね」
「まだないようです」
「では、どうしてだんながついているらしいとわかるんだね」
「よく観音さまへ半日がかりでおまいりに出かけるし、たまには家をあけることがあるんだそうで、まあそんなところからうわさが立つんでしょう」
「客種はどうなんだ」
「送りよりつり舟がおもですから、寮の客が目当てということになるようです」

「よし、わかった。じゃ、おまえはすぐ酒屋と米屋のほうへかかってくれ」
「かしこまりやした。――ごめんなすって」
　平吉はすぐにそこから引きかえしていく。ちょうど船米の掛け行燈が見え出したあたりだった。
　船米の前の桟橋には、大小の舟が四、五艘つないである。
　それを横目で見ながら、権太夫は船米の油障子をあけて、黙って店の土間へ入っていった。
「おいでなさい。お役目御苦労さんでござんす」
　炉端で一服つけていた若い船頭が、加役と見ていそいで上がり框まで出迎える。ほかに人はだれもいない。
「その方は忠吉か――」
「いいえ、あっしは辰のほうでござんす」
　にこりとしながらこっちの目をまっすぐ見あげているあたり、これも相当しっかり者のようだ。

13

「ここは女主人だそうだな、主人は留守なのか」
　権太夫はじろりとあたりを見まわしながら辰造に聞く。
「いいえ、ねえさんは二階におりやす」
「忠吉はどうした」
「稼業に出ておりやすんで」
「ゆうべ忠吉は柳橋へ客を送ったそうだな」
　権太夫はそれとなくかまをかけてみる。
「そんなことはありやせん。なにしろ、あの霧でござんしたからね」
「二人とも家にいたのか」
「へえ」
　辰造はにやにやわらっている。
「おかみの御用なんだ、正直に申しあげねえとためにならないぞ」
　権太夫がわざと苦い顔をして見せた時、声を聞きつけたらしく、二階から女主人がおりてき

た。
「おいでなさいまし。なにか御用でござんしょうか」
髪を大丸髷に結った、なるほどあだっぽい女である。
「おさわというのはおまえか」
「はい、あたしですが――」
「わしは加役大東組の伊藤権太夫だ。役目の筋によってたずねたいことがある。正直に返事をしてくれ」
「かしこまりました」
「ここの船頭は忠吉と辰造の二人だな」
「はい」
「ゆうべ二人とも家にいたのか」
「いいえ、宵すぎまでは家にいましたが、それからどこかへ遊びに出かけたようです」
「悪いところへ行ったんじゃありやせん。あっしはちょいと吉原をひやかしに行っただけなんで」
辰造はそんな言い訳をしながら、
「ねえさん、あっしは舟を洗ってきやす。――ごめんなすって」
と、逃げるように土間から桟橋のほうへ出ていく。
「辰造は手なぐさみをやるのか」
権太夫は苦わらいをしながらいう。
「さあ、どうなんでござんしょう。友達が友達ですからねえ」
「船頭が二人とも遊びに出かけたとすると、客はことわったのかね」
「いいえ、うちは送りはめったにありませんから」
「おかみにはいいうしろ立てがついているそうだな」
「あら、御冗談を――」
「そんな者はないとはっきりいいきれるかね」
「御近所で聞いていただけば、よくおわかりになります」

おさわはくすぐったそうにわらっている。
「ゆうべ若い侍がここへ飛びこんだのを見た者があるんだが、正直にいってもらいたいな。時刻は五ツ（八時）前後とそこまでわかっているんだが」
権太夫の目が急に光り出す。

14

「それはなにかのお間違いでしょう。ゆうべはそのころ、うちはもう表をしめていました」
おさわははっきりと答えて、なかなかこっちの手には乗ってきそうもない。
「すると、ゆうべはおまえはずっと一人で家にいたことになるんだな」
「ええ、一人はもうなれっこですから」
「しかし、物騒だな。いたずら者でも入ってきたらどうする」
「今までそんなこと一度もありません。まるでお気の毒みたい」
自分でくすりとわらっている。
「とんだじゃまをしたな。こんどはだれもいない夜こっそりたずねることにしよう」
「お待ち申しています。――御苦労さまでございました」
表へ出た権太夫は、どうもくさいという気がした。
大作のことは別にしても、あの年ごろで後家がとおせるはずもないし、だいいち世間の男がすてておかないだろう。
平吉はいいだんながついているようだといったが、それが本当なら別にしらをきる必要もあるまい。
――はてな。
南蛮組は昨夜も一昨日の晩も舟を使っている。もし南蛮組の巣がこの辺にあるとすれば、ああいう家を利用したがるのではないか。
もう一歩進めて、あの女は南蛮組の一人のめかけになっている、そう考えるのはこっちの思

いすごしだろうか。
　権太夫はとっさにそう思い立って、
　──よし、ひとつ洗ってみてやろう。
　と、うしろについてくる小者の安蔵を呼んだ。
「おい、安──」
　安蔵は仲間でもすっぽん安というあだ名があるくらいで、一度食いついたらそれがなんとか目鼻のつくまでは決して離れない男である。
「へえ、なんか御用で」
「いいから肩をならべろ」
「ごめんなすって──」
　ふだんは薄ぼんやりとした顔つきの小男で、どこにいても目立たない存在だが、御用だとなると目の色がちがってくる。
「船米のおさわ、よく見ておいたろうな」
　権太夫は歩きながら小声で聞く。
「見ておきやした。いい女でござんすね」
「ただそれだけか──」
「いいえ、あの女には好きな間夫（まぶ）がついていやす」
「どうしてそれがわかる」
「肌の色がちがいまさ。男にかわいがられている肌といない肌とでは」
　にやりとわらってみせる安だ。
「よし、おまえその間夫を洗ってみてくれ。ひょっとすると大物が引っかかるかもしれない」
「鴨南蛮（かもなんばん）ですか、だんな」
　さすがに素早いやつである。
「物にすりゃ手柄だ。それ、当座の雑用」
　権太夫は如才なく二分銀を二つわたしてやる。
「だんな、きっと手柄を立ててみやす」
　安は金を握って、感激したようにきっぱりといっていた。

15

　──あれならうまくやるかもしれぬ。
　すっぽん安が船米のほうへ走り去るのを見送って権太夫は内心そうつぶやきながら、ふっと別の不安が起こってきた。
　安のすっぽんのような執念深い性根の中には、相手の悪事をさがし出してその弱みにつけこみ、相手をいびってよろこぶという残虐性をたぶんに持っていることだ。いいかえれば、そのよろこびを味わいたいために、とことんまで相手の悪事をほじくり出したくなるのである。
　つまり、安蔵のは御用のために働いているのではなく、自分の残虐性を満足させるためにおかみの御用を利用している変質者なのである。
　だから、船米のおさわがもし安になにかのしっぽをつかまれると、ずぶとい安はそれを種におさわの骨までしゃぶらなくては承知できない男なのだ。
　──やり方は多少違うが、竜平さんにもそういうところはある。
　現に、役目を嵩にきて、あの若だんなは美沙緒を手ごめにしそこない、こんどはそれを三千両で柏屋へ売っているのだ。しかも、それさえ失敗に終わって、今はどうしても美沙緒と大作の口をふさがなくてはならない羽目におちこんでいるのだから、このほうが安などよりよっぽどたちが悪いことになる。
　──それを承知であの小せがれに忠義をつくしているおれは、どういうことになるかな。
　そこまで考えてくると、権太夫は我ながら苦わらいが出てきた。
　結局は利口なやつがいちばんうまいしるを吸って口をぬぐって知らん顔をしている世の中なんだと、ちゃんと悟りきっている権太夫なのだ。
「辰──」
「へえ」
「肩をならべろ」
　権太夫はもう一人の小者を呼んだ。これも、どぶねずみの辰を略してどぶ辰というあだ名を持っている。しのびの名人で、一筋なわではいかぬ男である。

「なにか御用で――」
「おまえはすっぽん安の目付役だ。あいつがどんなまねをするか、よく見ていてわしに知らせるんだ」
「へえ」
「案外大きな拾い物があるかもしれぬ。それ、当座の雑用にしろ」
これにも二分銀を二つ握らせてやる。
「かしこまりやした」
どぶ辰は口数のすくないほうで、いつも安とはいい競争相手である。
「負けるなよ」
「へえ」
どぶ辰は安のように駆け出すようなまねはしない。のそのそと今きた道を引きかえしていく。
――わしの目に狂いがなければ、南蛮組の巣も、美沙緒、大作のかくれ家も、ここから手がかりがついてくるはずだ。
権太夫には自信があった。

16

そのころ――。
柏屋の寮では、竜平に呼ばれたお浜が度胸よく書院の廊下へ掛けて、たがいに腹のさぐりあいをやっていた。
「あたくし柏屋の番頭さんがまいりまして、ぜひ加役の若さまにお目にかかってくれるようにと申しますのでおうかがいしたのですけれど、どんな御用なのでございましょうか」
お浜はあいかわらず紫矢絣の腰元姿で、今日は加役の前だからひどくよそ行きの顔をしている。
「いや、別にそう難しい用ではない。今日は役目をはなれて少し話してみたいことがあってな、――まあ、気を楽にしてしばらく付き合ってくれ」
竜平は如才なくねこなで声でいいながら、これはまったく美沙緒とは違った女の魅力をみな

ぎらせた毒婦だと、内心ちょっと意外な気持ちだった。
「そちはたしか神保町の三島家に奉公中だと聞いているが――」
「はい、このお正月から御奉公にあがっています」
「そうか。わしは役目がいそがしくなってから三島家へもすっかり無沙汰になっているが、美沙緒さんは家出をしているようだね」
「はい」
「弥十郎どのもよくないな。柏屋へ押しつけようとしても、それはちょっと無理だ。しかし、柏屋に聞いてみると、三千両の支度金はもうわたしてあるといっている。金の受け渡しがすんでしまっているとすると、これはまたちょっと面倒なことになるんだ」
「いまお嬢さまはどこにいるのでございましょう」
お浜はそれとなく一本さぐりを入れてみる。
「それがどうもわからん。鈴村大作という男が妙な義侠心を出して二晩ほど深川屋という柳橋の船宿へかくまっていたそうだが、ゆうべは二人とも深川屋へはもどっていない。大作はどうも南蛮組となにか引っかかりがあるんじゃないかと思うんだが、お浜は知らないかえ」
「少しぐらいなら知っています」
「そうか、それをひとつ話してみてくれないか」
「しかられると怖いからよしますわ」
お浜はわらいながら、うっかりそんな手にのれるものかと思う。
「いや、わしもさっきもいったとおり今日は役目をはなれているんだ。今日おまえから聞いたことはすぐ忘れることにしよう。それならいいだろう」
「じゃ、若だんな、あたしの聞くことに返事をしてくれますか、どんなことでも」
「よかろう。自分だけいい子になろうというのは虫がよすぎるからな。なんでも返事をしてや

ろう」
竜平の冷たい目が、さあなんでもこいといいたげにわらっている。
「若だんなはあたしをさそりのお浜だと知っていてここへ呼んだんでしょう」
「そのとおりだ」
「じゃ、ずばりといいますよ」
お浜はもう度胸がすわってきた。

17

「昨日、美沙緒は一度若だんなの手に入っているでしょう」
お浜はいよいよ勝負と出る。
「うむ、たしかに一度は手に入れている」
案外竜平はあっさりと口をわる。
「それがどうして若だんなの手から逃げてしまったんです」
「わしの組下に忠義者がいてな、柏屋から三島家へ三千両の支度金がわたっていると聞いて、これが表ざたになると三島家へ傷がつくと考えたんだな。そこで、わしの知らない間に、美沙緒を柏屋の使いの者にわたしてしまったというんだ」
うそをつけ、三千両の軍資金と美沙緒を取りかえっこしたくせにと思ったが、そこまであばいては実もふたもなくなるので、
「じゃ、美沙緒は柏屋から逃げ出したということになるんですか」
お浜はその先へ話を進める。
「いや、逃げ出したんじゃない。ゆうべ柏屋へ南蛮組が押しこんで、金を一万両と、ついでに美沙緒をさらって、裏の桟橋から舟で引きあげていったというんだ」
「あらあら――」
これは初耳なので、お浜も目を丸くしながら、
「あの狒々おやじ、案外だらしがないんですねえ」
と、つい悪態が口に出る。

「さあ、柏屋がだらしがないというより、むしろ南蛮組のほうの大胆不敵なやりかたに舌をまくということになるんだろうな」
「若だんながそんな弱音を吐くのはおかしいじゃありませんか」
竜平は正直に苦わらいをしている。
「まあ、そうひやかすな。どうだ、お浜、南蛮組の巣はこの今戸か橋場あたりとわしはにらんでいるんだが、見当が違うかなあ」
「そうですねえ」
お浜はあんまり本気になって相手になる気もなかったが、ふっと気がかわってきた。
「若だんな、あたしは昨日柏屋のだんなから、千両で大作をかたづけてくれとたのまれて、五十両の前金をもらっているんです。昨日は失敗してしまったけれど、もしあたしが本当に大作をやっつけたら、後金の九百五十両、若だんなのお口ぞえで本当に柏屋からもらってくれますか」
「無論、そういう約束があるんなら、必ずもらってやる」
「じゃ、あたし、若だんなのお手伝いをします。南蛮組も大作もこの近所にかくれているにちがいないんです」
「そうか、どの辺にかくれているか見当がつくか」
竜平の冷たい目がさっと輝いてくる。
「見当はつかないけれど、大作はあしたかあさってきっと出てきます」
「本当か、お浜。どこへ出てくるんだ、大作は」
「若だんなも大作がそんなにじゃまになるんですか」
お浜はちょっといたずらっぽい目をしながら、いよいよ大胆になってくるようだ。

18

「大作は南蛮組と手を握っているんだ。そうだろう」
ずるい竜平は平気でそんなことをいいかえし

てくる。
「さあ、手を握っているかどうかわからないけれど、南蛮組は二度も大作を助けているから、美沙緒はゆうべのうちにきっとまた大作のところへ帰っているわ」
「お浜はゆうべここで大作に会っているそうだな」
「会うには会いました。本当はゆうべのうちに若だんなのほうとこういう話になっていれば、あたしのほうもけが人を出さずに、うまく大作をかたづけていたんです」
お浜はまたしてもちらっと皮肉が口に出る。
「そうか、惜しいことをしたなあ。それで、あしたかあさって大作が出てくるというのは、どこへなにしに出てくるんだね」
「それを教えて、もし若だんなのほうで大作をかたづけてしまえば、あたしのほうの柏屋の九百五十両はふいになってしまうんでしょう」
お浜はさすがに抜け目がない。
「そんなことはない。よし、こうしよう。わしのほうは大作を遠巻きにして逃げ道をふさぐから、直接大作をやるのはおまえのほうへまかせる。それならいいだろう」
「そうねえ」
こっちがうまく大作をかたづければ、その加役の遠巻きがこんどはこっちをつかまえる、そうにきまっているんだとお浜は思ったが、その時はこっちにも考えがあると度胸をきめて、
「じゃ、そうすることにして、本当のことをいいますとね、美沙緒には甲府に峰村新十郎といういいなずけがあるんです。そこへ行くために美沙緒は屋敷をぬけ出したんですから、大作はどうしても美沙緒を甲府へつれていかなければならないんです。今日はゆうべのことで疲れているから一日休むと見て、あしたかあさってはきっと江戸を立つから、新宿か代々木あたりで網を張っていれば引っかかるにちがいありません。そうでしょう、若だんな」

と、あっさり打ちあけてやる。
「なるほど、そうだったなあ」
竜平もはっとそこへ気がついたようだが、
「しかし、美沙緒はもう大作に身をまかせているらしいぞ。それでも甲府へ行く気になるかな」
と小首をかしげる。
「うらやましい、若だんな」
お浜はあけすけに竜平をからかいながらなにかむらむらっと腹が立ってきて、
「若だんなが美沙緒からそんなことを聞き出したのは昨日なんでしょう。その昨日の朝、現に二人は甲府へ出かけるために江戸を立とうとしていたんじゃありませんか。二人はまだそんな仲にゃなっちゃいません。そう見えるのは若だんなのひがみだわ」
と、せせらわらうようにいっている。
そして、ふっと、こんな手前勝手なやつより、男としては大作のほうがよっぽどたのもしいと、比較してみずにはいられないのだ。

19

竜平はその日から組下の者を一組み内藤新宿（ないとうしんじゅく）へ出張らせて、交替で街道筋を厳重に見張るようにいいつけた。
軍資金さえ豊富にあれば、こういうとき組下の者にいやな顔をさせないで、十分働かせることができるのだ。
一方では権太夫の献策を入れて、今戸の寮という寮、ついでに寺の多いところだからその寺の一軒一軒を手先の者にさぐらせてみることにする。
無論、お浜にも、その仲間の浪人どもにもひもがつけてある。
しかも、なんとしても大作と美沙緒の口をふさいでしまわなくては安心できない竜平は、当分今戸の柏屋の寮へ寝泊まりすることにきめていた。
「権太夫、これでなんにも引っかからないとす

ると、もうちょいと手の打ちようがないな」
「いや、なにか引っかかります。なにか一つ引っかかりがつけば、それからいとぐちがほぐれてきますから、まあ二、三日気長に待ってみることです」
　権太夫は軍師らしくわざと落ち着いてみせる。
「うむ、それはあわててもしょうがないが、いちばん脈のありそうなのはどこだろう」
「いや、どこにも脈はあります。それより、お浜は長坂重蔵のことについてなにも話していませんでしたか」
「なるほど、美沙緒に逃げられていちばん困っているのはあいつだな」
「そういうわけです。わたしはまだ長坂は三千両の支度金を手にしてはいないんだろうと思います。金が入っていれば、昨日の朝自分でお茶の水などへ出てくるようなお人よしじゃありませんからな」
「しかし、柏屋はおとといの夜たしかに三千両ここへ運んできているはずだぞ」
「実はそれなんです。あの晩南蛮組がこの寮で短筒をぶっ放しています。どうもその時、三千両は南蛮組に横取りされているんじゃないでしょうかなあ」
「そうか——。よし、お浜に聞いてみよう」
「いや、お浜は大作がここへくる前に子分二人になにか縁の下までさがさせていたようだといいますから、いまにおもしろいことがわかってくるかもしれません。もうしばらく黙って様子を見ることにしましょう」
「ふうむ、おもしろいことというと——」
「まあ、今晩のおたのしみということにしておきましょう」
　権太夫は自信ありげにいいながら、ただわらっていて口を割ろうとはしなかった。
　しかし、その夜はどこからもこれという報告も入らずに、不安な一夜があけた。

　すっぽん安はその朝を、船米の向こうの草っ原の瓦焼き小屋でむかえたのである。
　昨夜は九ツ（十二時）すぎまで船米の家を見張っていたが、別に変わったことはなにもなかった。それからこの小屋へ入ってひと眠りしたと思うと、もう夜があけていたのだ。
　——こいつはいけねえ。
　目がさめたとたんに、安はそう思った。

20

　——まさか、おれの眠っている間に、おさわのやつどこかへぬけ出しやしなかったろうな。
　すっぽん安がいちばん心配になったのはそれである。すでにもう日が出て、どの家でも朝の支度にいそがしいころなのだ。
　ここから見える船米の家は北がわの羽目板で、二階に高窓が一つある。店からあがっていく階段の上についている小窓だ。二階はたぶん六畳一間ぐらいだろう。その小窓はまだ雨戸がしまっている。
　羽目板の下は通りになって、今戸町の表通りへ出ていく。
　店を掃除しているのは、おさわの弟の忠吉のようだ。
　台所をやっているのは、昨夜もそうだったから、たぶん辰造のほうだろう。
　忠吉も辰造もいい体をしているが、ことに辰造のほうは、おなじ辰でも相棒のどぶ辰などとちがい、見るからにいなせな船頭で包丁も器用らしく、一切台所のほうも受け持って小まめに働いているようだ。
　おさわはまだ起きていないのかもしれない。
　昨夜は近所の若い衆が二、三人集まって、みんなで宵から、将棋をさすやつ、炉端でおさわを相手にばかっ話をしているやつ、五ツ半（九時）ごろまではにぎやかだったが、店の客は一人もなく、四ツ（十時）には表をしめて寝てしまったようである。

あいにく月夜まわりで、うっかり家の近くへ寄るのはあぶないが、若い衆たちが帰ってしまってから、安は裏の家との間の路地へ入って、この辺はもうそんな時刻にはみんな寝しずまってしまうので、そっと船米の台所口へ立ってみた。

「忠吉、あたしはもう寝るからね」

おさわがそういって二階へあがっていく足音がしたから、おさわは一人で二階へ寝るんだなとわかった。

それからしばらく忠吉と辰造は店でなにか話しこんでいたようだが、まもなく店からいえば奥になる台所つづきの六畳のほうへ床をとって寝てしまったようだ。

船米の出入り口は表とこの台所口の二つきりで、台所から土間つづきに店の土間へぬけられるようになっている。

その路地の中ほどに井戸があって、表裏何軒かでいっしょに使うようになっているようだ。

つまり、台所口のほうも昼間は人目が多いから、うっかり近づけないことになるのだ。

しかし、この瓦焼き小屋にがんばっていさえすれば、船米へ出入りする人間は一人残らず目に入るはずなのである。

小屋の板がこいは透き間だらけだから、どこからでも外はのぞける。

——さあ、今日はどんな鴨が引っかかるかな。

安がそう考えながら店口のほうをのぞいているうちに、二階の小窓の雨戸ががらりとあいた。

顔を出したのは、いま起き出したばかりらしいおさわである。

裏をのぞけば

1

おくれ毛をかきあげただけの寝まき姿で、おさわは雨戸をあけたついでに、ちょいと首をのり出すようにして、表通りのほうの横町をながめている。

——けっ、だれかを待ってやがるんだ。

それは安がなんとなく嫉妬を感じたほど色っぽいかっこうに見えた。

が、その白々とした顔はすぐに引っこんで、小窓は障子をあけたままになっている。

朝日はだんだん高くなってくるようだが、それっきり別に変わったこともない。

すっぽん安は昨夜用意をしておいた握り飯で湯も水もない朝飯をすませ、むしろの上へあぐらをかきながら、絶えず板張りの透き間から船米のほうを見張っていた。

退屈な仕事ではあるが、人の秘密をのぞいてやるというたのしみがあるから、退屈などは苦にならない。

いや、今日はだれかきそうだというたのしみさえある。あの体で一晩だって男がいなくてすませるもんかと安は思うのだ。

その独り寝をあの脂の乗りきった女体が昨夜はどんなに燃えて身もだえしていたか、しかもその女体は朝になって、髪をなおし、朝化粧をして、ふだん着にきがえて店へおりてきて、今はいつもの船米の女主人おさわになって炉端に澄まして座っているだろうが、胸の中では男を待ちつづけ、その切なさに肌はいよいよ熱ぼったく、ひそかにため息ばかりついているにちがいないのだ。

——畜生、あの肌をわがものにしているやつは、一体どんな野郎だろう。

安は自分が息苦しくなってくるような気持だった。

「はてな——」

どきりとして安は思わず中腰になった。

今戸町通りのほうから深編み笠をかぶった立派な浪人風の男が、手にびくとつりざおを持ってゆっくり横町を船米のほうへ歩いてくる。

背のすらりとした男で、まだ若いようだ。

——南蛮組の一人。

安はもう一度どきりとした。
そうか、おさわが待ちかねていたのはあいつかもしれねえ。そう考えると、たまらないねたましささえ感じてくる。
安の焼きつくような目は、たしかにその深編み笠が川っぷちの道へ出て、なんのためらいもなく船米の店へ入っていくのを見た。
――畜生。
と見ているうちに、こんどは忠吉が艪とござをかかえて出てきて、桟橋をおり、つり舟の支度をはじめる。
――おや、すぐに出かける気かな。
そんなはずはないと見ていると、忠吉は一度店へ引きかえして、茶器をのせた盆とたばこ盆、それに座布団を持って出てきた。
それをつり舟に乗せて、船端を桟橋のほうへ向けてぴたりとつける。
「だんな、支度ができやしたよ」
自分も舟に乗って店のほうへ声をかけると、まもなくさっきの深編み笠の男がおさわに送られてゆっくりと桟橋のほうへ出てきた。

2

「行っておいでなさいまし」
おさわは桟橋の上へ立って、つり舟に移った深編み笠のほうへにっこりしながらおじぎをする。
若葉どきの朝の明るい日ざしの中で、いわゆる年増ぶとりとでもいうか、すんなりとしたおさわの女体は、後家の大丸髷だけに憎いほど色っぽい。
つり舟はまもなく綾瀬のほうへこぎ出したようだ。乗っている深編み笠は、もう桟橋のほうは振りかえろうともせず、忠吉となにか話しあっているようだ。
――畜生、やけに思わせぶりな野郎じゃねえか。
大丸髷はまだ桟橋の上に立ってそっちを見送

っているだけに、安はなんとなく癪にさわる。
と見ているうちに、大丸髷は薫風にすその白縮緬をちらつかせながら、ゆっくりと店へ入っていった。
「さあ、わからねえ」
すっぽん安はおもわず小首をかしげた。
深編み笠は船米の店へ入って二つ三つ世間話をするぐらいの時はあったろうが、二人で二階へあがるなどという間はなかったはずだ。
するとあの客はただのつり客で、おさわが小窓から横町をのぞいてまで待ちかねている男ではないということになる。
「おつな仲なら、舟へ乗る前に女のほうで二階へ引っぱりあげるはずだ。あの体が承知するもんじゃねえ」
どうもわからねえ話だと思いながら、ひょいと船米の二階の小窓を見ると、ついいましがたまで風を入れていた窓が、ぴしゃりと障子をしめきっている。
――あれえ。
こいつはおかしいと思った。
あの障子をしめたところを見ると、おさわは店へ入るとすぐ二階へあがったことになる。
どうして、ついでに障子をしめる気になったんだろう。こういうからりと晴れた日は、風を入れておくほうが部屋のためにも湿気がとれていいはずだ。
「待てよ。いまあの家にいるのはおさわと辰造の二人きりということになる」
安はどきりとした。
おさわは、ことによると、年下の辰造をそっとかわいがっているのかもしれない。ああいう大年増になると、なんとなくそんな火遊びがしたくなるものなのだ。
しかし、いくら弟でも、忠吉のいる前では、年がちがうだけに、知らん顔をしていなければならない。その忠吉がつり客の供をして出たとなると、当分は帰ってこないから、安心して火

遊びができるはずだ。
——畜生め。
それにちがいないと気がついたとたん、安はもうふらふらと立ちあがっていた。
どうしてやろうというつもりはないが、のぞいてみてやろうという好奇心に駆られてきたのだ。
安はゆっくりと小屋を出た。

3

すっぽん安は一度川っぷちの道へ出て、船米の店の前までぶらぶら行ってみた。
ぴしゃりと油障子がしめきってある。
——朝っぱらからふざけた野郎だ。
二階を見あげると、ここもちゃんと障子がしまっている。
安は横町の道へ曲がって、こんどは用ありげにさっさと歩いて台所口のある路地へ入っていく。
時刻はかれこれ四ッ（十時）に近く、路地の井戸端では、案の定、長屋の女房が二人、油を売りながら洗たくをしている。
この女たちに疑われないようにするには、すっと船米の台所口へ入っていくほかはない。万一、そこに辰造がいても、その時は忠吉に用があるように持ちかければいいのだ。
どたん場へくれば、こっちには御用の者という切り札があるのだから、びくびくする必要は少しもないのである。
安はいかにも用ができたというかっこうで、しかしなるべく音は立てないように注意しながら、そこの板戸をあけ、するりと土間へ入っていった。
あとの戸をしめて、ちょっと耳をすませてみたが、家の中はひっそりかんとして、どうやらこっちの勘に狂いはないようだ。
——ざまあみやがれ。
こうなればもうこっちのものだ。てっきり二

階へあがってちちくりあっているにちがいない。
どんなふざけたかっこうをしやがるだろうなと思うと、安はのぞきのたのしみで胸の中がぞくぞくしてくる。
足音をしのばせて、土間づたいに店のほうへまわってみた。ここもがらんとして、炉の鉄びんが松風をきかせている。
その炉の右がわのすみに、二階への階段口があるのだ。
——さて、どうしたもんかな。
安はここまできて、ふっと当惑した。まさか、ずかずかと二階へおしこんでいく口実は、こっちになんにもない。亭主ではないのだから、間男みつけたぞというわけにはいかないのだ。
しいてやるとすれば、そっと二階へあがっていってのぞいてみることだが、こいつはうっかり見つかると、あべこべにつかまえられて、番屋へ突き出されてもしようがないことになる。
——そうか、こっちには南蛮組をさぐっているという理屈があった。
安はそう気がついたとたん、もう店へあがって、階段口から二階のほうへ聞き耳を立てていた。
「ねえ、どうしてそうそわそわするんですよう、いやだなあ」
いきなり熱ぼったいおさわの声がはっきりと耳へ飛びこんでくる。
男がなにかいったようだが、これは声がひくくて聞きとれない。
「いやだったら。今日は放さない」
女は男のほうへ体をぶつけていったようだ。
「だれもこないから、大丈夫だっていうのに」
安は我にもなく階段へ四つんばいになって、一段二段とあがっていく。

4

畜生、もう少しだと、安の頭の中には男と女

がからみあっているあやしい絵姿しかなかった。息を殺して片足に重心をかけ、片足がもう一段上へあがろうとした時、ふいに重心をかけたほうの足を下からだれかにつかまれて、あっという間にずるずると下へ引きずりおとされた。途中でがくんがくんと二度ほどあごを階段にいやというほどぶっつけたようである。

「わあっ、あぶねえ、だれだ」

夢中で立ちあがった安は、おやっ、野郎、辰造だなと、そこに立ってわらっているぬすっとかぶりの若い男を目でつかまえたとたん、その目へ七味のとうがらしを一つかみぱっとたたきつけられたのである。

「う、うっ」

目の中へ火がついたような激痛を感じ、両手で目をおさえながらそこへぶったおれようとするえりがみを強い力で引っつかまれ、

「いてえ、いてえ、——なにしやがる」

それが我ながら泣き声になって、自分ではどうする力もないうちに、ずるずると土間へ引きずりおろされ、そのまま引っ立てられて、どすんと表へほうり出されていた。

「畜生、いてえ、いてえ。おぼえてやがれ」

安はその辺をころげまわりながら、起きあがる気力さえない。いや、このまままめくらになるんじゃないかと、ただそれだけが怖い。

井戸端で洗たくをしていた女房たちが、びっくりして、こわごわ安のほうをながめていた。

ぬすっとかぶりの男が安を台所口から路地へほうり出して、板戸のかぎをかけて店のほうへまわってくると、上がり框まで出て待っていた大丸髷のおさわが、

「あいつどうした、太郎さん」

と、まゆをひそめながら聞いた。

「目つぶしにとうがらしをたたきつけてやったから、当分目が痛いだろう」

男はわらいながら店へあがる。

「いやなやつねえ、のぞきにくるなんて」

おさわはなんとなく男の前へ近々と立って、ほんのり目のふちを赤らめる。

「あいつは加役の犬だ。たぶんこんなことだろうと思ったから一杯くわしてやったんだが、知らずにいい気になっていると、本当にのぞかれるところだった。よかったなあ、おかみさん」

男の指がからかうように、ちょいと女のむっちりと豊かな乳の上を小突く。

「いやだなあ、あたし」

おさわの目があやしく燃えながら、つと男のたくましい胸の中へ体をよせていく。

「のぞかれてもいいのか、おかみさん」

男の左手が軽く女の肩を抱きよせて、すぐ目の下へきた女の上気したような顔へささやく。

「だから、どうしてゆうべ来てくれなかったのよう、じれったい」

その熱いくちびるをひょいと上からくちびるでおさえて、ぎゅっと一度女の肩を抱きしめてやってから、

「話があるんだ。まあ、少し落ち着こう」

と、男は女を放して、あっさり炉端へ行って座る。

5

「太郎さん、ゆうべはどこのだれをよろこばせてきたの、おいいなさいよ、憎らしい」

おさわはもう男のそばを離れてはいられないように、ぴったり男の横へ座って肩をぶつけていく。年増盛りの体中の血が男恋しさに燃え狂って、自分でもおさえきれないのだ。

「ばかだなあ。辰造が帰ってくるまで、まあ少し落ち着けよ」

男はわらいながら、しかし右手を肩から胸へまわして、女を抱くように内ふところへ手をしのばせてやる。せめてそれまでのおもちゃ、そんな気があるのだろう。

「あんたは、この手で、何人ぐらい女を夢中にさせているの、悔しいなあ」

乳房をつかまれた手を上からしっかりと抱きしめながら、それだけでも女体はじいんと甘くしびれてくるようで、おさわはたわいなく身もがきしながら、舌までいつかもつれている。

「しかしなあ、おさわ、何人女がいたって、船へのせてつれていくのは一人きりなんだ」

男は平気でそんな思わせぶりなことをいう。

「太郎さん、あたしを置いていっちゃいやだ。あたしは、あたしは死んでもついていくんだから」

「そんなことをいって、大丈夫か、おさわ。一度船が出てしまうと、泣いてもほえても二度と日本へは帰れないぞ」

「いいんですってば――。あたしはこう見えても体は大丈夫なんだし、船だって怖くないし、海賊のおかみさん向きにできているのよ。あんたにさえかわいがってもらえば、どんなことだって平気だわ」

おさわは真っ青な海をおもいうかべながらうっとりとした気持ちになってくる。乳房をなぶっている男の手から、愛情の血が音を立てて体中へ流れこんでくる、そんな気持ちなのだ。

「冗談いうなよ。我々のは海賊が目的じゃない。大きな島を見つけて、そこへ新しい日本を作るんだ。だから、どうしても女はみんな子供を産んでくれないと困るんだ」

「産むわ。あたしきっと産む。あんたの赤ん坊なら、きっとできるわ。ねえ、子供ができない女だなんて思っちゃいやだ」

年が年だけに、これだけはちょっと自信がない。それだけに、びくっとして目の色がかわってくるおさわでもある。

「ねえ、船へ乗るのはいつごろなの。本当のことを教えて――」

「まあ、今月の末か、おそくとも来月のはじめだろう」

「それまでに、それまでに子供ができなくちゃいけないの」

「ばかだなあ。人間の体がそううまいわけにいくもんじゃないだろう。――そういえば、美沙緒の熱はもうすっかり下がったそうだね」

「あの金命丸がきいたんですって――。大作さんの看病もよかったけれど、薬もたしかによかったのよ。あたしものんでみようかしら」

おさわはその思いつきに我ながら目が輝いてくる。

6

「金命丸をのんでどうするんだ」

男がわらいながら聞く。

「だって、あたし、早くあんたの赤ん坊が産みたいんだもの」

「ばかだなあ」

乳房をつかんでいる男の手にいじらしいというおもいがこもって、

「まあ、そんなにあわてることはない。こんなにかわいがってやっているんだから、そのうちにはできるだろう」

と、やさしい声になっている。

「ねえ、あんた、美沙緒さんのほうが先かもしれないねえ、あたしより若いんだから」

「そんなに早く金命丸がきくかな。だいいち、大作はおれのようにそう簡単に女が抱いてやれる男じゃなさそうだ」

「そうかしら――。だって、どっちも好いたらしい仲なんだろう」

「そりゃほれあっちゃいる。しかし、美沙緒という娘にゃ甲府にいいなずけがあるんだ」

「聞いたわ、忠吉から。この間も、甲府へ出かける途中で、お嬢さんはさらわれたんだってね」

「うむ。あの男は少しばかっ正直すぎるが、美沙緒にゃいちばんいい亭主だろう」

「とても美人なんだってね、そのお嬢さん」

「おれにゃおまえのほうが美人に見える」

「口ばっかし――。うまいってありゃしないんだから」

おさわは抱いている男の腕へいきなりかみつきにいく。もう自分でも自分の血をもてあましているようだ。
「痛いなあ」
男はふいに手を引っこめて、
「おさわ、すぐに支度をするんだ。辰が帰ってきたら出かけよう」
「どこへ、どこへ出かけるの」
と、ぬすっとかぶりの中に目が光っている。
「ここじゃ加役の目が光っているから、ゆっくり抱いてやれねえ。ゆっくりできるところへ逃げ出すんだ」
「あいつを突き出したのがまずかったかしら」
「いや、どっちみちあいつは自分一人でここへ目をつけたんじゃあるまい。加役はもう今戸中へ網を張っているんだ。早く逃げ出したほうが勝ちだろう」
「うまく逃げられるの、あんた」
さすがにおさわは顔色をかえている。
「心配するな。おまえにゃおれという立派な亭主がついているんだ。まかせておくがいい」
「そりゃそうだけど」
「よし、そのままでいいや。すぐ猪牙(ちょき)へ乗って待っていろ。おれが船頭になってやる」
「待っておくれよ、そんなにいそがなくちゃいけないの」
「うむ、すぐのほうがいい。取りまかれちまってからでは面倒だ」
「なんだか怖いな、あたし」
おさわはあたふたと奥へ立って箪笥(たんす)をあける。
男はもう土間へおりて、そこに立てかけてある艪(ろ)を手にしていた。

7

「あんた、もうこの家へはあたし帰ってこられないの」
おさわはいそいで帯をしめなおしながら土間

の男のほうへ聞いてみた。
「たぶんそんなことはなかろう」
男は平気で答えながら、
「おい、おれは先へ行って舟の用意をしておくからな、おまえ座布団を持ってきたほうがいいぞ。冷えると子供ができなくなるからな」
ぬすっとかぶりの中でにこりとわらって、艪とござをこわきにかかえ、さっさと表口から往来へ出ていった。
――いやだなあ、あの人どこへあたしをつれていく気なんだろう。
しかし、どこへつれていかれようと、たとえ橋の下でこじきになろうとも、男のそばは離れたくないおさわなのだ。
そのころ――。
どぶ辰は川っぷちを走って一生懸命柏屋の寮へ引きかえしてきた。
裏木戸から例の書院の廊下のほうへ駆けこんでいくと、ちょうど権太夫が縁先にかけながら座敷の竜平となにか話しこんでいるところである。
「辰、なにか引っかかったのか」
権太夫は辰の顔色ですぐぴんときたのだろう、いきなり辰のほうへ聞いた。
「へえ、引っかかったようです」
辰はそこへひざまずいて、顔の汗をふきながら答えた。
「安はどうした」
なにかあればすっぽん安のほうが先へ駆けつけてくるはずなのである。
「安は船米の横の原っぱに引っくりかえっていやす」
「なにっ」
「とうがらしの目つぶしなんかくったようなんです」
「だれに目つぶしをくわされたんだ」
「今朝、船米へ深編み笠をかぶった浪人が一人、つり道具を持って入りやした」

「うむ、それで――」
　権太夫は思わず竜平と顔を見あわせる。
「その浪人者は、すぐに忠吉に舟を仕立てさせて、綾瀬のほうへつりに出かけやした。おさわが桟橋まで見送りましてね」
「安はその舟の後をつけなかったのか」
「あっしもそう思ったんですが、安はおさわが家へ入ると、ぶらりと瓦焼き小屋から出てきて、船米の裏から家の中をのぞきに行ったようです」
「なにっ」
「それまであいていた二階の小窓の障子がしまりやしてね、こいつ怪しいと見たんじゃないかと思います」
「そうか――。つりに出かけたのは身がわりで、浪人者は後に残ったんだな」
「残ったのはおさわとその浪人者の二人っきりということになりやすからね。それからまもなく、安が四つんばいになりながら草っ原へはいこんできたんです」
　にやりともしないどぶ辰なのである。

8

「まずいなあ。安はなぜすぐこっちへ知らせに駆けつけなかったんだろうな」
　権太夫は思わず苦い顔をして舌打ちをする。
「安は、きっと、残ったのが本当に浪人者かどうかたしかめたかったんだと思いやす。それが浪人者のほうなら、おさわのだんなにちがいない。すると、二人っきりなんだから、てっきり二階へあがっていると踏んだんでしょう」
「そんなことは余計なことだ。深編み笠をかぶって、この辺でつりをしていた南蛮太郎をちゃんと見ている者があるんだ。その浪人者は南蛮太郎にちがいあるまい」
「権太夫、すぐに船米を取りまいてみろ」
　竜平がきおい立った声でいう。
「ことによると、もう感づいて逃げているかもしれません。安の姿を見ているんですからなあ」
「いや、南蛮太郎が逃げていたら、おさわをつかまえてきて拷問にかけるんだ。忠吉も辰造も縛ってしまえ」
「承知しました。とにかくやってみましょう」
　しかし、南蛮組はみんな短筒を持っているとわかっているので、迂闊に飛びこんではあぶない。権太夫はただちに組下の者を集めて、まず船米を遠巻きに取りかこませ、その上十人ばかりの人数をすぐ家のまわりへ伏せておいてから、同心一人、手先二人をつれて、表から船米の土間へ入っていった。
　店の中はきちんと片づいていて、取り乱したところは少しもないが、家の中は妙にがらんとしている。
　――やっぱり逃げたらしい。
　権太夫にはすぐぴんときた。
「今日は――。だれもいないのかね。ごめんよ」
　どぶ辰が大きな声で呼んだが、はたしてなんの返事もない。
　ちょうどそこへ、すっぽん安が目を真っ赤にはれあがらせて入ってきて、
「だんな、すみません。あっしが踏んごんでみやす」
　と、権太夫にあいさつをした。
　ここで働かなくては面目が立たないといいたげな決死の顔つきである。
「よし、踏んごんでみろ。短筒に気をつけろよ」
「へえ」
　安は十手を手にして、ぺこりと一つ権太夫におじぎをするなりねこのように店へ跳ねあがり、そのまま足音も立てずまっしぐらに二階へあがっていく。
　――畜生め、人をこけにしやがって、ただじゃおかねえ。
　安は目がつぶれるかと思った深い恨みがあるから、いきなりがらっと二階の三尺のふすま戸をあけた。

「あっ」
中はすでにからっぽで、面憎いことには、おさわがさっき甘ったるい独り芝居をやって聞かせた座敷の真ん中にはちゃんとこぎれいな寝床がとってあって、まくらまで二つおいてあるが、まだそこへ寝た様子は見られなかった。

9

安は念のために押入をあけてみたが、無論、人のかくれていた気配さえない。癪にさわるのは、この二階の部屋全体にどこか甘い女のにおいがそこはかとなくただよっていることだ。
――いまに見ろ、おれはこの恨みをいつかはてめえの体にかえしてやるからな。
その寝床の中に大丸髷の女体があたたかげに寝ている姿を安は執念のまぶたにはっきりおもい描きながら、どかどかと店へ駆けおりてきた。
「だんな、二階もからっぽでござんす。ふざけやがって、ちゃんと寝床はのべてありやすが、そこで寝るひまはなかったようで」
「そうか――。床がのべてあるとすれば、残ったほうが浪人者だったにちがいない。惜しいことをしたな」
権太夫はいまいましげにいってから、
「安、どぶ辰、浪人者は帰ってこなくても、おさわ、忠吉、辰造の三人はきっと帰ってくる。帰ってきた者から有無をいわせずしょっぴいてこい」
と、きびしくいいつける。
「かしこまりやした」
「如才もあるまいが、よっぽどうまく網を張っていないと、やつらは感づいて家へ入らずに逃げてしまうぞ」
「へえ、うまくやりますでござんす」
そこで、権太夫は一応手くばりをといて、柏屋の寮へ引きあげてきた。
ちょうどそのころ――。
柏屋の寮の表門へ立派な女乗り物がついて、

若党が門番小屋の加役の中間作造に、
「こちらへ大東竜平さまがまいっているとうかがって出ましたが、三島家の奥方お信の方さまが、内々にてお願いの筋があり、ぜひお目にかかりたいと、お取り次ぎをおたのみいたします」
と、ていねいに申し入れた。
「しばらくお待ち願います」
作造は庭づたいにいそいで書院の廊下先へ走り、
「若だんなさま、三島家の奥方さまが、なにか内々でお願いがあるとかで、表へまいっております。どういたしましょう」
と、障子のうちに取り次ぐ。
「なにっ、お信の方がか――」
着流しになって床の間をまくらに寝ころんでいた竜平は、むくりと起きあがった。
「よし、庭からここへ通せ」
「へえ」
竜平は一度美沙緒を手ごめにしそこなっている。ひょっとすると、美沙緒が屋敷へ帰っていて、それを告げたのかもしれない。
脛に持つ傷で、一度はどきりとしたが、よく考えてみると、それなら屋敷のほうへ抗議を持っていくはずだ。
あの見識ぶったお信の方が、わざわざ今戸くんだりまできて、しかも内々の願いという前触れまでさせる、これは抗議ではなく、なにかほかに困った問題があってのことかもしれないと竜平はすぐに思いかえして、とにかく会ってみることにした。

10

お信の方は、掻取りを淡紅色のしごきでたくしあげた外出姿で、作造に案内され、庭づたいに書院の南の廊下先へまわってきた。
この寮は半分しか雨戸のあいていない荒れ放題の空き屋敷だから、なんとなく陰惨な暗い空気がただよっている。

その庭先へ、明るい若葉どきの日をあびて立ったお信の方は、もう三十を一つ二つ出た大年増ながら、すらりとした肢体にいわゆる中年太りという脂の乗りきった肉づきで、どっちかといえば気位が高い、つんと取り澄ました面立ちだが、その白々とした下ぶくれの顔にさえ、思いがけないなまめかしさがみなぎっている。

——はてな、こんなに色っぽい女だったかなあ、この人は。

度々屋敷をたずねて見かけたお信の方とはまるっきり違った感じをうけて、竜平はひそやかに目をみはらずにはいられない。

「さあ、どうぞ——。よくここがおわかりになりましたな」

着流しの竜平は、気軽に廊下まで出てお信の方を迎えた。

「おじゃまいたします」

お信の方はにっこりとこっちへ会釈をしてから、

「吉、駕籠は八幡さまの境内で待たせておきなさい」

と、ついてきた若党にいいつける。

「はい」

吉之助はおじぎをして表門のほうへ引きかえしていった。

「失礼いたします」

お信の方は沓脱ぎから廊下へあがって、うしろ向きになって掻取りのしごきをとき、それをそこへおいて、すそをひいてすらりと立つ。

「お信さま、それはこっちへ入れておきましょう。目立つといけない」

竜平は自分でしごきを取って座敷へ入れ、がらんとした床の間の前へ座布団をなおして客の座を作る。

「作造、組下の者にいいつけて、ここへは絶対に人を近づけてはならん」

「へえ」

竜平は作造が去るのを待ってそこの障子をし

めきる。

——お信さん、なにかいうかな。

竜平はちらっとそんなことを考えながら少し離れた下座へついた。

「ごらんのとおり、ここはこんなひどい空き屋敷でしてな、実はここへ南蛮組が入りこんだことがあるというんで、わざとここを本陣にしているんです」

「寝泊まりしていらっしゃるの」

お信の方はいかにも姉らしい心づかいを見せた親しげな顔をする。

「役目ですからな、しようがありません」

「まさか、ふいにここへ南蛮組が押しこんでくるようなことはないでしょうね」

「そんなことはありません。ここはいやしくも竜平の本陣です。安心してなんでも話してください」

竜平もまた姉に対するような親しさを見せる。

11

「竜平さん、実は困ったことがおこりましてね、ぜひあなたにお力になっていただきたいと思って——」

お信の方は青いまゆをかすかにひそめてみせる。

「どんなことです」

竜平は微笑でうける。

「三、四日前に美沙緒が家出をしましたの」

ずばりと切り出してきたところをみると、相手には長坂重蔵という策士がついているのだから、ある程度までこっちの秘密を握っているのかもしれない。が、竜平は素知らぬ顔で、

「そんなうわさはちらっと耳にしています」

と、もっともらしい顔にかえってずぶとく出る。

「もっとも、あたくしにも落ち度はございました。御存じのように、三島の先代は勘定奉行を

勤めまして、その当時は家計にも多少ゆとりがございました。先代が亡くなりまして七、八年になりますが、――これはここだけの話ですけれど、当主の三島には浪費癖がございましてねえ」

「弥十郎どのには女出入りが絶えない、本当なのかなあ」

竜平はすかさず一本切りこんでおく。弥十郎は遊び好きの上に、女中に手をつける癖があって、いつも夫婦の仲がごたごたしている。お信の方もおもしろくないから、ついぜいたくをして派手に金をつかうといううわさがあるのだ。

「いまさら竜平さんにかくしたってしょうがありませんね。あたくしはもうあきらめていますからかまわないのですが、散々遊んでしまった後で、長崎奉行になるのだから三千両ほど用意しろといわれても、どうにもなりはしません。とにかく、用人の長坂に話してみますと、これがまた安うけあいで、なんとかしてみましょうと申しまして、独りぎめに美沙緒を堀留の柏屋へ嫁にやるかわりに支度金として三千両出させる話をきめてしまいましたの。それが、美沙緒が家出をしてしまってからやっとわかったという始末で、いまさら長坂をしかってみたところでもう取りかえしがつきません」

「なるほど――」

「ところが、長坂は美沙緒が家出するとすぐ、後を追って出て、幸いすぐに美沙緒を見つけたのだそうです。そして、よく美沙緒に家の事情を説いて、どうにか納得してくれたから、美沙緒を柏屋へわたし、そのかわり三千両をたしかにうけ取った、それがこの柏屋の寮でのことで、やっぱり筋のとおらないことというものはだめなものなのですね。運悪くそこへ南蛮組とかいう凶賊が押し入ってきて、その三千両を持っていった。いいえ、その後へすぐ竜平さんの組がきてくれたので、金は持ち出す暇はない、たしかにこの屋敷内へかくして、賊は体だけで逃げ

ていると長坂はいうのです」

表情たっぷりなお信の方の話を聞きながら、そうか、権太夫のいっていた金のことはどうやら本当らしいなと竜平は思った。

12

「しかし、あの晩わしはここで柏屋には会ったが、長坂は見かけなかったがなあ」

竜平はわざとふしぎそうな顔をしてみせる。

「それは、長坂は主人の名が出ては悪いと考えて、わざと姿をかくしたのだといってました」

「なるほど――」

「美沙緒もあの晩、柏屋の手から南蛮組にさらわれたと聞いていますが、本当ですの」

お信の方はいかにも心配そうな表情を作る。

「その南蛮組の手から、いまは鈴村大作の手に移っているようです。表神保町の滝主水の弟です。御存じでしょう」

「存じています。こんど北のお奉行さまになられた遠山さまの御親戚だそうですね」

「そうです。それで、お信さまはわしにどうしてくれろといわれるんです」

竜平はわらいながらお信の顔を見る。

「この座敷の中に、本当に三千両かくしてあるかないか、それをさがしていただきたいの。せめてそのお金でもあれば、三島に、美沙緒がこれこれで自分の体でこしらえてくれたお金ですと話もできますが、それでないとあたくし三島に顔向けができませんもの」

「では、弥十郎どのはまだ美沙緒さんのことを知らないわけですな」

「そうなの。三島には美沙緒はあたくしの里へ行っていると話してありますのよ」

「それはだめだ」

竜平はきっぱりといった。

「なぜですの」

「美沙緒さんは大作に助けられている。万一、大作の口からそんなことが遠山の耳に入れば、

一切がぶちこわしになってしまう」
「そこを、あたくし、竜平さんに考えていただきたいと思って――」
お信の方はまじまじと竜平の目を見かえしてきた。恐れげもないその大胆な目は、また大胆にも大年増の濃厚な媚をふくんで、あやしく竜平の心をひきつけてくる。
それはまた、あなたのやったことも知っていますよと、内心こっちを脅迫しているような目のようにも思える。それがなくては、女の口からそんな思いきった言葉は出ないはずだ。
「大作をわしに片づけてくれというんですか」
「あなたにはお役目があるのですもの」
「長坂の口はどうするんです」
「おまかせしたいの」
これは相当毒婦的な血を持っている女だと、竜平もまた急にずぶとくなって、
「三島家には跡とりがない。わしの弟の虎二郎を三島家の養子にしてくれないかなあ」
と、こっちもずばりと切り出す。
「それは、あたくしの実家の妹お露を虎二郎さんがもらってくだされば、きっとお約束してもよろしいのよ」
「口約束だけじゃいやだな。たよりない」
「一札入れろとおっしゃるの」
「違う。お信さんの体で約束してもらいたいんだ」
竜平はもう大丈夫だと見ている。

13

「そんな、あたくし――」
お信の方は当惑したような顔になって、しかし、その目はあきらかに前より熱ぼったく燃えているようだ。
「いやか、お信さん」
竜平はかっと血気の煩悩に駆られて、にじりよるなりもう女の肩を両手でわしづかみにしていた。

「罪ですわ、そんな、御冗談――」
「いや、冗談じゃない。本気なんだ。わしはあんたが好きだ」
かまわず肩を抱きよせて、口紅の濃いくちびるへくちびるをかさねていく。
お信の方は軽く目をつむって、たわいなくもう熱い息づかいになっている。竜平の手はすかさず女の内ぶところをさぐって感触豊かな乳房をなぶりはじめる。
大年増の濃艶な女体はすでに淫蕩な血にかき立てられてきたらしく、上体を若い力で支えられ、のけぞるようになったひざ前がみだらにくずれかけていた。
「人が、人がきませんの」
「だれもこやしない。大丈夫だ」
「でも、ここでは――」
さすがに女は用心深い――。
「よし、じゃあ次の間へ行こう。先へ行っていてくれ」
ぐいと抱きおこしてやると、お信の方は肩からすべりおちそうな掻取りをそのまま支えて立ちあがり、夢うつつのようにふすまをあけて、次の間へすそをひきながらすべりこんでいく。
竜平は廊下へ出て、もう一度作造を呼び、人を近づけるなと念をおしておこうかと考えたが、やめることにした。
そんなことをしなくても、命令は必ず忠実にまもられているのだ。ばか念はかえって相手に変な気持ちをおこさせるようなものである。
――おれは不義密通を働く。
相手がれっきとした人妻だけに、若い竜平は興奮させられる。
わざとゆっくり次の間の八畳へ入っていくと、ここは雨戸がしめてあるだけに書院より薄暗く、がらんとした空き家の感じで、その古畳の上へ女は派手な掻取りを脱ぎすて、窮屈な帯だけといて、しごき姿のまま横座りになっているのが、わくわくと男を待ちかねているといっ

たなまめかしい風情で、そこはもうそのまま情痴の世界のように思えた。

——お信は男を知っている人妻なんだ。ことによると、長坂とだってどんなまねをしているかわかりゃしない。

そう考えたとたん、竜平は完全に野獣になっていた。

それはまたお信という女の、あくまでも淫蕩で、ねっとりとあやしいまでに強靱な肌がそれを求めたのかもしれない。竜平は自分でもおれにこんな悪魔のようなあくどい嗜好があったのかとびっくりしたほど、いつの間にか女体を全裸にして、その全身をさいなみなぶって、お信に悲鳴をあげつづけさせていたのである。

14

竜平はもとの書院へもどると、お信の方の座っていた座布団の上へむっつりと座った。全身を神経にしてあたりへ耳を澄ましてみたが、屋敷うちはしいんとして、近くに人の気配さえ感じられない。

日ざしはやがて真昼に近い明るさのようだ。

ふすま一重の向こうで、お信が着物をきているきぬずれの音がかすかに耳につく。

歓楽きわまった後の甘い感傷、そんなものは竜平にはなかった。

ついいましがたまで、お信のむっちりと肉づきのいい女体が、さいなむたびにうめき、もがき、こらえきれなくなって悲鳴さえあげながら、しかもその苦痛をむしろ肌が歓喜しているように、あくまでも男に媚び燃えてまつわりつき、泣き、くどいては身もだえする、そのあやしいまでに興奮した裸身が、いまも竜平のまぶたにはっきりと焼きついていて、どうにも胸がしずまりきれないでいる。

そんな激しい痴情を経験したのは、竜平もはじめてである。いや、これはたしかに悪魔の遊びなのだ。お信の体にそういうふしぎな血がたぎっていて、男を悪魔の遊戯にさそいこむにちがいない。

一度その肌にふれた男は、二度とそういうお信の肌を忘れられないだろう。悦楽の極致、いや、求めようによってはそれ以上の悦楽をお信の女体は持っているような気がする。

——くそっ、お信はもうおれのものだ。

そのことをはっきりともう一度お信の口から誓わせないうちは、竜平はどうにも落ち着けないのである。

ふすまがあいて、もうすっかり三島家の奥方お信の方のよそおいになった女が、掻取りのすそをひいてしとやかにあらわれ、そこへ行儀よく座って、にっと目でわらってみせる。

おくれ毛一つ見せずに櫛を入れた大丸髷が、しっとりと落ち着いて竜平の目にしみる。

「いやですわ、なんでそんな怖い顔をしておにらみになるの」

目に余情をふくんで、とろんとした口のききかたである。

「おれは、お信が憎い」

「どうしてなの、竜平さん」

「おれはもうおまえの肌を弥十郎にもさわらせたくないんだ」

「あんなこと——。あたくしはねえ、竜平さん、もう三年前から弥十郎とはお褥遠慮の間ですのよ」

「本当か——」

「あたくしは端女に手をつけるような男はけがらわしい」

お信はまゆをひそめてわらってみせるのである。

「じゃ、あの悪用人はどうなんだ」

「またそんなことを——」

竜平が痴情に狂って、いくつかお信の肌に紫色のあざが残るほどつねって、その度に悲鳴をもらさせるのは、それを白状しろと責めさいなんでのことである。

しまいに、お信は、そんなに疑うのならもう殺してと、竜平にしがみついて泣いていた。

15

「竜平さんはいま、そのことで、あたくしをあんなにおいじめになったばかりですのに」

ほおをほんのりさせながら、じっと男の目を見かえしてくるお信の目には、うらみがましい色は少しもなく、むしろこの年下の野獣がかわいくてしようがない、そんな淫蕩な感情を大胆に見せている目のようである。

「あたりまえだ。おれは長坂のお古などもらうのはいやだ」

「まあ、お古だなどと、疑い深い――。竜平さん、あたくしは今日、女中たちにおふろでうっかり肌も見せられないほど、あなたにいくつもあざをこしらえられていますのよ。いま着物をきながら見て、びっくりしたの」

「憎いからつけてやったんだ」

「ふ、ふ、まだあんなことを――。じゃ、竜平さんはあたくしの体に、竜平さんのでないほかのあざをごらんになったの」

竜平は返事をしなかった。あざがないから、長坂とはなんでもないという証拠にはならないのだ。

「それより、あたくしね、長坂は竜平さんに早くなんとかしていただきたいの」

「どうしてだ」

「あれは美沙緒のことを種にしてあたくしをねらっていますのよ。そんな脅しにのるほどあたくし気の弱い女ではないけれど、竜平さんとこうなってみると、やっぱりじゃまですわ。あれさえいなければ、いつでも竜平さんに屋敷へきてもらえますし、あたくしのほうから忍んでもいけます」

「弥十郎に見つかったらどうするんだ」

「弥十郎は寝間へはまいりません。お褥遠慮ですもの」

お信は平気でわらっている。

「しかし、夫婦だからな。いつふいに押しかけてこないとはかぎらない」

「かまいませんの。その時は竜平さんをしっかりと抱いて、あたくしはもうこの人のものとはっきりいってやります」

「きっとだな、お信」

「だって、竜平さんのあざをいくつももらってしまったのですもの、いまさらうそをいってもしようがありません。本当はね、あたくしこれから帰って、信は竜平さんにこんなにかわいがられてきましたといって、このあざを弥十郎に見せてやりたいくらい」

正気だろうかと、竜平はあきれてお信の顔を見なおさずにはいられない。

「でも、大丈夫ですのよ。虎二郎さんを三島家の養子にしてお露をめあわせれば、あたくしとあなたはどんなことでも好きにできます。うれしいわ。弥十郎をだますぐらいは、あたくしの知恵でなんとでもなります。ただ、長坂はきつねのようにずるいから、早くなんとかしなければ二人のじゃまになるわ。それから、大作も美沙緒も――」

邪恋のくぜつ、それがどこまで正気なのかちょっと判断はつきかねるが、お信が激しい情熱を自分に打ちこんできていることだけは、竜平にもはっきりわかる。しかも、それが密通という禁断の木の実だけに、竜平の魂はこの時から完全に世にも甘美なお信の肉体の呪縛にかかってしまっていた。

16

橋場の対岸、水神の森の木母寺の隣に、古庵という小さな表札を門柱に打ちつけてある風雅な構えの小屋敷がある。

もとはある旗本の隠居所で、隠居が俳人だったので、よく俳友を集めて運座などをやってたのしんでいたが、その隠居が世を去ってから、

これも京橋の丸屋善兵衛が手に入れて、自分は別に使いもせず、番人の老夫婦をおいて遊ばせておく寮だった。
　ここから木母寺の前をぬけて、向島土手を一つ越したところが隅田村だから、大作と美沙緒とがかくれている忠吉の兄の家とは七、八町しか離れていないことになる。
　船頭に化けた太郎が、おさわを猪牙に乗せて自分でこぎ、つれこんでいった先はその古庵であった。
　ここは門のくぐりから入って玄関わきの開き戸を押して入ると、つり堀ほどの池のある庭になって、その池を正面にながめるところに十畳と八畳の二間つづきの座敷がある。隠居は八畳のほうを居間に使って、十畳の座敷のほうで句会などをやったらしく、両方ともなかなか凝った造りにできている。
　留守番の老夫婦は奥の茶の間を使っているとかで、呼べばなんでも用を足してくれるが、用がなければ決して客の前へは顔を出さない。
　太郎は客間のほうの廊下からあがると、おさわをそこへ残しておいて、すぐ茶の間へ顔を出しに行った。
　ちょっと待たされたが、こんど出てきた時は、意外にも、もとの浪人姿にかえっている。
「あらあら、どうしたの」
「なあに、一足ちがいで辰造がこれをとどけてきて、いま帰ったばかりだそうだ」
「ここはどこなの。気味が悪いな、あたし」
「心配しなくたっていい。ここは我々が時々借りる丸屋の寮なんだ。ここならだれものぞきにこないから大丈夫だ」
　太郎はわらいながらおさわの手を取って八畳のほうへつれて入る。
「いやだ、そんな――」
　口では否定するようなことをいっても、おさわは朝からもやもやとじれきっていて、そうしなければ落ち着けないのを男はよく知っている。
　この辺はひっそりとしていて、子供の声ひとつしない。どうかするとそこの隅田川をこいでいく艪の音さえ耳につくくらいだった。
　案の定、おさわは燃えるような女体が満足すると、
「ねえ、忠吉も辰造もここを知っているんですか」
　と、汗ばんだほおにかかるおくれ毛をかきあげながら、急にいろいろなことが心配になり出したようだ。
「うむ、知っているよ。知っているから、着物のほうがおれより先にここへ着いていたんだ」
　と、立っていってそこの池に面した障子をあけ放す。
「まだいやだなあ、あんたは」
　おさわはあわてて横座りのままのしどけないひざ前をなおしていた。

17

「安心しろよ。池の鯉がわらっているくらいなもんだ」
　太郎は縁先へ出て、のんびりと青空を見あげた。
「こっちを向いちゃいやよ」
　おさわは座ったままくるりとうしろ向きになったようである。
「そんなことをいうから、そっちを見たくなるんだ」
「いや、いやだったら」
「いやだって、もう見ちまったよ。なにをたもとへかくしたんだ」
「ふ、ふ、当ててごらんなさいまし」
「当てたらそれをくれるかね」
「ばかばっかし――」
　女の声はまだ酔っているようにとろんと甘ったるい。

「おい、辰造はまさかあわてて家へ帰りゃしないだろうな」
　太郎はふっとそれが気になってくる。
「そんなことないでしょう。気をきかせるつもりで、今ごろ奥山へでもまわっているかもしれない」
「そうか、それならいいが――」
「ねえ、あたしは今夜うちへ帰っても大丈夫かしら」
「そうだなあ」
　大丈夫とはいいきれない。加役は南蛮組と大作が今戸の町内にかくれているとみて、昨日からきびしい網を張っているのだ。
　その手先の一人が特に船米を見張っていたとすれば、おそらくねらいは南蛮組の出入りとみていい。
　実は、たぶんそんなことだろうと思いながら、今朝つり浪人に化けておさわに会いに行ったのは、やっぱり少し冒険にすぎたのである。
「おさわ、ことによると今夜はここへ泊まったほうがいいかもしれないな」
「そうかしら――」
「とにかく、よく様子をたしかめてからにしたほうがいい」
「もしここへ泊まるようなら、あんたもいっしょなんでしょう」
「たぶんそうなるだろう」
「いやだわ、たぶんだなんて――。知らない家へ一人じゃ心細いんだもの」
「なんだ、おまえ、そんなに気が小さくちゃ、海賊の女房は考えものだぞ」
「違うんですってば――。その時はその時で、あたし、ちゃんと度胸をすえます」
　度胸などというものがその時々でそんなに都合よくかわるもんかなと、太郎が思わず苦わらいをした時、玄関わきの開き戸があいて、同志の南蛮五郎が入ってきた。
「おさわ、五郎さんがきたぞ。しまうものはみんなしまったか」
　太郎がひょいと振りかえって小声でいう。
「いや、そんなことばっかしいっちゃ」
　おさわはちょっと顔を赤らめて、いそいで座りなおしている。
「太郎さん、すぐそこへ行ってもいいか」
　五郎はこっちを見てわらいながらゆっくり近づいてくる。

18

　五郎は、上背があって、骨組みのがっしりとしたたくましい体つきだが、気性は明るく、いつも童顔をにこにこさせている。年も太郎より二つぐらいは若いだろう。
「五郎さん、おさわがここへきているのがよくわかったなあ」
「そりゃわかるさ。ここへ女の下駄（げた）がぬいである」
　十畳の座敷の沓脱石（くつぬぎいし）の上に、太郎とおさわがぬいだ履き物がそのまま並んでいるのだ。
「なんだ、そうか。まあおあがり」
　太郎は廊下づたいに客間のほうへ行って座る。
「おかみさん、じゃまならもうひとまわりしてきていいんだがなあ」
　五郎はわざと八畳のほうへ聞く。
「いいのよ、五郎さん、そんな遠慮なんかしなくたって――」
　そう答えた後で、おさわはどうやら赤い舌を出したようなうきうきとした声音である。
「そうか――。それなら助かる」
　五郎はわらいながらあがってきて太郎の前へ座った。
「なにが助かるんです、五郎さん」
「なあにね、まだかあまだかあと思いながら外をうろついているくらい退屈なものはないんだ。今は季節がいいからまだ我慢しいいが、寒い時などは人生が味気なくなってくるからな

あ」
「あら、いつあたしがそんなことを五郎さんにさせたかしら」
「まあいいさ」
五郎は太郎と顔を見合わせて、こっちはこっちで目でわらいあいながら、
「そこで、おれのほうなんだがねえ、太郎さん」
と、さっそく切り出す。
「どうした。深川のほうは都合が悪かったのかね」
「いや、途中で考えなおしたんだ。あの女はどうも気がやさしすぎるんで、船は無理じゃないかと思ってね」
「そうか——。患いでもされると当人がかわいそうだからな」
「おれもそれが心配になってきたんだ。体が丈夫で、よっぽど神経の太い女でないと荷やっかいになるし、みんなにも迷惑をかけるからな」
「うむ、しかし、かわりがあるか、五郎さん」
「一人、心あたりがあるにはある」
「どんな女なんだ。わしの知ってる女か」
「名前をいえば、びっくりするかもしれないな」
「ふうむ、だれだね」
「とにかく、太郎さん、体が丈夫で、気性がしっかりしていて、子供ができそうな女なら、だれだっていいんだろう」
五郎は念を押すようにいう。
「うむ。欲をいえば、その上船に強い女だな」
「あの女なら、船ぐらい平気だろう」
「名前をいってみろよ。だれなんだ」
「思いきっていうかな。実は、さそりのお浜なんだ」
「お浜——」
太郎は啞然として目をみはる。

19

「五郎さん、なにかわけがありそうだな」
太郎はまださそりのお浜に会ったことはない。しかし、お浜は悪用人長坂重蔵と共謀して美沙緒を屋敷からつれ出した女で、地獄長屋の浪人どもをあごで使って、どんなことでも平気でやってのけるすごい毒婦型の女だと聞いている。
わざわざそんな女を選んで女房にして船へのせていこうというからには、五郎になにかそれだけの考えがあってのことにちがいないのだ。
「実はねえ、太郎さん、あのお浜という女は、今から六、七年ばかり前に、おれの隣屋敷に腰元奉公をしていたことがあるんで、そこにおれより二つばかり年上の周さんというせがれがいて、これがおれに世界の話を吹きこんでくれたんだが、この周さんは蘭学を勉強していたくらいで、なかなか秀才だった。それが、二十一の時、ふいに自殺してしまったんだ」
「原因はなんだね」
「それがはっきりしないんだ。あんまり勉強しすぎて、気が変になったんだろうということになっているんだが、その周さんが妙な指輪を持っていてね、この指輪の中には百歩へびという毒蛇の毒が仕込んである。——太郎さんは百歩へびってのを知ってるだろう」
「うむ、そいつにかまれると、百歩もあるかないうちに死ぬというへびが暑い国にはいるそうだな」
「それなんだ。指輪は銀台で、へびの彫りものがしてある。それを指にはめて、人をつかむと自然に毒針が飛び出して、つかまれた人間は百歩へびにかまれたのとおなじで、たちまち死んでしまうというやつなんだ」
「そうか、お浜の持っているさそりの毒ってのはそれなんだな」
「おれもたぶんそうじゃないかと思う。とにかく、周さんはその毒針を自分でさして自殺したらしいんだ。家の者は周さんがそんなものを持っていることはだれも知らないから、なにか毒をのんで自殺したと思っているんだ。つまり、

その指輪は周さんが自殺した直後にだれかに盗まれてしまったことになるんだ」
「なるほど――」
「それからまもなく、そこの若い中間がその毒で殺されて、お浜が周さんの家から姿を消してしまっている。お浜はたしか十七ぐらいだったと思うんだ」
「お浜とその周さんとの間になにかあったんじゃないのか」
「そりゃあった。二人は夫婦になる約束をしていたらしい。そのころのお浜はまだ純情で、かわいい娘だった。わしは六日の夜、柏屋の寮へ押しこんで、五年ぶりぐらいではじめてお浜を見て、実はびっくりしたんだ。人相まですっかり毒婦型に変わっているんでね」
「向こうは五郎さんに気がつかなかったようかね」
「こっちは覆面をしていたからな」
「その毒婦のどこに五郎さんは恋情を感じたんだね」
太郎はまだ納得しきれないものがある。

20

「あの晩、わしはお浜を見て、この女もずいぶん変わったもんだなあとびっくりはしたが、その悪たれてすごんでいる言動の中に、どこか昔の純情、――純情は少しおかしいかな、つまり、なにか一本気な強さを感じたんだ。こんな風にとことんまでやけになれる女なら、魂さえ入れてやればきっともとのお浜になれるんじゃないかと、そんな気がしてきたんだ。――どうも口じゃうまく説明ができない」
五郎はそういって苦わらいをする。
「まあいいだろう。とにかく、五郎さんは見どころありとお浜を見たんだな」
「うむ」
「はたしてお浜が五郎さんのいうとおりかどうかは、当たってみなけりゃわからない。ということは、これから五郎さんがお浜をくどいてみて、お浜がうんというか、悪態をついてひじてつをくわせるかで勝負がつくことになる。そう思わないか」
「なるほど――。よし。じゃ、これから行ってくどいてみる」
「それがいちばん早いだろう。ただ、毒蛇(どくじゃ)の指輪だけは気をつけないとあぶないぞ。坂田慶三の例もあるからな」
「なあに、おれは別にけんかをしに行くわけじゃないんだから」
「いや、そうじゃないんだ。お浜は今のところまだ魂を悪魔に売っている毒婦なんだ。五郎さんをうまくだませば金になるとわかれば、どんな芝居をしないとはかぎらない。色仕掛けで眠り薬というやつなら金はとられても命だけは助かるが、毒蛇の指輪でやられると命までやられる。それを十分気をつけろというんだ」
太郎は弟にでもいうように細心の注意をあたえる。
「ありがとう、よくわかった」
「もう一つはな、五郎さん、わしがおさわをつれてここへ逃げ出してきたのでもわかるだろうが、今戸は加役組が水も漏らさぬ網を張っている。山ノ宿の平野屋にも張りこみが目を光らせているとみなければならない。大事の前の小事だからな、よく頭を働かせて、油断は絶対に禁物だぞ」
「承知した。じゃ、よく頭を働かせて、これからちょいとくどきに行ってくる」
五郎はそんな冗談をいいながら立ちあがって、
「船米のおかみさん、おれはまた出かけるから、後で太郎さんとゆっくりつもる話でもするといい」
と、おさわをふすま越しにからかいながら、さっさと庭へ出ていく。
「あんた、大丈夫なの」

ふすまをあけて出てきたおさわが心配そうに聞く。

「なあに、めったに加役組につかまるような男じゃないが、お浜とはまたえらい女に目をつけたものさ」

「けど、うわさだから本当のことはわからないけれど、うっかりくどくと毒針でやられるから、まだだれもあの女には手が出せない。だから、お浜はいまだに男を知らないんじゃないかというわさがあるのよ」

おさわは目でわらいながら、男のそばへきて座る。

恋というもの

1

平野屋へ行くには橋場の渡しをわたったほうが近いが、そこからだとどうしても今戸を通りぬけなければならない。その今戸は加役組の張りこみが厳重だと聞いてきたので、五郎はわざと竹屋ノ渡しをわたって山ノ宿へ出た。

――毒婦お浜。

六日の晩見たお浜は、たしかに颯爽たる毒婦ぶりだった。しかも、あの晩お浜は浪人坂田慶三を毒蛇の指輪の針にかけている。

幸い、五郎は四郎といっしょにその場へ行きあわせたので、骨は折れたがうまく坂田を隣の寮へ運びこみ、金命丸をのませて命だけは助けてやった。今日あたりはもうそろそろ体のしびれもとれるはずである。

そういえば、坂田は、体がなおったらお浜を切るんだと、いまだに憤慨しているのだ。

その坂田の口から、五郎はお浜の毒婦ぶりをかなりくわしく聞いてもいる。

が、五郎にはどうもそれがお浜の本性だとは思えないのだ。

お浜は初恋の石川周二郎に自殺された。それ

からやけになって世の中をのろい、なんの希望もないままに、そんな無軌道な暴れ方をして、心の傷をまぎらせているのだ。その証拠には、そんなにやけになっていても、まだ男を近づけたことはないようだという坂田の話でもうなずけるような気がする。

そこにまだ見込みがあると五郎は見ているのだ。

しかし、その毒婦ぶりは相当残虐性をさえ持っているようだから、お浜の血の中にはたしかにそういうものがあるにはあるだろう。

――はたして、そういう血がおれの力でなおせるかどうか、これだけはぶつかってみないとわからない。

五郎はそう考えて、小細工などのできる男ではないから、かまわず平野屋の店へ入っていった。時刻はまだ昼をすぎたばかりである。

「おいでなさいまし。だんな、舟の御用でござんすか」

店番をしていた船頭の竹次が、いそいで上がり框へ出てきて聞いた。

「いや、舟じゃないんだ。お浜姉御は在宅かね」

「へえ、姉御に用なんですか」

「小石川の金子新五郎がたずねてきたと取り次いでみてくれ。たしかおぼえているはずだ」

「じゃ、だんなは姉御をごぞんじなんで」

風采から見れば、旗本三百石金子新五郎の格はまだそうくずれていないはずだ。

竹次はそのおっとりとした童顔を見なおしている。

「うむ。まあ、昔なじみというところかな」

「ちょいとお待ちなすって」

竹次はすぐに二階へあがっていって、しばらく待たされたが、やがておりてきて、

「お目にかかるそうでござんす。どうぞおあがんなすって」

と、行儀よくおじぎをした。たぶん、お浜からこっちの身分を聞かされてきたのだろう。

2

「やあ、久しぶりだな、お浜」
五郎がなんのこだわりもなく二階座敷の六畳へ入っていくと、
「金子さん、どうしてここがわかったんです」
お浜はわざと行儀の悪い横座りにして、さぐるような鋭い目を向けてきた。
「おれがここをたずねちゃ悪かったかな」
「ここは殿さまなんかのくるところじゃありません」
「いや、その殿さまはもうとっくにやめたんだ。おれの家も石川家と同様つぶれちまったんでね。今は気楽な浪人者なんだ」
「あたしになんか用なんですか」
「ひどく邪険なんだなあ。なつかしいからたずねてみた、それじゃ迷惑かね。——もっとも、一つだけ用がないわけじゃない」
「どんな用なんです」
お浜の底意地の悪い顔はなかなか解けそうもない。
「怖い顔だなあ、お浜」
「この顔一つしか持っていないんだもの、しょうがないでしょ」
「そうか、困ったなあ」
「なにが困るんです」
「そうにらまれていたんじゃ、ちょっと切り出しにくいんだ」
五郎は当惑したようにわらってみせる。
「金子さんはあいかわらずのんきそうねえ」
「これであんまりそうでもないんだ。昔とちがって、このごろは自分でかせがないと食えないんでな」
「いま、なにしているんです」
「なんにもしていない。おれにできる仕事など、そう世間にないんでね」
「だって、今、自分でかせがなくちゃこのごろは食えないっていったじゃありませんか。なにをして食っているんです」
「どうだろうな、おれにできるような仕事、姉御のところになんかないか」
「それ、本気なの、金子さん」
お浜はまたしてもさぐるような目つきになる。
「本気だ。背に腹はかえられないというからな」
「あたしのところにある仕事は、一つ間違うと獄門首になりかねないようなあぶない仕事ばかりよ。それでもいいんですか」
おどかすようにいうお浜だ。
「うむ、お浜といっしょに首をならべてくれるんなら、獄門首になってもいい」
「なんですって——」
「お浜は周さんと夫婦約束をしていたんだろう」
「知るもんか、そんなこと——」
「ところが、おれは知っているような気がするんだ。だから、周さんはおれの兄貴分だし、そのころは別になにも考えちゃいなかった。そういえば、周さんがどうして自殺したか、お浜はそのわけを知っているんじゃないのか」
「知りませんねえ、そんなこと」
「そうか——。おれはこのごろになってやっとそれがわかってきたような気がするんだ」
五郎はあくまでもまじめな顔つきである。

3

「どうわかったんです、金子さん」
お浜は五郎をしり目にかけながら、なにがわかるもんかといいたげな顔つきである。
「あの家に若い後妻がいた。あのころ三十ぐらいだったかな。若くても周さんにとっては継母（ままはは）ということになるんだ」
そこまでいって、五郎はふっと口をつぐんでしまう。
「その後妻のおっかさんがどうかしたんです

か」
「いや、その話はやめよう。人間というやつは悲しいもんだ」
周二郎はその後妻の誘惑に負けて、道ならぬ肉体関係におちてしまったのだ。その醜い愛欲のどろ沼からのがれるために自殺の道を選んだのだと五郎は前から見ていたのである。
おなじ家にいたお浜がそれを知らないはずはない。初恋の男をそんなことで失った悔しさ、それがお浜をこんな毒婦にしたともいえるのだろう。
「おあいにくさま。あたしは悲しい人間なんかじゃありません」
お浜はじろりとこっちを見ながら挑戦するように冷笑する。
「そうか、そいつはありがたい」
「なにがありがたいんです」
「おれはそういう強い女が好きなんだ。周さんはもう死んじまったんだし、遠慮することはないからなあ」
「金子さん、あんた変なことばかりいうのねえ。一体、あたしをどうしようっていうの」
「ああ、そうか——。そう開きなおられるとちょいと困るんだが、どうだ、お浜、おまえ昔なじみで、おれが好きになれないか」
五郎はあっさり切り出してみる。
「なあんだ。じゃ、あたしをくどきにきたってわけなのね」
「手っとり早くいえば、そういうことになるんだ。いやか、お浜」
「あんたずうずうしくなったのねえ。あのころは女の話が出てもすぐ赤くなっていたくせに」
「そうだったなあ。おれはあのころ御年十九歳になるやならずだったからな」
「そうそう、あんた腕のほうはどうなの。あの時もう免許だって自慢してましたね」
「ところが、剣術の先生じゃなかなか暮らしにくい世の中なんだ。だから、腕自慢はもうよす

ことにしているんだ」
「人を切ったことあるの」
お浜の目があやしく光ってくる。
「殺したことはないが、切ったことはある」
「じゃ、こうしましょうよ。あたし切ってもらいたいやつが一人いるのよ。そいつを切ってくれたら、あたしの体をあげる。これでもねえ、金子さん、あたしは周さんにだって身はまかせなかった。だから、まだ体だけはきれいな生娘なのよ」
「ありがたい。そいつをおれにくれるんだね」
「だからさ、その男を切ってくれなくちゃいやだ。あたしも強い男が好きなんだもの」
「よし、その男ってのはだれなんだ」
五郎は思わずひざをのり出すようにしてみせる。

4

「本当に切ってくれるねえ、金子さん」
「うむ、切ってやる」
この男は昔っからばか正直で、うそのいえない性分だし、女を手くだにかけるなんて能はない。よし、ほれてきたを幸い、この体を餌に思いきり利用してやろうとお浜は思った。
「姉御——」
入り口の戸の向こうから、ふっと竹次の呼ぶ声がした。
「なにか用かえ」
「いま長坂のだんながこっちへくるようですぜ。どうしやす」
「ふうむ、御用人さまがかえ」
「そうなんで——」
「かまわないから、きたら二階へあげておくれ。そのかわりねえ、竹、お客さんの履き物をかくして、ここに先客があるなんて余計な口をきくんじゃないよ」
「かしこまりやした」
竹次はそっと階段をおりていったようであ

る。

「客がきたんじゃ、おれは帰ったほうがいいんじゃないか」

金子が遠慮そうに聞く。

「かまわないわ。いまあたしがおもしろい芝居を見せてあげますからね。あんたはここへかくれていておくれよ」

お浜はいたずらっぽくわらいながら一間の押入をあける。

「なんだか間夫（まぶ）のようだなあ」

「あら、気のきいたこと知ってるのねえ、金子さん。いいじゃありませんか、いまに本当に間夫になるかもしれないんだもの」

「そうか。じゃ、かくれていよう」

金子はうれしそうな顔をして押入の中へ入りこむ。

「どんなことがあっても、あたしがいいというまで出てきちゃだめよ」

「心得た」

お浜はぴしゃりとふすま戸をしめきって、うれしそうな顔をしてやがる、男なんてみんなまるでさかりのついた犬みたいなもんだなと、おかしかった。

そして、お浜は素早く堅い帯だけとって、しごき姿になり、いま金子の敷いていた座布団を自分のへならべ、たばこ箱をまくらにしてくの字なりにごろりと横になる。

「お浜は二階か――」

ちょうど長坂重蔵の声が階段の下で聞こえて、もうゆっくりと上へあがってくる。

すっとそこの入り口のふすま戸があいた。

「だれ――」

お浜はむくりと半身を起こして、

「あら、御用人さん、いやだなあ。ふいにこんなところへ」

と、いそいで座りなおす。

「昼寝か、お浜。まあ、そのままでいい。こっちがふいに押しかけてきたのが悪いんだ」

長坂はお浜がいそいで裏がえしにしてすすめる座布団へ座りながら、押入のほうなど見向こうともしない。

5

「なにか急用なんですか、御用人さん」

お浜はさっそく切り出す。

「うむ、ここのところまったく失敗つづきで、どうもついておらんな」

長坂はたばこ入れを取り出しながら苦わらいをする。

「本当ですねえ。あたしもすっかり腐っちまった」

「そうだろうなあ。もう少しというところで、いつもとんだじゃまが入る。どうだ、美沙緒と大作の行方はまだわからないか」

「残念ながらわかりません」

「金のほうはどうだ、柏屋の寮の」

「あそこはいま加役組ががんばっているんで手がつけられないんです」

「そうか――。やっかいなところへ加役が首を突っこんできたもんだ」

「そのかわりねえ、御用人さん、大作と美沙緒は加役さんたちが片づけてくれるんですから、こっちは高みの見物としゃれこんでいられるんです」

「加役のせがれも美沙緒をねらって失敗したそうだな」

「そうらしいんです。だから、大作と美沙緒の口をふさいでしまわないうちは、まくらを高くして寝られないんでしょうよ」

「美沙緒のほうはそれでいいとして、困るのはあの晩の三千両のほうなんだ。美沙緒も横取りされた、三千両も手に入らないでは、屋敷に対してわしの立場がなくなる。なんとか早く柏屋の寮をさがしてみる工夫はつかんものかな」

さすがの長坂もだいぶ当惑しているようである。

「さあ、加役さえどいてくれればねえ」
「加役はどうしてあの寮へああがんばっているんだね」
「南蛮組の巣が今戸にあるとにらんでいるんでしょうよ」
「やっぱりそうか――。すると、急にどうするというわけにはいかんな」
「まあ、そういうことになりますね」
「どうだ、お浜、あの寮の中にある三千両はおまえにやるから、今夜もう一度わしに手を貸してくれぬか」
長坂の細い目がきらりと光ってくる。
「あたしにどうしろっていうんです」
「おまえに、今夜、美沙緒に化けてもらいたいんだ」
「それで――」
「柏屋は表は用心堅固だが、裏の桟橋から入ればすぐに惣兵衛の居間へ入れる。しかも、惣兵衛の居間は廊下の杉戸のかぎをかけてしまえば、店の者はだれも奥へこられないようになっている。つまり、惣兵衛はそこで証文の書きかえにきた女をうまく脅して生き血を吸うことにしているんだ」
「うまい仕掛けになっているんですねえ」
「その仕掛けを、今夜は逆にこっちが利用してみようと思ってな」
「というと――」
お浜はまだ気のつかないふりをしている。

6

「今夜な、おまえを美沙緒に仕立てて、わしが舟で柏屋の裏口へ送っていく。座敷へ通されて、お高祖頭巾をぬいだところで、実はこういうわけだからとわけを話して、もう一度三千両出してくれとわしからたのみこむ」
「出すもんですか、業つくばりが」
「それは出すまいとわしもにらんでいる」
長坂はにやりとわらいながら、

「そこへ、五人組み強盗が押しこんでくるんだ。わしも、おまえも、惣兵衛も縛られて、五人組みは金蔵から三千両持ち出し、舟へ積んで引きあげるという筋書きだ。それなら、わしもおまえにも傷はつくまい。どうだな」
と、ずるそうな目をするのである。
「その手はもうだめだわ、きっと」
お浜はずばりといった。
「なぜだね」
「おとといの晩、その手で柏屋はひどい目にあっているんです」
「ふうむ、本当か、お浜」
「加役のせがれが美沙緒を長持ち詰めにして、船の上で柏屋の三千両と取りかえっこをしたんです。惣兵衛がその長持ちを裏口から自分の部屋へ持ちこんで、さてゆっくりおたのしみにかかろうとしたら、いつの間にか南蛮組が忍びこんでいて、柏屋の腰から金蔵のかぎを取りあげ、一万両持ち出した上、美沙緒までさらっていったっていうんです。加役のせがれの口から聞いたんだから間違いありません」
「ふうむ」
長坂は苦い顔をして、むっつりと黙りこんでしまう。
「ねえ、御用人さん、それよりいっそ奥方を表から柏屋へつれこんでみたらどうなんです」
「なにっ」
「大年増じゃあるけれど、あれならきっと狒々おやじだってよだれをたらすわ。三千両になるんだもの、奥方だっていやとはいえないだろうし、それならだれにも傷はつかないじゃありませんか」
お浜は冗談のようにいってみた。
長坂は返事をしない。
「三千両がほしいのは、本当は奥方さまなんでしょう」
「半分はな」
「奥方さまは、三千両手に入ったら、千両ぐら

い殿さまにやって、美沙緒がこしらえてくれた金だと柏屋へはめこんだことを打ちあける。殿さまはうむそうかですませてしまうような手前勝手な性分の男なんです。ところが、その金も手に入らないし、美沙緒も大作に横取りされている。うまくやったのは加役のせがれぐらいなものということになるんです。だから、奥方さまは、ここで金が手に入らないと、殿さまの手前、屋敷に居づらくなる。そうなんでしょう、御用人さん」

お浜はやんわりとすっぱぬいていく。

「うむ、まあ、そういうことになる」

「御用人さんは水くさいからいけない。さそりのお浜を仲間に入れたかったら、もっと本当のことを打ちあけてくれなくちゃ、あたしだって本気になれやしません」

7

「本当のことというと――」

ずるい長坂はまだそらっとぼけようとする。

「このくらいでやめておきますわ。あんまりあたしが深入りすると、御用人さんの迷惑になるかもしれませんからねえ」

お浜は器用な手つきできせるを取りあげる。なんでも知ってますよといいたげに、その目がわらっている。

「いってみてくれ、お浜。ここまでいっしょに仕事をしてくれれば、どの道ばれればおまえもおれも獄門首だ。おれも腹をきめようじゃねえか」

とうとう悪用人の地金を出してきたようだ。

「それならずばりといってみましょうか」

「うむ、そうしてみろ」

「もともと、こんどの話がうまくいったら、御用人さまはお信の方からなにかいいごほうびをもらうことになっていたんでしょう。それとも、そっちの取り引きはもうすんでいるのかしら」

「いや、あの女は利口者だからな、千両箱を見ないうちはうむといわぬ」

「そうなんでしょうねえ。御用人さんも男だから、それなら千両箱をつんでみせてやろうという気になった。だから、どうしてもここで三千両ほしい」

「まあ、そういうわけだ」

「ただそれだけじゃなさそうね。そのほうの取り引きがうまくすんだら、三島家の養子をきめておいて、じゃまな殿さまにねんねしてもらう。そうなれば、御用人さまは三島家の殿さまになったもおんなじですからね」

「どうだ、お浜、そう話がわかったら、今夜おれと柏屋へいっしょに行ってみぬか。手順はおれのほうできっとうまくつけてみせる。三千両なんかけちなことはやめて、南蛮組とおなじにこっちも一万両運び出してみようじゃないか」

長坂は悪党らしく、ぐいっと胸をそらせてみせる。

「五人組みはこっちでそろえるんですか」

「そうしてもらいたいな。例の市川佐二郎、岡田真兵衛、中垣兼助、植村八十助、本郷丑造、これで五人になるだろう」

「岡田と植村はだめなのよ、おとといの晩、大作にやられて、今ごろまだうなって寝ているわ」

「そうか。すると、後二人、だれかいるだろう」

「いるにゃいるけど、仕事は五千両ずつ山分けなんでしょうね」

「うむ、山分けでいい」

「今夜は柏屋へも加役組が詰めていると思うんだけれど、そのほうはどうします」

「なるほど、三千両の軍資金をもらっているんだから、加役組も忠義をつくす義理があるだろうしな」

「一人でもつかまると、みんな助からないことになりますからね」

「よし、これから堀留へ行って様子を見てくる。とにかく、頭数だけそろえておいてくれ。夕方までには知らせをよこすことにしよう」

長坂はそういうと、もうそそくさと立ちあが

っていた。

8

「姉御、いやすか」
長坂が出て行くと入れちがいのようにして、中間姿の喜久蔵が二階へあがってきた。この男はいまだに三島家の中間部屋へ入りこんでいるのである。
「喜久、どうしたの」
「御用人さんがいままでここへきていたんですってね」
「なんだ、おまえ御用人さんのお供できたんじゃないのかえ」
「なあに、あっしは今日は奥方のお供でさ」
「へえ、奥方がどこへ出かけたの」
「それがね、下谷のお里方のお寺へ墓まいりというんで屋敷を出たんですがね、途中から今戸へ行けっていうんでさ」
「今戸になにがあるんだろう」
「それがあるんでさ。なるほど、そういわれてみりゃもっともだとうなずけるところでござんしてね」
喜久蔵はにやにやわらいながら、しごき姿のこっちの胸のあたりをそれとなく目で見まわしている。いやな野郎だなとお浜は思いながら、
「もったいぶらずに、早くお話しよ」
と、わざとしごきの間へ左手をさしこんで、むっちりと豊かな乳房を浮きあがらせてやる。
「いけねえ、目の毒だ」
喜久蔵はいやみったらしくいそいで目をつぶりながら、
「駕籠はこっそり今戸の柏屋の寮へつきやしてね、加役の息子さんをたずねたんでさ」
と、意外なことをいう。
「へえ、あの竜平をねえ」
「なんでも竜平さんは一度美沙緒を嫁にくれといったことがあるんだそうで、こいつはあっしの考えなんだが、美沙緒はそっちへやるから大

作を眠らせてくれってたのみに行ったんじゃないでしょうかね」
「御用人さんはなんにもいっていなかったけれど、奥方が今日今戸へ行くのを知っているのかしら」
「そいつはたぶん知らねえんでしょうよ。今戸へ行くってのは途中でいい出したことなんですからね。その上、供の者にちゃんと口どめ料まで出ているんでさ」
「ふうむ」
お浜にはどうもふにおちないものがある。竜平が食えない男だということは、奥方もよく知っているはずである。それがわざわざ自分たちの弱みをさらけ出しに行く、あの利口な奥方がなにか成算がなくてそんなことをするはずはない。
「それからねえ、姉御、南蛮組の手下が二人いま加役組につかまって、柏屋の寮へ引っ立てられてきやしたぜ」
「本当かい、喜久――」
これはまたどきりとするような話で、さすがのお浜も思わずひざをのり出している。
「本当ですってさ。あっしはちゃんとこの目で見てきたんですからね」
喜久蔵の目は、うっかりくずれたお浜のひざ前あたりを見てたのしんでいるようだ。

9

「南蛮組の手下って、どんなやつがつかまったんだえ」
お浜はまゆをひそめながら聞く。
「そら、今戸の外れに船米っていう船宿がありまさ。おさわっていう色後家がやっている家、知ってるでしょう」
「船米なら知っているよ」
「あの色後家がどうも怪しいってんでね、加役はやっぱりうまいところへ目をつけるもんですね、昨日から手下の小者を張りこませておいた

んだって話なんです」
「ふうむ」
「すると、案の定、今朝になって深編み笠をかぶった浪人者が一人、つり道具を持って船米へ入った。これがまもなく忠吉っていう船頭に舟を仕立てさせてつりに出かけたんだが、なんとこれが替え玉で、その浪人者は後へ残り、朝っぱらから二階へ布団を敷いていちゃついているって始末だ」
喜久蔵はものほしそうな目つきをしてにやにやわらい出す。
「でたらめをおいいでない。だれもそんなところのぞけるはずはないじゃないか」
「ところが、すっぽん安っていう張りこみの男がのぞきに行ったんでさ。その罰で安はとうがらしの目つぶしをくらって半日目があけられなかった。それを聞いて、伊藤権太夫って与力頭が捕り手をつれて船米へ押しかけたんだが、もうおさわも浪人者もずらかった後だった。けれど、そのうちにはおさわか忠吉か辰造、だれかが帰ってくるだろうってんで、張りこみをつづけていると、まず浪人者の替え玉になった辰造が浅草のほうから帰ってきた。こいつをつかまえて柏屋の寮へ送りこむとまもなく、こんどはおさわの弟の忠吉が空の舟をこいで帰ってきた。こいつもちょっとこいといって柏屋の寮へつれてきた。あっしはその時、市川さんと柏屋の寮の裏口のところで立ち話をしていたんでさ」
「だって、その浪人者が南蛮組の者だかなんだか、まだわかりゃしないんだろう」
「なあに、市川さんの話じゃ、その浪人者のかっこうは、このあいだ柏屋の近くでつりをしながら大作と話しこんでいた南蛮太郎にちがいないっていうんでさ」
「そういえば、市川さんそんなことをいっていたねえ」
「そこで、忠吉と辰とを伊藤のだんなが一通り責めてみたが、知らぬ存ぜぬの一点張りなんだ

そうで、あいにく加役のせがれどのは屋敷へ帰って留守だ、竜平さんが帰ってくるまで蔵へほうりこんでおけ、若だんなが帰ってきたら拷問にかけて口を割らせてやろうということになったんだそうです」
「じゃ、そのおさわが帰ってくれば、やっぱりつかまえるんだね」
「つかまえますともさ。ちゃんと張りこみがついている上に、ひょっとすると南蛮組が出てくるかもしれないっていうんで、柏屋の寮へは市川さんなんかも用心棒にたのまれて入りこんでいるくらいなんでさ」
喜久蔵は得意げな顔をしていうのである。

10

「本当に南蛮組が今夜出てくるとおもしろくなるねえ、喜久」
そういうお浜は、我ながら好奇心がおさえきれない気持ちである。
「けど、南蛮組はみんな短筒を持っているっていいやすからね。いざとなると、加役組の連中はおもしろいどころか、きっとびくびくものでしょうよ」
「そうだ、加役は今夜きっと組下をみんな今戸へ集めるかもしれないな。——喜久、おまえこれから屋敷へ帰るのかえ」
「なんかこっちに用がありやすか」
「すまないけど、夕方まで柏屋の寮へ加役がどのくらい人数を集めるか見張っていてくれないか」
「それがどんな役に立つんです、姉御」
「そんなことは夕方になればわかるよ。寮を見張るのはいやかえ」
「どういたしやして。あっしはこれでも姉御の一の子分でござんすからね」
「じゃ、たのんだよ」
喜久蔵はにやりと追従わらいをうかべる。
「へい」

ちょいとなにかいいたそうだったが、お浜がもう強い顔になっているので、そのまま喜久蔵は階下へおりていく。
その足音が階段をおりきってしまうと、
「金子さん、もう出てきてもいいわ」
と、お浜は押入のほうへいった。
「やれ、助かった」
押入から出てきた金子は、邪気のない顔をしてわらっている。
「おもしろい話がたくさん聞けたでしょう」
「うむ、おかげでな」
「あたしって女に愛想がつきたら、黙って帰ってもいいのよ」
お浜は男の心を試すようにじっと顔色を見てやる。
「そうか――。おれはおまえの体のにおいをすっかりかいじまったような気がするな」
「なんですって」
「押入の中の布団はおまえが毎晩寝てる布団なんだろう」
「なにいってんですよ、いやらしい」
さすがにお浜は顔が少し赤くなってくる。
「おまえな、長坂なんかの手にのるとあぶないぞ」
「どうしてさ」
「あいつは悪党ぶっているが、あんまり利口じゃなさそうだ。だいいち、柏屋惣兵衛がおなじような手を二度と食うものか」
「あら、金子さんは柏屋を知ってるの」
「知ってるとも――。自慢じゃないが、おれの家は柏屋から金を借りたんでつぶれたようなもんだ」
「まあ――。じゃ、金子さんは惣兵衛にうらみがあるはずね」
「なあに、おれはあんな狒々おやじをうらむほどけちな男じゃない。もしうらむ気があれば、あんなやつとっくに切っている」
金子の目はおだやかにわらっているようだ。

11

「あたしはねえ、金子さん、負け惜しみや強がりをいう男は大きらいさ。口をきくのもいやになってくる」
お浜は金子が負け惜しみをいっているとしか思えないのだ。
「そうか――。おれも小利口ぶって失敗ばかりしている人間はあんまり好きじゃない」
「おや、変なことをいうのねえ、金子さん。あたしがいつ小利口ぶったっていうんです」
勝ち気なお浜は思わずかっとなってくる。
「いや、別におまえのことをいってるんじゃないが、長坂重蔵って男はねらった美沙緒を二度まで人に横取りされた上、せっかく手に入れた三千両まで人に持っていかれている。あんまり利口なほうじゃないようだ」
「その度に南蛮組がじゃまをするんだからしようがないじゃありませんか」
「そういう仕事にじゃまはつきものだ。はじめからそれを計算に入れておかないのは、頭が足りないんだ。今夜だって、たぶん成功はおぼつかないな」
「じゃ、金子さんならどうします。ぜひうかがわせていただきたいわ」
お浜は意地になって突っかかってきた。
「おまえ、三島家の奥方が今日わざわざ加役のせがれに会いにきたのは、大作と美沙緒の口をふさいでもらうためだろうと考えている組じゃないのか」
「それよりほかに、なにか考えようがあるんですか」
「まあ、そうぷんぷんしないで、よく考えてみろよ。奥方が大作や美沙緒の口が怖いというんなら、長坂やお浜の口もおなじように怖いことになりはしないか」
「長坂のほうは取り引きでふさげます」
「おれにいわせれば、だいいちそれからしてお

かしいな」
「どうしてさ、金子さん」
「おれなら先へ取り引きのほうをすませてから仕事にかかるな。仕事がうまくいってからさあ取り引きというんじゃ、女はいつこっちを裏切るかわからない。もともと愛情のない取り引きなんだから、金をつかんでから一服盛るという手だってあるだろう」
「そうかしら——」
いわばお浜はその手で今まで男たちをうまく使ってきたようなものなのだから、そういわれるとなるほどとうなずかないわけにはいかない。
「いいか、お浜、奥方がその手で加役のせがれに無理をたのみに行くとすれば、もともと無理なことをたのみに行くんだから、先に取り引きを迫られた場合、奥方はいやとはいえない。無論、奥方はそれを覚悟して竜平に会いに行ったとおれは考える」
「そうかしら——」
「つまり、色じかけというやつだ。竜平がうまくその手にのったとすれば、いや、竜平はおそらくよろこんでその手にのっている。そこで、奥方は安心して、じゃまになる大作、美沙緒、長坂、ついでにお浜まで片づけてもらいたいとたのんで帰ったはずだ」

12

「畜生、本当かしら——」
お浜は怒った目をぎらぎらさせながら、
「だって、金子さん、あたしたちを片づけたって一文にもなりゃしませんよ。奥方は本当は金がほしいんです。金のほうはどうなるんです」
と突っこんでくる。
「奥方は長坂から、あの寮のどこかに三千両かくしてあると聞いている」
「さあ、それはどうだかなあ。あたしもずいぶんさがしたけれど、三千両なんてどこからも出

てこなかったもの」
「そっちの金が見つかる間、竜平がこの間の軍資金の中から千両ぐらい立てかえておくさ。それの用があるから、竜平はいま神保町の屋敷へ帰っているんだろうよ」
「畜生——」
お浜は悔しくてたまらない顔をもうかくしきれなくなってきたようだ。
「金子さん、あたしは今夜柏屋から一万両もらってこなくちゃどうしても気がすまない。その上で、竜平とお信をきっと眠らせてやる。あんなやつらに甘く見られてたまるもんか。金子さんも今夜の五人組みの中へ入って、あたしにいい知恵を貸しておくれよ」
「そのかわり、お浜、おまえここで今おれの女房になるか」
金子はわらいながらずばりと切り出す。
あっというように、お浜はさすがに目をみはって、
——この男は本気なのかしら。
と、まじまじと男の顔を見すえているうちに、その目の中になにかたくましい気魄のようなもののあるのをはっきりと感じてきた。
「あんたは、あんたは取り引きのほうを先にしろっていうの」
「うむ、おなじ取り引きでも、おれのは女房になりますっていう約束が必要なんだ」
「あんたにそんな力があるかしら。あたしのほうから女房になりたくなるようなそんな力があるんなら、一度見せてくれないかな」
もしそれほどだのもしい男なら、自分の体をやってもいいような気が胸のどこかでうずき出してきたのだ。
「お浜、おまえ、加役の伊藤権太夫と口をきいたことがあるか」
「権太夫とはないわ」
「しかし、権太夫はおまえが竜平となにか約束のあることは知っているんだろう」

「そりゃ知っています」
「どうだ、これからわしを権太夫の前へつれていってみないか」
「それで、どうしようっていうの」
「つまりだな、南蛮組が出るそうだから、この人をつれて加勢にきましたといえばいいんだ。後のことはおれが引きうける」
「一体、そんなことがなんの役に立つの」
「なんだ、おまえは加役組の様子をさぐってその裏をかいてやろうという気はないのか」
「あら、そうだったわ」
お浜は思わず男の顔を見なおしている。

13

時刻はすでに八ツ（二時）をすぎてはいるが、日が暮れるまでにはまだ二刻（ふたとき）（四時間）ほどある。
お浜はきちんと帯をしめていつもの腰元姿になり、金子といっしょに家を出た。
「この人といっしょに柏屋の寮へ行ってきますからね。もしあたしに用のある者がきたら待たせておいておくれ、すぐ帰ってくるんだから」
出がけに店番の竹次にそういうと、
「へえ、行ってらっしゃいまし」
竹次は神妙に頭をさげていたが、腹の中ではどう思っているかわかりゃしないと、お浜はちょっとくすぐったかった。
——そんなことを考えるだけ、あたしはどうかしているんだ。
お浜はこれまでどんな男と二人きりになっても、こっちに女だという気持ちが少しもなかったから、人に気兼ねのようなものを感じたことは一度もなかった。それが、今日だけは、ふっと人の目がまぶしい。正直にいえば、さっきから金子にだけは女心を感じているからだ。
どうしてこんな気になったんだろうと、お浜は自分でもふしぎである。
十七の時、若い主人石川周二郎に初恋を感じ

たのは事実である。行儀のいい若い主人は、それをちゃんと知っていて、自分も憎からず思っていたくせに、手ひとつふれようとはせず、どうしようかと迷っていたようだ。
どっちかといえばそういう引っこみ思案のほうだったから、しまいには三十女の継母の火のような邪恋にまきこまれて身をあやまり、とうとう自殺してしまったのだ。
その若い主人が自殺した毒蛇（どくじゃ）の指輪をその場でうまく盗みとったお浜は、いつか人に知れないように、恋敵の継母を殺してやる考えだったが、そのうちに中間に手ごめにされそうになって毒蛇の指輪で殺してしまった。
もう屋敷にいられないから、恋敵の女主人のほうはあきらめて、そのまま屋敷を飛び出してしまったが、実はその中間は若い主人が自殺してまもなく女主人が寝間へ引き入れているのを知っていたから、半分ぐらいはうらみを晴らしたつもりでいたのだ。
その後今日まで、お浜は男はきたないものときめて、逆に男をあごで使うような荒っぽい女になっていた。毒蛇の指輪さえあれば、男の腕力など少しも怖くはないのである。
それが、自分のほうから金子にだけはなんとなく心をひかれていく。初恋の男の友達という気持ちがあるからだろうか。
いや、初恋の男は気が弱かったのに、この男はひどくずぶといところがある。その強さに引きずられているのかもしれない。
——その勝負は、これから柏屋の寮へ行ってからきまるのだ。
一体、この男は柏屋の寮へ行ってどんなたのもしいところを見せてくれようというのか、一つ間違えば二人とも加役組に縛られてしまうかもしれない危険があるだけに、さそりのお浜にはかえってそういう火遊びが胸がわくわくするほど興奮をさそうのである。

14

「金子さん、あんた本当に大丈夫なんだろうね」
今戸橋をわたって川っぷちの道へ出ながら、お浜はちょいと心配になってくる。
「なにが――」
「なにがって、権太夫ってやつは加役のせがれとちがって海千山千らしいから、うっかりするとこっちが鴨にされちまいそうだもの」
「まあ心配するな。鴨にされるか鴨にするかが男の勝負なんだ。権太夫に鴨にされるようじゃ、お浜の亭主になる資格はないからな」
「そりゃそうだけれど、あたしはあんたになるべく鴨なんかになってもらいたくないのよ」
思わず本音が出て、お浜はなんとなく胸が甘ったるくうずいてくる。
「まあ見ていろよ、金子さんはこれでちょいと男らしいところがあるんだ」
金子は平気でわらっている。
おなじ浪人はしていても、市川佐二郎や岡田真兵衛などと違って、こっちはちゃんと三百石取りの旗本の殿さまだったという風格がどこかに残っているから、いっしょに歩いていてもお浜は妙に鼻が高い。
――いやだなあ、あたしはこの人にだんだんのぼせてくるんじゃないかしら。
お浜はふっとそう気がついて、わざと怖い顔を作ってみたりしている。
やがて柏屋の裏木戸の前へかかると、そこの桟橋のあたりに顔見知りの手先がひとりぼんやりと立って、そのくせ油断のない目を八方へ働かせているようだ。
「親方、あたし加役の若だんなにお目にかかりたいんですけれど、おいでになりますかしら」
お浜はそばへ行って小声で聞いてみた。
「ああ、お浜さんか――。若だんなはいま留守のようだぜ」
中年の手先はじろりと金子のほうを見ながらいう。
「じゃ、伊藤さまでもいいんですけれど、お目にかかれないかしら」
「なにか急用かね」
「ええ、ぜひお耳に入れておきたいことがあるんです」
「そうか――。ちょいと待ってくんな」
お浜は竜平に一、二度会っている女だし、地獄長屋の浪人組は現に加役組の下について働いているのだから、独断でことわるわけにもいかない。その男はすぐ木戸の中へ取り次いでくれた。
ほどなくその木戸があいて顔を出したのは、若い同心の若林良平である。
「お浜、伊藤さまがお目にかかるそうだが、その連れの御仁は――」
「これは金子新五郎さんとおっしゃって、あたしの元のお主筋にあたる人なんです。怪しい人じゃありません。正直にいえば、あたしのいい人、――ごめんなさい、若林さん」
お浜はずばりといって、ほんのり目のふちを赤くする。
若林はあきれたようにお浜と金子の顔を見くらべていた。

15

若林同心について寮の庭へ入っていくと、今日はさすがに加役の組下が要所要所に厳重に配置されているようだ。
地獄長屋の浪人どもの姿はどこにも一人も見えない。これはたぶん外まわりの警戒のほうへまわされているのだろう。
するとここで万一のことがあっても、こっちは金子と二人きりということになるのだから、お浜はちょいと心細い。
伊藤権太夫は例の書院の東の廊下まで出て二人を待ちうけていた。
「御筆頭、お浜をつれてまいりました」
若林は権太夫にそう告げると、さっさと自分

の持ち場のほうへ引きかえしていく。
「お浜、竜平どのになにか用だそうだな」
口をきくのははじめてだが、顔見知りだから権太夫は如才なく声をかけてくれる。
「はい。若だんなはお留守なんだそうでございますね」
庭先へ立ったお浜はつつましく小腰をかがめながら聞く。
「うむ。——その連れの御仁はどなたかな」
役目柄、権太夫はなかなか用心深い。
「この方は、もとあたしが御奉公していました小石川のほうのお旗本で、金子新五郎さまと申します。お道楽がすぎてお家がつぶれたものですから、昔なじみであたしのところへなにか仕事はないかとたずねてまいりました。御主人じゃ使いにくいと申しあげましたら、それじゃ今日から子分になるというものですから——」
お浜がわらいながら臆面もなくそんなことまで披露すると、
「浪人金子新五郎です。お浜同様によろしくお願いいたします」
と、金子は人のいい顔をしておじぎをする。
「さようか。昔なじみというと、お手前はお浜の手ぐらいは握った仲と見てもよいようだな」
権太夫は多少退屈をしているらしく、ついからかい顔になる。
「はあ、昔からこの姉御はきかない気性で、思いきり腕をつねられて紫色のあざがしばらく消えなかったことがあります」
「ばかばっかし——」
お浜がじろりと男をにらみながら、そのくせ体中なんとなく媚のようなものがかくしきれないようだ。
「なかなかおもしろい。金子さん、こんどもう一度姉御の手を握ってみなさい。こんどは脈があるかもしれぬでな」
「だめなんです。あたしは昔から男はきらいなんですから」

男にからかわれるのはいまだに好きでないほうだから、お浜は急に冷たい顔になる。
「そうか、姉御はどうもそうらしいな。——それで、竜平どのにどんな用かな。若だんなはいまちょいと屋敷へ帰っておるのだが」
「なかなかおもどりになりませんの」
お浜はなに食わぬ顔をして聞く。

16

「それで、お浜、おまえの用というのは、若だんなでなければだめなのか」
権太夫があらためて聞く。
「いいえ、伊藤さまでもよろしいんです」
「そうか——。どんな用なんだ」
「一つは、この人をなにかに使ってもらいたいんです。昔はとにかく、いまは日当をかせがないと暮らしていけないんですから、浪人組並みに使ってもらえませんかしら。剣術のほうは一通りはできるんですって」
「そうか、人手はこっちはいくらでもほしいにはほしいが、——金子うじ一人ぐらい、昔のよしみでおまえが養ってあげればいいじゃないか」
「ところが、そんなのあたしきらいなんです。女の悪ひもになって平気でいるような男、顔を見ただけでも虫酸が走るほうでござんしてねえ」
「こりゃなかなか手痛い——」
権太夫は金子のほうを見て苦わらいをしながら、
「それで、もう一つの用ってのは」
と、後をうながす。
「これは余計なお節介なんですが、あたしは南蛮組がはじめてここへ押しこんできた晩ここにいて、そのやり口をよく知っているんです。だから、その話をしてあげてもいいと思ったのと、もう一つは、大作たちが江戸を立つのはこの二、三日のうちだと思うんです。大木戸の見張りのほうは大丈夫なのかどうか、それを聞いておき

たかったんです」

「なるほど——」

権太夫はきびしい顔を取りもどしてじっとお浜のほうを見ている。大作たちのほうの問題は、初対面の金子がそばにいるので、加役組としてはうっかり口にするわけにはいかないだろう。

「よし、こうしよう。とにかく、金子うじはこの寮の裏の川っぷちで働いてもらう。裏手はいまの若林良平が指揮に当たっているから、とりあえずその組下へ入ってもらいたい。それでいいか、金子うじ」

「結構です」

「後のことは、もう若だんなももどってくるころだから、竜平どのと直接話してもらう。これでどうだ、お浜」

「結構ですわ。あたしはこの人が働かせてもらいさえすればそれでいいんで、後のことはどっちだってかまわないんです。うちの浪人どもは、今どこにいるんでしょうね、伊藤さま」

「あの連中は小宮松吉の組下へ加えられて、船米のほうを受け持っているはずだ」

要するに、浪人組はみんな外まわりに使われていることになるらしい。

「じゃ、伊藤さま、あたしたちは裏の川っぷちへ行っています」

お浜はそうあいさつをして裏のほうへ行きかけた時、例の問題の外蔵のほうから、柏屋の番頭に化けてきたことのある同心馬場庄之助が、あいかわらず番頭庄吉の姿でふらりとこっちへ出てきた。

17

「あら、柏屋の庄どん——」

お浜は庄吉を見かけるなりなれなれしくそっちへ走り寄っていった。

「やあ、平野屋のねえさんでしたね」

庄吉は向こうの権太夫のほうをちらっと見ながら当惑したように思わず苦わらいをする。い

まさら、実はおれは加役組の同心だとはいえない理由が庄吉にはあるのだ。

「庄どん、あたしは大変なことを耳にしているんです。ちょっとこっちへ顔をかしてくれない」

「本当ですか」

「あたしがあんたにうそをいったって一文の得にもならないでしょ。だいいち、あたしはあんたから五十両という前金を取っておきながら、その仕事がうまくいかなかった。だから、ここで少しでもその埋めあわせをしてあげたいと思っているんです」

「わかりました。ちょっと伊藤さまにごあいさつをしてきますから、ここで待っていてください」

庄吉はそんなうまいことをいって、権太夫のいる廊下のほうへ進んでいく。

お浜はわざとそっちは見ずに、

「金子さん、あたしのやりかたはこれでいいの」

と、そっと金子に聞いた。

「うむ、おまえのいいようにやってくれりゃいいんだ」

「それで、あんたはいつあたしにいいところを見せてくれるんです」

「まあ、そうせくな。いまにわかる」

金子はのんびりとわらっている。

「さあ、ねえさん、その大変なことというのを聞かせてください」

庄吉は伊藤からゆるしを得てきたらしく、お浜のそばへ引きかえしてきてうながす。

「内緒の話なんだから、こっちへきてくださいよ」

お浜は庄吉のたもとをつかんで引きよせ、外蔵のある裏のほうへ引っぱっていく。

「あらあら、ここにも加役組の人たちが詰めているのね」

問題の外蔵の前には手先四人が詰め、裏にも二人見張りが立っているようだ。

「ここなら大丈夫です。だれにも聞こえやしま

せん」
「そうかしら――。番頭さんはどうしてこんなところへきたの」
「なんだか知りませんが、南蛮組の手下が二人つかまったとかで、その首実検をたのまれたんです」
　庄吉はうまく切りぬける。
「それで、どうだった。やっぱり南蛮組の手下だったんですか」
「手前にははっきりしませんが、若い船頭が二人あそこへ入れられているんですがねえ」
「あたしならわかるかもしれないな。この間、南蛮組のやつらとここでやりあっているんだから」
　お浜の目にははっきり敵意のようなものがうかんできた。

18

「そうでしたねえ。姉御は南蛮組に縁の深いほうだった」
　庄吉はお浜の顔を見なおしている。
「あんまりうれしいことじゃありませんのよ」
「じゃ、あいつらを知っているかどうか、ちょいと首実検をしてみてください」
　庄吉は先に立って土蔵のほうへ行き、見張りの手先になにか耳うちをする。
　お浜が臆面もなく蔵の前へ立つと、手先の一人が観音びらきの重い戸を左右にあけて、
「忠吉、辰造、おめえたちに会いたいって人がきた。こっちへ面を出せ」
と、中へどなった。
　暗い蔵の中で、両手を縛られたままふてくされて寝ころんでいた二人のうち、忠吉がむくりと起きあがってこっちを向く。
　こっちは明るい日ざしの中にいて格子戸の中をのぞくのだからすぐには顔形がはっきりしないが、中からは外の人間が一目でわかるらしく、忠吉はなあんだお浜かというような顔をした。

　次の瞬間、そのお浜の肩越しに思いもかけない金子の顔を見てあっと目をみはったようだが、これはとっさに金子が目で合図をしたので、たちまちもとのふてくされた顔にかえり、
「平野屋の姉御、おれたちは見せ物じゃねえんだから、ひやかしはやめてくんな」
と、そっぽを向いてしまう。
「ひやかしじゃないんだよ。おまえさんたちがどうしてこんなことになったんだろうと思ってさ。きっとなにかの間違いなんだろうから、後でなんでも正直にいってしまうといいわ」
　お浜としては珍しくやさしい口をきく。
「そのとおりだ。正直な人間には必ず天の加護があるもんだ。やけになっちゃいけないよ」
　金子が気の毒そうにいう。
「もうわかったでしょうな。あんまり口をきいちゃいけやせん」
　手先は冷淡にいって、たちまちぱたんと蔵の戸をしめてしまう。
「どうだろう、姉御。あの船頭たちは、この間、南蛮組を舟にのせてこいでいたやつらとちがうだろうか」
　庄吉が元の庭のほうへ引きかえしながらさっそく聞く。
「さあ、どうなんかしら。あれは船米さんとこの船頭さんたちでしょ」
「そうなんだ」
「庄さんは、あの晩、ほら、柏屋さんが一万両持っていかれた時の船頭の顔を見たの」
「いや、わたしはあの時、あいにくお店にいなかったんでねえ」
　庄吉は苦わらいをしている。
「それで、姉御が大変な話だっていうのはどんなことなんです」
「ああ、そうそう、これは本当に内緒なんだけれど、柏屋さんはまだねらわれているって話を聞いたのよ。用心のほうはどうなのかしら」
　もっともらしくいい出すお浜である。

19

「どんなやつが柏屋をねらっているんです、ねえさん」
　庄吉はひそかに目を光らせているようだ。
「偽五人組みはまだいくらだっているんです。南蛮組が柏屋さんから一万両持っていったって話は、蛇の道はへびで、もう方々へ知れていますからね。加役組の人たちは毎晩何人かお店へ詰めていてくれるんでしょうね、番頭さん」
「そりゃちゃんとお願いしてあります」
「それならいいけれど、柏屋さんは店のほうは厳重だけど、奥のだんなの居間のほうは不用心だって評判ですよ。番頭さんはよく知ってるんでしょう」
　お浜は意味ありげににやりとわらってみせる。
「それは承知しています」
「もう一つ心配なのはねえ、番頭さん、あたしは番頭さんから五十両前金をもらって、この間うまく大作のやつをここでつかまえたのに、加役さんがつまらない手配りなんかするもんだからしくじってしまったんです。けど、どっちみち大作のほうは二、三日中にはかたづきます。——あんただからいうんだけれど、そっちがかたづくとこんどはこっちへ火がつく。わかる、番頭さん」
「というと、どんなことなんでしょうな」
　庄吉はそらっとぼけて小首をかしげてみせるのだ。
「いまにわかるわ。あたしは前金をもらっているから、そのお礼に、お気をつけなさいとわざわざ知らせてあげるんです。じゃ、さよなら」
　お浜はていねいにおじぎをして、
「金子さん、行きましょう」
と、金子をうながして裏口のほうへ歩き出す。
「ねえさんはこれからどこへ行くんです」
「あたしたちは裏の川っぷちの見張りをたのま

れているのよ。この人も働かなくちゃ食えないというんで、あたしが伊藤さんにお願いして仕事をもらってやったんです」
「そりゃ大変ですねえ。南蛮組はみんな短筒を持っているっていうから、気をつけたほうがようござんすよ」
「どうもありがとう」
　なにをいってやがるんだえきつねめと、お浜は腹の中でせせらわらいながら裏木戸のほうへ出てきた。
　そこにはさっきの若林同心が手先たちをしたがえて油断なく警戒にあたっていた。
「若林さん、あたしたちは外まわりの見張りをすることになりましたから、どうぞよろしく」
「そうか——。それは御苦労だな。よろしくたのみます」
　若林は金子のほうへ軽く会釈をしていた。
　二人はそのまま木戸から川っぷちの道へ出たが、考えてみると金子はただ自分についてうっそりと歩いていただけで、男らしいことなどなに一つしていないのである。

20

「金子さん、あんたどこであたしにいいところを見せてくれるの」
　ぶらぶらと北隣のほうへ歩いていく金子と肩をならべながら、お浜はわざとなじるように聞く。
「まあ、そうせくなよ。姉御があんまりいい腕すぎるんで、ちょいとおれの出る幕がないんだ」
　金子はのんびりとわらっている。
「それ、あたしがでしゃばりっていうことなの」
「いや、ほめているんだ。まったくおまえはいい度胸を持っている」
「そんなうれしがらせをいったって、あたしはその手には乗りませんからね」
「よし、わかったわかった」

金子は軽くうけ流して、隣の丸屋の寮の裏木戸をあけて入っていこうとする。
「あら、そんなところへ入ってどうしようっていうのさ」
「ここも空き屋敷なんだろう」
「ここにはびっこの寮番がいるって話よ」
「そうか。じゃ、寮番にたのんでしばらくここの座敷を借りることにしよう」
「それで、どうしようっていうの」
「お浜を手ごめにして、おれの強いところを見せてやろうと思ってな」
「あんたはあたしが毒蛇の指輪を持ってるっての知らないの」
「知ってるよ。それをまずこれからうまくだまして取りあげる」
「ばかばっかし――」
冗談にもそんな話が出るとむかむかっとなっていきなり相手を殺したくなるお浜だが、今日は一向に腹が立たない。
――あたしも少し焼きがまわってきたんじゃないかしら。
お浜は自分でもなんだかくすぐったい気持ちである。
金子は例の農家造りの母屋の廊下の前を通りすぎてずんずん表門のわきの寮番小屋のほうへ行く。
「あんたは本当にあたしを手ごめにする気なんだね」
「いやか、お浜」
「あたりまえじゃありませんか。さそりの姉御をあんまりばかにすると、後で後悔するわよ」
「その後悔がな、ぜひしてみたいんだ」
「本当なの、金子さん」
「本当だとも――。姉御はまだ男を知らないんだっていうから、ぜひおれが女にしてみてやろうと思ってな」
金子はそんなことをいいながら寮番小屋の前へ立つ。

――どうする気なんだよう、お浜。
お浜は自分でもじれったいほどまだ決心がつかない。というより、この男にならどうされてもいいような気持ちが半分ぐらい胸の中で甘くうずいているのである。

火と水

1

こっちの声を聞きつけたか、金子が寮番小屋の前へ立つと、ふいにそこの出入り口の雨戸ががらりと中からあいて、九郎助おやじが顔を出した。
「なんか用かね」
おやじはちらっとお浜のほうを見て、わざと仏頂面をしながら、とがめるように金子に聞く。
「すまんがなあ、おやじ、あの母屋は空いているんだろう」
「それがどうしたんだね」
「ほんのしばらく借りるわけにいかないかなあ」
「だんなは隣に捕り物があったのを知っていなさるんかね」
「うむ、なんだかそんな話だな」
「それなら、ここへも加役組がいまに張りこみにくるのわかっているかね」
「わしもたぶんそうだろうとは思うが、まさか家の中までは入りこまないだろう。きても精々隣との塀ぎわを見張るぐらいのもんだ」
「けど、万一ってことがある」
「なあに、この姉御は加役の連中に顔なじみがあるから、その時はその時でなんとでもなる」
「そうかね。そんなら勝手に使うがいい。そのかわり、おれはそんなかかりあいになるのは真っ平だから、黙って入りこんだんだということにしておいてもらいたいね」
「承知した。じゃ、黙って入りこむことにする」

金子がそういうと、おやじはもうぴしゃりと雨戸をしめきっていた。

「さあ、これでいい。行こう、お浜」

「あたしをどうしようっていうのよう、金子さん」

ここまでくれば男の気持ちはもうはっきりわかるので、お浜はちょっと当惑せずにはいられない。

「いやか、お浜」

「いやじゃないけど――、約束が違うんだもの」

平気でわらっている金子の顔を見ながら、なんというずぶとい男なんだろうと、お浜はただあきれるばかりだ。

「安心しろよ、お浜。おれは約束を破るような男じゃない」

「どうだかわかるもんですか」

そのくせ、男が母屋の戸をあけて農家造りの納戸の土間へ入っていくうしろから、引きつけられるように自分も入っているお浜なのである。

「その戸をしめろよ」

金子は横柄にいいつける。

お浜は黙っていま入った入り口の板戸をしめる。広い土間は薄暗くなって、空き家だから妙にほこりくさいにおいが鼻につく。

上がり框（かまち）から十畳ばかりの座敷へあがっていった金子は、火のない大きな炉端へ行って、座って、

「あがらないのか、お浜」

と、わらいながらのんびりと催促をする。

2

二人っきりしかいないがらんとした空き家である。男のそばへあがっていけば、男はきっといきなり肩を抱いて体を求めてくるのはわかりきっている。

帯の間にかくしてきた毒蛇（どくじゃ）の指輪をそっとはめてしまえばそんなことにはびくともしないお

浜なのだが、今日は思いきってその指輪をはめる気にどうしてもなれない。

それだけに、男のそばへ行くのは怖いし、いつになくためらいながら、お浜は胸がどきどきしてくる。柄にもなく顔が赤くなっているにちがいない。

「どうしたんだ、お浜、おかしなやつだなあ」

金子はふだんの顔で微笑している。

こんな時の男の顔はたいていけだものじみた濁った目になっているのが普通なのだ。

どう見ても、金子にはそんな気配さえない。

「いやだ、あたし――」

「どうして」

「恥ずかしいんだもの」

事実、二十二というお浜の熟れた女体は火のように燃えている。理性ではもうどうごまかしようもないのだ。

「ばかだなあ。おれはなんにもしないといっているじゃないか」

「だって、手ごめにされるのなんかいやなんだもの」

「あれは冗談だ。おれはおまえをちゃんと納得させてからでなけりゃなんにもしやあしない」

「本当――」

「本当さ。おれはおまえを女房にする気でいるんだから、こそこそかくれていやらしいまねなんかするもんか」

「じゃ、あんたは、あんたは、本当にあたしといっしょに獄門首になってくれる気なの」

「疑い深いんだなあ。うそだと思ったら、あの指輪をはめてくれればいいじゃないか」

「そうじゃないのよう。本当に夫婦になってくれるかって聞いているんだわ」

「うむ、なる。おまえのほうこそ、その時になっていやだなんていったってだめだぜ」

「いいわ、あたしもうどうなってもかまやしない」

かあっと血のたぎってきたお浜は、座敷へあ

がるなりつかつかと男のそばへ行って、我にもなく男の左の腕を両手で胸へ抱きしめていた。火のような恋心が一度に表へ吹き出してきたのである。

「お浜、その前に見せてやるものがあるんだ」

金子はあいている右手で炉の中の灰を両側へかきのけはじめる。

「どうするの、あんた」

思わず炉の中を見ていると、やがて千両箱の一部がはっきりと目に入ってきた。

「あっ」

「もうわかったろう」

「じゃ、あんたは、あんたは――」

お浜はまだしっかり男の左腕を抱きしめたまま、茫然と男を見なおしている。

3

「お浜、ほしければこれはおまえにやる。ただし、ここには一箱しかないが、後で取りにくるがいい」

金子は炉の灰を元のようにならして手を手ぬぐいで丹念にふきながらいう。

「それで、それで、あんたはどうするのさ」

「おれはこれから日の暮れるのを待って、あの二人を助けに行く」

「一人でやるの」

「うむ、一人でたくさんだ。もっとも、だれか心配してくるかもしれないが、それは当てにしちゃいない」

「その前に、竜平が帰ってくると、あの二人きっと拷問にかけられるわ。もし、もしあの二人に白状されちまったらどうするの」

「そんな意気地のない二人じゃないよ。だから、わしが顔を見せに行ってやったんだ。二人はあれで安心して、どんなことがあったって夜まではがんばるさ。それに、竜平はたぶん日が暮れるまでは帰ってこないだろう」

「どうして――」

「竜平がどうしてもつかまえたいのは南蛮組じゃなくて、大作と美沙緒のほうだ。だいいち、竜平はお信に会いに行ったんだろうから、お信のほうでそうあっさりは放さないだろう」

「だって、二人は今朝会って、もういい仲になっているんでしょう」

「無論そうだろう。だから、竜平は女の後を追いかけていきたくなったんだ」

「そんなに何度も――いやらしいなあ」

お浜は自分でいって我ながら顔が赤くなってくる。

「おまえはまだ男を知らないから、その辺の男と女の気持ちはわからない。まあ、おれの女房になってみるんだな。おまえはおれが殺したくなるかもしれないぞ」

「いやっ、いやっ、そんなことといっちゃ。じゃ、あんたはあの晩あたしの前へきたうちの一人なのね」

お浜はいろいろなことが一度にききたくなってくる。

「うむ、あの晩は四郎さんと二人だった」

「じゃ、あんたは五郎さんのほうなの」

「おれは金子新五郎、昔からおまえ知ってるじゃないか」

金子は平気でわらっている。

これがあの怪盗南蛮組の一人とはどうしても思えない。

「憎らしいなあ、あんたたちは散々あたしたちをなぶりものにして――悔しい、あたし」

お浜はついかっとなって、いきなり両手で金子の胸倉を取りに行く。

「これこれ、そんなことをすると女房にしちまうぞ」

「いやなこった。あたしはこれから加役のところへ駆けこんでやる」

「いいとも――。すぐ行ってこい」

金子は目でわらいながらゆっくりとお浜の肩を両手で抱きよせ、身もがきする女のくちびる

をすっと口でおさえている。

4

お浜は、はじめて男に口を吸われた時から、まるで自分の体中の力を吸いとられてしまったように体の自由を失っていた。

男は軽々とお浜を抱きあげて、次の間のふすまをあけてそっちへ運んでいく。

「どうするの、あんた」

胸が切ないほど甘く波打って、舌までしびれたようにもつれている。

「おまえをおれの女房にしてしまうんだよ」

次の間も十畳ほどのがらんとしてなんにもない薄暗い座敷だった。

「だれも来ないかしら」

そんなことを聞いたくらいだから、男がこれから自分の体をどうしようとしているかはお浜も知っていた。

が、男にそんなことをされるのははじめてなので、それが実際はどんなものなのか、怖いような、恥ずかしいような、それでいて体中の血が火のように燃えながらそれを待っている。そんなうっとりとした気持ちなのだ。

「だれも来やあしないよ」

男はそういって、一度そこへ女を座らせると、固い帯だけを解いてとらせ、ふたたび強く肩を抱いて口をかさねてきた。

それからの男の愛撫は、お浜はもう夢うつつだったのではっきりおぼえていない。

紫色の春の雲があたたかくたなびいて、その雲の中で自分はしっかりと男の胸の中に抱かれ、切なく目をつむってただあえいでいた。

はっきりとおぼえているのは、その女体の中に男の愛情が強くくいこんでいることだった。

ずいぶん長い時間のようでもあったし、夢の間にすぎた時間のようでもあった。考えていたよりずっとしあわせな感じだったようでもあるし、本当はもっとしあわせなもののように考え

ていたのにというような気もした。

そして、女体はまざまざと男の血を自分の中に感じて、お浜ははじめて女にされていたのである。

「お浜、おれはあっちで一服しているからな」

男は帯をしめると、あっさりいって、納戸のほうへ出ていった。

すぐに炉端のほうから火うち石のかちかちという音が聞こえていた。

「いやだなあ、あたし」

いつの間に帯しろ裸にされていたのか、お浜はいそいで白々とした豊かな胸の前だけをかきあわせて、まだうっとりと夢からさめきらずに横座りになっていた。

なんだか自分の体がすっかり変わってしまったような気がする。

この体はもうあの男のものにされてしまったのだと思うと、やっとしずまりかけてきた感情のあらしの底から急に男のすべてが焼きつくように恋しくなってきて、

——捨てたら承知しないから。

そんな執念がむらむらっと胸の中にうずをまいてきた。おまえはおれを殺したくなる女だ、そういった男の言葉がいまさらのように思いかえされてくるのだ。

5

きちんと帯をしめてもとの腰元姿になったお浜は、黙って次の間から出てきて、炉端の金子のひざの横へきて、わざと体をぶつけるようにして座った。

「どうしたんだ、そんな怖い顔をして」

「あんたが憎いんだもの」

お浜は金子の持っていたきせるを取りあげて、澄ましてたばこを吸いはじめる。

「そうか——。今ごろ竜平もお信の方にそんなことをいってだだをこねているだろう。あっちは女のほうがずっと年上だからな」

「そうかしら。でも、あの奥方はいつも見識ぶった顔をして、男なんかそばへも寄せつけたことがないっていうように澄ましている女だけどな」
「お浜だって、さっきまでは、男が大きらいで、いつも毒蛇の指輪をはめて用心していたんじゃないのか。——痛いっ」
しなやかなお浜の指がいきなり男のひざをつねって、
「ふ、ふ、そんなに痛い」
と、顔を見てわらっている。
「なるほどなあ。本気になってつねるところをみると、おまえはやっぱり男ははじめてなんだなあ」
「そうよ。だから、あたしあんたが殺したくなりゃしないかと思って心配だわ」
「いいじゃないか。殺したくなるほどほれられりゃおれも本望だ。遠慮することはないぜ」
金子は邪気のない顔をして微笑する。
「本当だね、あんた」
「ばかだなあ、おれはおまえという女をすっかり知っていて女房にしたんだぜ。命が惜しくてさそりの姉御にほれられるものか」
「それもそうね」
お浜はまじまじと男の目を見あげながら、
「うれしいわ」
我にもなくぽろぽろと涙がほおへあふれてきた。
「なんだ、涙なんか出して」
「うれしいんだもの——」
お浜は手の甲で子供のように涙をこすっている。
「あのなあ、お浜、おまえとおれとはこうして本当にほれあえるが、竜平とお信はそうはいかないんだ。たぶん、お信は竜平を手玉にとって、すごいことをたくらんでいるんじゃないかと思う」
「どんなこと——」

「いまにわかる。とにかく、竜平はお信のとりこにされているから、日が暮れてからでないと帰るまい。しかも、お信に散々生き血を吸われてふらふらになってくる。そこがこっちのつけ目なんだ」
あっとお浜は気がついたように、
「あんたは、あんたは仕事があったのね。大丈夫かしら」
と、ぬれた目をみはりながら、
「死んじゃいやだ、あたし」
いきなり金子にしがみついていく。

6

いつかあたりはすっかりたそがれてきて、この薄暗い納戸の中はおたがいの顔だけがぼんやり浮きあがって見える時刻になっていた。
金子とお浜がここへ入ったのはまだ八ツ半(三時)前だったから、二人きりでここに一刻半(三時間)近くも鼻を突きあわせていたことになる。
「お浜、男と女というものがどんなものか、おまえにも今日はよくわかったろう」
金子はお浜のひざまくらをしながらそんなことをいってからかうのである。
「いやっ、そんなことをいっちゃ」
お浜は男の顔をなでたり、鼻をつまんだり、まるで人形でも愛撫するようにもてあそびながら、時のたつのさえ忘れていた。
「ねえ、じゃ、太郎さんとおさわさんも、こんなことをして遊んでいるの」
「まあそうだろうな。太郎さんは男で、おさわさんは女だからな」
「あの船米のおかみさんは、ういたうわさなんか一つもなかったんですけどねえ」
「ばかだなあ、人の前であたしはいい人がいるんですといってにやにやして見せる女なんかあるもんか。そんなのは色きちがいだ」
「そういえばそうねえ」

「それにな、おさわさんはおまえよりずっと大年増（おおどしま）なんだ。おまけに後家さんだからな。今ごろさすがの太郎さんもげっそりとして青くなっているだろう」
「ばかばっかし――。恥ずかしいなあ、あたし」
「なぜ――」
「知らないわ、あんたが悪いのよ」
　さっき男にまつわりついて胸をなぶられているうちに、女体はまたしても激しく燃えあがってきて、はじめの時は夢うつつだったが、二度目にははっきりと愛欲の歓喜を感じとっていた。それだのに、お浜はこうして男の重い頭をひざにのせているとなんとなく体中の血が甘くさわぎ出してくる。そして、もう一度男が野獣になってくれるのを心待ちにさえしているのだ。
「ねえ、あんたあ――」
「なんだよう」
「大作と美沙緒も二人きりでかくれ家にかくれているんでしょう」
「いいや、あの二人は育ちが違うから、まだそうはいかないだろう」
「そうかしら――」
「そこがあの二人のいいところなんだ。そりゃ男と女だからな、おれたちとおなじ欲望は持っている。それをじっと慎んで、そうだなあ、くちびるぐらいは吸いあっているだろうが、おたがいに家柄というものがあるから、うっかり子供でもできてしまうと困ることになるんだ」
「あら、じゃ、あたしはもうあんたの子供がおなかへ入っているかもしれないんだねえ」
　お浜ははじめてそこへ気がついたように、じっと上から男の顔をのぞきこむ。
　とんとんと表から出入り口の雨戸をそっとたたく音がした。

7

「だれかきたようよ」

ぎょっとしたようにお浜が顔をあげる。
「よし、おれが出てみる」
　金子はむくりと起きあがって、そこにある刀を取り土間へおりていこうとする。
「あたし、ここにいてもいいの」
「いいさ、おまえはもうおれの女房じゃないか」
にっとわらってみせて、金子は戸口へ進んでいった。
――たのもしいあたしのだんなさま。
　お浜はうれしくなりながら、今の気持ちにくらべて、よくいままで一人でいて寂しくなかったもんだなあと、我ながらふしぎな気がしてくる。
　金子が戸をあけてみると、そこに船米の船頭仲間で岩次郎という若い男が立っていた。
「岩さん、どうした」
「太郎だんながね、五郎だんな一人で大丈夫かっていってます」
「うむ、そりゃ大丈夫だ。舟のことはたのんでおいたか」
「たのんでおきました。もう出ていると思います」
「よし。じゃ、こっちも仕事にかかるからな、例のやつを四つばかりほうりこんできてくれ」
「合点です」
「うまくやれよ」
「なあに、なれていやすからね」
　岩次郎はにやりとわらいながら門番小屋のほうへ引きかえしていく。
　声が小さいので、お浜には無論なにを話しあっているのか聞こえなかった。が、それがただの話でないことは勘でわかる。もっとも、人に聞かれてもいい話なら声をひそめる必要はない。
「お浜、仕事にかかるからな、おまえここの寮の裏木戸の中で待っていてくれ」
　金子が上がり框（かまち）のところまできてあっさりという。

「えっ、——仕事」
はじかれたように立ちあがったお浜は、いきなり金子の肩へ両手をかけて飛びつくようにしがみついていった。
「あぶないじゃないか」
「ねえ、仕事って、どうするのよう」
「いまにわかる。おまえは裏口で待っていればいいんだ。後からわしもすぐ行く」
「いやだ、いやだ、あたしはあんたといっしょにどこへでも行きますからね」
「しようがねえなあ。じゃ、早く下駄をはけよ。いそがしいんだ」
「はい」
「もういいというまで口をきくんじゃないぞ」
「その仕事っての、あんた一人でやるの」
しかし、金子はもう返事もせずに、黙って先に立って土間から出ていく。
外はもうすっかり暮れきって、月のあかるい夜になっていた。

8

柏屋の寮では、日が暮れてもまだ肝心な竜平が帰ってこない。
そのうちに、たのんでおいた仕出し屋から三十人分の折り詰め弁当がとどいた。若い衆が二人がかりで荷車に積んできた大きな魚籠を玄関先へ運びこむと、別にこれという仕事がなくて退屈しきっていた手先や小者たちがたちまちうきうきしながら玄関のほうへ集まってきた。
表門と裏木戸は警戒をおこたるわけにはいかないので交替で弁当を使うことにして、小者組は玄関の間へ集まり、与力同心組は八人分の弁当を書院へ運ばせて、そこで折り詰めをひらくことになった。
「蔵番組も持ち場を離れてはならんぞ」
権太夫はそう注意しておいたが、その蔵番組の組頭ばかりでなく同心たちはみんな書院へ集まってしまったので、手先たちもつい気がゆる

む。
それに、南蛮組が船頭二人を取りかえしにくるにしてもそれは四ツ（十時）すぎからのことで、まさか日が暮れたばかりの宵の口に押しこむとはだれしも考えられない。しかも、船米の家のまわりは無論のこと、今戸町の要所要所にちゃんと手配りがしてあるのだ。やみ夜とちがって、今夜は月のあかるい晩である。
「おい、腹がすいたじゃねえか。なにも折り詰めは座敷でなけりゃ食えないときまったもんじゃねえ。だれか行って、四人分の弁当をここへもらってきちゃどうだ」
蔵番の一人がそういい出して、よしきた、おれが行ってくると、裏の見張りが気軽に引きうけて、玄関のほうへ走っていった。
残った三人は蔵の前へ集まってのんきに一服やっていた。
書院では書院で、裸ろうそくをそこここに四、五本立てて、
「竜平どのは少しおそいようですなあ」
「いや、こっちの仕事はどうせ夜になるんだから、若だんなもそのつもりなんでしょう」
と、同心たちにすればやっぱり竜平のいないほうが気やすいから、そんなことをいいあいながら、いまみんなでのんびりと折り詰めのふたをひらいたところだった。
だあん。
ふいに表玄関のほうで大筒でも撃ったような音がきこえ、
「なんだ、あれは——」
ぎょっと一同が中腰になったとたん、
だあん。
だあん。
こんどはもっと近い台所あたりで二発、これは近いから家鳴り震動して、たちまちすうっと煙硝のにおいが廊下から流れてきた。
「一同、南蛮組だ」
真っ先に刀をつかんで立ちあがったのは、紙

のように顔から血の気のひいた伊藤権太夫である。とたんに、
「火事だあ」
という叫び声が玄関のほうからまきおこったのである。

9

火事はいちばんはじめ門番小屋から火を噴き出したのだ。
つづく母屋の爆音二つに、玄関の間で弁当をひらきかけていた手先たちも、書院に集まっていた同心たちも、なにがなんだか見当がつかず、一度にわあっと南の庭へ走り出していた。そこがいちばん広い場所で、いざとなれば裏の外庭から川っぷちへ逃げ出せる。だれしもまず身の安全を考えたのだろう。
そして、同心たちも、手先たちも、期せずして伊藤権太夫のまわりへ集まった時には、もう母屋の真ん中あたりの軒下からめらめらと赤い炎が舌を出しはじめたほど火のまわりが早かった。
「一同、気をつけろ。これは南蛮組の仕業にちがいない。この屋敷うちに南蛮組がしのびこんでいるのだ」
権太夫はあたりの者に大声でいってきかせたが、だからみんな早く各自の部署へつけとは下知しなかった。それだけ度を失っていたのである。
「伊藤さま、南蛮組は大筒を撃ちこんだんでしょうかなあ」
「いや、そうじゃあるまい。焼け玉というやつを使ったんだろう。火薬を紙にくるんで、その紙を何枚ものりで張ってかわかし、まりのようにこしらえあげる。ちゃんと口火がつけてあって、それに火をつけてほうりこむ。つまり、花火の大きなやつだと思えばいい」
「すると、南蛮組がそれをほうりこんだことになるんですな」

「一体、どこから、いつ、南蛮組はこの寮へしのびこんだんだ」
そんなことをいう者があって、権太夫ははっと我にかえったのだ。
「一同、早く各自の部署につけ。怪しいやつを見かけたらすぐに取りおさえる。手にあまったら、大声で味方を呼べ。場合によっては切りすててもよい」
「はっ」
「火消しがくるまで、表門も裏門もあけてはいかん」
そのころ——。
外蔵の前で一服やっていた三人の手先は、第一の爆音でぎょっと立ちあがり、母屋の、それもすぐそこの台所のあたりでつづけざまに二発の爆音が耳をつんざいたとたん、
「それっ、一大事だ」
「お組頭に知らせろ」
と、三人が三人とも夢中で書院の庭のほうへ駆け出していた。
その後へ台所のほうから手先らしいやつが素早く外蔵の前へ走り寄ってきて、
「大切な下手人を忘れやがって、みんなしようがねえじゃねえか」
と口小言をいいながら、いつの間にか蔵のかぎを外していた。
重い観音びらきがひらくとこんどは中の格子戸だが、これは輪かぎがかけてあるだけだから、がらがらっとすぐにあいた。

10

「すまねえなあ、岩の字」
匕首（あいくち）で手のなわを切りほどかれた忠吉と辰造は、案外しっかりと立ちあがった。
「裏に五郎だんながいる。いそいでくんな」
「合点だ」
忠吉と辰造が走り出す後からいっしょに蔵を出た岩次郎は、手早く観音びらきを元のように

しめる。

　まだあたりにだれの目もなく、母屋は台所から火を噴き出してきたようだ。

「うまくいったなあ、岩」

　蔵の裏へまわるとそこに宗十郎頭巾（ずきん）をかぶっていた五郎が待っていて、忠吉と辰造はいま塀（へい）を乗りこえるところだ。

「だんな、こっちも引きあげやしょう」

「うむ、わざわざ敵を待っている必要もないからな」

　五郎はわらいながら塀ぎわまでさがって、

「岩、先へ塀をこせ」

と、自分はそこに立ってもう一度敵の様子を目でさぐる。

　大丈夫らしいと見たので、いちばん後から塀を乗りこえて隣へ移ると、

「五郎さん――」

　そこに待ちかねていたお浜が、人前もなくいきなり胸へすがりついてきた。

「三人は裏口のほうへ行ったのか」

　五郎は手早く宗十郎頭巾をぬいで金子にかえりながら聞く。

「ええ、行ったわ」

「よし、こっちもいそごう」

「これからどうするの」

「おれは浪人金子新五郎、おまえはさそりのお浜、二人とも加役の用心棒なんだから、別にあわてることはないんだ」

　金子はお浜の肩を抱えながら裏木戸のほうへぐんぐん歩き出す。

「あの三人は――」

「まあ、黙って見ていろ」

　木戸口へくると、三人ともふんどし一本の素っ裸になって待っていた。

「忠吉と辰は、体は大丈夫か」

「大丈夫です。昼間だんなの顔を見たんで、もう安心だと思っていやしたからね」

「しかし、今のうちに手足をよく動かしておか

ないと、水はまだ冷たいからな」

「へえ。姉御、この度はお世話になりやした」

　忠吉がお浜のほうへおじぎをする。

「なあに、いいんだ。お浜はもう五郎さんにくどかれて、もう五郎さんの女房になっているんだ」

「あれえ、思ったよりすごい腕なんだなあ、五郎だんなは」

　忠吉はぽかんとして二人の顔を見くらべている。

「いやだなあ、恥ずかしい」

　さすがにお浜は赤くなって金子のうしろへかくれていた。

「へええ、さそりの姉御がねえ」

　だれの目にもそれはもうただの仲でないとわかる女のしぐさなので、辰も岩もにやにやわらい出す。

11

　金子が裏木戸をあけてお浜といっしょに川っぷちへ出て見た時は、まだ野次馬も裏へはまわってきていなかった。

「今のうちだ、三人ともそっと川の中へ飛びこめ」

　金子は木戸の中へ声をかけておいて、

「お浜、おれたちは柏屋の裏口へ行ってみよう」

と、お浜をうながしてそっちへ歩き出す。

「どうしてさ、あんた」

「さっきあそこの桟橋（さんばし）に手先が一人張りこんでいた。たぶん、今ごろは寮の中へ駆けこんでいるだろうと思うが、もしそいつがまだその辺に見張っているとすると、そいつの目をしばらくおれたちのほうへ引きつけておく必要があるんだ」

　金子はそういいながらお浜の肩をぐいと抱きよせて、わざと肩ごしに手を女の内ふところへ

滑りこませる。
「いやだなあ、人に見られるじゃないか」
乳房をぎゅっとつかまれて、お浜の体はもう甘ったるくゆるみかけてくる。
「これは計略なんだからな、変な気をおこすんじゃないぞ」
「おこすわ、そんなところをつかむんだもの」
「さそりの姉御もすっかり甘くなっちまったんだなあ」
「だれがこんなにあたしを甘くしちまったのかしら、憎らしい」
ついもつれあうようなかっこうになって柏屋の裏の桟橋のあたりまできてみたが、案の定さっきの手先の姿はなく、裏木戸があけっ放しになっている。
ちらっと川のほうを目でさぐると、月かげのあかるい川面を三人はすでに中流まで泳ぎ出して、それと知っていて見ないかぎり、もうだれの目にも入らないはずだ。しかも、その少し向こうにつり舟らしいのが一艘とまってこっちの火事を見物している。
まもなく三人はその舟のかげになってしまうだろう。
「よし、うまくいったようだ。お浜、川のほうは見るなよ」
金子はそういって、やっとお浜を離す。
「じゃ、あたしはどこを見ていればいいの」
「おまえはゆっくりおれの顔に見とれていればいいんだ」
「ばかばっかし――」
そこへ寮の庭から同心若林良平がさっきの手先といっしょにあたふたとこっちへ飛び出してきた。
「やあ、お浜――」
「若林さん、どうしたんです。いま大筒のようなひどい音がしましたねえ」
「うむ、南蛮組の間者が入りこんでいるんだ。金子うじ、持ち場をしっかりかためてくれ」

若林はすっかり興奮しているようである。
「心得た。お浜、持ち場へつこう」
金子はお浜といっしょに柏屋の北隣との境の塀のところまでひとまず下がることにした。

12

まもなく半鐘が鳴り出して、火の手が真っ赤に夜空をこがしてきた。多少西風があるらしく、火の粉は隅田川のほうへ飛んでいる。
ようやく裏の川っぷちのほうへも野次馬が集まり出してきたようだ。
しかし、柏屋の裏の塀の上手と下手に手先ががんばっていて、そこから中へは野次馬を入れない。
その柏屋の裏木戸へ、川下のほうから野次馬をかきわけて竜平が四、五人の組下をしたがえて大股にあらわれ、たちまち寮の庭へ姿を消していった。
「お浜――」
そこまで見とどけた金子は、そっとお浜をうながして川上のほうへ歩き出した。
そのころになると、物好きな連中は舟を出して火事見物としゃれこんでいるのがかなり出てきた。この辺の寮はたいてい裏の桟橋へ自家の小舟をそなえているのだ。
「どこへ行くの、あんた」
野次馬の中を離れてから、お浜は男の腕へつかまっていきながら聞いた。金子へ対してはもう甘ったるい声しか出なくなっているから、我ながらおかしくなる。
「これから道行きだよ」
「だから、どこへ行くの」
「おれの考えじゃ、こんどねらわれるのはおまえたちだ」
「どうして――」
「加役はせっかくの南蛮組の手がかりに逃げられた上、柏屋の寮まで焼かれている。しかも、竜平はお信といちゃついていて今戸へかえる時

がおそすぎたという自責の念もあるから、ここでなんとか一つぐらい手柄を立てないと、組下の者たちに対しても世間へ対しても顔が立たないことになる。いちばん手っ取り早いのは、地獄長屋の浪人どもを偽五人組み強盗を働いた罪科で召し捕ってしまうことだ」
「わかったわ、ついでにじゃまになるあたしと長坂の口をふさいでしまう」
「そのとおりだ」
「憎いなあ、あの野郎。——でも、三島家の屋敷の中で、真っ昼間お信とそんなことができるかしら」
「男と女なんてものは二人くっつくと魔物みたいなもんで、人目をしのぶ火遊びがかえっておもしろくなる。そのかわり、だんだん天を恐れなくなって、自分たちに都合の悪い人間はいっそ殺してやろうという気持ちになってくる」
「じゃ、いまにあの殿さまも一服盛られちまうんじゃないかしら」
「たぶん、そこまでいくだろうなあ。おまえだって、もしおれにほかに女があるとすれば、きっと毒蛇(どくじゃ)の指輪が使いたくなる」
「あたりまえだわ。あんた本当にほかにあたしより好きな女があるの」
お浜はぎゅうっと男の腕をつかみながらむらむらっと火の玉のようなものが胸いっぱいにこみあげてきて、目のつりあがってきたのが自分でもよくわかる。

13

「やきもちか、お浜」
金子は平気でわらっている。
「本当のことといっておくれよ、あんた」
「ばかだなあ。おれはおまえに命をあずけてある男だ。そんな女があるとわかったら、いつでもその毒蛇の指輪をつかえばいいじゃないか。ちゃんと持って歩いているんだろう」
「持ってるわ」

「それよりなあ、お浜、おまえこのままおれとずっと遠いところまで道行きをする気になれないか」
「遠いところって、どこなの」
「おれもまだ行ったことはないが、とにかく日本という国を離れてしまうんだ」
「ああ、わかった。あんたは南蛮へ行く気なのね」
お浜はどきりとした。南蛮組はみんなで遠い南の島へ行く気で、その軍資金をあつめているのだと、人のうわさに聞いていたのを思い出したからである。
「いやか、お浜」
さすがにお浜も急には返事ができない。
「まあ、よく考えてみろ。おまえは今日までやけになって散々あばずれてきた。どんなことをしてきたんだとここで聞く必要はないが、おまえもおれも日本では安心して夫婦になって暮らせない男と女なんだ。だから、おれはおまえを女房にして、南の島へつれていって、そこへ新しい日本をこしらえて住む、そのほうがおまえだって獄門首になるよりよっぽどしあわせなんじゃないかと考えたんだ。——しかし、無理にとはいわない。どうしてもおまえが日本を離れるのはいやだというんなら、さっき見せてやったろう、あの炉の中の千両箱はおまえにやるから、あの金で生きられるだけ日本で暮らすがいい」
「いやだわ、あんたと別れて暮らすなんて」
今はやきもちどころではない、この男を海へとられてしまうか、自分もいっしょにその海へ飛びこんでいくか、そういうどたん場へお浜は立たされてしまったのである。
「あんたは、あんたは、怖い男だったのねえ」
「お浜はそういう強い男が好きじゃなかったのか」
「だって、少し強すぎるんだもの」
「おまえはきっとおれの赤ん坊ができる体だと

思うんだ」
「そりゃできるわ。どうしてそんなことというの」
「子供ができない女は、なるべく船に乗せない約束なんだ」
「あら。じゃ、みんなおかみさんつれていくの」
「そうさ。跡をつぐ子供がいなくちゃ、新しい日本をこしらえたってしようがないからな。それで、太郎さんはおさわさんのことを心配しているんだ。おさわさんは年が年だからな」
「じゃ、おさわさんも行くの」
「うむ、おさわさんはきっと太郎さんの赤ん坊を産んでみせるって、がんばっているんだ」
「あんた、あたしも行く。あたしはきっとあんたの赤ん坊を産んであげる」
お浜はかっと体中が熱くなってきて、思わず男の腕をしっかりと両手で胸へ抱きしめていた。

悪夢

1

その夜の失敗の大きな原因は、なんといっても竜平にあった。
竜平がせめて夕方までに今戸へ帰ってきていれば、船米の若い船頭二人を拷問にかけ、あるいは南蛮組の動静を聞き出すことができたかもしれない。
一足おくれたために柏屋の寮を焼かれ、せっかく手がかりの船頭二人を取りかえされた上、一体敵はどこからその二人を今戸町の外へつれて逃げ出したか、それさえはっきりしないのである。
しかも、前後の事情から聞いて、お浜と金子という男の二人がどうも臭いと思われるのだが、そのお浜も金子もその夜姿を消したきりいまだに平野屋へもどっていない。
そういえば、船米の後家おさわも、忠吉、辰造の船頭二人も、無論、姿を消したきりになっている。
しかし、竜平は内心南蛮組の手がかりを失ったことはさほど惜しいと後悔はしていなかった。
それよりも、竜平がいちばん気になるのは、大作と美沙緒の行方だった。
だから、その夜のことについては珍しくあまり組下の者を責めずに、柏屋の寮が燃えきってしまうと、それぞれへ張りこみを残しただけで、人数はひとまず屋敷へ引きあげることにした。
しかし、大作と美沙緒の二人だけは、どうしても早くさがし出してひそかに口をふさいでしまわなければならない。
次は長坂とお浜の二人だが、これは場合によってはまだ道具に使う必要があるので、大作と美沙緒を片づけてから後で始末すればいいのである。
あの日、竜平はお信の方の後を追うようにして神保町の屋敷へ帰ると、ひと休みしてからすぐに筋向かいの三島の屋敷をたずねた。
正直にいうと、燃えるようなお信の方の女体がこっちの肌にあやしい余燼を残していて、どうにも煩悩を断ちがたい。
竜平はまずお信の方に面会を求め、その居間へ通されると、
「お信さん、おれはご亭主弥十郎どのに会いにきたんだ」
と、二人きりになるのを待っていきなり耳もとへいった。
「会ってどうするの、竜平さん」
お信はしっとりと落ち着きながら、しかし、その目はもうただの仲ではないのだからという安心しきったものを見せて、なにか男に甘えかかっているような色さえある。
「おれは弥十郎どのをためしてみたいんだ。あ

んたから、美沙緒のことでおれが会いにきていると取り次いでくれ」
「なにをためそうというの」
「おれがいつここへ忍びこんできても大丈夫かどうか、本当にもうお信が三年もお褥遠慮かどうか、会えばわかる」
竜平の胸の中にはそういう嫉妬もあって、完全にふてぶてしい姦夫になりきっていたのである。

2

「どうぞなんなりと聞いてきてくださいませ。腰元に案内させましょうか」
お信の方は微笑していて、少しも動じた色は見せない。
「よし、じゃ案内させてくれ」
ともすればそのきちんと行儀よく取り澄ましている女の体に手をふれて、この人妻が亭主のいる自分の屋敷ではどんな顔をするか見てやりたい衝動に駆られてくるのを、竜平は、まあ待て、それは後のたのしみだと自制して、お信の方の呼んでくれた腰元について奥の弥十郎の居間へ行ってみた。
いつも退屈している弥十郎は、例によって碁盤を前にして一人で定石をたのしんでいたらしく、
「久しぶりだな、竜平さん。一石どうかな」
と、さっそく挑戦してくる。
「三島さんはあいかわらず熱心ですなあ」
竜平はわざと気さくにわらいながら座について、
「実は、今日は少し忙しいのです。このごろおやじさまの名代をつとめているもんですからな」
と、すぐに真顔になる。
「そういえば、御尊父の足痛はどうかな」
「なあに、あれは例年のことで、今ごろから梅雨にかけていけないようですな。梅雨があける

とけろりとして歩けるようになる。おかしい病気です」
「まあ竜平さんがいるからいいようなものの、お役があるから御尊父も気が気ではあるまい」
「さっそくですがねえ、三島さん、わしは今朝妙なところで美沙緒どのを見かけましてね、そのことでいま奥方に会って聞いてきたんです」
「美沙緒はたしか本郷の信の里方へ行っているはずだが」
弥十郎はあまり気にもしていないようである。
「わしが今朝見かけたのは浅草の観音堂の人ごみの中で、先方は気がつかなかったようだが、ちゃんと相手がいるんです」
「相手――」
「それがちょっとおかしい。表神保町の滝さんの弟で大作というのを知っていますか」
「知らんなあ。滝さんのほうは知っているが」
「わしは大作とは道場仲間なんだが、去年の秋あたりからぐれ出して、このごろはあんまり屋敷へも寄りつかないということを耳にしていた。美沙緒どのはその大作といっしょに歩いていたんで、はてなと思ったわけです」
「ふうむ、美沙緒がそんな男とねえ」
まだ解せない顔の弥十郎である。
四十面をさげてぼんくらだなあと竜平はあきれながら、これなら才物のお信に手玉に取られたってわからないだろうと、痛快な気さえしてくる。
そこへ、まだ十六、七とも見えるぽったりとした腰元が茶を運んできて、主客の前へおき、おじぎをしてさがっていった。小娘にしてはどこか人おじをしないようないけしゃあしゃあとした態度が見える。

3

「わしにはどうも大作と美沙緒どのの仲は普通とは見えなかったんで、実はいま奥方に会って

それとなく聞いてみたんです」
竜平は小娘の腰元がさるのを待って話をつづける。
「すると、お信どのが困った顔をされて、まだ主人には内密にしているんですが、美沙緒さんは三、四日前からお浜といっしょに本郷の屋敷をぬけ出している。お浜というのが相当な食わせ者だったらしく、それが大作との仲を橋渡ししたんだろうとわかってきたんです」
「では、信はもう三、四日前からそれを知っていたのかね」
弥十郎の顔にはじめて怒りの色があらわれてきたようだ。
「それは、三島さん、奥方を責めてはかわいそうだ。奥方は長坂にそっといいつけて、あなたの耳に入らないうちに早く美沙緒さんを取りかえそうと骨を折っている。それに、ほかにも金のいることがあって、そのほうも都合をつけなければならないしと、一人でだいぶ苦労しているらしい。だから、わしはいったんだ。知らない間柄じゃなし、早く知らせてくれればなんでもなかったんだ。こっちは加役をおおせつけられて、そういうことになれた組下を持っている。二、三日中に美沙緒さんのほうはきっと目鼻をつけてみせる。金のほうも千両ぐらいなら軍資金のほうからわしが一時融通しておいてもいいとね」
「本当かね、竜平さん」
千両と聞いて、弥十郎はちょっとあっけにとられた顔つきになる。どうやら、美沙緒のほうより金のほうに関心が深いようだ。
「ねらいは長崎奉行だそうですね」
「うむ、弥十郎一世一代の大野心というわけでな」
「三島さんなら大丈夫だ。先代の引っかかりがまだ重要なところにちゃんとにらみをきかせているんですからな。おやじどのには内密ですが、わし一存で千両用立てましょうか」

「そうしてくれれば、弥十郎恩に着るがなあ。いや、この恩がえしはきっとできると思うんだ」
「いや、武士は相身互いといいますからね。金は夕方までにそっと運ばせます。あまりお信どのをしからんでください。御令妹のほうも二、三日中にはなんとかしますから」
「ぜひたのむ、竜平さん。なあに、家内などしかってみたところでしょうがないからね」
「しかし、おかしいなあ」
「なにがだね」
「夫婦というものには寝物語というやつがあるんじゃないんですか」
竜平はわざと微笑をうかべながら小首をかしげてみせる。
「それは、竜平さん、若いうちのことだ。大きな声ではいえぬが、女房も三十になると鼻についてくるんでねえ」
弥十郎はなんの興味もなさそうに苦わらいをする。

4

弥十郎はやっぱり初物好みらしく、それをきたならしいとお信がまゆをひそめて表現していたように、絶えず腰元から腰元へ手をつけていく悪癖があるようだった。そして、自分でも、
「竜平さん、男も不惑をこえるとな、そんなことでもしないともうあまり興奮しなくなってくるものなんだ」
と臆面もなく放言して、あほう大名のようなしまりのないわらい顔を見せていた。
――よし、それなら千両くれてやってもいい。
竜平はそう腹をきめて、かえりがけにお信の方の居間へ入りこみ、まさか今戸の空き屋敷でのような大胆なまねはできなかったが、それとはまたおもむきを異にした不義のつかの間の歓喜をちゃんとわがものにして屋敷へ帰っている。
その夕方、竜平は千両の金をわざと五百両ず

つ二つにしてふろしき包みにつつみ、庭をまわってひそかにお信の方の居間へとどけさせておいた。これで不義の通路はだれにも怪しまれることなくひらけたのである。美沙緒の件についてといって表玄関から乗りこむこともできるし、内密に会いたいからといえばそのまま庭づたいにいきなりお信の方の居間の縁先へまわることもできるのだ。

が、大作と美沙緒の行方は、どうさがしてみても手がかりさえつかめない。

七日の夜、南蛮組が掘留の柏屋の奥座敷から一万両の金といっしょに舟でつれ去った、それっきりどこへ行ったか姿を消しているのだ。竜平がいちばん心配なのは、ひょっとして大作が美沙緒をつれて北の遠山の官邸へ駆けこみはしないかということである。

あの時、美沙緒を手ごめにしそこねて、それならと腹立ちまぎれに長持ち詰めにして柏屋の手にわたし、その代償として柏屋から三千両の軍資金を受け取っている。美沙緒と大作の口からそれがばれれば、お役御免ぐらいの罪ではすまない。それだけに竜平も悶々とせずにはいられなかった。

すると、九日に柏屋の今戸の寮が焼けてから中二日おいた十二日の朝、お浜の策を入れてずっと新宿の大木戸を張りこませておいた組下の者から思わぬ吉報が舞いこんできた。

「今朝六ッ半（七時）ごろ、鈴村大作が美沙緒をつれて、二人きりで甲州路へ向かいました」

と、手先の一人が知らせてきたのである。

「権太夫、とうとう引っかかったようだな」

屋敷の詰め所で伊藤権太夫と今日の打ち合わせをしていた竜平は、急に世界があかるくなったような気持ちだった。

「こんどこそのがせませんな」

その責任の一端をしょっている権太夫もほっとした気持ちである。

「うむ。二人は今夜はたぶん府中泊まりだろう。なにか万全の策はないか」

竜平はまず権太夫に策を求める。

5

「この一両日、長坂重蔵が平野屋へ泊まりこんで寮の焼け跡をかきまわしているそうですな」

権太夫が皮肉な薄ら笑いをうかべながらいう。

「うむ、まだ三千両に未練があるんだろう」

竜平は苦わらいをした。竜平もまたあの寮には南蛮組が三千両かくしていった疑いがあるとお信から聞いているので、二日ばかり焼け跡をさがさせてみた。しかし、結局は徒労におわっている。

それをまた、こっちが手をひくのを待ちかねていたように、長坂がお浜の手下どもを使って地の下まで掘りかえしているということだ。

「重蔵はどうしても金が入用なのです。大作を切って美沙緒どのを手に入れれば、また柏屋へ売りこめるわけですからな」

「よかろう、長坂のほうはさっそく奥方から手をまわさせよう。それで、こっちは――」

「手前が小宮をつれてまいることにしましょう」

「そうか、そうしてくれれば安心だが、二人だけで大丈夫か」

「いや、気のきいた小者を三人ばかりつれていきます。こっちは直接手をくだすわけではなく、長坂たちにうまく働いてもらって、こんどは土地の目明かしを使えばいいのですから」

「なるほど――。たのむぞ、権太夫。軍資金は五十両もあればいいか」

「十分でしょう」

話がきまって、竜平はこれでもうこっちのものだと思った。

時刻はすでに五ッ半（九時）に近いころである。

そのころ――。

鈴村大作は美沙緒をつれて内藤新宿から二里あまりの下高井戸へ向かって歩いていた。

街道はやがて麦秋に近い麦畑つづきで、明るく晴れた青空から絶えずひばりの声がきこえていた。

暑くなく寒くなく、旅にはいちばんいい季節だが、美沙緒の足はあまりはかどらない。こんな田舎道へ出るのは生まれてはじめてだろうし、しかも病後でもあった。

いや、それより本当のことをいえば、美沙緒はもう甲府へ行きたくなくなっているのであった。

「美沙緒さん、明日はここを立つことにしよう」

昨夜、大作がそういい出した時、

「あの、明日でございますか」

美沙緒はびっくりしたようにさっと顔色をかえていた。

「まだ旅に出る自信は持てないかね」

一時はどうなることかと心配したほどの熱を出して、それがやっとなおったばかりではあった。

が、なおってみればたかが風邪のことで、これと病名のつくほど重い病気ではなかったのだし、それに、こっちにはいつまでもここにぐずぐずはしていられない事情もあった。

6

大作はあの日、忠吉と辰造が加役につかまってあぶないところだったが、幸い日が暮れてからまもなく助け出されたという話は、久蔵からその夜のうちに聞いていた。

それっきり、忠吉はこのかくれ家へは顔を出さない。もしここへ敵の目が光り出しては大変だと用心しているのだろう。

そういう危険が絶対にないとはいえないし、正直にいえば、大作としては南蛮組の息のかかっているこのかくれ家へそういつまでも世話になっていることは、なんとしても良心がゆるさ

なかったのである。

だから、少し無理だとは思ったが、昨夜思いきって美沙緒に甲府へ立つ決心を告げたのだ。

「大作さま、あたくし、あの、もう甲府へはまいりたくございません」

美沙緒は突然体中をこわばらせながらそんなことをいい出す。

「どうしてだ、美沙緒さん」

大作は思わず目をみはった。

「あたくし、もし甲府に峰村さまがいると怖いのですもの」

「怖い――」

ああそうかと、大作はすぐに気がついた。美沙緒はすでに大作のくちびるの愛撫(あいぶ)をうけて、もう大作のものになったと思いこんでいる。だから、いいなずけの前へ出られる体ではないとはっきり割り切っているのだろう。

もし美沙緒がもっと下世話に育った下町娘なら、こんな体にだれがしたと男に詰めよりたいところだったにちがいない。

「おいで、美沙緒」

あまりにも必死になっている美沙緒の青ざめた顔を見ると、大作はついいじらしくなって、その肩を抱いてやらずにはいられなかった。

「いいか、美沙緒、わしはなにも甲府へあんたを引きわたしに行くつもりは少しもないんだ。わしはこうして美沙緒をもうわしの妻にしてしまっている。これがいいの悪いのといったところで、もうどうなるもんじゃない。しかし、わしにもあんたにも家柄というものがある。後で家へ迷惑がかからないように、わしは峰村さんが甲府にいるものとして、あらためて美沙緒をもらいに行くつもりなんだ。もし新十郎さんのほうでどうしてもそんなことは許せないというようなら、その時はまた考えようがある」

「教えて、――どうなさるの、その時は」

しっかりと胸へしがみついて、必死の目にいっぱい涙をためている。

「その時はね、びっくりしちゃだめだぜ」
「びっくりしません、教えて」
「その時は南蛮組に入って、美沙緒をさらっていくだけのことだ」
　きっぱりといって、それだけはもうなれている愛撫のくちびるをかさねていくと、美沙緒はやっと安心したように体中から力がぬけて、おとなしく目をつむっていた。

7

　今朝、大作と美沙緒が久蔵を後へ残して二人でそっと隅田村のかくれ家を立ってきたのは七ツ（四時）をすぎたばかりの時刻だった。
　後始末は久蔵にまかせ、母屋のほうへの礼とことわりもよくたのんである。
　その久蔵は、かくれ家の始末をつけてから一度柳橋の深川屋へ寄ってあれからのことを島七夫婦に告げ、それからこっちの後を追うことになっていた。
　時刻はやがて四ツ（十時）に近く、二人はもう五里あまり歩いてきたことになる。
「美沙緒さん、だいぶくたびれたようだなあ」
「いいえ、そんなでもありません」
「だれも見ていないから、手をひいてあげようか」
　野良で働いている百姓たちが、この辺では珍しい武家娘が歩いているので時々立って見送ってはいるが、そんなことは別に気にすることはないのだ。
　美沙緒は黙って大作の腕へつかまっていた。
「まだ道中へ出るのは無理だったかな」
「大丈夫ですわ」
「下高井戸で昼飯にして、布田へ二里たらず、布田から府中へ一里二十三町、無理なら今夜は布田泊まりにしてもいいんだ。別にいつの幾日までに甲府へつかなければならないという旅じゃないんだからね」
「あたくし、あなたとならどこへでもまいります」

「わしだってそれはおなじことだ。場合によっては、南蛮組といっしょに南の国へ行ってしまう決心さえしているんだからね」
「きっとですよ、大作さま」
「きっとだとも――」
「本当は、あたくし、――しかられるかしら、こんなことといって」
「しかるもんか。わしはこれでも美沙緒さんをたべちまいたいほど好きなんだ。とてもしかる勇気なんかないな」
「うれしい、あたくし」
「だから、いってごらん。なにをいいたいんだね」
「あたくし、なんだか甲府へ行くの怖い。このまま南の国へ行ってしまいたいと思うんです」
　それが美沙緒の本音らしく、悲しげにいうのである。
　正直にいえば、大作もまた好んで甲府へ行きたいわけではなかった。しかし、峰村新十郎という男に会ってはっきり話をつけた上でなければ、事が親同士の約束であり、しかも美沙緒の父は新十郎の父から恩義をうけていると聞いているだけに、それを無視するわけにはいかないのだ。
　――では、新十郎が物のわからない男で、あくまで親の約束を盾にとってきたらどうする。
　その場合は海賊になると美沙緒にいって安心させてはあるが、実はそう簡単にはいかないかもしれない不安さえないわけではなかった。

8

「怒ってはいやです、大作さま」
　美沙緒はいまにも泣き出しそうな顔になっている。
　こっちがつい考えごとにとらわれてしばらく黙って歩いていたのを、きげんを悪くしたとでも取ったのだろう。

「いや、怒ってなんかいないよ。どうしてだね」
「だって、急に黙りこんでおしまいになるんですもの」
「そうか——。そんなに黙っていたかなあ」
「なにを考えていらしたのかしら」
「本当はねえ、甲府へはわしもあんまり行きたくないんだ。いまさら美沙緒と別れるなんて、わしだって泣くかもしれないからなあ」
　大作は冗談のようにいう。
　美沙緒は返事のかわりにぴったりと身を寄せてきた。
「しかしなあ、美沙緒さん、人間というやつは、つくすべき手はつくしておかないと、後まで悔いが残る。せっかく美沙緒さんといっしょになっても、新十郎さんがいまに押しかけてくるんじゃないかと毎日びくびくして暮らすのは、美沙緒さんだっていやだろう」
「じゃ、もし峰村さまがいけないといったら、大作さまは本当に南の国へ美沙緒をいっしょにつれていってくださいますの」
「行くとも——。なあに、峰村さんはそんな話のわからない男じゃないと思う。だから、とにかく勇気を出してぶつかってみよう。それならいいだろう」
　大作としても、それ以上のことは今はいえないのである。
「あたくし、あなたのいうとおりになります。勇気も出します。ただ、別れるのだけは、どうしてもいや」
　それが美沙緒の本音なのだが、それだけに甲府へ行ってもしや別れなければならない立場になったらどうしようと、不安でたまらなくもなってくるのだ。
　その不安は、江戸が遠くなるにつれていよいよつのってくるばかりである。
　だから、自分たちに恐ろしい追っ手がかかっているなどとはまったく考えてもいなかった。もう江戸を出てきてしまったのだから、それだけは大丈夫だと、むしろ安心しきっていたのだ。

　胸に心配ごとはあっても、二人きりのたのしい旅なのである。大作は絶えず美沙緒の足を用心して、途中何度も休み休みゆっくり歩いた。
　それがかえってよかったらしく、その夜の泊まりは府中まで足をのばすことができた。そのかわり、府中の宿へ入ったころにはもうすっかり宵になっていた。
　旅籠は女づれだから、特に松本屋という上旅籠に着いた。
「後から供の者がくるはずだから」
　大作が番頭にそういっておいたので、案内されたのは奥の控えの間つきの、ここではいちばん上等の座敷のようだった。

9

「どうしたんだろう、久蔵はおそいなあ、美沙緒さん」
　座敷にはもう寝床をのべて寝るばかりの時刻になっているのに、久蔵はまだ追いついてこない。たとえ平日おそく江戸を立っても、男の足なのだからもう着いていなければならないはずなのだ。
「なにか間違いでもなければいいんだが」
　それが絶対にないとはいえないのだ。
　竜平はなんとしても自分と美沙緒の口をふさがなくては安心できない立場にある。だから、要所要所へは必ず組下の者を張りこませているにちがいない。
　深川屋も無論第一にねらわれているはずだ。それがあるからわざと今日まで久蔵を柳橋へ帰さずにおいたので、
「その点は十分気をつけて出入りしなければいかんぞ」
　と、今朝かくれ家を出る時よく注意しておいた。
「あっしのほうより、だんなこそ気をつけておくんなさいよ。お嬢さんはまだ病み上がりなん

ですからね」
　久蔵はむしろこっちのことを心配していた。それも無理はないとは思う。こっちはこんど敵の網に引っかかるとまず切り死にと覚悟をきめなければならないからだ。
　しかし、幸いこっちは今のところそんな心配はない。江戸さえ無事に出てきてしまえば、おそらくもう大丈夫だと見ていいだろう。
　──そうか、ことによると久蔵は深川屋の張りこみに見つかったと気がついて、家を出られずにいるのかもしれないな。
　それなら安心だと大作は思った。
　なまじひもを引っぱってこられては、それこそまたやっかいなことになってしまう。
　なんとなくほっとした気持ちで美沙緒のほうを見ると、美沙緒はまだ帯もとかずにこっちに背を見せて、座敷のすみにしょんぼり座っている。
　と見ているうちに、そっとたもとを目へ持っていく。泣いているのだ。
「どうしたんだ、美沙緒さん」
　大作は思わず火ばちのそばを立っていった。
　こっちが久蔵の心配をしてつまらぬことを口走るもんだから、それでなくてさえはじめて江戸を離れて心細い身が、いっそう悲しくなってきたのだろう。
「しようがないお姫さまだなあ。心細いのか」
　うしろから肩を抱いてやると、
「あたくし、悲しくて──」
　美沙緒はくるりとこっちへ体をねじ向けて胸の中へすがりついてくる。
「悲しい──。どうしてさ」
「別れるのはいやっ、大作さまと別れるのはいやっ」
「わしはここにいるじゃないか」
「いやっ、いやっ、いまに鬼がさらいにくるかもしれませんもの。死んでしまいたい、あたくし」

　狂乱したように、両手で力いっぱい急に激しく胸へしがみついてくるのである。

10

　人間ひょっとするとない命かもしれないとわかると、そこに異常な興奮がまきおこってくるものらしい。それをやけといってはあまりにも酷すぎる。
　人倫の道も、世の中のおきても、命を保証されていればこそ確立するので、ない命とわかればそこに多少の狂いが出てくる。
　しかも、大作は、なぜ美沙緒が悲しがったり泣いたりするのか、その気持ちはわかりすぎるほどよくわかっている。
「美沙緒──」
　大作は自分もまたしっかりと美沙緒の体を抱いてやりながら、涙にぬれたほおへぴったりとほおを寄せていった。
　そして、いつものようにこんどはくちびるをかさねて、長い間女のくちびるを愛撫してやる。恥ずかしがりやの美沙緒は、ただ男の愛撫をうけるだけで、自分からはなんにもできない。
　やがて、女体は燃えあがってくる全身の血に切なげにあえぎ出して、夢うつつにされてくる。
「美沙緒、もうおまえ、おれの美沙緒になるか」
　大作がそっとくちびるを放してささやくようにいう。
「切ない、あたくし」
　女体は目をつむったまま甘くとけゆるんであえぎつづける。
　大作がもう一度熱いくちびるをかさねて静かに押し倒していっても、まだ甘い夢に酔いつづけている。そして、一瞬本能的に体中をかたくしたが、無論それは男への反抗というわけではない。
　たとえ反抗しても、ここまできては男はもうそれをゆるさなかっただろう。
　女体はふたたび少しずつ溶けゆるんできて、

完全に男に征服されていく。一切の世界がその歓喜の中に燃えつくされて、そこにあるものは男と女でしかない。
　美沙緒は強烈な男の愛情に、あえごうとする口さえ口でおさえつけられて、この時はじめて自分からも男の口を吸うことをおぼえたようだ。いや、歓喜が羞恥心（しゅうちしん）をも燃えつくしていたのである。
「美沙緒、わしたちはもう別々の体ではなくなったんだよ」
「はい」
「もう悲しくないね。泣いたりしないね」
「ええ」
　まったくいじらしいほどすなおで従順な美沙緒であった。
　その夜、二つの寝床のうちの一つはついに空のまま朝を迎えたのである。
　朝、ふっと目をさました美沙緒は、すぐ目の前にまだぐっすり寝入っている男の顔を見て、思わずほおを赤らめたが、
　——美沙緒のだんなさま。
　すぐにじいんとしあわせが胸へあふれてきて、男の腕をそっと抱きながら、いつまでもそのしあわせの中にひたっていた。そして、美沙緒は体中でもう自分が女になっていることをはっきりと感じていたのである。

11

　美沙緒は朝の膳（ぜん）に向かってもなんだか恥ずかしいような気がして、どうしても大作の顔がまともに見られなかった。
　そのくせ、いまはもうすっかり安心して、甲府へ行くこともそう気にならない。しあわせが胸いっぱいにふくらんでいて、朝飯も軽く二つきりですませてしまった。
「もっとたべないとおなかがすくよ。今日はまた一日中歩くんだからね」
　大作はそんなことをいいながらゆうゆうと三

つも四つもおかわりをしている。
　黙って給仕をしながら、美沙緒はたのもしいなあと思った。
「美沙緒さん、今朝はいやにお澄ましなんだなあ」
　やっと食後の茶にしながら、大作がわらいながらいう。
「いやですわ、恥ずかしい、あたくし——」
　美沙緒はかっと体中が赤くなったような気持ちである。
「かわいいなあ、あんたは。おれは美沙緒さんのようないいお嫁をもらおうとは思わなかった」
　うれしそうな顔をする大作だった。
「あの、ふつつか者でございますけど、どうぞ末長く、なんでもおしかりになってくださいませ」
　赤くなったついでに、美沙緒はあらためてそこへ行儀よく両手をそえてあいさつをした。それは、本当は初夜の床入りをする前に、花婿のまくらもとに座ってするあいさつなのである。
「うむ。しかし、おれに美沙緒さんがしかれるかなあ」
「もう、さんではございませんのよ」
　美沙緒ははっきりといって大作の顔を見た。お床入りのあいさつをすませてしまうと急に気が楽になってきたから、我ながらふしぎである。
「あれえ、おれの方がもうしかられている」
「そんな冗談ばかし——」
　うらめしそうにいいながらも、美沙緒は自分がだんだん落ち着いてくるのを意識してうれしくなってくる。
　——もう御夫婦なのだもの、これが本当なのだ。
　そう気がついてみると、昨日までの自分の体と、今朝の体とでは、すっかり体が違っているはずなのである。この体は昨夜ちゃんと大作のものになっているのだし、男の命がこの体の中

に生きている、そう考えてもいいはずなのだ。

「久蔵はとうとう来ないねえ」

大作は思い出したようにいう。

「どうしたのでしょう、本当に」

美沙緒は甘い夢からさめたようにどきりとして、思わず大作の顔を見る。

「まさか加役組につかまるようなこともなかろうとは思うんだが、――竜平は鬼になっているだろうからなあ」

心なしか大作の目は暗い色をかくしきれないようだ。

12

その朝、大作は美沙緒をつれて、五ツ(八時)すぎごろ府中の旅籠を立った。

府中から日野へ二里八町、日野から八王子へ一里二十七町、ざっと四里足らず歩いて八王子の宿で昼飯を取り、後は美沙緒の足次第で行けるところまで行き、なるべく今日は無理をしないで旅籠へつくつもりだった。

「美沙緒、道中は二日目、三日目あたりがいちばん足に疲れが出るんだ。今日は無理をしないで、疲れたところで泊まることにしような」

「ええ」

昨日と違って、今朝の美沙緒の顔はなんとなくいきいきとしている。あいかわらず口数こそすくないが、足も案外に軽いようだ。

「今日はとても元気のようだね」

「でも、心配はありますのよ」

「どんな心配だろうな。やっぱり甲府のことを考えているのか」

「それもありますわ」

「そうかなあ。新十郎さんにはちょっとすまないが、美沙緒はもう大作のお嫁になってしまったんだから、あっちへわたすわけにはいかないんだ。あっちだって、わけを話せば、そう無理にわたせともいわないと思うんだがねえ」

「そうですかしら」

「よっぽど意地の悪い男ならとにかく、あっちにだって今まで音信を断っていた落ち度があるんだ」

常識からいえばそうなるはずだと大作は考えるのである。

「でも、もし竜平さんのような人だと、どんな無理をいうかわかりませんでしょ」

「うむ。まあ、それもそうなんだが――」

大作は苦わらいをしながら、

「その時はこういってやるつもりなんだ、これはもうわしの子を身ごもっていますとね」

と、ずばりという。

「恥ずかしい、そんなこと」

美沙緒はぱっと赤くなって、いそいで男のたもとをつかみながら、

「でも、もうそんなことは決してありませんとはいえませんものね」

と、小さな声でいう。

「うむ、いえないさ。ちゃんとおぼえがあるんだものな」

「赤ちゃんほしい、あたくし」

そんなことをいってうっとりしているところを見ると、そんなに甲府の心配をしているとも思えない。

「だから、甲府のことなんかもう気にしなくたっていいさ」

「気になどしていませんわ」

「じゃ、ほかになにが心配なんだね」

「心配はたくさんありますのよ」

「そんなにたくさんあるのか。おかしいなあ、一体なにがそんなに心配なんだね」

「あら、あなたはちっとも心配なんかありませんの」

わらいながら美沙緒が逆襲してくる。

13

「あの、こんど江戸へ帰ったら第一におうちをさがさなくてはならないでしょ」

「なるほど、そうだったなあ」
なあんだ、そんな心配かとは思ったが、そういわれてみると、大作にとってもこれは大きな問題になってくる。
「おうちを持てば所帯道具がいりますのよ」
「うむ、それはいるねえ」
「どんなものをそろえて、お金がどのくらいかかるか、美沙緒にはちっとも見当がつきませんの」
「そんなことは江戸へ帰ってから深川屋のおときに聞けばすぐわかるよ」
「うちでは女中をおくわけにはいきませんでしょ。あたくしお内職もするようになると思うんですけれど、おときに聞けばわかりますかしら」
美沙緒はもうそんなことまで考えているようである。
「おどろいたなあ、お嫁さんは内職までしてくれるつもりなのか」
「それは、なんでもいたしますわ。だんなさまが世に出る時まで、お嫁が苦労するのはあたりまえですもの」
「そうだなあ、おれは今のところ浪人者とおなじなんだからなあ」
「そんなことあなたが心配なさらなくてもいいんですのよ。あなたはいまにきっと出世なさる方なんですもの。今のうちはあたくしがよっぽどしっかりしていなくては」
美沙緒はなんでも一人でしょって立つつもりでいるようだ。
それにしても、昨日の二人の話とはなんと違ってしまったことだろう。あんなに心細がってめそめそと泣いてさえいた美沙緒が、たった一晩でこんなにも明るく強くなってくるとは、まったくふしぎな気さえした。
妻の座に座った女の強さ、今はまだそれが夢の中の強さでしかないだろうが、しかし、明日はこれが現実の姿になって、美沙緒も相当苦労することだろうと思うと、たのもしいような、

いじらしいような、――いや、それよりこのおれこそしっかりしなくちゃだめじゃないかと、大作はしみじみ反省させられてくる。
今日の二人は、あれこれとこれからの二人の生活の話に夢中になってたのしく歩きつづけ、いつか日野の宿を通りすぎていた。
日野から八王子へ一里二十七町、日野の宿を出外れると坂を一つ越して日野ガ原という草っ原道へ出る。ほとんど人家のない寂しい道で、しかも十八町あまりもつづく。
「美沙緒、少し怪しくなってきたよ」
ちょうど日野ガ原の真ん中あたりにかかった時、大作はぎゅっと美沙緒の手をつかんでいった。
「どうかしましたの、あなた」
美沙緒はまだなんにも気がつかないらしく、けげんそうな顔をして聞く。おそらく、もう江戸の追っ手のことなどすっかり忘れてしまっているのだろう。

14

この草っ原は荒れ地で土地が平らではなく、ゆるい丘と谷とが波のようにいくつもうねりながらつづいている中を、街道もまたゆるいつまさきのぼりの丘をのぼったりおりたりして十八町あまり行くのである。
その行く手の谷あいの左手のやぶのかげから、大作はちらっと浪人者らしいやつがのびあがるようにこっちをのぞいて引っこんだのを目ざとく見つけていた。
追いはぎ強盗のたぐいならそう恐れることもないが、江戸の追っ手が先まわりをして待ち伏せしているとなると、それだけの手を打っているだろうから、そう簡単にはいかない。
「美沙緒、もし敵が出たら、なるべくわしのいる近くへかくれて様子を見ているがいい」
「敵がいるのですか」
「うむ、あの向こうのやぶのかげに長坂組が先

まわりをしているかもしれない」
「じゃ、ここから引きかえしましょうよ、あなた」
　そんなむじゃきなことをいい出す美沙緒である。
「いや、あいつらは引きかえしても追いかけてくる。憎いやつらだ」
　大作はむらむらっと怒りがこみあげてきた。こっちは当たらずさわらずになるべく身をよけるようにしているのに、あくまでも追いまわして口をふさごうとする。あまりにもあくどすぎる。
「よし、おれは覚悟をきめた」
「どうなさるの」
「善人が悪人に遠慮することはない。今日の敵の出ようで、おれはやつらのうちにいる竜平にしろ三島にしろ、江戸へ引きかえして堂々と正面から闘ってやる。それでないと、おれたちは安心して所帯が持てないんだ」
「あの、兄もいけないんでしょうか」
「いけない。だいいち、三島さんがだらしがなさすぎるから、悪用人がのさばってこんなことになるんだ。美沙緒をお嫁にした以上、おれはそのお嫁を苦しめるようなやつはだれとでも闘ってやるんだ」
「あの、兄も兄嫁も長坂にだまされているのですわ」
　さすがに美沙緒は心配そうである。
「いやだ。美沙緒をいじめるやつは片っ端からたたっ切ってやる」
　大作はしっかりと美沙緒の腕をつかんで本当にそう思った。法外な出世などしようという野心はないが、世の片すみでささやかな愛の巣を作ろうとする、それさえじゃまになるというなら、こっちも断然たる決闘をもって報いるほかに生きる道はないのだ。
「あなたがそんなに怒ると怖い。もっと落ち着いてくださらなくては敵の手にのせられます

わ」
　大作はどきりとして、
「今日の美沙緒はたのもしいんだなあ」
と、その落ち着きぶりに思わず顔を見なおさずにはいられなかった。

15

「あたくし、もうあなたのお嫁なのですもの、これからはたのもしくならなくてはあなたが困ると思いますのよ」
　美沙緒は真顔になっていう。
「そうだとも――。美沙緒のだんなさまは少し人のよすぎるところがあるんだ」
　大作はいきなりこのいじらしい花嫁を抱きよせて口を吸ってやりたい衝動さえ感じてきたほどだった。
「でも、きっと勝ってくださいね。あたくしまだ死にたくありませんもの」
「よし、きっと勝つ。負けやしない」
　負けてたまるかと大作は思った。
　はたして、谷あいのやぶのあたりへかかると、ばらばらっと四、五人の浪人者が行く手へあらわれて、右手の草原へはみ出すように半円を作ってきた。
　先頭は市川佐二郎、しんがりは中垣兼助、中の三人ははじめて見る顔だが、いずれ聖天の地獄長屋から金で雇われてきたごろつき浪人どもにちがいない。
　すると、やぶのかげには金主の長坂重蔵が美沙緒をねらっているはずである。
「妙なところへ出てきたなあ、市川さん。なにか用かね」
　大作がわざと落ち着いて軽く出る。
「気の毒だがなあ、大作、そのお嬢さんをおとなしくこっちへわたしてくれぬか。そうすればおたがいにここで血を見ないですむ。我々もなるべくなら人は切りたくないんだ」
　いちばん右の草原の中へはみ出している市川

が、あいかわらずぬけぬけと虫のいいことをいう。

「そういえば、市川うじ、お浜姉御はここ数日姿を消しているというが、本当かね」

　お浜が金子新五郎と妙なことになったらしいという話は、忠吉の口から久蔵が聞いて、大作は江戸を立つ前日耳にしている。

「あの女は気まぐれだからなあ、どうやら金子とかいう昔なじみの浪人者にうまくだまされてしまったらしいな」

「ふうむ、それでいちばんがっかりしたのは市川さんじゃないのか」

「いや、わしは女にはこれで案外あっさりしているほうでな。——おぬしは、見たところ、もうそのお嬢さんとうまくやっている仲らしいぞ。そうれ、お嬢さんの顔が赤くなった」

　事実は赤くなって目は伏せたが、まだしっかりと大作の腕につかまっている美沙緒なのである。

「お察しのとおり、美沙緒はもうわしの妻なんだ。生木を裂くような罪なまねはしてもらいたくないんだが、どうだろうな、市川うじ」

「それが、どうもおれの一存では取り計らえないんだ。どうだ、ここは一応我々にそのお嬢さんをあずけて、貴公もいっしょにある人の前まで行ってもらう。そこであらためてその先方の人と直接に貴公、談じこんでみては」

　市川はもっともらしい顔をしていう。

16

「美沙緒、ちょっと下がっておいで」

「はい」

　美沙緒はすなおに六尺ばかり後へさがる。

　無論、到底一戦は避けられない。大作の心配なのは、目の前の五人より、むしろどこかにかくれていると思われる長坂重蔵のほうだ。できれば真っ先に長坂を倒して災いの根を断っておきたいのだ。

「市川さん、今日は長坂の姿が見えないねえ」

「なんだ、貴公は勘違いをしているようだな。今日そのお嬢さんに会いたいといっているのは加役の大東竜平さんなんだ」

「なにっ、竜平——」

　大作としては、それも考えられないことはない。竜平のやり方は、長坂などよりはるかに悪辣なのだ。

「竜平はいまどこにいるんだね」

「若だんなは日野まできて待っている。貴公とは友達の間柄なんだから、会えばきっと話がつくと思うんだ」

「貴公たちはどうしてそう甘いんだろうな」

「なにっ」

「竜平は、わしと美沙緒を手に入れれば、こんどは貴公たち五人を五人組み強盗としてつかまえる気でいるんだ。そんなことぐらいがわからんかなあ」

　さすがに市川はちょっと絶句して凶悪な形相にかわってきたようだ。

「そんなことはな、小僧、おめえに聞かなくても先刻御承知なんだ。どうせ危ない橋をわたらなけりゃ金にゃならねえ。それにゃどうしても貴様がじゃまなんだ。わかったかね」

「よくわかった。それで——」

「おい、やっちまえ」

　さっと市川は抜刀する。

　たぶんそうくるだろうと大作は見て、いちばんいい機会を待っていたのだ。

　いちばん腕の立つ市川と中垣が両端にいるのは、こっちが正面の三人に切りかかるのを待って、その左右から一気に切って出ようという作戦にちがいない。大作としては、その機を与えぬうちに正面の敵を切って前へ切りぬけるほかはないのである。

　——今だ。

　と思ったので、市川と同時に後の四人が抜刀したとたん、

「えいっ、――とうっ」
こっちは無謀にも似た抜き打ちを地をけって体ごと正面の敵の中へかけ、右を払って、かえす一刀で左をなぐ。
「わあっ」
「うぬっ」
まさかと思っていた正面の二人は、あっという間に左右へ切り倒され、どっとぶっ倒れていく間に、大作はあざやかに敵の剣陣の背後へ飛びぬけていた。
「それやった。油断するな、中垣」
「くそっ」
大作がくるりと立ちなおった時は、市川と中垣を左右にした敵の三人が、ぴたりと剣陣を敷いて前に立っている。

17

一瞬にして五人の敵を三人にしたのだから、緒戦は大作のほうが成功した。
が、残る三人にがっちりと剣陣を作られてみると、こんどは大作もそう無造作には切って出られない。しかも、美沙緒は敵のうしろに残っているのだ。
――しまった。
そう気がついて大作はちらっとそっちへ目を走らせたが、そこにはもう美沙緒の姿はなかった。
そうか、切りあいになったらすぐわしの姿の見えるところへかくれろといいつけてある。すなおな性分だから、さっそくそれを実行したのだろうと大作は見てほっとした。
「えいっ」
「とうっ」
緒戦に失敗した市川と中垣は、あきらかに憤然とした顔つきになって、こんどこそ切るか切られるかの腹をきめているらしい。
彼らがいうとおり、もしこの待ち伏せが竜平の指図だとすれば、

「おまえたちが大作を切ったら、ほうびの金をやる上に、おまえたちの前科は見のがしてやろう」
ああいうずるい竜平のことだから、そのくらいの条件は出しているのかもしれない。
――くそっ、ひきょう者め。
大作は竜平が憎い。あいつは三千両の軍資金を柏屋から出させるために平気で長持ち詰めにした美沙緒を惣兵衛にわたしたやつなのだ。こんどこそもう許せぬと思う。
その激しい忿怒が、今は節操もなにもない三人のごろつき浪人に向かって火のように燃えているのだ。
こいつたちを早く切ってしまわなくては、美沙緒がどこかその辺のやぶかげにかくれて生きた空もなくふるえているにちがいない。
――待っていろ、美沙緒。いますぐそばへ行ってやるぞ。
が、市川も、中垣も、初顔の真ん中の浪人者も、道場剣術からいえば腕はたしかに大作より一枚上のようだ。
こっちは持って生まれた度胸一つで三人の剣先をおさえてはいるが、思いきって仕掛けていく自信は到底持ちきれない。
三人の出ようを待って、まず仕掛けてきた者から切る、それ以外に手はない。自然、敵が大事を取ればそれだけ持久戦になってくる。
――長びくとこっちの息がつづくかな。
大作はふっとそれが心配になってきた。
明るい四月半ばの太陽が頭から照りつけて、大作はもう全身に汗を感じている。
いや、大作ばかりでなく、相手の三人も顔を赤鬼のように充血させて、三人とも額からぶつぶつと脂汗が吹き出している。
「えいっ」
「とうっ」
真ん中のやつが業を煮やしてじりじりと間合いを詰め出したようである。

——落ち着け、大作。
大作はぐっと一つ腹に力を入れた。

18

そのころ——。
美沙緒は大作にいいつけられたとおり、大作が二人を切って向こうへ飛びぬけたのを見ると、いそいでそこのやぶかげへ身をかくしていた。
——大作さま、きっとお勝ちになって。
胸の中で必死にそう念じながら美沙緒はやぶの中へ立って、目はやぶの透き間から気もそぞろに大作の姿を追っている。
青々とした草っ原の丘を背にして立った大作の姿は、男らしく本当にたのもしい。
が、敵は二人倒れて三人にはなったが、一人に三人、ぎらぎらと恐ろしい白刃が春の日に光って、なんともすさまじい殺気がここまでひたひたと波打ってくるようだ。
——死んではいや、大作さま。
いまは天にも地にもかけがえのない大切なだんなさまなのだ。一刻もそばを離れたくない恋しい人、大作はもう美沙緒の魂なのだ。
その大作が死ねば、美沙緒も死ぬほかはない。
——いっしょに死にますとも、あたくし。
だから、死んでもらいたくない。
世の中というものは、どうしてこんなに意地悪くできているものなのだろう。
血をわけた兄でさえたよりにならないから、美沙緒はお浜といっしょに家出をした。家出をしても、美沙緒にはこの世の中に一人もたのみになる人はいなかった。
しかも、その時はお浜でさえもう自分を裏切って、ちゃんとこっちをだましていたのである。
そして、お茶の水の桜の馬場で恐ろしい目にあうところを、偶然大作に助けられた。
それでもはじめは、本当にいい人なのかしらと、やっぱり少し怖かった。

あの深川屋の二階であんな風に二人で泊まるようになった時は、恥ずかしいというより、なにか怖いと思うほうが大きかった。
「そんなにわしが信用できないんなら、わしはもう知らん」
あの人は怒って部屋を出ていこうとした。
夢中であやまって、やっと床の中へ横になったが、本当にそれでもまだ体がふるえていた。
でも、翌朝目をさました時は、もう気持ちが変わっていた。
——この人だけはいい人なんだ。
明るい朝日の中であの人の澄んだ男らしいきれいな目を見た時、美沙緒は心からそう思った。
女ってふしぎなものである。一度いい人だと思いこむと、この人にならなにをされたってかまわないと安心してしまって、それがたちまち恋心にかわっていく。
それからはずいぶんひどい目にあいつづけだったが、いつも心の中にあの人がいてくれたので、一度も気がくじけるようなことはなかった。
もしあの人が胸の中にいてくれなかったら、自分はきっと今日まで生きていられる気力がなかったかもしれないのである。

19

「大作さま、——美沙緒の命の大作さま」
美沙緒はひしと胸のところで合掌して、恋しい男の姿からどうしても目を放すことができない。魂はもうとっくに大作のところへ飛んでいるのだ。
「あっ」
ふいに美沙緒は背後からだれかに組みつかれてどきりとした時には、もうくせ者の腕がへびのようにのどへからみついていた。
「助けて——」
わけもなく恐怖に見ひらいた目は、晴れた青空を見て、必死に手足をばたばたさせたが、たちまち息が詰まってきて、殺されるのだと全身

に悪寒が走った時は、もう意識が半分消えかかっていた。
「大作さま、——大作さま」
悲しく呼びながら、しかし、それはもう声にはならなかった。
体がどっとやぶの中へくずれ落ちて、もうだめだと思った時、せいせい息を切りながら、ふっと我にかえってきた。
気がついてみると、いつの間にか手足を縛られて、手ぬぐいでさるぐつわをされ、やぶかげの草の上へころがされている。
「だんな、荷造りはできやした」
そっと目をあけてみると、それは長坂と一味の中間喜久蔵である。
「よし、こっちへ運んでくれ」
用人長坂重蔵の声である。
「定、たのむぜ」
「合点だ」
足のほうを抱えあげたのは、これも三島家の中間定造だった。
頭のほうを喜久蔵が抱えて、ざわざわとやぶをかきわけながら裏のほうへ出ていくようだ。
——どうされるのかしら。
また長坂につかまってしまったのだ。恐ろしいには恐ろしいが、それより、大作さまはどうしたろうと、今はその方が気になる。
たった昨夜、やっと体が一つになって、これからはどんな苦労も二人でする苦労ととてもしあわせだったのに、やっぱりあの人とはない縁だったのだろうか。
美沙緒は絶望のあまり今はまだ涙さえ出なかった。
やぶの中の道をどのくらい運んで行かれたのか、そこに宿場駕籠が一丁待っていた。
「お嬢さん、おとなしくしておくんなさいよ。お屋敷へ帰れば楽にしてあげますからね。おとなしく駕籠に乗っていてくださいよ」
喜久蔵がそんなことをいいながら、定造と二

人でうまくその駕籠へ乗せてしまう。
たぶん、こっちを狂人あつかいにして、このまま江戸へ運んでいこうというのだろう。
「駕籠屋、静かにやってくんな。また暴れ出されるとやっかいだからな」
「合点でござんす。日野へ引きかえせばいいんだね」
「うむ、とにかくそうしてくれ。酒手ははずむからな」
とんと駕籠があがったようだ。

20

えんほい。
えんほい。
駕籠は日野ガ原の街道へ出て、威勢よく日野坂のほうへ駆け出す。
——こんどこそうまくいった。
駕籠の後からついて足を速めながら、長坂重蔵はやっとほっとした気持ちである。
昨日長坂がお信の方のいそぎだという使いをうけて、山ノ宿の平野屋から神保町の屋敷へもどったのはやがて昼に近いころだった。
「重蔵、美沙緒が今朝大作といっしょに甲府へ向かったそうです。知っていますか」
いきなり奥方にそういわれて、
「それは本当ですか、奥方さま」
と、さすがの長坂も思わず聞きかえさずにはいられなかった。
「うそか本当か、とにかくすぐに後を追ってみてください。ここへ五十両だけ都合しておきました。——わかっているでしょうね」
「わかっています」
大作と美沙緒の口をふさいでしまわないと、奥方は安心していられない立場にある。長坂はそれをよく知っているので、というより、美沙緒の体で柏屋から三千両引き出す筋書きは自分から話を持ちかけ、もしそれに成功したら特にわしを信用してもらえるでしょうなと、そこま

でなぞがかけてあるのだ。

だから、それを機会にもう一度、

「奥方、こんどうまくいかなければ、いよいよ手前も獄門首を覚悟しなければなりません。このほうもおわかりでしょうな」

と、あらためて念を押しておいた。

「そんなこと、あらためて口にしなくても、獄門首は信もおなじことでしょう」

お信の方はそういって、むしろしっかりおやりといいたげに、目に微笑さえ含んでいた。

——この二、三年は後家同様の奥方なんだからな。

しかも、勝ち気なお信の方には、そういう冷淡な主人に対する復讐という気持ちも多分にあるようだ。こんどこそ、こっちさえ成功すれば、いよいよおれの天下になると考えた長坂は、昨日のうちに市川佐二郎に浪人どもを集めさせて、中間喜久蔵と定造を供に加えて、夜道をかけてここへ先まわりをしていたのだ。

そして、ついに美沙緒はうまく手に入った。大作は浪人者二人を倒したようだが、後の三人までやられる心配はおそらくない。市川も中垣もこの仕事にうまく成功すれば三島家へ仕官させてやろうと約束してある。こっちも今日は必ずうまくやるにちがいない。

（そこで、重蔵、美沙緒はどうする）

（無論、柏屋へはめこんで金にするさ）

（このまま運びこんでしまうのかね）

（いや、途中で荷造りをしなおさなくちゃならないだろうな。駕籠より長持ち詰めのほうが、やっぱり運びいいだろう）

（そのとおりだ。そして、その時役得するという手もある）

そんな自問自答をしながら、ひょいと長坂の胸の中へ悪魔がかま首を持ちあげてきたのである。

21

若い男と女が、とにかくいっしょに幾日か逃げまわって歩いていたのだ。美沙緒はもう大作に肌をゆるしているにちがいない。

さっき二人はこの草っ原道をぴったりと肩をよせあって歩いていた。あの美沙緒の安心しきった体つきを見てもそれがよくわかる。

かまっておもしろいのはむしろ三十女の脂の乗りきったお信の方のほうだろうが、美沙緒のまだ娘々した様子にも、どんな恥ずかしがりかたをするか、長坂は急に男心が動いてくるのだ。

——どうせ柏屋に売って口をふさぐか、それでなければ殺してしまわなければならない娘なんだ。

日野の宿で中食をとって、いっそわがものにしてしまえば、無理に長持ち詰めにしなくても、あきらめておとなしく江戸までついてくるかもしれない。それに、美沙緒をひそかに生かしておくということは、万一お信の方がずるく立ちまわって、こっちの要求をこばもうとした場合のいい責め道具にも使えるのだ。

駕籠はやがて草っ原道から日野坂へかかろうとしていた。

長坂がそんな妄念にとりつかれながら、駕籠がゆれる度に垂れの間からちらっちらっともれる美沙緒の紫矢絣の着物の色を目に焼きつけていると、

「その駕籠、しばらく待て」

ふいに、右手のやぶのかげから行く手へ、加役らしい旅支度の若い同心が一人、手先を二人したがえて飛び出してきた。

「あっ、——御用人さん」

先頭を走っていた中間の喜久蔵は、相手が悪いと見て、すぐうしろの長坂を呼ぶ。

——しまった。

重蔵はその同心の顔を見るなりどきりとした。口こそきいたことはないが、たしかに大東

配下の小宮松吉である。
竜平にとっても大作と美沙緒は目の上のこぶなのだ。いわば共同の敵ということになるのだが、
「ようござんすか、御用人さん、その次に口をふさがれるのは御用人さんとあたしなんですからね」
と、お浜が底意地の悪い目を光らせていっていた言葉がとっさに長坂の頭へうかんでくる。
――そうか。こいつ竜平の筋書きにちがいない。
こっちに大作と美沙緒を片づけさせておいて、こんどはこっちをその罪におとす。
すると、まさかとは思っていたが、これもお浜がいっていたとおり、お信の方と竜平の間はもうただの仲ではないということになる。つまり、こっちは迂闊にもまんまとその二人の手にのせられたことになるのだ。
くそっと思いながら、長坂は度胸をきめて、ゆっくり美沙緒の駕籠のそばを通りぬけて小宮の前へ出ていった。

22

「失礼ですが、江戸神保町の大東さま御配下の方のようですな」
長坂は如才なくこっちから声をかけていった。
「さよう、加役配下の同心小宮松吉と申す」
「お役目御苦労に存じます。手前は大東さま前屋敷の三島家の用人長坂重蔵ですが、なにか御用ですか」
「役目によってその駕籠の中を改める。垂れをおあげくだされたい」
小宮はにこりともせずにいう。
「駕籠の中は三島家の当主の令妹美沙緒どのです。お気の毒にも多少逆上気味にて家出をされ、甲府へ向かったと知らせてくれる者がありましたので、主人の申しつけにより手前が後を追い、やっとこの日野ガ原で追いついてただいま江戸へおつれするところです。手足を縛ってありますのはそのためで、その点誤解のないよう願います」
長坂はあらかじめ先手を打ったつもりだった。
「お手前、いまの言葉にしかと相違ないか」
「相違ありません。御胡乱と思われるなら、この中間どもに聞いていただきたい。これなるは二人とも三島家に奉公中の者どもです」
その中間二人、喜久蔵と定造は、駕籠のわきまでさがってひざまずき、どうなることかと上目づかいにじっと小宮の顔色をうかがっているようだ。
「お黙りなさい。われらは三島弥十郎どのからその方の取りおさえ方を依頼されてまいっている者――、その方は数日前三島家の腰元お浜なる者と共謀して美沙緒どのに家出をそそのかし、その途中浅草のごろつき浪人どもをかたらい、当時横行する南蛮組と称する浪人強盗をよそおって一度は美沙緒どのを強奪いたしたるも、まもなく美沙緒どのに逃げられ、その後あくまでも美沙緒どのを取りかえそうと執念深く追いまわして、このほど甲州路へ走った様子があるから取りおさえてくれるようにと三島家の訴えによって立ち向かっているのだ。なわ目の恥辱がうけたくなかったら、美沙緒どのを神妙に当方へわたし、われらと同行して江戸へもどりなさい。それとも、手むかいいたせばこれにて召し捕るが、どうだ、重蔵、神妙にするか、返答いたせ」
「これは驚きましたなあ」
あきらかにお信の方が竜平と共謀してこっちを一杯くわせたのだ。が、ここでそれをあばいてみたところで、こっちの首はつながらない。
早くもそう見てとった長坂は、
「よろしい、それは主人の大きな誤解なんだが、ここでいくら弁解してみたところでむだでしょ

う。一応小宮うじのいうとおりにして、江戸へ立ちかえった上、あらためて主人と対決することにしましょう」
と、あっさりかぶとをぬぐことにした。
「さようか――。しからば、これへ美沙緒を出していただこう」
小宮は油断なく重蔵を見すえながらいう。

23

「小宮さん、美沙緒どのは本当に狂っているんだ。なわを解けば暴れ出す。まあ、あなたがたの手でなわを解いてみていただこう」
長坂はふて腐れたようにいいながら、それとなくあたりを目でさがしている。
敵は若い小宮一人に手先二人、どこにも味方がかくれているようには見えない。
それならこっちも、自分と、喜久蔵、定造の三人だ。小宮をたたっ切ってしまえば逃げられる、ふっとそんなずぶとい気になってくる。
小宮は油断なくこっちをにらんでいたが、
「おい、安、辰と二人で駕籠の中を出して、なわをといてみろ」
と、一足さがって控えているすっぽん安とどぶ辰にいいつけた。
つい目がうっかり二人のほうへ動いた、そのほんのわずかなすき、
「えいっ」
一足踏みこみざま長坂が火のような抜きうちをかける。
「おうっ」
その実、小宮は少しも油断はしていなかった。というより、むしろどうせ生かしておいては面倒なやつなのだから、わざと誘いのすきを見せたというほうが当たっている。
同時にこっちからも踏みこんだ小宮の抜きうちのほうが間一髪早く、
「わあっ」
長坂は半分抜きかけた手の肩のつけ根のあたりからだっと横なぐりに切りこまれて、大きくのけぞりながら草の中へぶっ倒れていく。
「あっ」
向こうの下郎二人も、やや離れた草っ原の中に逃げ腰になっていた駕籠屋二人も、いや、こっちの安と辰も、一瞬ぎくりと棒立ちになる。
「安、辰、下郎二人を逃がすな」
目を引きつらせた小宮がとっさに叫ぶ。
「いけねえ」
喜久蔵と定造は真っ青になって、がさがさと灌木林の中へ脱兎のごとく逃げこむ。
「それ、逃がすな」
「へえ、御用だっ」
「神妙にしろ」
安と辰もつづいて猟犬のようにがさがさとやぶの中へ躍りこんでいく。
駕籠屋二人は反対がわの草っ原の丘へ後も見ずに駆けあがって、たちまち丘の向こうへ姿を消していた。
小宮はまだ血刀をさげたままじっと長坂のほうへ目をやった。右腕がぽろりと落ちてそこからおびただしく血を噴き出しているが、まだ息はあるようだ。
すぐに手当をしてやれば命だけは取りとめるかもしれないが、このままでほうっておけばそのまま息が絶えるだろう。
「小宮、よくやったなあ」
そこへ、やぶの中から手先一人をしたがえてぬっと出てきたのは、筆頭与力の伊藤権太夫だった。

風かおる

1

そのころから急に風が変わって、高尾山、小仏峠のほうから黒い雲がぐんぐん空へひろがり出してきた。

肌にひやりとする一陣の風が、ざ、ざあっと草っ原の青草を吹きなびかせ吹き去ったと見る間に、頭の上の太陽がぬぐうように黒雲にかき消され、日野ガ原はたちまち夕方のような暗さになってくる。

夕立という季節にはまだ少し早いが、どうしても雷雨になりそうな気配で、その不気味な黒雲は天翔ける妖魔のごとく、江戸の空へ空へとまっしぐらに走っていくようである。

加役の小者の手でなわをとかれ、やっと体の自由を得て駕籠から出て立った美沙緒は、

――やっぱりない命。

さっきからがっかりして、そう覚悟をきめていた。

たとえ長坂の手から助けられても、それが加役の竜平の配下では、まるでおおかみの手からとらの手にわたったようなもので、到底助かる命とは考えられないのだ。

「あなたは三島家の美沙緒どのですな」

「はい」

「われらは大東組の配下の者で、わしは伊藤権太夫。三島弥十郎どのの御依頼により、わざわざあなたをお迎えにまいったのです。あやうく間にあって、御同様になによりでした」

権太夫が如才なくそんなあいさつをする。

「ありがとうございました」

美沙緒はつつましくおじぎをしてから、

「それについてお願いがございます」

と、しゃっきりと顔をあげた。あたくしはもう鈴村大作の妻なのだ、せめて死に際は立派に散って、あとであの人にほめてもらわなくてはと、我ながら自然と腹がすわってきたのである。

「その願いというのはどんなことでしょうな」

「つれのあたくしの夫、鈴村大作と申す者が、この原の真ん中ほどのところで悪い浪人どもに取りかこまれ、切りあいになっております。勝負はどうなっておりますか、どなたかに一度見てきていただきとうございます」

「なるほど、鈴村大作どのですな」

権太夫はちょっとなにかいいたそうな顔をしたが、

「小宮、おまえすぐ見に行ってあげてくれ」

と、思いかえしたように小宮にいいつける。

「かしこまりました」

「ひと雨きそうですな。わしは日野の上田屋まで引きかえして待ちあわせることにしよう」

「上田屋でございますな、わかりました。では、いそいで行って見てまいります」

小宮は刀をぬぐって鞘におさめ、もう風にさからって走り出す。

「友吉、ついてまいれ」

「はい」

「美沙緒どの、いそぎましょう」

権太夫は美沙緒と小者友吉をうながして、空の黒雲にせき立てられるように日野坂のほうへ歩き出す。

2

そのころ――。

市川たちの三人を相手にしている大作は、じりじりと間合いを詰め出した真ん中のやつを見て、この一合が勝負のわかれめになると直感した。

「えいっ」

「おうっ」

真ん中のやつの進出と同時に、その左右の市川と中垣がすっとこっちの側面へまわり出したのだ。

正面の敵に対して大作のほうから仕掛けていっても、敵の仕掛けと同時にこっちが踏みこんでも、その体勢のくずれへ左右から市川と中垣が切って出る。

こう三人いっしょに気をあわせてかかられては、いかに大作でも十中の八、九のがれる道はない。

残されたただ一つの道は、正面の敵と相うちを覚悟で、一気にもろ手突きに出て向こうへ飛びぬけることだけである。

——よし、やれっ。

大作はとっさに度胸をきめて、こっちからも無言でじりじりと攻撃圏内へ間合いをつめて出ようとした時、

「おい、待て——。双方、待った」

日野坂のほうの丘を一散に駆けおりてきて大声で叫んだ旅の浪人風の男がある。

「なにっ」

その声に思わず市川が振りかえって、

「あっ、坂田——。おぬしは慶三」

まったく唖然としたように棒立ちになる。

「なにっ、慶三だと——。おお、坂田」

ぎょっとしたように中垣も刀をひく。

今戸の柏屋の寮であの晩お浜のさそりの毒で倒され、まる裸にされて外蔵の前へ寝かされていたまま、だれかにどこかへ死骸を運びさられてしまった、そう考えて仲間の者たちはみんなあきらめていただけに、いまここで無事な姿を見た一瞬、市川も中垣も幽霊としか思えなかったのだろう。

「びっくりしているな。おれはその坂田慶三だ。偽物でも幽霊でもないから、安心して、まあ刀をひいてくれ」

「よく生きていたなあ、坂田。あれから、おぬし、どうしたんだ」

市川はどうにもまだふにおちない顔つきである。

「まあ待ってくれ」

坂田は二人を制してから、

「鈴村大作うじですな」

と、こっちへ呼びかけて前へ進む。

「さよう、わしは鈴村だが」

「拙者は甲府の峰村新十郎さんという人からたのまれてあなたの後を追ってきた坂田慶三という浪人者です」

「なに、甲府の峰村新十郎さんから」

こんどは大作が唖然とする番だった。

「峰村というと、美沙緒に関係のある」

「そうです。もと三島さんの組下だった峰村新十郎さんです」

すると間違いなく美沙緒のいいなずけの峰村新十郎ということになる。

3

「坂田うじ、貴公は江戸のほうからきたようだな」

大作は思わず息をのむ。

「そうです。江戸からきたんだが、ちょっと待っていただきたい。市川たちのほうから話をつけましょう」

坂田はそうことわって、もう一度市川のほうを向く。

「貴公たちな、この仕事はもう長坂から金をもらっているんだろう」

「うむ、前金はとってある」

「その前金だけでこんどは我慢しておくほうがいいようだぞ。というのは、わしは今ここへくる途中、加役の伊藤権太夫が配下をつれて日野坂の下で網を張っているのを見てきているんだ」

「なにっ、加役が出張っているのか」

あっというように市川は中垣と顔を見あわせている。

「わしの考えでは、加役は貴公たちに鈴村うじと美沙緒どのを切らせ、それがすんだところをこんどは自分たちが貴公たちを召し捕って二人を切った罪におとす、そういう腹にちがいないんだ。——長坂重蔵はどうしたんだね。もう美沙緒どのをさらっていったのかね」

「たぶん、そうだろうと思う」

「それじゃ、今ごろ、重蔵も加役につかまっているな。あれも相当な悪用人だからな。早くしないと、こんどは貴公たちの番だぞ」

「そうか——。加役に利用されている、結局は加役にねらわれるということは、長坂も我々も承知はしているんだ。しかし、今日の仕事は江戸を離れてのことだし、まさかうしろに加役の目が光っているとは気がつかなかった。——なあ、中垣」
「まあ、いまさら愚痴をならべてみたってしようがない。おれたちはどうせ追いまわしに使われているんだからな」
　中垣はあきらめよく苦わらいをしながら、
「しかし、よくおぬし命が助かったなあ、慶三」
と、あらためて坂田を見なおしている。
「おれは、あの晩、今戸の外蔵の前から妙な人物に助けられたんだ。とにかくだな、これはいやみでいうんじゃないぜ。あの晩わしの仲間は大勢いた。しかし、みんな自分の体がいそがしいんで、わしを助けてくれる者は一人もいなかった。それを、わしは、縁もゆかりもない、やっぱり体のいそがしい人間に、命がけで助けてもらった。おかしな話だろう、諸君」
　さすがに市川も中垣もかえす言葉がないようだ。
「しかもだな、そのわしを助けてくれたという人物は、なんと、さそりのお浜の亭主なんだ。世の中は実にたのしくできているものなんだ、心がけのいかんによってはな」
「お浜の亭主、——本当か、坂田」
「本当だ。しかし、この話は後日にゆずろう。貴公たちは早く逃げないと加役につかまる。いそいだほうがいいぞ。そして、できれば当分江戸へ帰らないほうがいい。貴公たちは五人組み強盗の片われとしてねらわれているんだからな」

4

　ここもすでに風が変わって、あわただしい黒雲が太陽を塗りこめると視界はたちまち荒涼たる草っ原に変貌してきた。

　天変地異は悪党にとっていっそうおのれを責められているような不気味さを感じさせるのだろう。
「坂田、じゃ我々は貴公の忠告にしたがってここをずらかることにするからな、後をたのむぞ」
「よし、引きうけた」
「おい、行こう」
　市川は刀をおさめて二人をうながし、一度逃げるときまるともう待ったなしにどんどん八王子のほうへ走り出す。
「慶三、命があったらまた会おう」
　中垣がそんな負け惜しみをいって、連れといっしょに市川の後を追う。
「鈴村さん、見てのとおりだ。失礼した」
　坂田が苦わらいをしながらこっちへ帰ってくる。
「いや、さっそくだがなあ、坂田うじ、その峰村新十郎さんはいま江戸にいるのかね」
　美沙緒のことも気になるが、とにかく峰村の話からだと、大作はいそいで血刀をぬぐって鞘におさめる。
「そうだ、まずこれを読んでもらったほうが早そうだな」
　坂田は両手を内ふところへ入れて、油紙にくるんだ書状のようなものを取り出す。
「これが峰村うじからたのまれてきた手紙なんだ」
「ありがとう——。さっそく拝見する」
　手早く油紙をとりのけると、鈴村大作殿と書いた書状が出てきたが、上封には峰村の署名はない。
　中をひらいてみると、達筆にこう書き流してあった。
「我ら同志ここ二、三年来の野望ようやくその緒につき、今夜半壮途にのぼるに際し、倉皇のうち乱文にて一筆呈上つかまつり候。御判読願いあげ候。
　過日今戸河岸にて大兄と奇遇、その折、思い

もかけず突然美沙緒どのの名を耳にいたし、なんと日本は狭きものかなと啞然たることしばし、それとなく事情を聞いていくうちに、美沙緒どのの事情、大兄の俠気、胸あたたまる思いに感激つかまつり候。
　拙者儀壮図を計って甲府脱走の時、すでに美沙緒どのとのことは断念、いや、正直にいえば、親ども存生なればともかく、双方死去いたせし今日、いいなずけなどということは空文も同然と忘却いたしおり候。
　不埒かくのごとき男が、多少なりと美沙緒どのの純情に報い得たるは望外のしあわせにて、幸い美沙緒どのは大兄を得て後事の憂いなしと安心の上、勇躍日本を去るものに御座候。
　ここにあらためて美沙緒どのの儀は一切大兄に委託つかまつり候間、くれぐれもよろしく願い上げ候。大兄の俠気を愛する小生としては、他にいうことなし。海のかなたより切に御自愛を祈りおり候」
　署名は南蛮太郎こと峰村新十郎となっている。

5

　――南蛮太郎が峰村新十郎。
　あまりにも意外だったので、大作は啞然としながらもう一度その手紙を読みかえしてみる。
　そして、そうだ、この手紙はなによりも早く美沙緒に見せてやらなければならないと気がつくと、手早く巻いてひとまずふところへおさめ、夢中でさっき美沙緒の立っていたあたりまで走った。
「美沙緒、どこにいるんだ、美沙緒」
　そこのやぶのほうへ大声で呼んでみたが、灌木林は、ざ、ざあっと強い西風に吹きなびかれて激しくうずをまきながらこっちの声さえ吹きちぎれて飛んでいく。
「美沙緒、返事をしてくれ、美沙緒」
　大作はその強風にいどむようにわめき立てな

がら、いまにもやぶの中へ駆けこんでいきたい衝動に駆られてくる。
「鈴村さん、美沙緒どのは長坂につれていかれたんじゃないかなあ」
　そこに倒れている二人の浪人者たちの様子を見てやっていた坂田が走り寄ってきて気の毒そうにいう。
「そうか――。そうかもしれないな」
　大作はくちびるをかみしめながら目を血走らせているのだ。
「大丈夫だ、鈴村さん。日野坂の下には加役が網を張っている。いそいで行ってみよう。きっとまだ間にあう」
「うむ」
　しかし、たとえ長坂の手から加役の手に移っても、早く行ってやらないと命のあぶない美沙緒なのである。
　大作は坂田にさそわれるように日野坂のほうへ足を速める。
「一人は腰、一人は太股だから、二人とも命だけは助かりそうだ。貧乏ほど怖いものはないねえ、鈴村さん」
　歩きながら坂田がいう。自分もまた貧しいゆえに悪浪人の仲間入りをしてお浜のさそりの毒で死にそこなっているのだから、人ごととも思えないのだろう。
「あの二人を見てきてくれたのか、坂田うじ」
「うむ。鈴村さんはよっぽど腕が立つようだな」
「いや、おれは人は切りたくないんだ。おれがここでやられると美沙緒がかわいそうなんだ」
「そうだろうなあ。太郎さんもそういっていた。鈴村うじは情が深いから、美沙緒どのはしあわせだってね」
「そうそう、貴公はお浜の亭主に助けられたといっていたようだが、その亭主ってのは五郎さんか」
　大作はふっと思い出して聞いてみる。
「五郎さんを知っているかね」

「いや、会ったことはないが、お浜が五郎さんといっしょになったという話は、こんど江戸を立つ前に聞いているんだ」
　空は真っ暗になって、遠いところで雷鳴さえしてきたようだ。

6

「世の中なんてふしぎなもんだなあ、鈴村さん。あの晩、わしは五郎さんと四郎さんに助けられて、北隣の丸屋の寮の天井裏へかつぎこまれたんだ。あの天井裏には隠し間が——」
「慶三さん、それをわしの前でいっちゃいけない。わしはまだ公儀の旗本の家に籍があるんだ。今日の話はおたがいに夢物語ということにしておきたいんだ」
　大作はいそいで坂田に注意する。
「わかった。太郎さんもそういっていたが、やっぱりあんたは本当の侍だ。いっしょに南の国へ行けないのが残念だといっていた」
「太郎さんたちはもう船へ乗ってしまったのかね」
「うむ、ゆうべの九ッ（十二時）すぎに船出をした。太郎さんも五郎さんも、おさわ、忠吉、辰造、それからお浜も、みんな鈴村うじによろしくといっていた。特にお浜はねえ、美沙緒どのにひどいことをしているんで、よくあやまっておいてくれといっていた」
「そうか、忠吉も辰造もねえ」
　二人には隅田村のかくれ家で散々世話になっているだけに、大作はなにかじいんと胸が熱くなってくる。
「海は真っ暗だったが、ゆうべは星がきれいだった。わしはそれからすぐいまの手紙を持って江戸を立ってきたんだが、——船が帆をあげて動き出すのを見た時は、男子の本懐ここにありとわしは天に向かって叫びたいほど胸がおどった。考えてみると、日本は狭いなあ、鈴村さん」
　坂田は興奮したように、だれに遠慮もなく大

きな声でいう。
　その声さえすぐに風に吹きちぎれていく。
「そうか、もうみんなゆうべ立ってしまったのか」
　南蛮太郎のつくしてくれた好意の数々がいまさらのように思い出されてくる。
　日本にいれば、いつかは相入れぬ立場に立たなければならないと内心こころづらかったが、今は安心してその好意に感謝ができる。しかも、それが美沙緒のいいなずけの峰村新十郎だったとは——。
「おかしなもんですなあ。わしはさそりのお浜だけはどうしてもたたっ切ってやろうと思っていた。そのお浜が命の恩人の五郎さんの女房になってしまったんじゃ、もうそういうわけにはいかん。それに、五郎さんがいうんだ。お浜は日本で散々あばずれてあんまりいいことはしてこなかった。その罪のつぐないに、南の島へ行って新しい日本を作り、十人ぐらいは子供を産ませてやるんだとね。——南蛮組の考えていることはさすがに大きい。みんな向こうへ行ってかせいでこようというんじゃなくて、向こうへ新しい日本を作ろうっていう考えなんだからなあ」
「坂田うじはどうしていっしょにその船に乗らなかったんだね」
「大作さんだから本当のことをいうが、わしは第二軍をこしらえておく大事な使命を託されている。あんたも美沙緒さんといっしょに行ってくれるといいんだがなあ」

7

「第二軍——」
　大作はどきりとした。が、これは深入りをしてはならない話だと思ったので、
「慶三さん、あぶないことだけはもうやめてもらいたいな。これはわしの希望だ」
　と、それだけをいっておく。
「ありがとう。しかし、鈴村うじは誤解してい

るようだな。第二軍というのは、第二の南蛮組という意味じゃない。我々は人員だけをそろえて迎えの船を待つ、そういう意味の第二軍なんだ」
　坂田は明るく答えながら、
「あっ、あそこに駕籠がころがっているぞ」
と、急にそっちへ走り出す。
　もう日野坂に程近いあたりだった。
　その駕籠のそばに解きすてた細引きがそのままになっていて、その駕籠の三、四間向こうに長坂重蔵の死骸が仰向けになってころがっている。
「やっぱりそうか。こりゃ抜きうちにやられたんだなあ、鈴村さん」
「そうらしいな」
　すると、美沙緒はここまで長坂のために駕籠で運ばれ、ここで加役の手に移ったということになりそうだ。
「慶三さんは加役の顔を見たのかね」
「うむ、はっきりとじゃないが、そこのやぶかげからちらっとのぞいていたのは、たしかに小宮松吉とかいう若い同心のようだった」
「何人ぐらいいたかわからないだろうな」
「さあ、そう大勢いるようでもなかったようだがねえ」
「なるほど――」
　加役としては、大作は市川たちに切られるだろうとみているから、そう大勢の必要はない。それに、人数が足りなければ、いくらも土地の目明かしが使えるのだ。
「とにかく、日野へいそいでみよう」
「よかろう。美沙緒どののことはきっと慶三が引きうける。太郎さんからくれぐれもたのまれているんだ」
　坂田は意気ごむようにいって先に立って走り出す。
　ぱらぱらっと大粒の雨が降り出してきたからでもある。
　草っ原がつきると日野坂へかかる。

――美沙緒、もうしばらくの辛抱だよ。
　大作は気が気ではない。加役はまさか美沙緒を切るような心配はないだろうが、そのかわり一服盛るという手段がある。どっちみち生かして江戸へつれて帰るわけにはいかない美沙緒なのだ。
「憎いなあ、鈴村うじ。南蛮組は命を張って江戸の悪豪商から軍資金こそ集めたが、決して外道は働かなかった。加役は役目のかげへかくれて自分の都合の悪いやつはそっと口をふさぐ。大体、今の役人どもは町人を泣かせて、その上へあぐらをかいて、自分たちだけがうまい酒をくらっていやあがるんだ」
　昂然と罵倒する坂田の声が、たちまちざあっと強くなってきた雨脚にたたき消されていく。

8

　この雷雨は江戸の空へきて、かえって風も強く、雨も雷鳴も猛烈をきわめていた。
　竜平はちょうどその時、お信の方の居間へきて、その後の打ち合わせをしていた。
　当主三島弥十郎は昼少し前に長崎奉行になる運動に他出していて留守である。
「大丈夫ですのよ。あの人はのんびりしていますから、どうせ夜でなければもどりはしません」
　お信の方はあいかわらず物に動じない顔つきで、平然とわらっている。
「それはさぞお寂しいことでしょうな」
　竜平も負けずに冷静な顔をよそおい、女のほうからじれてくるのを待つつもりだ。
「いいえ、ちっとも寂しくございませんのよ。もう慣れておりますから」
「そうかなあ。女の体ってそんなもんなんですかねえ」
「そんなものって――」
「ずばりといえば、体がさびしくないかっていうことです」
「さあ、体に聞いてごらんなさいましな」

わざと取り澄まして、この品のいい大丸髷は男を悩殺するような妖艶な微笑をうかべてみせるのである。
「それでよくあんたあの悪用人に手ごめにされずにすんできたなあ、わしはふしぎでたまらないんだ」
「そんなこと、ふしぎがることはありませんのよ。女がきちんと行儀よくしてすきさえ見せなければ、男だってどうすることもできないものなのです。――そういえば、竜平さん、長坂は今日あたり美沙緒に追いつくはずではないかしら」
ひらりと体をかわして、この三十女は涼しい表情になりながらそんなことを聞く。
「無論、追いついているでしょう。大作たちは、ゆうべは布田泊まりか、精々歩いても府中泊まりですからな。今日はどうしても日野から日野ガ原を通らなければならない」
「そこは寂しいところなのですか」
「広い草っ原、十八町あまりの間、人家は一軒もない。しかも、草っ原が波のように丘から谷へ、また丘へと、まったく都合よくできていやがるんだ」
竜平は調子にのってしゃべってしまってから、
「しかし、どうなんだろうな、大作は人間はちょいと甘いが、腕のほうはかなりたしかだからな」
と、ふっとそれが不安になってくる。
「あなたがそんな弱気じゃ困りますわ。加役の方たちも行っているのでしょう」
お信の方は竜平を信じきっているような口ぶりである。
「無論、こっちからも行っちゃいる。こっちは権太夫によくいいつけてあるから大丈夫だとは思うんだが、――大丈夫でないと、ちょいと困ったことがあるんだ」
「どんなこととなの」

「大作の兄貴が、こんどお目付役にあげられたんだ」

9

「まあ、滝さまがお目付役にねえ」
お信の方はあまり驚いた様子もない。
目付役は若年寄の下につき、旗本の不正を糾弾するのが役目だから、非常に大きな権力を持っている。定員は本丸に十人、西ノ丸六人だから、これにあげられる者は人材とされ、またその出世を人からうらやまれもした。
竜平にとって、大作の兄滝主水が目付役にあげられたことは、うらやましいなどという問題ではなく、身にうしろ暗いことがあるだけに恐ろしいのだ。
「お信さんはあんまり驚かないんだなあ」
「なにをですの――」
「お目付役にわたしたちの不義が知れたら、どういうことになるか怖くないのかね」
「知れないようにすればよろしいのでしょう」
平気でわらっている。
そのころから空が真っ暗になり出して、雷鳴といっしょにざあっと雨が降り出したのである。
「おかしな天気だなあ。春雷ってやつかな」
竜平は自分たちのことをなにか暗示されているんじゃないかというような不気味な気がして、我にもなくまゆをひそめる。
「おや、吹きかけるようですね」
お信はすらりとすそをひいて立って足早に廊下へ出ていくと、そこの雨戸を手早くしめはじめる。
向こうでも女中たちが急にきたすさまじいような雷雨にきゃあきゃあにぎやかな悲鳴をあげながら方々の雨戸をしめているようだ。
「まだ夕立という時候には少し早すぎるんじゃないかしら」
そこの障子をしめてそんなことをいいながら

元の座へかえるお信の方のちらっと白縮緬がこぼれるすそさばきが、雨戸をしめきってたそがれどきのようにどんよりと暗くなった座敷だけに、竜平の目に白々と焼きついてくる。
　と見ているうちに、紫色の火花がかっと座敷中をつんざくように走って、すぐ頭の上を家鳴り震動させながら雷鳴がとどろきわたっていく。
「さすがだなあ、お信さん」
「なにがですの」
「あんたはお目付役が怖くないだけあって、雷もちっとも怖くないようだな」
「あら、竜平さんは雷が怖いの」
　にっとわらった顔がいかにもこっちを子供あつかいにしているような取り澄まし方にも見えて、しかも目に三十女らしい濃艶さを含んでいる。
「お信――」
　その声さえ外の風雨に消されがちな天候異変に、竜平もまたふいにむらむらっと悪魔のような興奮に駆られてきた。
　今戸の空き屋敷で見た白蛇のようにのたうちまわって歓喜する女体を、もう一度この雷鳴の中で見てやりたい、お信があまりにも取り澄ましているだけに、そんな火のような欲望がわいてくる。
　弥十郎が留守だということも、竜平の気持ちをいっそう大胆にしたようだ。

10

　思いきった悪魔の火遊びに酔いしれている姦夫姦婦には、頭の上でとどろきわたるすさまじい雷鳴も、庭を狂いまわるごうごうたる風雨の音も、ほとんど耳に入らなかった。
　いや、間断なく座敷うちへ火花を走らせる紫電の強烈な光は、雄にところきらわずかみつかれ、指のあとが残るほどつねりさいなまれる度にのたうちもがく全裸の女体のあやしいまでに

ねっとりとした肌の白さに炎となって明滅し、庭をたたきつけてうずまく風雨の音は、苦痛にうめき、歓喜に口走る雌の悲鳴にも似た痴語くぜつをその場で吹き消していくから、この座敷の地獄絵巻きは二人きりのもので、他へもれる心配は少しもなかった。
　この異常な雷雨にとじこめられた一間で、雄はあくなき雌の狂態に堪能し、雌はだれはばからぬ女体の歓喜に心ゆくまで陶酔して、長い悪魔のたわむれを終わるころ、雷雨もようやく下火になって、西の空から明るみがさしはじめてきた。
「お信、おれたちはよっぽど悪運が強いんだな」
　さっさと身支度をなおしてしまった竜平は、もうそこへきちんと座りながら、まだうしろ向きになってゆっくり髪をなおしている女にいった。
「どうして、竜平さん」
「本当なら、天帝の怒りにふれてここへも雷が落ちてもしようがないことを我々はやっていたんだ。しかし、我々はこうして助かっている」
「だって、あたくしは天帝にしかられるようなこと、なにもしていませんもの」
「へえ、そうかなあ。たった今、殺して殺してといって泣き声をあげたのはだれだったっけな」
「竜平さんにならいつ殺されてもいいんですのよ。あたくしかわいくってしようがない」
　お信の女体にはまだ甘いいまの余燼が濃厚に残っているような声音である。
「そんな髪なんか後にして、早く帯をしめろよ。人に見つかるとことだぜ」
「ふ、ふ、御自分でみんな解いてしまったくせに」
「いいから、早くしてくれっていうのに」
　竜平は自分で満足してしまうと、やっぱり人目が怖くなる。
「だって、今はまだ立てませんのよ」

わざと若い竜平をからかって、ゆうゆうと余燼をたのしんでいるようなお信である。
　そのお信がやっと元の姿にかえって、取り澄まして雨戸をあけている時、
「若だんなはこちらでございましょうか」
　と、若林がようやく小降りになった雨の中を庭づたいに走りこんできた。
「なにか御用、若林さん。竜平さんは雨に降りこめられて一人で怒っていますわ」
　お信はまったく物に動じない女にできているようである。
「竜平さま、一大事です。深川屋の久蔵が牢を破って逃げ出しました」
　若林は真っ青な顔色になっている。

11

「なにっ、久蔵が逃げたのか」
　しまったと竜平は思わず廊下へ飛び出していく。
　久蔵は、昨日の朝、深川屋を張りこんでいた若林良平が旅支度で家を出てきたのをお茶の水まで黙って後をつけて、そこで有無をいわせずつかまえ、屋敷へつれて帰ってそのまま牢へ入れておいたのだ。
　竜平の考えでは、権太夫が帰ってきたらそっちの様子を聞いた上、大作が南蛮組と深い関係があったという証言を取るつもりで、厳重に監視させてあった。いわば大切な生き証人なのである。
　その久蔵が牢から逃げたとなると、駆けこむ先は北の遠山の役宅にちがいない。これで事はすっかりぶちこわしになってしまう。
「申し訳ありません。あんまりひどい雷だったんで、牢番がそっちへ気を取られているうちに逃げられてしまったらしいんです」
「一体、どこを破って逃げたんだ」
　今のところ牢には久蔵一人しか入っていない。いくら仮牢にしろ、人間一人の力でそう簡

単に破れるほどやわにはできていないはずなのだ。
「それが、どこから逃げ出したかまだはっきりしないのです」
「ばかっ。そんなことで役目がすむと思うか。わしもいま行くから、早く帰ってもう一度よく調べてみろ」
「はっ」
　若林はそそくさとまた雨の中へ走り出す。
　どこから逃げたにしろ、それをいまさら調べたところでどうしようもないのだ。
「お信、やっぱり天罰の雷はとんだところへ落ちたようだぜ」
　竜平はお信の腕をつかんでもう一度座敷へ引き入れ、そこへ立ったまま苦わらいをした。
「それはどういうわけ――」
「大作と美沙緒の供をして甲府へ行くはずだった久蔵という小者を、昨日つかまえて仮牢へ入れておいたんだ。いま聞いてのとおり、こいつが逃げたとなると、駆けこむ先は、滝の屋敷か、北の遠山左衛門尉の役宅かどっちかだ。おれたちのやったことは、もうごまかしきれない。――どうだ、お信、悪名をしょっておれと駆け落ちをする度胸があるか」
「そのほうがよければそうしてもいいんですのよ」
　さすがにちょっと寂しげな微笑だが、腹は竜平などよりもうとっくにちゃんときまっているような顔つきだ。
「おれがみんな悪名をしょっていかなくちゃ、いくらかでも家名が立たない。それじゃおやじがかわいそうだからな」
「いますぐ駆け落ちするんですか」
「駆け落ちは夜にきまったもんさ。まさか、今日が今日お呼び出しもないだろうからな」
「では、日が暮れたらどこへ行けばよろしいの」
　お信はどこまでもたのもしい姦婦にできてい

るようである。

12

悪運つきたと悟った竜平がとっさに駆け落ちと腹をきめたのはさすがにあきらめのいい決断だったが、それにはお信という物に動じない変わった女が相手だったことがせめてものしあわせだった。少し変態ではあるが、それはそれなりにお信は若い竜平に対して深い愛情を持っているからである。

この雷雨は江戸の空へきてからのほうがいっそう荒れて十数ヵ所へ落雷していた。幸い火事はおこらなかったが、死人を一人出している。

その死人は堀留の柏屋惣兵衛で、居間で小判を勘定していてやられたといううわさと、わざわざ廊下へ出て、ただだから花火でも見るような気持ちで雷見物をしていてやられたといううわさと二説ある。どっちにしても、あのおやじなら天罰が当たったってしょうがないと冷たい悪口をいう者はあっても、だれ一人かわいそうにと同情する者はなかった。

やっと雷雨がおさまって、東の空へ大きな虹がかかり、江戸の子供たちをよろこばせたのは、やがて八ッ半（三時）に近いころである。

そのころ――。

大作と坂田慶三は日野坂の途中にある空き小屋へ入って雨やみをしていた。

「大作うじ、美沙緒さんのことも心配にゃなるだろうが、たぶん向こうも日野の宿あたりで雨やみをしているにちがいない。雷と心中してしまってはそれこそ元も子もなくなるから、しばらくここで雨やみをしていこう」

そういって大作を無理にこの小屋へつれこんだのは坂田のほうだった。

この小屋はもとだれかが茶店を出していたところらしく、土間と二畳ほどのほんの寝泊まりできるだけの小座敷があるだけで、無論いまは畳も建具もないがらんとした空き小屋になって

いた。

それでも屋根があって、三方は板囲い、表に雨戸が入っているので、雨風だけはどうやらしのげる。

「大作うじ、この雷雨が我々にとって吉か凶か、だんなはどう判断をくだすね」

そこの床の板へ並んで掛けて、坂田がなぞをかけるようなことをいい出す。

「というと――」

「つまりだな、敵にも味方にも、手順、策略というものがある。その点から見て、加役はだんなにひもをつけていると思うんだ。そのひもがだんなの生きていることを権太夫に注進したとなると、これは死んだ長坂などより加役にとってはずっと大敵ということになるからな」

「なるほど――」

大作が思わず目をみはった時、表の雨戸が一枚がらりとあいて、

「わあ、すごい雨だ」

その風雨といっしょにどかどかと飛びこんできた頭からぬれねずみの中間二人、三島家の喜久蔵と定造だった。

「あっ、いけねえ」

先頭の喜久蔵は大作の顔を見るなりぎょっと棒立ちになる。

13

「喜久蔵、なにも怖がることはない。おまえなどを相手にする鈴村さんじゃないから、安心して雨やみをしていけ」

そばから坂田慶三がわらいながらすかさず声をかける。

「へえ」

喜久蔵と定造は顔を見あわせていたが、外はすごい雷雨なので、一度屋根の下へのがれてみると二度と外へ出ていく気になれないのだろう。

「鈴村のだんな、すんません」

頭からぽたぽた滴をたらしながら、喜久蔵はそこからこっちへぺこりとおじぎをする。
「喜久蔵、おまえ長坂の死骸を見てきたか」
　大作は念のために聞いてみた。
「へえ、実をいいやすと、あっしたちは御用人さんが加役の小宮に切られるのを見てびっくりして逃げ出したんでさ」
「そう、それでよくつかまらなかったもんだなあ」
「そりゃ命がけでござんすからね。けど、追いかけてきたのはすっぽん安とどぶ辰というどっちも一度食いついたらのがしっこないというやつらなんで、こんどはだめかと生きた気持ちはしなかった。やぶからやぶへむぐりこみながら、こいつは逃げるよりかくれんぼだと思いやしてね、穴ぼこのようなところへかくれてみたんでさ。さすがに野郎たちは気がつかずに行きすぎていきやがった。その二人が、まもなくやぶの中をいそいで引きかえしてきて、またどんどん日野のほうへ逃げていくんでさ。おかしいなあと思って街道のほうを見たら、鈴村のだんなと坂田さんがやってくる。びっくりしちまった。鈴村のだんなは市川たちを切っちまったんですかい」
「いや、ちょうどいいところへ坂田うじがきてくれて、それで助かったんだ」
　大作は正直にいって苦わらいをする。
「市川たちはな、喜久蔵、わしを幽霊と間違えて逃げ出したんだ」
　喜久蔵はいまさらのように坂田の足もとを見ている。
「そういやあ、坂田さん、あのお浜のさそりの毒にやられてよく助かったねえ」
「喜久蔵、おまえはたしかお浜の一の子分だったな」
「へえ、まあね」
「その実、お浜の体をねらっていたんだろう。ちゃんと知っているぜ」

「そいつはおればかりじゃありやせんや」
「ところで、そのお浜はな、ゆうべ長崎のほうへ落ちていってしまったらしいぞ」
「本当かね、坂田さん」
「本当らしいな」
「じゃ、いよいよしりへ火がついたんだな。もっとも、長坂さんでさえやられるくらいだからねえ」
「おまえも早く江戸から姿を消すんだな」
「ねえ、鈴村のだんな、どうせおれは江戸をずらかるんなら、加役の野郎どもにひとあわ吹かしてやりてえんですがねえ」
　喜久蔵の目にめらめらっと復讐心が燃えてきたようだ。

14

「加役にひとあわ吹かせるっていうと――」
　坂田が大作にかわって喜久蔵に聞く。
「鈴村のだんなはこれから加役の手からお嬢さまを取りかえしに行くんでしょう。あっしたちも加勢しやすから、なんにでも使っておくんなさい。どうせずらかるなら、その前にひとつ思いきって仕返しがしてやりてえんでさ」
　おなじようなあくどいまねをしている加役に、目の前で長坂を切られ、こんどは自分たちまで命があぶないとなると、いくらげす下郎でもさすがに憤慨せずにはいられないのだろう。
「しかし、おまえたちもうっかり加役に見つかると、仕返しどころか、あべこべにつかまってしまうぞ」
「なあに、そんなへまはやりませんや。どうでしょうねえ、だんな、加役の泊まっているところへ火をかけて、そのどさくさまぎれにお嬢さまを取りかえすって手は」
「そんなむちゃなまねをしてはいかん」
　大作は思わず苦わらいをしながら、
「では、こうしよう。加役はたぶん今ごろ日野の宿で雨やみをしているだろう。彼らは今夜ど

こへ泊まるか、後をつけて我々に知らせてくれ。策はそれから立てることにしよう」
と、あまり当てにできる連中ではないが、とにかく仕事をいいつける。
「承知しやした。じゃ、だんながたは後からくるって寸法なんですね」
「うむ、我々はいざという時までなるべくやつらに姿を見られないほうがいいんだ」
「ありがてえ。こんどこそおれたちもやつらに仕返しができまさ。なあ、定」
そう話がきまって、雷雨がようやくおさまりかけると、喜久蔵と定造はまだ小雨の中を威勢よく表へ飛び出していった。
「ひょっとするとなあ、だんな、こっちはあの二人がたのむから利用したまでだが、加役のほうでも我々が生きているのを見ているんだから、なにか手を打っているかもしれないぞ」
いよいよ空き小屋を出る段になって、ふっと慶三がいい出す。
「わしもそれは考えている。しかし、こうなったらもうやるところまでやるより手がない」
「それはまあそうだ。断じて行けば鬼神もこれを避く、その意気でやるか」
「うむ」
こっちはそれですむが、大作が心配なのは美沙緒のほうである。竜平としては、結局生かしておいては困る美沙緒なのだから、途中で一服盛ってしまえと権太夫にいいつけているかもしれないのだ。いや、これはおそらくかもではなく、たしかにそういいつけているにちがいあるまい。
とすると、今夜の晩飯がいちばんあぶない。
「いそごう、坂田うじ。日が暮れないうちに美沙緒を取りかえさないと、毒殺されるおそれがありそうだ」
「なるほど——」
雨はあがって、江戸のほうの空はまだ真っ黒だが、こっちはようやく青空が見え出し、さっ

と明るい日の光がさしてきていた。

15

大作と慶三が日野坂を下って日野の宿へかかろうとすると、そこの畑道の百姓家のまだ露をいっぱいふくんだ生垣のかげから、
「お武家さん、ちょいと待った」
四十五、六の目明かし風のおやじが、十手を握ってつかつかと行く手へ出てきて立ちふさがる。後から用心棒が二人ついてきて、目明かしの左右に立つ。生垣のかげにまだ四、五人長脇差をさしたけんか支度のやつが待機しているようだ。
権太夫の小細工だなと直感した大作は、
「なにか用かね」
と、油断なく立ちどまる。
「おまえさんは江戸の鈴村大作、そっちは坂田慶三、二人とも南蛮組の一味だそうだね」
「おやじは土地の目明かしか」
「この十手を見ればわかるだろう。日野の五兵衛という目明かしだ」
「本業は博徒らしいな」
「なにっ」
「我々はそんな怪しい者じゃない。これを見ればわかるだろう」
大作はふところから手早く北町奉行所の焼き印のある例の木札を出してみせる。
「知ってるよ。遠山さまの内与力の鑑札だろう」
五兵衛は手に取ろうともせず、
「こっちは、そういう偽鑑札を用意しているからその手にのるなとちゃんと申しわたされているんだ」
と、にやりと冷笑する。
「そうか、加役の配下伊藤権太夫から吹きこまれているんだな」
「悪いことはできねえものさ。神妙におなわをちょうだいしちゃどうだね。凶賊だから、手向かいしたら切れといいわたされているんだぜ」

「ついでに、親分、伊藤からいくら握らされているんだ」
「なんだと——」
「こっちにはこの鑑札がものをいう。へたをするとおまえたちこそ切られ損ということになるぞ」
　大作は木札を胴巻の中へおさめて、こうなれば切りぬけるよりほかはないととっさに腹をきめる。
「やかましいやい。——かまわねえ、たたっ切れ」
　五兵衛は憤然とわめきたてながら、自分は素早くさっとうしろへ身をひく。
「凶賊、覚悟」
　同時に左右の用心棒二人がぎらりと抜刀する。
「えいっ、——とうっ」
　忿怒が胸いっぱいにたぎっている上に、もうこういう真剣勝負になれっこになっている大作だから、だっと踏んごみざま右のやつへ抜きうちをかけ、つばめがえしの二の太刀が火のように左のやつをなぎ払っている。
　用心棒二人も無論そう弱いほうではないだろうが、まさかと思っているうちに度胸よく捨身の戦法に出られたので、
「わあっ」
「う、うっ」
　ひとたまりもなく悲鳴をあげて、二人とも大きくのけぞっている。

16

「それ、やった」
「たたっ切れっ」
　生垣のかげにいたけんか支度の子分たち五、六人がいっせいに長脇差を引き抜いて往来へ飛び出そうとしたが、あまりにもすさまじい大作の気魄に圧倒されて、掛け声ほどには足が前へ出ないうちに、

「慶三さん、行こう」
　大作は坂田に声をかけて大股にそこを通りぬけてしまう。
　目の前でたのみにしていた用心棒が二人まであっさり片づけられてしまったのだから、子分たちは大作を追いかける気力さえ失っているようだ。
　日野の五兵衛も啞然として大作を見送っている。
「やるなあ、だんなは」
　だれも追いかけてこないとわかると、坂田は大作と肩をならべていきながら感嘆したようにいう。
　大作は血刀をぬぐって鞘におさめ、
「慶三さん、わしはいま鬼になっているんだ。美沙緒を助け出すまではね」
　と、きっぱり答える。
「よかろう、日の暮れるまでにはなんとかやっつけよう」
　日野の宿を通りすぎて府中へ向かったのはやがて八ツ半（三時）に近いころだったろう。今朝美沙緒と二人でたのしく歩いてきた二里八町の道を、大作は心重くふたたび府中へ引きかえすのである。
　そのころ——。
　おなじ道を美沙緒は宿場駕籠で府中へ送られていた。
　——きっとあの人が助けにきてくれる。
　美沙緒はそれを信じているから、すなおに伊藤権太夫のいうなりになっていた。
　しかし、あの雷雨の最中日野の中食所で膳が出たが、美沙緒は渋茶を少しのんだだけで、気分が優れないからとことわり、膳には手をつけなかった。事実、食欲はまったくなかったが、それより毒殺を警戒する気持ちのほうが強かったのだ。
　——今夜中にあの人が助けにきてくれなければ、たぶん明日のお日さまは見られないかもし

れない。

一方で美沙緒はそう覚悟もしていた。

その時はどうせ大作も無事ではいないのだ。無事ならどんなことがあったって助けにきてくれないはずはないのだ。

――大作さまが生きていないのなら、あたくしも死のう。

駕籠の中で、美沙緒ははっきりとそう思った。そして、昨夜ちゃんと大作の妻になっていてよかったと、今となってはそれがせめてもの心のなぐさめである。

うれしかった思い出の一夜、たくましい男の腕の中で安心して甘い眠りに入り、目がさめたらもう雨戸の透き間に朝がきていて、すずめの声が聞こえていた。

17

――あたくしのだんなさま。

美沙緒は今朝の夜あけのことを思い出すとひとりでにほおがほてってくる。

一つの寝床をからっぽにして、とうとう一晩中だんなさまの胸の中で寝てしまったと、男の寝顔をながめながら一人でしあわせをかみしめていると、大作がふっと目をさましたのである。

「なんだ、目がさめたのか、美沙緒さん」

大作はまだこっちをさんづけに呼ぶ。もうさんではないのにと思いながら、黙ってうなずいてみせると、

「そうか、夜が明けたんだねえ」

そういってから、肩を抱いてまじまじと顔をながめ、はっきり昨夜のことを思い出したにちがいない。

「おれのお嫁さん」

急にくちびるを吸いにきたのである。

美沙緒はもうお嫁さんなのだから、目をつぶってだんなさまのするなりになっていた。

だんなさまの愛撫(あいぶ)はだんだん情熱的になってきて、ただくちびるだけでは気がすまなくなってきたのだろう。美沙緒もまた体中の血が甘くしびれるように熱くなってなにか切ない。

そして、その胸の切なさがかっと燃えあがった時、女体は完全にだんなさまのものになっていて、昨夜の時は恥ずかしくてただ夢のようだったが、今朝はおなじ恥ずかしい中にもだんなさまの体をはっきりと自分の体のうちに感じ、激しい歓喜におそわれて、これが本当の御夫婦なのだと満ち足りたよろこびにひたっていた。

――美沙緒のだんなさま。

だから、こうして一人で駕籠にゆられていると、たまらなく寂しくなってくる。まるで、魚が水を求めるようにだんなさまが恋しい。

しかも、そのだんなさまにもう二度と会えずに一人で死んでいくかもしれない危ないどたん場に、今は身をおかれているのだ。

それを考えると、つい涙がこぼれてくる。

その恋娘をのせた駕籠の後から黙々とついて歩いている伊藤権太夫もまた、大きな胸の苦悶(くもん)に苦りきった顔をしていた。

意外にも、鈴村大作が日野ガ原の待ち伏せを切りぬけて、しかも坂田慶三といっしょにこっちを追っているということが一つ。

しかし、これは日野の目明かし五兵衛に金をやって策をさずけておいたから、こんどはなんとかなるだろう。

それより重荷になるのは、この駕籠の中の娘である。

どうせ江戸へはつれて帰れないのだから、いっそ日野ガ原で長坂を切った時、ひとおもいに刺し殺しておいたほうが後くされがなくてよかったのだ。それなら下手人は浪人どもになすりつけても事はすむ。

それを、うっかりこうしてつれてきてみると、だれがやったかわからないようにして始末するということはちょっと難しくなってくる。娘は加役の伊藤がつれていたと土地の者がみんな知っているからだ。

18

——それに、わしにはこの娘を自分で始末する勇気はとてもない。

心重くそんなことを考えているうちに、駕籠はついに府中へ入って、まもなく本陣の玄関へ横づけにされていた。

「小宮、美沙緒どのは一同といっしょでは窮屈であろう。一座敷別にとってさしあげるがよい」

「承知いたしました」

小宮が番頭にそういいつけて美沙緒といっしょに別室を見に行っている留守へ、女中が廊下を走ってきて、

「お客さま、日野の五兵衛親分がお目にかかりたいといって玄関へきていますが」

と取り次いできた。

「そうか。——ここへ通してくれ」

また失敗したなと権太夫は直感した。うまくいっていれば、後始末があるから、こんなに早くは出てこられないはずである。

小者たちは部屋が違うので、そのとき権太夫は座敷に一人だった。

あたりはもうたそがれかけて、やがて灯の入る時刻になっている。

「だんな、申し訳ありません」

五兵衛は座敷へ入ってくるなり畳へ額をこすりつけるようにする。

「しくじったのか、五兵衛」

「へえ。この埋め合わせは今夜必ずいたしやす。油断していたってわけじゃねえんですが、なにしろ昼間のことでござんすし、おまけに相手はすっかり気が立っていやがるんで、うちの用心棒が二人ともあっけなくやられちまいやしてね、そうなるともういけません。そのかわり、今夜はきっと眠らせてお目にかけやす、へえ」

五兵衛は冷や汗をかいているようだ。

「それで、二人はもうこの宿へ入りこんでいるのか」

「へえ、いま宿外れの飯屋へ入って腹ごしらえをしているそうで、どうせ日の暮れるのを待ってここへ娘をねらいにくるにきまっていやす」

「おまえのほうの人数、手くばりはどうするんだ」

「府中の藤九郎はあっしの兄貴分になっていますから、ここへ加勢がたのんでありやすんで」

藤九郎は博徒の親分で五兵衛とおなじように目明かしをつとめている男だが、このほうが五兵衛よりずっと上の勢力を持っている。

「そうか、藤九郎が加勢してくれれば、こんどは大丈夫だろう」

権太夫も一応安心はしたが、ふっと思いついて、

「どうだ、五兵衛、おなじやるにしても、この宿場の中でやるより、宿場の外でやったほうがやりいいんじゃないか」

と聞いてみる。

「そりゃ街道筋へ出たほうが、だいいち人目がござんせんからねえ」

そうしてもらえばいっそうありがたいといわぬばかりに五兵衛は目を輝かせる。

19

伊藤権太夫の計らいで美沙緒が番頭に案内された座敷は、廊下を二つ三つ曲がっていったいちばん奥のかくれ間のような六畳の間であった。

ここは人を泊めるというより、むしろ茶室風に炉が切ってある風雅な造りで、

「ここならいちばんお静かでございます。ここは特別なお客さまにお茶をたのしんでいただくようにと、手前ども主人が茶人でございますんで、まあ道楽半分にこしらえましたんで」

と、案内の番頭は得意そうに小宮に説明していた。

美沙緒の人柄がどう見ても旗本のお嬢さまに見えるので、番頭はまさかこれが監視づきの娘

だとは思わなかったのだろう。
「しかし、ここは少し寂しすぎはしないかな」
さすがに小宮はちょっとまゆをひそめていたが、美沙緒の前で当人を罪人あつかいにもできないので、
「とにかく、しばらくここで休息していてください」
といいおいて、番頭をつれていそいで引きかえしていった。一応、権太夫と相談してみるつもりなのだろう。
――逃げるなら今だ。
美沙緒はそう思って、そっとぬれ縁のほうの障子をあけてみると、そこは石をあしらった小庭になっている。
一体、どこが裏口になっているのか、はじめての家で見当がつかないし、逃げるにしてもまだ外は暮れきっていない。それに、逃げてこんどつかまれば、おそらくなわをかけられるにちがいないのだ。
――もう少し待ってみたほうがいい。
どうにも決断がつかなくて、とにかく暗くなるのを待つことにした。
そのうちに茶室へは行燈が入り、まもなく女中が夕餉の膳を運んできた。
が、この膳はうっかり箸がつけられない。また、そう食欲もなかった。
「後でいただきますから、お膳はそこへおいていってください」
女中を去らせておいて、もう外は暗くなったし、こんどこそ逃げ出そうと、ぬれ縁の障子を一枚あけて庭の気配に耳を澄ましてみた。
そして、ふっと気がついたのである。
さっき小宮が番頭といっしょに引きかえしていってから、加役の者はだれもここへ顔を見せていない。こっちがすきさえあれば逃げ出したがっていることを伊藤たちはよく知っているはずなのだ。
――ことによると、庭のどこかから手先が見

張っているのかもしれない。
だから、伊藤たちは安心して膳に向かっているのだと、そう考えるとまたしても勇気がくじけてくる。
だいいち、今ここをぬけ出しても、女一人では恐ろしくてとても夜道は歩けそうもないのだ。
――どうしよう。
美沙緒はそこに立ちつくして暗い庭をながめながらなんとなく泣き出したくなってくる。

20

「お嬢さん――」
ふっとそこの袖垣のかげから呼びながら顔だけ出した男がある。
「まあ、定造――」
美沙緒はどきりとした。
「今のうちだ、早く」
定造はこっちへいそがしく手招きをする。
――どうしようかしら。
定造はもう数年屋敷で使っている中間だが、このごろ喜久蔵といっしょに長坂について、あんまり信用はできなくなっている。
「早く、お嬢さん。――鈴村さまが外に待っているんだ」
「まあ、大作さまが」
美沙緒はその一言でもう足袋はだしのまま庭へ飛びおりていた。
そこからどこを通って裏木戸を出たか、月のない真っ暗な宵だから美沙緒にはなんにもわからなかった。ただ定造のうしろについて小走りに走っただけである。
裏木戸は街道から十間ばかり横町へ入ったところについているらしく、その暗い横町を街道へ出ようとすると、そこに喜久蔵らしい男がぴったりと塀に張りついていて、
「定、今だ。なるべくこっちの軒下を走るんだ」
と小声でいった。

「合点だ。――さあ、お嬢さん」
　定造は先に立って、なるべく人家の軒下づたいに走り出す。
　日が暮れるとほとんど人通りのなくなる田舎町である。
　――どこへつれていかれるのかしら。
　喜久蔵がいっしょでは油断ができないと思ったので、美沙緒は走りながらそっと懐剣のひもをといている。相手を切って逃げようという気はない。もしこの下郎たちに辱めをうけるようなら、その場で自害しようと覚悟したのだった。
　道はどこかの神社の前へかかった。
「定造か――」
　そこの暗がりの中からすっと出てきて声をかけたのは、その声でなつかしい大作だとすぐ美沙緒にもわかった。
「へえ」
「あなた――」
　美沙緒はかっと血が頭へのぼったような気持ちで、定造がなにかいおうとする前に、その定造をかきのけるようにして、ひしと大作の胸の中へ体を投げこんでいた。
「美沙緒、――ありがたい、無事だったか」
　大作は力いっぱい美沙緒を胸の中へ抱きとめて、
「定、礼は後でいうぞ」
と、そのまま美沙緒をかかえるようにして境内の中へ入っていく。
「よく無事だったなあ、美沙緒」
「あたくし、あたくし、夢かしら」
　涙さえ忘れて、美沙緒は今になってからがたがたと体中がふるえてくる。なにか恐ろしくてたまらないのだ。

21

「美沙緒、もうわしがついているんだから、しっかりするんだ」

「はい」
「こんどこそ、どんなことがあったって、わしはおまえを放しはしない」
「うれしい、あたくし」
「後でもっといい話があるんだが、おまえおなかがすいているんだろう。ここへ握り飯を用意してきている。そこの御手洗(みたらし)で手を洗って、まず腹ごしらえをするんだ」
「はい」
　そういえば昼飯も夜食もたべていないから、急にひもじくなって、――なんという親切なだんなさまなのだろうと美沙緒は思った。
　御手洗で手を洗って、なにさまだかわからないが拝殿のほうへ合掌してから、大作がわたしてくれた竹の皮包みをそこへしゃがんでひざの上でひろげた。
「腹のすいた時は、ゆっくりかんでたべないと、おなかがいたくなるよ」
「はい」
　その時一口かんだ結びの味を美沙緒は一生忘れられないだろうと思った。そして、急に涙がぽろぽろとこぼれてきた。
「だんな、ちょいとおかしいことがある」
　境内の入り口のほうから坂田が近づいてきて大作に声をかける。
「どうした、慶三さん」
「あんまり仕事がうまくいったんで、いま定造に聞いてみると、こっちが本陣の裏木戸をねらっているところへうまく手先の一人が中から出てきたんだそうだ」
「なるほど――」
「その男がすたすたと表のほうへまわっていくんで、喜久蔵を見張りに立ててな、定造はかまわず本陣の中へ忍びこんでいった。すると、灯のともっている茶室風の部屋があるんで、もしやと思って忍びよってみると、そこに美沙緒さんが一人でいたというんだ」
「ふうむ。――美沙緒、その部屋にはだれも監

視はついていなかったのか」
　大作がしゃがんでいる美沙緒に聞く。
「ええ。本陣へ着いた時から、あたくしそこに一人でゆっくりくつろいでいるようにといわれていました」
「そうか——。慶三さん、ことによると安心させておいて一服盛るという手もありはしないか」
「いや、そうじゃあるまい。敵はわざと美沙緒さんが逃げられるようにしておいた、そうは考えられないか」
「なるほど——」
　大作にもすぐぴんとくるものがある。
「だんなと美沙緒さんが一つになれば、敵としてはなお好都合だ。どうせこれから布田へ夜道をかけるだろうから、途中で南蛮組の片われとして有無をいわせず切ってしまう。後で間違いだとわかっても、これだとなんとでも申し訳がつくからな」
　この坂田の意見は、大作もたぶんそうだろうと考えるほかはない。

22

「慶三さん、そこまで敵に手を打たれてしまったんでは、もう後へ引いても前へ進んでもおなじことだ。運を天にまかせて、わしはやっぱり江戸へ向かうことにしよう」
　大作はそう腹をきめるほかはなかった。
「よかろう。わしもそれよりないと思う。こんどはわしが先陣をつとめよう」
「そうか、すまんなあ」
「なあに、ここで犬死にをするような運命なら、とても第二軍の大将などはつとまらん。わしにしても、運だめし、腕だめしだ」
「それにしても、敵はたぶん御用ぢょうちんを先に立ててくる。わしのさっきの鑑札さえ無視するやつらなんだから、かまわず御用ぢょうちんをたたっ切ってしまうんだな」

「いいとも——。幸いわしは御用ぢょうちんなど恐れてはいられない男になっているんだ。今夜のだんなの罪はみんなこの坂田慶三がしょっていってやろう」
　坂田は一度今戸の寮で死んでいるだけに、もうすっかり度胸はきまっているようだ。
「美沙緒、支度はもういいか」
　大作は美沙緒のほうへ聞く。
「はい、もうすみました」
　美沙緒は竹の皮をきれいに折ってむすんでそこへおき、御手洗へ立っていって口をすすいでくる。
「じゃ出かけるとして、喜久蔵と定造はどうするな、慶三さん」
「あれたちにはしんがりをつとめさせよう。なあに、いざとなって逃げ出したければ、勝手に逃げ出したってかまわない。わしから話をしてやろう」
「じゃ、慶三さん、気は心だ、この金を二人にやってくれ」
　大作は胴巻の中から小判を二枚出して慶三にわたす。この金は遠山の伯父(おじ)からもらってきたものだが、もう甲府へ行く必要もなくなったし、そう大して金はいらないのだ。
「美沙緒、我々は甲府へ行かなくてもよくなったんだよ」
　坂田が街道口のほうへ走っていった後からゆっくり歩きながら大作は美沙緒にいった。
「どうしてですの」
　美沙緒はそっと大作の手につかまってくる。
「後で手紙を見せるけれど、峰村新十郎という人の手紙をいまの坂田慶三さんがとどけてくれたんだ」
「まあ——」
　美沙緒はどきりとしたように立ちどまろうとする。
「まあ歩こう。驚いちゃいけないぜ。その新十郎という人は実は南蛮太郎で、ゆうべ同志の人

たちといっしょに品川から南の島へ船出をしたんだそうだ。我々の幸福を祈ると手紙に書いてある」
「本当ですの、あなた」
「うむ、本当だ。お浜も五郎さんの女房になって、いっしょでね、おまえにくれぐれもわびをいっておいてくれと慶三さんにことづけがあったそうだ」

23

大作と美沙緒が境内から街道筋へ出てくると、
「だんな、喜久蔵も定造も江戸までお供をするそうだ」
と、そこに待っていた坂田が告げた。
「鈴村のだんな、ただいまは大枚の金をありがとうござんす。坂田さんからたしかにちょうだいいたしやした」
喜久蔵と定造が頭をそろえておじぎをする。
「いや、礼をいわれるほどの金じゃない。――さあ、そう話がきまったら出かけよう、慶三さん」
「心得た」
坂田慶三が先頭で、喜久蔵と定造がしんがりだった。
府中から布田へは一里二十三町ある。月のないやみ夜だから、坂田は府中で小田原ぢょうちんの用意をして、それに灯を入れ、
「どうせ出るときまっている敵なんだ、かくれて歩くことはない」
と、不敵なことをいってわらっていた。
「あの、このまま今夜はずっと江戸まで歩くのでございますか」
美沙緒はさすがに不安そうに大作に寄りそってくる。
「いや、敵の様子によっては、布田か下高井戸あたりで宿についてもいいんだ」
そう答えたが、その望みはほとんどないとみ

ていいだろう。場合によっては今夜こそ切り死に、その可能性のほうがはるかに多いだけに、大作はいじらしくなって、しっかりと美沙緒の手を握ってやる。
「いいんですのよ、あたくしこのまま、江戸へでも、あの世へでも、あなたといっしょなんですもの」
今は峰村新十郎との約束から解き放されて、晴れて鈴村大作の妻になれるのだ。しかも、その大作といっしょにこうして死ねるのなら、こんなむごたらしい汚い世の中にもうなんの未練もないと美沙緒は思うのである。
その覚悟を大作に教えるように、美沙緒は夫の手を自分の帯の間の懐剣のところへ持っていって、
「ね、ここにこれがありますのよ」
と、そっといって微笑した。
「うむ、そうだったね」
大作も軽くうなずいて微笑をかえしながら、
「しかし、大丈夫だよ、美沙緒。望みは最後まですてるもんじゃないんだ」
それはまた自分にいって聞かせる言葉でもあったのだ。
布田の宿は五ヵ宿ともいい、宿の長さが三十町あまりもある。やがて、その布田の宿へ入ろうとすると、両側が雑木林の道へかかった時、案の定、御用ぢょうちんを持った一組みが突然行く手へ立ちふさがったのである。
「お待ちなせえ。あんたがたはどこへ行きなさる」
四十がらみの目明かし風の大きな男が一足前へ出て聞いてきた。

24

「その方はどこの目明かしだ」
坂田は昂然（こうぜん）たる態度で高飛車に出る。
「なにっ」
「これなるは江戸町奉行遠山左衛門尉さまの配

下の内与力鈴村大作どの、また拙者は鈴村どのの家来坂田慶三、その方は見うけるところだいぶ博徒、用心棒らしい風体の人数を集めてここへ出張っているようだが、なにか子細があるのか」

「黙らねえか。おれは府中の藤九郎という目明かし、加役の大東さまからおめえたちはこのごろ御府内を荒らしまわる凶賊南蛮組一味の片割れだから有無をいわせず召し捕れ、手向かいしたらかまわず切りすてろという仰せをうけて、ここへ出張っているんだ。神妙におなわをちょうだいしねえと、おめえたちのためにならねえぞ」

　藤九郎のほうもどうせたたっ切ってしまうのだという腹があるから、負けずにやりかえしてくる。

「そうか、それなら召し捕り状を持っているだろう。これへ出してみせろ」

「なんだと――」

「それみろ。召し捕り状も持たずに捕り方に向かう目明かしがどこにある。その加役の大東という者をこれへ出せ。おそらく偽物だろう、真偽のほどをたしかめてやる」

　坂田のいうことがいちいち急所を突いてくるので、返事に窮した藤九郎はもうこれまでと思ったのだろう、

「やかましい。いいてえことがあったら出るところへ出てからいえ。――それ、かまわねえからこいつらを召し捕れ」

　藤九郎はぱっとうしろへ飛びのきながらわめき立てる。

「それ、やっちまえ」

「たたっ切れ、凶賊だ」

　林の中に待機していたけんか支度の博徒、用心棒たちが、いっせいに抜刀しながらわあっとこっちを取りまいてきた。無論、召し捕るのではなくて、切るのが目的だ。

「うぬっ」

　同時に抜刀した坂田も、こんどは容赦をしない覚悟だから、親分藤九郎をまもろうと前へ割って入ってきた四、五人の敵の中へ、

「えいっ、――とうっ」

と、こっちから勇ましく切りこんでいく。

「美沙緒、わしのそばを離れるな」

「はい」

　大作は美沙緒を背にかばって抜刀する。今夜は死なばもろともという覚悟である。

「御用だ」

「神妙にしろ」

　口々に叫びながら取りまいてきた敵は五人、博徒、用心棒が十手ではなく白刃をならべて剣陣を敷いてくる。

「構えていねえでたたっ切れ。早くしろ。じゃまが入っちゃ面倒だ」

　林の中でわめき立てた声は、どうやら日野の五兵衛らしい。

25

　左右に御用ぢょうちんをかざした子分二人をおき、前を用心棒一人にかためさせて、布田口のほうの逃げ道をふさいでいる藤九郎は、

――こいつ、なかなか手ごわい。

と、思わずまゆをひそめていた。

　こっちにはまだ新手がたくさんひかえているからもう心配はないだろうが、坂田はもう二、三人に手傷をおわせ、颯爽と前へ前へと出ようとしている。間のじゃま者を突破しておれをねらっているんだと思うと、藤九郎はあまりいい気持ちはしない。

　その向こうでは大作が、これもすでに三、四人切って、これだけの人数に取りまかれながらびくともしていない面魂である。しかも、女を一人うしろにかばっているから、その位置は動かず、切って出る者から倒す、その敏捷無類な太刀さばきに鉄壁の底力が感じられるのだ。

「だれか娘のうしろへまわれ。娘を引っつかまえるんだ」
藤九郎がいらいらしながらこっちからどなる。娘を切れといわなかったのは、美沙緒の美貌を見てただ切ってしまうのがなんとなく惜しくなったのだ。
「おい、うしろからまわって娘をつかまえるんだ」
御用ぢょうちんを持っていたやつが忠義顔をしてそっちへわめいた時、
えんほい。
えんほい。
布田宿のほうから駕籠が一丁飛んでくるようだ。先頭を御用ぢょうちんが走ってくる。
――まずいことになりそうだ。
藤九郎はこっちに引けめがあるだけに、どきりとした。
じっと見ていると、駕籠は十数間向こうでとんと地におり、素早くおり立った八丁堀風の男が御用ぢょうちんを先に立て、若い見習い同心らしいのを一人、手下の手先を三人したがえて、ばらばらっとこっちへ走ってくる。
「これ、この捕り物はその方が捕り親か」
「へえ、府中の目明かし藤九郎と申しやす」
「わしは北町奉行配下の小林勝之進という者だ。支配違いだが、この捕り物はしばらく待て」
「と申しやすと――」
「あれに取りまかれているのは、遠山左衛門尉さまのお身内、北の内与力の鈴村大作どのだ。なんでその方鈴村どのを取りかこんでいるのだ」
「加役大東さま配下の伊藤権太夫さま申しつけにて捕り方に向かいましたんで」
「黙れっ、捕り方が博徒のけんか支度で長脇差をふりまわしているのはどういうわけだ。早く取りしずめろ。一つ間違うとその方の首が飛ぶぞ」
小林に一喝されて、さすがに一言もない藤九

郎である。
「申し訳ありやせん。――おい、みんなしずまれ。刀を引け」
藤九郎はうろたえて子分たちのほうへわめき立てる。

26

藤九郎の下知が殺気立っている子分たちの口から口へ触れつたわると、博徒たちはどっと林の中へ潮が引くようにひいていく。
「藤九郎――」
「へえ」
「加役配下の伊藤どのにな、大東さまは不都合のかどがあって今夕お役御免、謹慎仰せつけられたと、そっと知らせてあげろ」
「かしこまりやした」
「今夜のことは見ないことにしておいてやるから、以後は大切に御用をつとめろ」
「恩に着やす、だんな」
小林の一言で藤九郎は首がつながったもおなじだから、ほっとして子分をまとめて引きあげていく。
「やあ、小林さん――」
そこへ大作が美沙緒をつれて走り寄ってきた。
「鈴村さん、間にあってよかった。実はこんなこともあろうかと思いましてな、親玉から内意をうけると、即刻江戸を立ってきました」
「伯父上の内意というと――」
「こっちも今日のおひるごろ大夕立があったでしょう。江戸もひどい雷雨でしてな。その雷のおかげで、深川屋の久蔵が加役の牢をぬけ出して、親玉の役宅へ駆けこみました」
「すると、久蔵はやっぱり加役の手につかまっていたんですな」
大作は思わず美沙緒と顔を見あわせる。
「そうなのです。そのために、大東さまは即日お役御免、謹慎ということになるんでしょう。

人間、悪いことはできないもんです」

「そうか――。竜平は少しやりすぎたんだ。気の毒だが、しょうがないだろうな」

「あなたにひとつ、よろこばしいお知らせがある。お兄上滝主水さまはこんどお目付役にあげられることになりました」

「ふうむ、そりゃよかったなあ。どうもありがとう」

「まあ」

「それから、もう一つ、今日の雷雨でたった一人死人が出た。柏屋惣兵衛だそうです」

美沙緒が恐ろしそうにそっと大作のたもとをつかんでいる。

「美沙緒どの、江戸へ帰るとあなたにもきっとうれしい話がありますよ」

「さあ、どんなことでございましょう」

美沙緒にはまったく見当がつかない。

「わしもまだはっきりはいえません。とにかく、今夜布田泊まり、明日は江戸ですから、たのしみはそれまで待つことにしてください」

翌日、江戸へ六里の旅は若葉青葉に風かおる明るい道中だった。

大作と美沙緒は、江戸へ着いたらさっそく家をさがして、坂田は居候においてやろうと、そんなたのしい話ばかりして歩いたが、さて江戸へ着いてみると事態はがらりと変わっていた。

お信と竜平の駆け落ち事件でその責任を感じた三島弥十郎が隠居し、大作を美沙緒の養子に迎えて三島家をつがせるという話が二人を待っていたからである。

●江戸おもしろ事典

江戸の祝日

江戸時代に祝日はあったか

現在の祝日が、国の法律によって制定されたものだとすれば、そういった意味での祝日は、江戸庶民の生活にはなかった。

だから、全国的に官庁や会社は休みになって、家ごとに国旗を立てて祝う、というような日はないわけだ。

ただし、暦や季節の移り変わりに合わせ、習慣として必ず行っている、という行事は厳然と存在した。それは、国家によって判定された現在の祝日よりも、もっと確かに生活の中に存在していた、といえるかもしれない。

例えば、祝日とはいえないが、衣替え、という行事が江戸にはあった。四月一日がその日で、五月四日まで袷を着て、翌五日から単衣になる。この次に袷を着るのは九月一日からで、九月九日にはこんどは綿入れを着ることになっていた。当時はこういったことを、いまわれわれが想像する以上に、きちんと守ったものなのである。

ところで、江戸の年中行事といっても、公家・武家・民間では、それぞれに異なっていたのはもちろんだが、ここでは主として江戸庶民の祝日らしき行事を中心にして、日ごとに拾ってみることにする。

年始回りはいつするか

祝日といえば、何といっても正月だ。一年のうちでこの月と十二月が、もっとも行事が多かった。

元旦には三卿・三家と譜代大名、それに諸役

人などが登城して、将軍に年始の挨拶をする。元旦から三日まで、身分や階級によって何日に登城するか、きちんときめられていたものだ。

民間ではそんな堅苦しいきまりはないが、それでも元日は戸を締めて商売も休み、外出もしなかった。町家の年始回りは二日からで、七日ぐらいまでにすませた。元日めでたし、二日面白し、という諺があるが、そのとおりである。

正月の風物になくてはならないものの筆頭は門松だが、これを立てるのは暮れの二十六日からときまっていた。

余談になるが、この門松について面白い話がある。

最近ではあまり見かけなくなったが、太い竹の上端を斜めに切り、その切り口を前のほうに向け、その根元に松の枝を添えた、そんな門松があった。これは、家康が三方ガ原の戦に敗れ、浜松城に逃げこんだ時の出来事に由来しているという。

新年を迎えて、浜松城を囲んだ武田方から、こんな句が届けられた。

松枯れて竹たぐいなきあした哉

松は松平で、家康を指している。松が枯れて武田の竹が栄える、という語呂合わせだが、家康は不愉快だった。

ところが、傍らにいた酒井忠次がすかさず、

松枯れで武田くびなきあした哉

と、わざと読みちがえた。

家康もすっかりきげんをなおし、やがて、武田の軍勢も囲みをといて引き揚げた。

これ以後、門松の竹の上端を切って、武田方の首をはねた姿を表した、というのである。

この門松を取るのが六日で、六日年越しといって雑煮を祝う、七日に食べる粥が、七草粥だ。せり・なずな・ごぎょう・はこべら・仏の座・すずな・すずしろ、の七草を入れる。

次に、十六日の藪入りがある。

藪入りとは盆と正月の二度、奉公人が休暇を

もらって、故郷の両親のもとに帰ったり、遊んだりすることだが、江戸初期にはこういった風習はなかったようだ。

花見はどこへ行ったか

伊勢屋稲荷に犬の糞、という諺どおり、江戸にはお稲荷さんが実に多かった。

当然のことに、お稲荷さんの祭りもさかんであった。二月初めの午の日を初午といい、武家屋敷の稲荷もこの日に限って、庶民たちの参詣をゆるしたものである。

また、町内にも一つや二つのお稲荷さんは必ずあり、こちらは地主が音頭をとっておこない、店子たちに強飯などふかして配った。店子のほうはお供え物の菓子や酒を持参して、参詣した。

ところで、桜の咲くのはこの月の末ごろからだから、花見は三月ということになる。

江戸の人たちが花見に行くとすれば、上野か向島、御殿山、飛鳥山、吉原仲ノ町といったところだった。

長屋の花見、という落語があるが、江戸の人たちはほとんどだれでもが、花見に出かけたものらしい。花の下に赤い毛氈を敷き、飲んだり食ったり、歌ったり踊ったり、現代の花見とあまり変わりはないようだ。

ただし、上野は三味線や踊りが許可されなかったのと、七ツ(午後四時)には上野の山の門が閉まってしまうので、酔って騒ぐのが目的のような連中は行かなかった。だから、見物人も女や子供、身分のある者が多く、上品で静かな場所だった。

三月には三日の雛祭りもある。

この日は女の幸せを祈り、家族に取りついている悪魔や災難を、小さな人形につけて川に流した。これが雛祭りのもとだが、現在のような形式になったのは元禄時代(一六八八~一七〇四年)あたりからのようだ。

最初、人形はごく簡単なものだったらしい

が、次第に立派なものをつくるようになり、そうなると流してしまうのが惜しくなり、どうせ残しておくものなら、より豪華なものをつくろう、ということになったわけだ。内裏雛ができたのは、江戸も末期のころである。
　この月には、江戸っ子の祭り、といっても差し支えない三社祭りもある。
　四月の一日は前に述べたように衣替えで、八日が灌仏会。お釈迦さまの誕生日で、花祭りともいう。ほうぼうの寺では境内に銅の誕生仏を置き、参詣人たちは竹の柄杓で甘茶をそそいだ。
　初鰹が出るのもこの月だが、その他にはあまり行事はなかった。
　五月もまた四月とともに、行事の少ない月である。
　五日の節句。三月三日を女の節句、五月五日を男の節句、というようになったのは江戸時代からだ。菖蒲湯、などという習慣もこのころから一般に広がったようである。ついでにいえば、鯉のぼりは江戸の中期ごろから始まったもので、鯉が出世魚とされていたからであろう。
　両国の川開きも江戸庶民の楽しみの一つだが、これが五月二十八日ときまっていた。この川開きには花火が打ち上げられるが、八月二十八日の打ち止めの花火まで三ヵ月の間、舟遊びなどでにぎわうが、川岸の茶店はいうまでもなく、見世物小屋や寄席なども深夜まで営業をしていた。

年の暮れには何をしたか

　六月の行事を代表するのは、何といっても山王祭りだろう。十五日に行われるが、俗に天下祭りともよばれ、将軍家の上覧に供えたものである。
　盆提燈を下げるのは、この月の三十日からのことだ。
　七月に入ると七日の七夕がある。五色の短冊に歌や文字を書き、竹に結びつけて飾るのが一

般的な風習だが、江戸では屋根の上に立てたものである。
　お盆は祖先の霊を迎えて祭る日だが、七月の十三日は夕刻までに寺参りをすませ、迎え火を焚くことになっていた。祖先の霊をわが家に迎えるわけだが、送り火を焚くのが十六日で、盆の藪入りの日でもある。
　徳川家康が江戸へ入府したのが八月一日、つまり八朔で、この日は徳川幕府の公式の祝日でもあり、武家は総登城した。民間でも赤飯をたき、衣服をあらため、いつも世話になっている人たちへ挨拶まわりをする。
　八月十五日は中秋の名月で、月に団子やすすきなどを供えた。
　九月に入ると、九日の菊の節句がある。江戸時代初期には、五節句のなかでも重要な祝日で、大名の間でも菊の品評会などが行われた。
　また、芝の神明祭りが十一日から二十一日まで、神田の明神祭りが十五日で、これは山王祭りとともに天下祭りといわれ、各町内ともきそって山車・屋台踊り、などに趣向をこらし、これが江戸っ子たちの話題の的になった。
　十月にはお会式がある。日蓮宗の宗祖日蓮の忌日に行う法会で、十二日が池上本門寺、十三日が堀ノ内妙法寺で行われた。
　二十日は夷講である。江戸の商家ではえびす像の前で、品物に千両、万両の値をつけ、商売のまねごとをし、手をしめて祝ったという。
　また、炉開き、といって、武家では十月の最初の亥ノ日、町家では第二の亥ノ日に炬燵を開いたものである。
　現在では見えっぱりの親たちが、子供を着せかえ人形にして満足している七五三の祝いは、十一月十五日になっている。
　もっとも、江戸時代から宮参りはかなり派手であったらしく『絵本風俗往来』には、旗本の子弟や商家の人たちのにぎやかな参詣の様子が描かれている。

もともと、子供たちの成長の一つの区切りに当たる年齢で、将来を祝うと同時に神の加護を祈るのが、本来の目的であった。七歳、五歳、三歳、と別々に行われていた宮参りが、七五三とまとめていわれるようになったのは、江戸末期か明治の初期であるらしい。

十一月の酉ノ日に行われるのが酉の市だが、江戸時代には酉の町といった。町は〝まち〟で、まつりのつまった言葉だそうだ。

浅草の鷲神社が盛大であった。開運の神で、熊手やお多福面など、縁起物を売っていた。これを買うのは多く客商売の、役者や料理屋の人たちだったというが、その混雑繁盛ぶりは大変なものであったらしい。

さて、いよいよ十二月だが、年の暮れは何かとあわただしい。

まず、節分である。

寺では講中から選ばれた年男が、豆まきを行う。もちろん、寺ばかりではなく、武家・町家・農家を問わず、豆をまく。また、いわしの頭と柊を軒へさして魔除けとした。

次に煤掃き。江戸城ではこれを十三日に行うので、ほとんどの家でも同じ十三日に行った。これが終わると家内そろって、そばをたべる。

十四日が年の市のはじまりだ。門松や注連縄、神具や縁起物などを売る暮れの市で、いまでいえばデパートや商店街の、歳暮大売り出し、といったところだ。浅草の観音さまの市が最も古いといわれている。

十四日から始まる深川八幡を皮切りに、神田明神、芝神明、芝愛宕神社などと続く。

歳暮に回るのは二十日からで、餅つきは二十八日だ。

これでやっと、駆け足ながら一年間の行事を追ってきたわけだが、みなそれぞれに江戸庶民の生活のための必然性があるような気がする。

現代の行事、祝日と比較し、見直してみるのも面白いと思う。

（一条　明）

山手樹一郎長編時代小説全集55

天の火柱

発行——一九七八年九月二五日初版第一刷
一九八〇年三月二五日初版第七刷
著者——山手樹一郎©
装画——国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁——玉井ヒロテル
発行者——和田欣之介
発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三—四—一六
〒一〇三　☎東京二七一—〇〇五一　振替東京〇—一六一七
印刷製本——城北印刷製本センター
定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします